





徳富健次郎著

蘆花全集

第十四卷

日本から日本へ

第三卷

昭和五年三月刊行

昭和五年三月十日印刷
昭和五年三月十五日發行

非賣品

蘆花全集

著作權
所有者

德富愛子

發行者

佐藤義亮

蘆花全集刊行會代表

印刷所

富士印刷株式會社

製本所

新潮社神田製本部

發行所

新潮社內

蘆花全集刊行會

東京市牛込區矢來町七十一番地（換替東京二七一〇〇）

電話牛込（八〇五番・八〇七番・八〇八番・八〇九番）

日本から日本へ 第三卷

目次

第十篇 英 利

第一 Great Silence.....	一
第二 倫敦へ.....	三
第三 倫敦日記.....	三
第四 Oxford.....	六
第五 倫敦日記(續).....	六
第六 Scotland.....	一四
其一 Flying Scotchman.....	一四
其二 Edinburgh.....	一六
其三 Glasgow.....	一七

第二 紐 育……………三九

第三 入日を趁うて……………三〇一

第四 桑 港……………三二〇

亞米利加の女……………三三〇

第十二篇 日本へ

第一 太平洋(前)……………三四四

其一 新天新地 四海一家……………三四四

其二 春 洋 丸……………三四六

第二 布 哇……………三五七

第三 太平洋(後)……………三六九

第十三篇 日本

其一……………三九三

其二……………四一〇

第 1 GREAT SILENCE

(1)

十一月十一日。眼がさめると、船房に私は寝て居る。向ふの キャビンには妻ではなくて若い男が眠つて居る。佛英連絡船に寝て居るのだ、と云ふ事を思ひ出す。時計を見ると最早七時を過ぎて居る。

私は窶こぼと起きて身仕度し、婦人室に往つて見る。果して妻は酔つて苦しんださうだが、それでも眠れたのは好かつた。

甲板に出る。空はからり明けはなれて、寒い風が飄々ひょうひょうと北から吹きつける。それでも海はいくらか静かになつた。五千噸の細長い ボートは海峡の波を蹴つて英吉利近く寄りつゝある。寒いので、甲板には出て来る客も少ない。右舷に往つて見る。正に日の出である。久しぶりに海の日の出を見る。日は出で、空は晴れ、而して北の烈風は波のしぶきで右舷甲板をびしょ／＼に濕らし、寒いとも冷たいとも氷の矢を吹きかくるやうで、面を向けられぬ。それが私の元氣を喚び起す。

日の本の日と日女との渡ります日をばうれしみ海を出づる日

Armada を沈めナポレオンカイゼルを泣かしめし一衣帯水今渡り行く

北の風水の征矢を放ちつゝ日子日女迎ふ嶋夷共

私は食堂に入つて一碗の茶を喫し、Toast の一片を食べる。それから左舷の Recess の Bench にかけて。海の色が薄緑になつて來た。汽船が煙を吐き、駛つて居る。白い帆船が揺られて居る。鷗が飛ぶ。何時となく英吉利の陸影が眼に入る。高低不規則な陸の側面を眺めて居ると、津輕海峽を渡りつゝ北海道を眺むるやうな心地がする。

妻が起きて來たので、私共は食堂に入つて、軽い朝食をとる。諸君は朝から魚の Fry など食ふてお出でる。

食堂を出た頃は、Vera は已に詩人 Tennyson の住んで居た Wight の嶋を尻眼にかけて、鷗を左右に散らしつゝ陸へくと進んで居る。海中から築き起したやうな海堡がある。

私共は流石に波立つ心で近づく陸を眺める。これが英吉利か。世界の家族會議で首座に坐わる長兄の國はこれか。私が十一歳から其國語を學びはじめて四十年になる其英吉利がこれか。其所領に日の入らぬこれが英吉利か。

寄つて来た陸がまたお出で——をすするやうに後退りはじめた。Southampton の入江に入ったのである。

兩舷の陸は此方に流れて、Southampton の港がやゝに寄つて来る。煙突や起重機や煉瓦の建物やトタンの倉庫や、立働く人、埠頭に待つ人の影が見ゆる。汽船や赤い Buoy の間を縫ふと、Vera が岸壁に横づけになつたのは、朝の九時半であつた。

(11)

船客はぞろ／＼船を下りる。昨夜 Havre で妻がいたはつた鼻に怪我したあの婆さんの姿も、其中に見受けられた。黒服を着て居るのは、戦死した子の墓參にでも往つたのではなからうか。私共も手荷物荷夫に託して、やをら英吉利の國土に下り立つた。

私は日を忘れなかつた。今日は 1919 年の十一月十一日である。十一月十一日——恰も世界大戦の休戦一周年の其日に、私共が英吉利に上陸するのは正に其時を得て居る。

旅客の注意こと／＼しく張り出されて居る税關内で、私共は、今 Vera を下りた乗客の人々と一同 Passport を調べられ、身分、目的、滞在期限等を問はれた後、更に構内の一の小舎に待つ可く要められた。其處には電氣暖爐が赤く燃えて居て、私共の外に三四人同じく待つ人々がある。瑞西や西班牙

の人々であつた。

他の乗客はぞろ／＼汽車に乗る様子。私共も心は心でないが、調べが済まぬので、電気暖爐の傍近く椅子引寄せて、係の人の今や來ると待つて居る。

其内追々十一時近くなつた。

此十一月十一日午前十一時、即ち休戦滿一周年の此午前十一時に、英國では五分間一切の鳴を靜めて、大戰に斃れた人々を追弔記念のお布令が *George V.* から出て居る事を私共は新聞で知つて居る。誠にゆかしい思ひつきで、これが英國に限らず全世界時を同うし心を揃へて祈念を凝らすとしたら、如何に嬉しい事であらう！ 何はともあれ、斯 *“Great Silence”* の日に英吉利に來合はせて四千萬の人々と死者——其内には女子供も家畜も居る——の前に感謝と懺悔——何となれば彼等を死なしたは畢竟我儕の罪であるから——の頭を低るゝ事は、嬉しい事である。

私は時計を見た。十一時に五分前である。

八年前の秋の一夜、武藏野の草廬に家族座を正して明治天皇輜車發引の相圖を待つた時の緊張が私共の椅子の居ずまひを正させた。

ド、ドド——ン！

壁を震はして砲聲が轟いた。

電氣暖爐がばつたり消えた。

あらゆる音が止んで、森となつた。

私共は瞑目した。

私は此 “Great Silence” の五分間に世界の心的一周をして、且念じ且祝した。私は日本人だから私の祝福は私共の此旅の如く正に日本から始まつた。日本から朝鮮、西比利亞、支那、支那印度、馬來の邦々、印度、中央亞細亞から西亞細亞の國々、土耳其、埃及、亞弗利加の國々、露西亞、Scandinavia 諸國、白耳義、和蘭、獨逸、埃地利、バルカン諸邦、伊太利、佛蘭西、西班牙、葡萄牙と思ひ浮べて祝ひつゝ英吉利へ來た時、電氣暖爐がばつとついた。陸海の汽笛が一時に鳴りはじめた。“Great Silence” の五分は過ぎたのである。

然し私の祝福は全世界の何れをも漏らしてはならない。私は瞑目をつゞけて、英吉利から愛蘭、北米、南米、布哇から南洋濠洲と心を遊ばせて、一々祝福を贈つた。

隣室に足音がして、私共以外の人々が呼び入れられた。“Silence” を終へて、係の人が來たのであらう。

それ等の人々が出て去ると私共の番になつた。私共は椅子にかけて、白木の「チアール」越しに係の人々と相對した。正面の Khalid は四十近い大尉で、Roosevelt に一寸背にて居る。傍の若いのは黒服。大尉が重に調べる。兩肱りょうぶく卓子たかごにいたり、片肱突ひとぶくいたりして、しげ／＼私の顔を見つゝ細かに調べる。無論さし紙が此處にも來て居るのだ。

私は日本出發以來行程の主要を述べた。獨逸を見に往つた事が、二人の係の注意を鋭くした。

「何の Authority で獨逸に往きました？」

大尉は問ふ。

「スイスで獨逸公使館から旅券をもらつたのです」

「其旅券は？」

「靴の中にあります」

大尉は細い眼で瞬またきもせず私の眼を見つめた。私の大きな眼に、疲勞は浮いて居たらうが、譎たぶはそこに認められなかつたと思はれる。私には何の祕密もないから。

「御夫婦で世界漫遊は隨分金がかゝりませう。あなたは金満家ですか？ 財産は何程おありですか？」

旅券出願の時、東京府廳の係は私に財産の申告を要求した。外國に出て先々の厄介にでもなる事があ

つたら國辱だから、財産調査は無理でないかも知れぬが、私の財産申告を添へて旅券願が外務省に廻はつた時、其處の若い人達はこんなものをも笑つたさうだ。然し私は眞面目に私共の所有する土地、家屋、立木、屋内現在品、及び一切の預金現金を合はせて三萬圓と計上して、申告書に書いた。のみか、地所登記の書類、銀行の當座預帳まで自ら府廳に持參して、私の言の確實を證據立てた。地所は坪五圓で、少し高いと思ふたが、府廳の役人を安心さす爲に値を張つたのであつた。私の財産調べは、英吉利に來て忽ち役に立つた。

「約三千磅です」

と私は東京府廳へ申告のまゝを答へた。最も近頃は磅の値が下つて居るが、そんなに細かでなくてもの事だ。

「三千磅？　それで御兩人で一年間の漫遊とすると、如何しても全財産の半額は消えますね」

大尉は頗る合理的である。而して大尉の計算はそれでも内輪に見積つてある。何故なれば私共の世界一周は二萬二千圓を使ひ、私が戯れに言ふたやうに、日本から羅馬までは我足で歩いたが、羅馬から日本迄は義足で歩いたからである。義足と云ふのは、借りたおあしの義。

「然です」

大尉の眼は鋭くなつた。獨逸から金が出はせぬかと云ふ疑念が閃めいたらしい。誠にお氣の毒さま、あのけちなをぢさんが、加之ぎゆうく云はされて居る今日此頃、唯一馬克一Plemingも滅多に出すものか。然し大尉はさう思はない。

「あなたは著作家ですね。大約何部程著作がおありですか？」

「左様、一ダアスもありませうか」

私は兎の糞のやうな貧弱な私の所産をきまり悪く頭の中に數へながら答へた。

「あなたは Successful author ですか？」

「然 Very popular です」

と私は正直に答へた。日本では Popular は、劣等低級の別名として苟も文士の恥ぢねばならぬものゝやうになつて居るが、西洋人の前に立つて、「Popular です」と答へた時全く私は肩身が廣かつた。

大尉はいよ／＼鋭く私の眼を見る。人を見るに眸子を見るよりよきはなし、と孟子の言を此英吉利の大尉も實行して居る。

私は言を添へた。

「私は Popular です。私共の旅行も読者がさしてくれるのです。然し私の財産が三萬圓は愚 百萬長者で假令私があらう共、今度のやうな旅行をする爲には全財産を抛つても少しも惜しいとは思ひません。それに、文筆の人に金は必ずしも益をのみするものではありません。財布がふくらむと著作が凹むことになり易いものです」

力強い私の言葉がしつかり頭に入つたと見えて、大尉は顔を解いて頷いた。

然しそれで直ぐ手放す程の甘いをぢさんでもなかつた。歸つたら無論旅行記を書くが、それは單行本として出し、所謂新聞雑誌の記者ではない事を確めて、やつと私共の英吉利入國は許された。

訊問所を出ると、私共の手荷物と鞆が持つて來られる。大尉は追ひすがるやうにして、一寸獨逸の旅券を見せてくれと云ふ。私は鍵を撫つて黒い鞆の蓋を開け、直ぐ中子にあつた黄色い獨逸の旅券を取り出して大尉に渡した。眼にくつゝけるやうにしてそれを見て居た大尉は、それを私に戻すと目禮して去つた。

私共は初めて自由になつた。

第二 倫敦へ

汽車はとくに出てしまつた。私共は驛夫の呼んでくれた馬車で、荷物諸共 Southampton の港を他の停車場に往つた。荷夫に手傳ふて重い鞆を下ろすとして、六十餘の人の良い馭者が右の手の指を少し傷つけた。赤い血が私の頭を痛くする。馭者は何でもないと笑ひ、六志の馬車賃に十志をやると悦んで去つた。

私共は歩廊の雑誌店で、汽車の時間表を買ふ。剝製の黒い犬が頸に箱を下げて居る。倫敦のジョンと云ふ善良な犬と書いてある。箱は孤兒の爲。

待合室の暖爐にあたりながら、私共は汽車を待つ。薄青い揃ひを被た十五六の物賣の娘が三人つり箱を下ろして、暖まりに来る。私共は Chocolate や近邊の産と云ふ柚子見たやうな Orange を買ひ、商賣があるかなど問ふたり、私共が世界周遊中で、妻の帽子は佛蘭西、靴は白耳義、手提は獨逸で買つた事や、獨逸の娘達の蒼ざめて居る話などをする。皆がしみくゝ聽いて居る。

兎に角私共は英吉利に來た。英吉利に來たのは何と云ふても第二の故國に來たのだ。言葉の親しみがすべてを近くする。それについても日本を出て私共が過ぎて來た邦々で、其國語が自由に話せたら、自他の悦喜も多かつたらうに、と今越えて來た海のあなたの邦々に濟まぬ怠慢の罪を今更に感ずるの

であつた。

汽車が来た。荷夫が荷物を運び込んでくれた一等室は、私共唯二人。紺地に白模様の Cushion や、大きな硝子窓を上下する同じ織物の太い括紐も、英吉利らしい重厚な感じのものであつた。

“Lunch Basket” “Lunch Basket” と兵隊上りの若者が歩廊を賣りあるく。呼んで 3 志 6 片出して一つ買ふ。手細工に大きな平たい重いそれを Cushion の上に置いてくれた。

一時發車。

Basket を開ける。ハムと冷肉が一皿。セロリイとトマト。パンは四角が一切、小さい圓いのが一個、Tea Biscuit が二つ。Knife, Fork を添へ、芥子と胡椒と鹽を劃つた皿がついて居る。Basket の蓋裏には、どうぞ最寄の停車場でお出し下さいと注意書が貼りつけてある。好い氣もちになつて私共は英吉利最初の食事を汽車中とする。而して先刻買った Orange を Dessert に食べる。思ふた程酸くもなかつた。内は Heat 外は小春の日かげうら〜と、牧場や、のんびりした小川の流れや、人家や、木立や、如何にも長閑な景色がつづく。

雪の獨逸雨の佛蘭西海越えて英吉利に來つ小春日和よ

古い墓地近く過ぎる。落ちついた故國の永い眠り所を眺めつゝ、今一つの私の眼には *Palestina* は *エリコ* 路の石ころ路の路側に幾十と竝んで居た英吉利士卒の新しい十字の墓標が忽ちぼうつと浮んだ。「倫敦までおつ通しです」と發車の前に荷夫が教へてくれたが、果して汽車は *Southampton* を出たきり、停車場も停車場も乗り打ちしてひたもの倫敦へ急ぐのであつた。

忽ち空が黯くなつた。あの小春日が、と驚いて見る黒雲からはら〜〜と白いものが落ちて来る。雪——と思ふと何時の間にかまた青空になつて居る。

窓の外の田舎は何時か郊外に、場末に、雑沓に移つて、午後三時私共は倫敦 *Waterloo Station* に着いた。

(11)

兵士上りの若い *Porter* が私共の手荷物を車にのせて出口近く下ろすと、今度は貨車から今一切合切下ろされた荷物の處に往つて、私が此と指さすまゝに私共の鞆をさつさと手車にのせる。引換切符も何もあつたものではない。*Palestina* あたりでも英吉利人が經營して居る處では似たやうな経験もないではなかつたが、此處は本場だけにそれが徹底して居て、如何にも氣持がよい。

自動車が無いので、私共は *Porter* が雇ふてくれる箱馬車にのつた。鞆や手荷物一切は、鐵欄のつ

いた天井に積まれた。ごた／＼荷物を頭にのせて、がた／＼と挽かれて行く氣もちも傍目も決して好くはないが、與へられたもので納まる外はないので、おとなしく挽かれて行く。

大きな川に出た。高い長い晴々した橋を渡る。川は Thames, 橋が Waterloo Bridge だ。川向ふの宏大な建物、高い塔の上には大きな旗がゆら／＼夕風に靡いて居る。英吉利の旗の外に佛蘭西の三色旗もある。橋を渡り終つて、通る夕暮れの街々巷々は、紅白段だらに巻いた旗幟、さまざまの英國旗、佛國旗が今日を晴れとやうに飾られて居る。これは休戦一周年の記念訪問に、佛蘭西の Pomcarret 大統領夫妻が昨日來たのを歓迎の裝飾である。大統領夫妻は昨日海峽を渡つたのだ。巴里で英吉利の官憲が私共に Havre—Southampton の航路を取らせた意味が讀めた。間近い Dover の渡は大統領夫妻の爲にあげられたのだ。

兩國旗の入り亂れて美しい夕暮の街を幾曲り、後で Hyde Park へ行って Kensington Garden と知つた片側公園の長々しい通りを公園の盡くる所まで往つて、馬車は一つの Hotel の前にとまつた。下りて見ると、それは Kensington Palace Hotel であつた。私共のは Kensington Palace Mansions Hotel である。それは先のから少し後戻りして、一寸横にきれ込んだ處であつた。

赤い大理石柱の二本相對して立つ Portal の石段を上り、玄關から帳場に往つて名刺を出す。N.Y.

「これこれで室が Reserve されてる筈。茶を啜りかけて居た帳場の若い女少しも其意を得ない。そんな約束はないと云ふ。變だ。云はるゝまゝに N.Y.N. に電話をかける。日本語の人が出て、其様な筈はない、兎に角早速誰か往くと云ふ。」

荷物を積んだ馬車は外に待たせて、玄關側の Sofa に私共はかけて待つ。眼の前に五歳位の愛らしい男の子が現はれる。日本の子だ。妻を呼んでこの見の可愛いのを御覽と云ふ。不圖眼を上ぐると、背には其子の阿母である、若い美しい人が立つて居る。やがて其人は電話室に入った。母子で先づ倫敦に着いて、一足おくれた主人を待つ人々と後で知つた。戦後の世界を漫遊の日本人は數あつても、夫婦の漫遊は少なく、子供連れはますます少ない。旅にして日本の子供を見る事は、私共を悦ばせませんでした。

N.Y.N. の若い吉君が來たのは、やゝしばらくたつてからであつた。初対面の吉君の後にまた一人支那人見たやうな眼鏡の若い男がぬうと立つて居るのを、妻は一目見て、淺さんではありませんかと叫んだ。それはまがひもない淺君であつた。巴里からはがきをつい昨日出した私には季の姉の二女を妻とし、年久しい粕谷の Offenart の一人であつたが、近年私の家の門戸閉鎖で、淺君も度々門前拂ひを喰はされて居たのである。高商出で、N.Y.N. に入つて最早數年になることは知つて居たが、

つい先々月倫敦訪になつて先廻はりして来て居る事は少しも知らなかつた。

吉君の談判で、事情は分つた。室は確に *Receptive* してあつたが、日本人夫婦とのみ姓名が通じてなかつた爲、他の日本人夫婦の客が一日早く来て室は自然にふさがつたのである。可愛い *Boy* の連れがそれであつた。兎に角 *Manager* は私共の爲に別に一室を設ける事を諾したが、それは明日の事で、今夜は氣の毒ながら廣間の隅の *Sofa* にじも、と云ふのであつた。

私共はそれで満足したが、淺君が吉君と相談し、電話をかけて到頭私共を清さんの宅に一泊と云ふ事にきめてくれた。

あまり長いので如何に落ちついた英吉利氣質でも當然眩やいて居る馭者君をやつと歸へして、荷物は *Hotel* に預け、*Bag* 一つ *Basket* 一つ持つて、四人は *Taxi* に乗つた。

吉君は途中で下り、自動車は賑やかな光の街、淋しい通りと随分長く走る。淺君が窓から頭を出して車掌に右に往つて左に折れて云々と細かな道筋を教へる。やつとある横丁のある家の前に止まつた。昨日初雪が降つたさうで、此あたり夜目にも地が薄らと白い。

私共は淺君の先導につれて、遠慮なく通る。主人の清さんは東京高商出の人で、船から陸と勤めて来て今 *London* の倫敦支店副長として働き盛りと云ふ所。此夏洋を渡つて来た女子學院出の夫人

と十一の百合さん紀元節の誕生で名づけられた三歳の紀さんと West Hampstead の屋敷町に家を成して居るのである。「宿かさぬ人のつらさを情」ではないが、Hotel の手違から倫敦の第一夜を他ならぬ日本の Home に私共は迎へらるゝを得て、五目飯、味噌汁、卵のつゆ、後ではまた汁粉などの郷味に倫敦を忘れた。清さんは近來倫敦の評判で何十遍も見えた人もあると云ふ Chu Ching Chow の芝居の話をして、子達に今日買つて歸つた其劇中の歌の Record を蓄音器にかけて、皆共に、聴くのであつた。

淺君が歸つた後、私共は特にうれしい Bath の馳走になり、瓦斯暖爐の紅く燃ゆる Bedroom に退くと、夫人の心付けで若い日本女中が湯婆を持つて來てくれ、屋外の雪も霜も忘れて、私共は倫敦の第一夜を温かい夢に入つた。

(三)

十一月十二日。からりとした晴れた。朝寒に雑炊の馳走は殊に妙。早や百合さんの若い女教師が來て日課が始まるので、私共は三階の客間に移る。畫幅をかけ雛人形など飾つて、つとめて日本風にしてある。長方形の庭を見下ろす。女教師は其庭で百合さんに體操なども教へて居た。指の運動からはじめて、極めて嚴格周到に教へると云ふ。父母と英吉利でそだつ子供は恵まれたものだ。

清さんが出勤の後、私共は日本の新聞など見ながら浅君を待つ。中々來ない。妻が夫人と話して居る間を、私は窃と下りて、出て見る。近くに停車場はあるが、要するに淋しい處で、雇はうにも自動車一つ見つからぬ。歸るとすれば、棟つゞきの入口も極めて相似た様に欺されて、早速異つた家の玄関にかゝり、出て來た英吉利の婆さんに教はつて、さりげない顔して清さん宅に戻る。

附近に猶太人の婆さんが經營して居る下宿があつて日本人が可なり居るさうな。若い太つた山君が其處から來て、病中此處の主婦から氣をつけられた禮など言ふて居た。やがて瘠せた紳士の來客がある。學習院の熊教授。先頃伊太利に往つてナポリの案内者の手帖に私の書き残したものを見たなど話して居た。私共の寫真まで貼つてあつたとは、下さんからでももらつたのだらう。熊さんは私共より晩く日本を出て早く英吉利に來、近々米國を経て歸るさうで、そろ／＼荷造りをはじめると云ふ話が私共に羨ましく聞かれた。熊さんは今年が銀婚さうな。ポケットから出して見せられた寫真には、石の門に高女中學齡の子女達が列んで居て、また私共を羨ましがらせた。私共のやうに Home を負ふてあるく蝸牛の夫妻は、熊さんの Home stick が羨ましいのも、鑿く事を知らぬ人情であらう。

浅君がやつと來た。昨日 Home に來てくれた吉君の母者の計が來たさうな。傍事ならず私には響いた。私共は諸君と食堂で午餐の馳走になつた。日本流に焼いた牛肉の馳走がある。熊さんは肉に鑿き、

Minton など食はされるとたまらぬと云ふ話をする。Palesina で Minton を見るもいやになつて半飢れになつた私共は一も二もなく同意する。

諸君が去つた後、頼んだ自動車がやつと來たので、私共は清夫人に夜來の厚い待遇を謝して、それに乘つた。

Hotel に往く途、自動車を待たせて、私共は大使館に寄つた。大使館は英吉利らしい大使館で、大使の珍さんは英吉利にふさはしい大使であつた。先頃の鐵道のストライキに、某公爵某男爵と云はる人々が自身自用の自動車を乗り出して公共の用を勤めた話や、以前の下男が將軍になり主人が却つて下風に立つと云ふ様な新しい世態を穿つた芝居などの話を、私共は暖爐の前に立ちながらゆつたり物語る大使の重い口から聞いた。

若い館員の甲乙がかはるゝ私共の見られ榮えせぬ顔を見に來る。官邊の屈の事など聞き、待つて居た郵便物を受取つて私共は自動車で歸つた。

自動車は Hyde Park を突切つて、また一走りして Kensington Palace Mansion Hotel に着た。

私共の爲に設けられた室は、玄關から左に折れ、すうつと往つて一寸した段を下り、讀書室につれて二曲りして、ちよいと段を上り紅い敷物を敷いた硝子屋根の通路を行き當つて、また一寸段を上つ

し、それから十段も階段を下り、閉め切りの口に傍ふた *off* と云ふ室であつた。玄關から小一丁もあるどん詰りの室。二つの瓦斯の白い光が廣い、靜かな、落ついた室を照らし、壁つきの大きな暖爐に石炭の火が赤々と私共を歡び迎へる。

兎に角私共が倫敦の Home もこれで出來たわけだ。

以前親しく往來して居たので、私共の嗜好を覚えて居る淺君が、藤村の羊羹を持つて來てくれたので、室内に茶を呼んで引越しを祝ふ。

淺君が歸ると、私共は洋服をキモノに換へて玄關近くの食堂に往つた。

而して歸ると窓の綠帷をひいて、椅子や *sofa* を暖爐近く引寄せ、瓦斯の光で大使館で受取つた故國の郵便物を開いた。それは大抵坡西土の南さんから轉送して來たものであつた。二度の巴里には私共へのはがき一本來て居なかつたので、七月の初に坡西土で一通の手紙を受取つて以來、四ヶ月半ぶりに接した故國のたよりである。

エルサレムで出した「私の所望」の反響が二つ三つ。中に六十八翁伊藤彦九郎氏が朝日新聞を経て送つた「無窮の平和」と云ふ小冊子があつた。

思ひがけない粕谷の留守を託した其家の主婦が五月に突然逝いた間接のしらせ、「死の蔭に」の出版

者が失敗して田舎に退いたしらせ、朝鮮の水原すわんで我官憲に、朝鮮人や亞米利加宣教師を怒らすやうな無理があつたしらせなどは、私共を或は駭おどろかせ、或は惱ませるものであつた。

私共は適あたかに十二時過ぐるまでもそれ等の故國のたよりにしんみりと讀み耽つた。

第三 倫敦日記

(1)

英吉利が私共に提供した住居は、私共の心に適あたふものであつた。倫敦の西山の手、Hyde Park や Kensington Garden の南側を通る Kensington Road の片側町の 1 Block の頭を占めた Kensington Palace Mansion Hotel は、Hotel よりも Mansion 卽下宿で、決して所謂 Fashionable でも乃至備そなへた意味に於ての所謂 Comfortable な Hotel でもなすが、矢張私共には一番好い家であつた。第一に位置が好い。空氣と空間の餘裕よゆうを好む私共の爲には、往來一つ越せば Kensington Garden で、Hyde Park を合あはせて二百五十餘町歩の公園は我有わがものである。買物をしようと思へば、比較的ひかくてきに新聞町ながら、倫敦 Shopping の中心は此處に移りしゝあると云はれて居る Kensington High Street が近くに

ある。出かけようとすれば、地下鐵の停車場は矢張其 Street にあり、また近い屯の Taxi や間斷なく往來する乗合自動車で、Oxford Street や Regent Street の買物にも、銀行區域の用達にも、王宮や議會乃至觀劇にも、三十分或は一時間足らずで樂に往かれる。

五階建のがつしりした英吉利式の建物、必要につれて隣りを併せたので繼ぎ合はせの頗る露骨な、無細工に横長な Hotel であつた。Block つきも Hotel、東向ふもホテルであつた。私共の室 84 號の A は、此無細工に横長な Hotel の新らしく併合されたその西南の隅で、Hotel から云へば、トントのどんづまりの Ground floor にあつた。Ground floor の室に置かれた事は、此世界一周に唯倫敦だけである。堅固な立脚、安心な位置、これから築き起さうと云ふ氣分の私共に、此 Ground floor の室と云ふ事が何程悦喜を與へたか知れぬ。それは西向きで中の一つは角面突き出しになつた三つの大きな上げ下ろしの硝子窓は、自動車などは滅多に通らぬ靜かな横丁に向いて居る。

室は約三十疊も敷けさう。濃緑の Carpet を一面に敷きつめてある。天井が高い。然しナボリのそののやうに落つこちる危険はなささう。もと Restaurant であつたと云ふ。室の東北の隅のひらきをを開けて見たら、料理の皿などのせてつり上げつり下ろす仕かけがまだ其まゝになつて居た。天井は白、壁も白で、三方壁は紺模様様の壁紙でぐるりと張られて居る。山鳩のやうな鳥が枇杷の葉見たやうな木

の實を啄む模様で、それが私共に熱帯を、殊に錫崙を妙に想はせた。出入の扉と東北隅の例の扉とは、深緑に黒い縁をあしらひ、金緑でそれを明るくしてある。まるで金庫の扉だ。金庫と云へば、室全體の岩乘堅固がどうしても *ニセツ*、其ものゝ感がある。金庫の内に居るやうだね、と私共はしばし言ひ合ふた。自惚を云へば、私共は寶物扱ひせられたわけだ。淋しいと思ふたり、鬱陶しいと感じたり、いやと思ひ出したら、それは *Providence* の壓抑の如く、人を發狂せしめずには措かぬやうな室だ。幸に私共は英吉利に來て極めて樂になつたので、此金庫か、地下室か、牢獄見たやうな室は、八重垣つくる八重垣うちののびやかさをのみ私共に感じさせるのであつた。

硝子窓は觀音開きのこれも綠黒金の窓蓋が掩ふやうになつて居る。まだ其上に粕谷の書齋の綠帷を思はず綠帷を高くから垂れて、其一枚毎に中央に赤い花環の模様が一つついて居る。それが劇場の緞帳か引幕を思はせる。

扉を入つて、壁附の南枕に木製寢臺が二つ。寢臺の足もとに古物の *Soft* が一つ。窓下に妻のあまり美しくない然し大きな化粧臺が一つ。伯林のホテルの私共の室に鏡一つ高くかゝつて居た外に婦人用の何等特別な設備もなかつたに比して、これは夫人を優待した譯である。西北隅の壁際に、二人用の洗面臺が一つ。東の壁側には大きな衣裳戸棚が据ゑてある。籐製に更紗を張つた其隣埃及人や印度

人から見た英吉利人のやうに尻の重い硬い樂椅子が一つ、籐の常用椅子が二つ。天井からつり下げた *Candelabrum* には白色瓦斯が二つつく。残りの二つもつけてくれと、*Goethe* の臨終の願の "*More Light*" を帳場にくりかへしたが、到頭つけてくれず、やつと立つ少し前になつて電燈がつくやうになつた。読み書く人に化粧臺一つではやり切れぬので、帳場に云ふたら、古道具屋から仕入れたと見え、競賣札のついたまゝを持つて来てくれた。妻の爲に軟らかい椅子をと注文しても、前からあるのと同じものしか持つて来てくれなかつた。便器は *Bed* 下（せま）に直に入れてある。あまり殺風景だから新聞を蓋して置く事にした。もとより電鈴一つあるでなく、きまつた時刻に女中が朝の湯或は水を持つて來、掃除に來、夕食前の湯を持つて來る時の外は、一々自身出張して女中も *Porter* も探さねばならぬ。掃除に來、夕食前の湯を持つて來る時の外は、一々自身出張して女中も *Porter* も探さねばならぬ。*W. C.* は階段の都合三つも上つて行く二階だし、*Bath* は尙其上に一階上らねばならぬ。不便を云へば夥しいし、古道具を寄せあつめての室内家具も、古物で新世帯を造る此第二の創世、新開闢、世界的改造時代の氣分にもふさはしく、それが却つて私共に嬉しい感を與へるのである。北の壁つきに大きな暖爐がある。 *Coal Boy* が大きなバケツに石炭を一ぱいと、古箱を割つた焚付（たきつけ）の二三把を持つて來て、其都度 *Card* に室の番號と姓名を記入させる。私共が寢て居る内に女中が來て古新聞など使つて火を起す。外出すると、歸る時間前にちゃんと燃しつけてある。 *Heat* でも要は足りるが、

生きた火の紅く燃ゆる暖爐は、何と云ふ嬉しさだらう！ 楯など燃す圍爐裡欲しくて、村住居を始めながら、ついぞ、其慾望を果す事なしに、火鉢と炭火で暮らして居る私共は、戦後の英吉利に來て此の「Fireside」の快味を與へられたことを感謝した。それにつけても、あの伯林の火の氣のない室の寒かつたこと！ 此頃は如何して居るだらう？ と此火の嬉しさに連れて獨逸の上が思はれる。此暖爐にも永いこと「Tongs」はもとより、火をあせるべく短い鐵の棒ぎれすらなかつた。黒い石の「Mantel-piece」は潤くして、私共が到る處で生活の標にする豆眼ざまし時計と旅行用寒暖計と色々記入された 1919 年の剝曆は此處に處得顔に並び、時々は寫眞また新着の畫はがきなど此處に飾つた。暖爐が室の魂である。其火が私共の心身を温めた。

獨逸以外大陸で「Bath Room」の便利にしたゝか馴れた私共は、もつと便利な室と思ひもし頼みましたが、何時となく、此處に安住して、果ては假令王室の紋章つきの自動車を迎へに來やうとも、「Palace」なら此「Palace」と少しも動ぜぬ氣になつて了ふた。

(11)

十一月十三日。晴。昨夕私共は與へられた「Mansion」の此室に落ちついた。昨夜何だか寒かつたと思ふたら、今朝見ると、窓硝子を一枚しめ忘れてあつたのだつた。

朝食を命じたが、十時頃までも持つて來ぬので、食堂に出る。非常に雜沓して居る。

不足品の目録を帳場に提出。樂椅子、外套掛、其外數點。

それから自動車で中央倫敦の商業區に往き、Hongkong & Shanghai Bank で信用狀の殘額 30 磅を引出した。横濱の支店で振出してもらひ、方々で受取つて今本店で悉皆受取つた譯だ。年配の行員が少し笑つて、何磅紙幣で上げませうかと云ひ、手の切れるやうな 1 Pound 紙幣 30 枚くれた。これで私共の所持金は皆になる。

更に Paddington Green の市警視廳に往つて、二人分四志拂つて、外國人滞在の登録を受ける。登録にはちやんと私共各自の寫眞を貼つて、番號は 4715 と 4716 である。これで私共も當分英吉利に入籍した譯である。寫眞を貼つた横には、「英字で署名不可能の者は左拇指紋」とある。伊太利、瑞西、伯林と恰も私共の後を追ふ様に廻はつて來たと云ふ大阪の人に會つた。

Hotel に歸つて、午餐の後、淺君が來た。水さんも昨日巴里から歸つて、明後日は私共を晚餐にと云ふ事である。旅客輻輳で、船は早くしないと中々手に入らぬと云ふので淺君に聞き合はせてもらったが、米國へ一月出る船の中で、三萬噸の Mauritius は出帆期不確實さうで、一月十七日の Royai George 一萬一千噸のにきめる。太平洋の船の事は、紐育東洋汽船の淺君の知人に照會してもらふ。

大使館から東京朝日が届いた。倫敦に來ると直ぐ故國の新聞が來るとは、嬉しい事だ。

此處の *Hotel* は日本人が多い。食堂で若い人達を見受ける。淺君の話によれば、倫敦には日本人が千人から住んで居るさうだ。それに往來の旅客を加ふれば、大分の人數であらう。今迄私共の通つて來た所で、絶えて日本人を見なかつたは、唯 *Palastina* だけだ。

夕食後「人本主義無窮平和」を妻に讀んでもらふ。著者伊藤翁は信州出の當年六十八の翁で、此冊子は今年二月の著である。第一此地球に名が未だ無いから「平和星」と命名するから始まつて、世界的平和の經綸が中々細かに語られて居る。去五月 *Abbas Effendi* の許で見た日本人の平和の畫はがきと云ひ、此小冊子と云ひ、人類が一つになりたい望が全く符節を合はして居る。

其内冊子の經綸は可なり細目に涉つたので、疲れて居る私は、暖爐の快い溫度につうとくして了ふ。

(三)

十一月十四日。今日も晴。

終日在宿。

午食後女中が私共の室を掃除の間讀書室で *Daily Mail* を見る。忽ち私は息を呑んだ。ある一項が

私の眼を射たのである。Tolstoy 寡夫人が死んだ。去四日クリミアで。ヤスナヤ・ポリヤナでなく、クリミアで。村が不穩でクリミアに避けて居たのか。それとも老病で轉地をしたのか。何れにもせよ、クリミアで死んだのだ。クリミアは以前爺さんが肺炎後轉地した處で、爺さんが長靴で磯に腰かけて居る向ふに、騎馬帽に長袴鞭を右手に娘かと思ふやうな若々しさで夫人が立つて居る畫はがきは、私の頭にある。波瀾多かつた夫婦の晩年の中で其時のクリミアは夫人にも嬉しい一齣であつたに違ひない。其クリミアで亡くなつたのは、夫人も本望であつたらう。

私がパレスチナのテベリア湖畔で夫人に書いた手紙は、テベリアの郵便局で刎ねられ、坡西土の佛蘭西郵便局で刎ねられ、今も其まゝ鞆の内にある。露西亞行は今度は駄目と見切つて、夫人にみやげの水飴は嘗めて了ふた。伊太利 Cono 湖畔の Bellagio では夫人の影を Tolstoy 本家の老母堂に見た。伯林では頻に思ふたが、終に手紙を書きも出し試みもしなかつた。英吉利に來れば、最早クリミアで死んで居る。十一月四日は私共が獨逸を出て、白耳義に眼ざめた日である。私は少しも知らなかつた。夫人は爺さんに十七も年下だから、今年はまだ七十五である。私共は今度露西亞に往けなくも他日往かうと話し合ふた。爺さんの墓邊に蒔かうと思ふて持つて來た自園山茶花の種子も、供へてくれと託された名刺や百合花の畫も、今度は持ち歸るつもりで居る。私共は待つことが出來た。然し夫人は

待たなかつた。十三年前一剋同志こくどうしが氣まづくなつて別れたきりで、心は兎に角手は握ることなしに、今生こんじやうの別れとなつた。私はそれを残念に思ふ。然しまた婆さんを爺さんの許に送つて安心と云ふ氣もする。

古倫母こりんぼでは生みの母、倫敦では Tolstoy 夫人、世界を一周もし果てぬに、私共は母や母見たやうな者を亡くして了ふた。私は鞆を開けて、六ヶ月前に書いた手紙を読み返して見る。

Lake of Tiberias

22 May, 1919.

Countess dowager Sophie Tolstoy:

Dear Madam.

After the silence of many years, I take up the pen to write you. How do you do, dear Madam? Though you are now over seventy and though you have had so many sorrows and sufferings in your life, yet I hope you are quite well, and notwithstanding the still unsettled condition of things in Russia the days at Yasnaya Polyana be quiet and even.

It was in February of 1017 that Leo your son came to Nihon and passed an afternoon at our own house, when I had the chance of hearing about you all. I wonder whether Leo told you anything about us or not. I understand him to be now in Sweden. Which of your sons do live with you now? Perhaps Michael? But dear Madam, you are happy in having sons and daughters who love you and are the comfort and stay in your old age. For however selfeliant one may be, there is a time when he or she sorely needs the natural affection of the blood. In that respect, I and my wife who after twenty six years of marriage have no offspring of our own are rather unfortunate, though we percieve the special significance and mission meant for us in it too.

It is thirteen years since my visit to Yasunaya Polyana. About nine years have passed since his death. What a lot of thing occurred during the interval! What a prodigious amount of suffering the World has had to pass through! It almost drives one to despair to think what price one had to pay. Yet dear Madam, we all know this to be the birth pang. New world is being born. You who had so many experiences of birth pangs and the joys of Motherhood after quite understand

it. What do you think will be the opinion of his? Of course his pain and sorrow on seeing much blood shed and on hearing the din of the fight would have been difficult to express. Yet through those thousand hideous scenes would he fail to perceive and rejoice in the triumph of God? Yes, as some one said, "God is wiser than we." Though the peace conference at Paris may persist in making a series of blunders, though the fermentation in Russia and the other countries may boil over to the excess, yet we could not but see that the new Era is being born. It is quite near—almost at hand. Nay, it is almost already done. A little patience—and the pang will be over. The pain is momentary. Joy, forever.

You must wonder that I am writing from unexpected corner. Yes, I write you, not from Nihon, but from the lake of Tiberias in Palestina. Not only I, but my wife is here with me. We left Nihon toward the end of January, landed at Port Said on the middle of March, stayed at Cairo about half a month, then spent whole April at Jerusalem, and after passing about two weeks in Nazareth we came here and already stayed a week. Why did we come to Palestina? What for? The reason is this—we intended to resuscitate Jesus Christ. After much musing and pondering

over the condition of mankind, we—I and my wife—came to the conclusion that nothing but the second appearance of Jesus Christ could reform the world at large. We have had enough of dead Jesus, crucified Christ. Of the cross we have had too many. No, he must come again, the Jesus Christ. He must come not in spirit, but in flesh. In short, the prophecy and promise so distinctly made in Bible as to the second coming of Christ must be fulfilled now. "I believe in the teaching of Christ and I believe that complete happiness on Earth is only possible when all men believe in his teaching." So said your lamented husband. I fully concur in that. But mere dead words of dead Christ will do nothing. The world must have the living words of living Jesus. The new Earth must turn on that only axis—Jesus Christ in flesh. Were we successful in resuscitating him? That we do not know. He the Father only knows. Time will show.

Tomorrow we start for Damascus. By the beginning of June we shall be back in Jerusalem. Then via Port Said we go to Europe. From Europe to America, and then crossing the Pacific we shall return to Nihon, thus making the circuit of the world. Now two countries we would like the most to visit are Russia and Germany, which however are perhaps most difficult to enter at

present. The chief attraction in Russia is, needless to say, Yasnaya Polyana. To see the dear Yasnaya again, to speak with you freely, and to visit and to speak silently to his grave are the fond wishes of mine. My wife who loved him as she always loves dear old fatherly men and who fully sympathize with you——why, she is even much more earnest than I——if I may say——in the wish to come to you. She speaks but little English, yet great deal has she in her mind and her heart. We have some cards entrusted to us to present them to his grave. A girl student brought her piece of raiming to offer it to his grave by our own hands. They all know our intention to visit you. You see how we all love him and sympathize with you in Nihon. Thus our visit to you has manifold significance. Personal but national, it may be said. But then they tell us that the time was unfavourable. We must bide the time it seems. We intend to stay in Europe until the end of the year. Circumstance will change in the interval. Favourable time will come, I believe. So whenever and wherever we got the chance, we will hasten to your Yasnaya Polyana. You will be so kind as to allow us to pass a night under your roof. We shall see your old yet hearty self and speak with you on the sorrows and joys of our lives to our hearts' content.

We shall see some of your sons and daughters and grand children. Together we shall be to his grave and speak in spirit with him. We pray our Father to give us this dearly loved wish.

Hoping to see you,

Dear Madam,

pretty soon,

We remain,

Affectionately yours.

Kenjiroh & Ai Tokutomi.

(右譯文——あい子)

伯爵未亡人ソフイートルストイ様

愛する奥様

幾年もの御無沙汰の後御便りの筆を取ります。御機嫌は如何ですか、御齡も最早七十を越えられ、随分さまぐの御悲み御憐みの御生涯であつたとは申ながら、あなたには愈々御健勝に、然も露西亞が今猶いろくと不安の状態であるに係らず、どうかヤスナヤ・ポリヤナには平靜なる日常のあらんことを祈つて居ります。

千九百十七年の二月でした。あなたの御子息レオさんが日本へ来られ、そして私共の家で或日の午後を過ぎましたが、其節私はあなたの御消息を詳しくお聞きすることが出来ました。私共の様子をレオさんがあなたにお話したか如何かは知りませんが。レオさんは今瑞典に居らるゝと存じて居ます。御子息の誰方があなたと御一緒にお暮らしですか、多分ミカエル君ではありませんか。然し奥さん、あなたの御老境で、あなたを愛し、あなたの慰めとなり、頼りとなる御子息や令嬢を持たるゝあなたは御幸福です。自信は誰しも持ち得ませうが、然し男にしても、女にしても、何時かは肉親の自然の情愛を必要とする日が参ります。その點に於て結婚後二十六年の今日猶自身の子供を持たない私共夫妻は、たとひそれが私共に對する或特殊の意義と使命を含むものとは思ひましても、寧ろそれは不幸と申すべきであります。

私がヤスナヤ・ポリヤナに參上の時からもう十三年、御良人の逝去から殆んど九年を経過しました。此間には如何に澤山な事件が起りましたでせう。そして世界は如何に驚くべき多くの苦しみを通らなければならなかつたでせう。人々はその拂ふべき代價の如何に大きなものであるかを考ふる時、殆んど絶望の暗に追ひ込まれます。然し奥さん、私共は是等は凡て陣痛の苦しみだと思ひます。新しい世界が生れかゝつて居ます。あなたは母として産みの苦しみと其欣びとの經驗を幾度か重ねておいでます。ですから十分それは御理解が出来ると思ひます。若し伯爵が生きて居られたならば何と申されませうか、勿論彼は是等の夥しき流血を見、鬨争の囂々を聞かれては其苦悶悲痛は到底言ひ現はすことの出来ない程でありませうが、然し之等無數の忌しい光景を通してども、故翁は神の勝利を認め且歡ぶことに吝であり得ましたらうか？ 左様、或人が言ふ

たやうに、「神は我等の慧きよりも慧し」です。たとひ巴里に於ける平和會議が、愚案の羅列を押し通さうとしましたも、亦露西亞や其他の國々の擾亂がいよ／＼極度に沸き返つても、しかし私共は新しき時代の將に生れつゝあるのを見逃すことは出来ません。それは近く——殆ど其處に。否、それは最早既に生れて居ります。少しの忍耐です——陣痛は去りませう。苦しみは瞬間、喜びは永遠であります。

あなたは私が思懸けない一隅から御手紙差上げるのを不思議にお思ひなさる事と存じます。さうです。私は今、日本からではなく、パレスチナのテベリヤ湖畔から差上げます。そして然も私一人ではなく、私の妻も此處に一緒に居ります。私共は恰度一月の下旬に日本を出發して、三月の中頃ポートサイドへ上陸、半月程カイロに滞在し、四月一杯をエルサレムに過しました。そして二週間程をナザレに送り、當地へ參つてから一週間になります。

私共がパレスチナへなど參つたのは何の爲めでせうか、理由は斯様です。——私共は耶蘇基督を復活させようためでありました。人間の現状に就てよく／＼沈思熟考を重ねた結果、私共——私と私の妻——は、基督の再現にあらずんば全世界を覺醒さす事は出来ないといふ結論に到達しました。私共は「死せる耶蘇」や、「磔刑の基督」はもう澤山です、十字架が多過ぎます。否、「イエス・キリスト」が今一度來ねば駄目です。靈の基督でなく、肉の基督が來ねばなりません。約言すれば、聖書の中にあれ程確然と豫言され、約束された基督の再來は今こそ實現されねばならぬ時です。「余は基督の教を信ず。而して地上の完き幸福は只凡ての人々が基督の教を信する時に於てのみ實現する」と曾てあなたの御良人は嘆じて申されました。私も全然それに同感で

す。然し死んだ基督の、死んだ言葉では何の力もありません。世界は生ける基督の生ける言葉を要します。新しき世界は生ける耶蘇基督——只その軸により廻轉すべきです。然らば私共は基督を復活せしむることに成功しましたでせうか、それは判りません。只父なる神のみが知つて居ます。「時」が示してくれませう。

私共は明日ダマスコに向つて出立致します。そして六月の上旬迄には又エルサレムに歸る積りです。それからポートサイド經由で歐洲に渡り、歐洲から亞米利加へ、さらに太平洋を逾えて日本に歸り、世界一周を了ります。私共が今度是非訪れたいと思ふ二つの國は、露西亞と獨逸ですが、然し現今の有様ではどちらも入國が頗困難なことと思はれます。露西亞で一番心を惹かるゝは申すまでもなくヤスナヤ・ポリヤナです。愛するヤスナヤの再會、あなたとの心ゆく會談、そして故翁の墓と沈黙の物語りなど、私の無上の念願です。私の妻は誰しも父らしい老人を見れば懐かしがる様に故伯爵を愛し、あなたに對しては亦全心の同情を捧げて居ります。——若し左様申すことが出来ますならば、私の妻は私よりも一層熱心に御地に參ることを望んで居るのであります。彼女は自由に英語を話しません、然し彼女の心中、意中には溢るゝ程の思ひを持つて居ります。猶、私共は故翁の墓前に居ける筈の名刺の幾枚かを託されて居ります。或女學生は自分の筆に成つた繪畫の一枚を親しく私共の手で翁の墓前に捧ぐる様にと頼んで參りました。是等の人々は皆、私共があなたをお訪ねするつもりを知つて居ります。日本に於て如何に人々が故翁を愛し、あなたに同情を持つて居るか、御判りにならうと思ひます。私共の御訪問、幾多の意味を含みます。個人的ではありませんが、又國家的とも申されます。然し、時機が生憎だと皆が申します。來る機會を待つの外ありません。私共は今

年中は歐洲に留まりたいと思つて居ます。その間には事態が一變するかも知れません。きつと適當な機會が參ると思ひます。何時何處に居りましても、機會の得られ次第私共は飛んでヤスナヤ・ポリヤナに伺ひます。その節は、どうか夫妻のために一夜の宿を御無心致します。私共は、御高齢で、然もいよく御壯健なあなたに御目に懸り、俱に心ゆく程世の悲喜哀樂を語りませう。御子息御令嬢の或方々や、御孫様にもお目に懸りませう。皆様と故翁の墓に奠じて翁の靈と語りませう。希くは父なる神、我等のこの切なる歡びの願を聴き玉はんことを。 敬具。

いと速かに御拜面の日を念じつゝ

千九百十九年五月二十二日、テペリア湖畔にて

徳 富 健 次 郎
同 あ い

私は今書き加へる。

“So you are gone to him, dear Madam, even as my old mamma did ten months ago go to my old papa. You are gone, both you and mamma. You could not wait for us, neither of you. Shall we grieve over you, both? Grieve, of course we do. But rejoice we do too over the peaceful end of your toilsome journeys and the happy meetings of you both with your husbands.

May you all rest in peace!”

(右譯文)

とう／＼あなたは逝かれましたね、故翁の許に。恰度十ヶ月程前、私の老いたる母が老いたる父の許に参つた様に。

あなたは去られました。あなたも母も、いづれも、あなた方は私共をお待ち下さる事が出来ませんでした。私共はあなたや母のために哀しむべきでありませうか、無論哀しみます。然し又私共は、あなた方の辛勞多かりし旅路の平和なる終りと、各御良人への幸福なる再會とに對して寧ろ歡びます。願くは、あなた方凡てが平安のうちに休息せられますやうに。

(四)

十一月十五日。水さんの馳走にゆく日で、淺君が案内かた／＼やつて來た。英吉利はまだ砂糖克己で、茶を呼んでも砂糖は一人に付散藥の一包程もくれぬ。淺君が今日は自身香港で仕入れて來た角砂糖一罐を譲つてくれた。千金にます贈物。

夕五時半から出かける。Kensington High Street からはじめて地下鐵に乗る。Charing Cross Tube に乗り換へる。地下深く白い滑々した所謂化粧煉瓦で穹窿をかためて、停車場處々に電燈晃々と、成程獨逸の飛行機の襲來を此處に避難の婦女老幼が集まつたも尤と思はれる。

Lift で上つて、Hamstead 驛で出る。而して立止まつては路を案する淺君の後からそれでも誤なく

坂の上の水さんの宅に着いた。

好い住居である。唯女氣子供氣がない爲に折角の家が淋しく寒い。水さんの家族は東京に住んで居る。子達の學校の關係からさうなが、斯る別居は傍目にも心憂く思はれる。一夜の宿に温まつた清さんの家を知るだけに、水さんの身邊が殊に淋しく氣になる。私共が二人で歩いて居るからでもあらう。水さんは電車の切符が變つたと云ふては封じて送り、見るもの聞くものにつけ毎日のやうに故國にたよりをすると、東京の子達も劣らじとたよりをし、珍らしくないものまで阿父おとうさんに書き送るさうな。

客は私共の外に學生時代粕谷に來た事もあると云ふ時事新報記者と、鑛理學士。英吉利の英語は耳馴れぬ英學者に分りかねる話。水さんが上手な謠の話。淺君も二年越し習つて居るといふので、話はずむ。水さんは自身船に弱い爲、船酔ひの藥で一番好いと云ふ *Mother's sea sick remedy* を妻に教へてくれた。時事記者の話によれば、それは銀座でも賣つて居るさうな、私共のやうな田舎者は、燈臺下暗く洋行して毎々日本を知る。其爲にもよく出て來た。

女氣はないが、料理番が腕を振つた馳走の數々が出る。雪の様な米の飯、鮓すし、鯛の刺身、鶏甘煮、鯛味噌汁、蒲燒、鰻うなぎと胡瓜きゅうりの酢の物、すり身の吸物、漬物、葡萄と梨、羊羹とつき〜に出る。私は若い人よりも健啖けんたんの自分を見出した。水さんも深くはいけぬさうな。出された葡萄酒も日本酒も、素

人にすら好いものと思はれた。

それから間を置いて、甘酒の馳走がある。甘味も程よく、少し薑しょうがが入つて居て頗る氣の利いた味だ。東京は淺草で罐にして賣つて居るのさうな。倫敦に来て甘酒は、富士の絶頂でのその様に珍らしく嬉しいものだ。

N.Y.N.の支店長として、其船に乗つて來る程の名ある人達は一度は水さんの家の郷味の振舞に會ふのださうな。私共も其船にこそ乗らなかつたが、Nobilinで水さんに會ふた爲に、倫敦のHotelと云ひ、得難い甘酒の御馳走にまでなつたのは、ありがたい事である。

十時頃私共は淺君と謝して起つ。玄關を出れば、地が月影のやうに白い。雪が降つたのである。然し最早止んで居る。雪を踏んでしばらく歩き、乗合自動車でOxford Circusまで行き、それから淺君の案内で買物所のRegent Streetを歩く。大袈裟な道普請で、歩道に傍ふて積まれた四角な木片は革命騒ぎの市街戦に出來たBarricadeでもあるかのやう。直ぐ同じ道普請をして居た伯林が念頭に上る。Charing Crossで私共は淺君に別れ、地下鐵Kensington High Streetより、Hotelに歸る。

(五)

十一月十六日。曇。午後Kensington gardenを歩き、ギクトリア女皇の皇婿Prince Albertの記念

像の前に立つて、塔の透かしになつた處に腰かけ姿の其像を見る。ギクトリア女皇の民等が謝恩を表する爲にと題詞がある。私は妻に Albert 親王の話をして、其立場の困難を語つた。ギクトリアが賢い女であつたればこそだ。でなければ、男子として中々立ちにくい位置だ。胤はもらふ。然し國政に干渉は容さぬ。と云ふ様な養子婿のみじめな云はゞ嫉妬の眼で睨まれ通して、而して否應なしに此様な謝恩の碑まで建てさせた Prince は見上げた男ではあるまいか。それでも「ギクトリアの民」と死後までもまだ差別を立てる英吉利氣質が、まことにしぶとい英吉利人らしい。

園をぬけて道に迷ひ、六時頃やつとホテルに歸る。

(六)

十一月十七日。雨。午後雨仕度で Kensington High Street を歩き、倫敦地圖、案内記、當月新刊の婦人雜誌「Eve」や果物など買ふて歸る。

亞弗利加かららしい黒人が書店に来て居た。店員が子供にでも言ふ如く Bible を買ふべく勧めて居た。異な感がした。

果物は相應に好い。白耳義で食ふたそれ程ではないが、Muskat 葡萄も可なり甘い。然し Eggs が倫敦に來た月に倫敦で出た「Eve」は時を得て居ると謂ふて買ふた婦人雜誌は、内容のつまらぬもの

であつた。表紙の半裸體の女が懷劍片手の姿で、それに鞘さやにをさめた日本刀などあしらつてゐるのは日本の Artist の手にでもなつたものか。感心したもので無^ス。

(七)

十一月十八日。最初の程は朝々暖爐を焚きに來る女中の Ada に口頭で朝食の註文をしたが、一昨日から註文の傳票を書^キて、Manelpiece の上に置く事にした。稀まれに男が持つて來るが、大抵は女が持つて來る。

私共の室は Ground Floor だが、私共の下にも住んで居る家族がある。釜底帽の五十前後の男がよく朝出て夕歸つたり、學校行きの十二三の子供連れが待つて居ると同じ位の子が何處からか現はれて來たりするを見たが、それは私共の下に住む人達なのだ。地表から一間ばかり、掘り下げであるので、船の Deck の船房のやうに、それでも陽光がさし入るのだ。よく Lyon と書いたパン屋の車が私共の前にとまるのは、下の家族に配達するのだ。今日は “Hardy loggie—Hardy loggie” と云ふ觸れ聲が透かした硝子窓から聞えて、一尺程に切つた堅木の薪を馬車に積んで賣る男がある。硝子窓から私共を覗いて、買はぬかと云ふ態をする。夫婦で間借りをして居ると思ふたらしい。嬉うれしい氣もちになつて、買ひたかつたが、石炭が十分あるので、私は手を振つて見せると、“Hardy loggie—Hardy loggie”

の聲は馬車と共に下町の方へと往つて了ふた。觸れ聲と云ふものは、なつかしいものである。私共がそだつた熊本で、私は郊外住居だつたが、妻は市中の住居で、よく「タツギヤア——タツギヤア」を聞いたものだ。「薪や薪や」の訛りである。「タツギヤア——タツギヤア」と「Harry——Loggie」と物のみか音までよく似て居るので、殊に Home の情調をそよる。それは私共がエルサレムで聞いた飴賣の聲が「朝顔の苗、胡瓜の苗」を想はせたと同じやうなものだ。

Hotel に蟄居して、朝が晚いので減りもせぬ腹に、あまりうまくもない宿の午餐をつめ込むのは感心せぬ。そこで今日を初めとし、降つても照つても外出し、午食は外で食ふ事にする。

そこで出かける。今日は曇り日だ。ぶら〜 Kensington road を東へ歩く。昨日は Kensington Garden 外の歩道に傍ふて馬の爲に設けられた二の新しい花崗石の水槽を見た。それには何年何月何處で戦死した良人の記念の爲に、と云ふ文句と共に寡夫人の名が鐫つてあつた。今日は反對の側の廣い歩道を歩いて居ると、まだ若い男の舗石に胡蹴かいて物乞ふのを見る。白や赤や青の Chalk 海の景山の景など舗石に描かれて居る。而して其處には白 Chalk で、「私はカタリではありません。何年何月何日佛蘭西の何處で Liquid fire の爲に負傷して働けなくなつた者です。Ladies and Gentlemen, 何卒あなた方の Brother の困つて居るのを看過しにしないで下さう」と書いて居る。私共は已に數個の

銅貨が入つて居る脱いだ其帽の中に幾個の銅貨を加へた。少し往つて見かへると、其前に *Billings* を開けて居る髪の白い *Lady* の姿も見えた。こんなのは後でもよく彼方此方で見かけた。死力を出した大戦の後始末、中々英吉利も骨が折れると思ふ。

私共は *Hyde Park Corner* から *Green Park* を通つて、*Buckingham* 宮に王旗の翻るを眺め、其處の廣場にいち白き大記念碑、空と地の間に小高く悠然としたギクトリア女皇の圓熟した *Womanhood* をなつかしみ、*St. James Park* を通つて到頭 *Westminster Bridge* まで歩いた。此處の朝景色は *Wordsworth* の *Sonnet* で想ふて居たが、眞晝中の曇り空の下で、橋の上の車は車、馬は馬、人は人と秩序正しい雑沓、橋の下の濁り *James* に或は汽笛を鳴らし、或は荷足舟を曳き、おのがじゝ上り下りする船の賑合ひも好く、橋の西詰に川に向ふた一構へ、名物議院の高い時計臺を上の開會中の大旗がゆら／＼と揺／＼で居るのも殊に好し。

ぶら／＼議院の前を歩く。 *Kobert Peel* だの *Palmerston* だの *Cobden* だのと知名の政治家の記念像が數々立つて居る。

Westminster Abbey に入つて見る。即位の式には毎も使はるゝ薄暗い古い建物は、今禮拜中で、佳し *Choir* の歌の波が寄せては返して居る。 *Poet's Corner* の名高い墓を見るつもりで來たが、禮拜中

でそれを見合はせ、お馴染の Gladstone や Disraeli の像を見ただけで Abbey を出る。

議會向きの A. B. C. の茶とパンの午食を済ます。二人で十片。A. B. C. とは Aerated Bread Company の頭字だ。Aerated のパンは軽さ。

それから乗合自動車で Piccadilly Circus 迄行く。途中往來の真中に新らしく建てられた Cenotaph 招魂碑を過ぎる。國旗で掩ひ、周圍に數々の花環を飾つた其處には、多くの男女や Khaki 姿も見える。往來の烈しい處で、よく怪我人が出來ると新聞に苦情が出て居た。

馴れて居るので、それでも怪我は少ない方だが、先日は此處ではなかつたが、十歳になる女兒が學校歸りに荷物自動車に轢かれ、學校中で其葬式を送つた記事が新聞に出て居た。

Piccadilly Circus で自動車を乗り換へる。此處は熱鬧區で向ふへ越すに Subway もある。地下を行くのだ。それでない者の爲には、間島の安全區がある。隙を見て其處に越し、また隙を見て向ふに越すのだ。乗合自動車には、何れも警句が書いてある。「感は思ふよりも早し」とか、「行る前に先づ御覽なさい」とか色々注意の語が書いてある。危い場所には一際すぐれて丈高い巡査が立つて居る。四辻では交り番こに通行の流れを通す。止つた間に自動車の間を縫ふて慣れた人は越す。大勢なれば越す方が優勢で、數の蔭に隠れて越す道もある。私共のやうに、静かな村住居して神經ののびた者は、

人ごみの中を歩くに一通りならぬ苦勞する。此旅に出かける少し前も夫婦で電車から落ちた事がある。それは新宿の追分おひわびで、落ちた者も悪いが、無遠慮の乗合の一人と車掌の不注意が落したと云ふてもよかつた。幸に私は少し膝をすりむき、妻は下駄の緒を切つただけで済んだが、それ以來日本の電車が恐くなつた。日本を出て以來、馬車や自動車で出あるく事が常であつても、人ごみを歩く場合もないではない。従つて冷汗ひやせになる場合も時にはあつた。坡西土ぼしとの停車場外で、危く追つた自動車をかはず餘裕がなくなつて、私は氣遠くなつて居る妻を突きやるやうにして二人共むつか纒むかに免れた事がある。佛蘭西人は敏慧輕快で飛行機でも自動車でも操つる事流るゝが如く、見て居て氣もちがよく、それでも其間を横切るとよく冷汗が流れた。英吉利人の自動車を操る手際あやは佛蘭西人より少し手重ておもだが、然し安全と云ふ點では却てヨリ安心な心地がする。行くに路あり、廻るに規まあり、巡查が手を舉げればたと止まり、自動車が廻る場合には高く右手を廻る方向に向けて行人うろうとんの注意を牽ひく。これは新嘉坡以來見馴れた處で、如何に戦後で荒んで居ても、英吉利の訓練は一朝夕に失せるものではない。

Piccadilly Circusピカデリーで乗合自動車を下りると、私共は車掌が教へた通り、Kensingtonケンシントン行きのに乗るべく、向ふへ越しにかゝつた。私は右、妻は左、自動車の際を見て、間島へ渡らうと二足三足行くと、思ひがけない右角から忽ち自動車が來た。はつとして妻の腕を捉へて後へ退うすつた時は、自動車は私の

右の腕に危く突かけて止まつた。私は冷汗を流した。今少し亂暴な、人の命を何とも思はぬ車掌だつたら、私共の血は *Piccacilly* を染めて、此の報告を私共は書く事が出来なかつたのだ。それについて思ひ出すは、私共の周遊が新聞に公にされた後、佛蘭西語が出来るから祕書で連れて往つてくれの、瑞典に往つたら某と云ふ西洋人の妻になつて居る女に會つてくれの、と様々依頼や註文の手紙を私共は受取つたが、中に私共を苦笑させたのは傷害保険の勧誘だつた。成程新宿で日本の電車から落ちた手際を見れば西洋の人ごみの中で自動車に轢かれたりはあるまじい事でもない。それを見越したやうな保険勧誘は、親切と云ふ事が出来なくとも、少なくとも其道にかけてぬかりのないとは云へやう。然し私は保険と云ふものが金輪際嫌ひだ。傷害保険をつけて世界一周の旅に上るなんかはづかしい事だ。そこでやめた。此時若し英吉利の自動車で死傷したら、それ見た事かと保險會社の勧誘員に鼻うごめかされたであらう。

兎に角自動車に轢かれ損ねた私共は無事に向ふに越し、別の乗合自動車で無事に *Hotel* に歸つた。歸ると私共の室は濡れたワスの臭が満ち／＼て居る。 *Hall porter* の一人が来て直してくる。私共のワスは秤形になつた閉閉器の鍵を引いて、明るくし小さくするやうになつて居る。不用意のワス心中を遂げない爲め、今夜から就眠前嚴重にワス管のねちをねちて置く事にする。而して夜間の用の

爲に、日本から持參の手燭を出した。

(八)

十一月十九日。雨。今日から Daily Mail と Daily Mirror がきまつて来る。英吉利に来て今更に羨ましいのは、事々物々人々類々にあらはれて居る「自由」だ。戦ふは同化で、敵の武器をとらずに戦へるものではない。獨逸との戦で英吉利の「自由」は大分傷められた。それでも本質は中々變るものではない。新聞一つ見てもそれは分る。Northcliffe は Northcliffe が大嫌ひで、盛に排過激の宣傳を新聞でやつて居る。然し其新聞には英吉利が過激派を潰さうとするのは、百年前佛蘭西革命を潰さうとしたと同じく勞して功なしと云ふ某將軍の投書を麗々と掲げて居る。段々險惡になりさうな勞働者の主張を危險視しつゝ、或はそれ故に、特に彼等の見を公にする爲に一欄を供して居る。「妻が良人の外に男友をもつの可否」「獨逸人に嫁した英吉利女の身の上」と云つたやうな問題でも、千差萬別の異見が投書欄に肩を摩して居る。「自然」が最上の智慧で、「自由」が一番安全である事を此處の苦勞人はよく知つて居る。

雨装束で出かける。Hotel から南へ少し往つて、近い處に藥屋や果物店を見つける。今日は Albert Hall に “With Albany in Palestine” の活動寫眞を見るつもりだが、時間が早いので、例の通りを

Knights Bridge Street まで歩くと、一の飲食店で焼き立ての熱い Beefsteak と Ginger beer 飲むが、晝食をする。

それから立戻つて Royal Albert Hall に行く。それは私共の Hotel に程遠からぬ Kensington Road に面して、小山のやうに踏む楕圓形の會場である。五十年前に二百萬圓をかけて出来たもので、周圍百三十五間、樂に八千人を容れ、其處の Pipe organ は九千の Pipe があつて世界的に大きな Organ と云ふ事である。音樂會や色々の會が始終催されて、私共は往來の度毎さまぐの看板を見せられる。"With Allenby in Palestine" の活動寫眞の看板が一兩日出て居る。Allenby と云へば、Caro で顔を見、Nazareth で私が手紙を書いた彼は先日凱旋し、日にやけた面目、古びた服装、飾り氣のない武將の風采は、功を先任將軍と部下とに歸する謙讓と、九十を越した母堂への孝行で英吉利人一同の評判が好かつた。活動寫眞は亞米利加人が飛行機で從軍撮影したものだ。Allenby 自身も先日見物したさうである。

二志拂つて、二階座席に通る。八千人も容るゝ建物だけあつて、大きなものだ。晝夜二回の興行で、今日は七分の入りである。

寫眞は Palestina の部と Arabia の部と二つに分れ、Palestina の部は Allenby が主人公、Arabia の

部は亞刺伯の人心を収めて側背から Allenby に力をあはせ、其功を成さしめた Lawrence 大佐が主人公で、兩將兩軍 Damascus で相會する處で目出度終を告げる事になつて居る。

午後二時半に、何の前置も囃子もなしに映寫が始まつた。活動が大部分で、動かないのもある。背廣の若い男が出て來て説明する。即ち飛行機で從軍撮影の重役者米人 Lowell Thomas だ。彼が出て來ると、會衆が先づ拍手を浴せる。大きな建物だが、聲は可なり通る。然し私には斷片的にしか説明が分からない。皆が哄と笑ふ時、平氣で居らねばならぬのが、頗苦しい。然し説明がなくも、畫は自ら説明する。婆さんが賣りに來た Program を三片で買うて、それを見い／＼遷り變る畫面を眺める。五ヶ月前に埃及や Palestine を親しく歩いて來た私共には、光景の多くが倍の鮮やかさで活きて來る。

軍用飛行機から見下ろしたピラミッドが現はれる。蘇西運河を下に見て、沙漠を Palestine へ進む六萬と云ふ駱駝の縦列。Khaki 服、斑白の八字髭、虹色の勳牌を胸に、鐵壁も透さでは止むまじい像が大きく映ると、會衆が騷呼の聲を上げる。Allenby が消えると、飛行機が小さく現はれてやゝに大きく近くなり、一ぱいになつて過ぎる。昔のユダヤの今の村々が現はれる。井に水波む甕の女。砲車が行く。砲の白い煙が爆發する。騎兵が奔る。エルサレムが落ちて、Allenby を先登に徒步入城の行

列。それを迎へるエルサレムの父老。お馴染のヤツツア門、直ぐ其處の Hotel に私共は五十日も居たのだ。空から見たエルサレム。橄欖山、ゲツセマネの園、Omar の Mosque、お墓の會堂、倫敦に來てまたまざ／＼それを見る。然しなつかしいのは私共ばかりではない。私共の隣に居る若い Cavalry の兵士兩人は、初から終まで畫のうつる毎にころ／＼喜び、くつ／＼笑ひ、其處で苦しみ死を冒し而して生きて還つた者でなければ出來ぬ怵へられぬ悦びの騒ぎをする。

十分間の休憩があつて、亞刺比亞の部に入る。説明者はやはり同じ人。分らぬ事も依然たるものだ。今度は埃及からずうと Kharounn まで南下する。沙漠の沙嵐。紅海に出る。汽船で亞刺比亞の港に着く。牛や馬を船から丸太で海に刎ね落すと、驚いた牛馬はそれでも水中で起き上つて、眞顔で陸へ上る。それが皆を笑はす。牛さん馬さんに濟まない氣がする。亞刺比亞の沙の上の邑。あの頭のかぶりもの、あの夏冬もない寛濶の袍、髻長に納まつた亞刺伯酋長。其装をした亞刺比亞の無冠王 Lawrence。亞刺伯を抱き込んだ Lawrence の別働隊は次第に北上する。シナイ山が映る。進んで死海ヨルダンの谷が出る。装甲自動車が Moab の地を奔る。空中戦。敵の一機が火を起してばた／＼と死海の濱に燃え落ちるので、私共ははつと息をつまらせる。

Lawrence はヨルダンの東を北へ進む。已にエルサレムを落して、エリコの谷かけて別働隊と聯絡

を通じた ^{Allenby} の本軍は、地中海岸からエルサレム以北の山地を一掃して、エスドレロンの野からナザレ、テベリアを席捲し、長驅 ^{Damascus} に入つて、此處で ^{Lawrence} の軍と東西相會する事になる。それから ^{Aleppo} が落ち、土耳其が降り、やがて歐羅巴でも休戦になり、^{Mesopotamia, Syria}、亞刺比亞、パレスチナが土耳其の鞭をはなれると云ふ段取で、映寫は終を告げる。

終つたのは五時であつた。

私共は戦ふた人々にしみじみ氣の毒と云ふ氣分になつて、^{Hotel} に歸つた。歸りに黒葡萄、^{Jamaica} の ^{Grape fruit} と一瓶のアルコホルを買つて歸つた。

白耳義での電報の返事として、正金支店から文淵堂の爲替入手の通知が來て居た。

それから私共の赤と緑の鞆が二個郵船支店から着いて居た。此は去七月初私共が伊太利行の船に乗る時、坡西土の南さんに頼んで倫敦に送つてもらつたもので、鍵を添へて置かなかつた爲に、倫敦に着いても税關の検査が出來ず、主が大陸をぶらついて居る間、四ヶ月と云ふもの税關の厄介になつて居たのだ。氣永の英吉利人もあまりの事に劫を煮やし、錠前を破して検査を濟まさうと云ふのを、郵船でもう少しもう少しと頼むやうにして、到頭私共の到着まで待ちつけたと云ふ事である。

金は着く。鞆は着く。果物屋で買つた夏蜜柑見たやうな ^{Grape fruit} なるものゝ案外酸つばかつた

のも、大した失望にはならなかつた。

一週間の Bill が来た、朝夕二食を添へて 20 Pounds に上らなう。先づ一日二十三圓と云ふ處だ。鞆を開けて坡西土で一別以來の内容に對面する。獨逸で欲しかつた軟らかい毛布や、濇かい下着や、冬物一切が出て来て私共を悦ばせる。妻は無いと思ふたものまで見出し、送り戻してしまふたつもり。懐爐灰まで入つて居たのを喜ぶ。少し輕かつたかけ物の脚部に Shetland の毛布をふわりとかけて、馴染の銘仙の丹前を袖たゝみして側の椅子にうちかけ、俄富限の夢は長閑なものであつた。

(九)

十一月二十日。朝私共は自動車で正金支店に往つて文淵堂の送金を受取る。此處にも Roll of Honor が掲げられて、従軍店員の姓名が出て居る。死傷も一二に止まらないであらう。店頭日本人の影も二三見えた。係の若い三——君が多分あの三さんの何かであらうと思ふ私は、不如歸の著者として少々くすぐつたい氣がした。

更に郵船支店に行く。正金にも二三日本人を見たが、此處には更に多い。水さんは留守であつた。副長室に獨事務を執つて居る清さんに過日の禮を述べる。それから出船前の忙しい淺君のデスクを訪ひ、Oxford 行きの打合せをして、此處を出る。

それから倫敦第一の婦人服仕立屋に連れて往けと自動車掌に云ふて、Regent Street の宮内省御用
Zooil に案内される。金不足で巴里で出来なかつた妻の服をつくらせようと云ふのだ。私は巴里で背
廣を作つたので、英吉利で作らうと思ふて居た冬の杉の色の服を作る事は見合はした。巴里で男の服
を作り、倫敦で女の服をつくるなんかまさに逆さ事だが、決して奇を好んだわけではなく、金の都合
がさすわざである。妻の服地には樺茶の天鷲絨を擇んだ。近頃の若い西洋婦人は、申合はせたやうに
袖の潤い、袴の窄くて短かい、意氣な服を着る。それで踵の高い靴をはいて、薄い鞆から白い足が透
いて二本にゆうと立つた處は、ある人が評した通りまるきり「鷲の感じ」だ。若い女には所謂意氣か
も知れぬ。上品では無論ない。歩いたり、車の上り下りには裾が狭いのは不便にきまつて居る。袖が
寛くなつたり、裾窄くしたり、飛んでもない廣い帯をしたり、畢竟日本趣味の適用は、洋服として悪
化である。男装の女は興がさめる。私は支那料理の如く支那服も男は好きだが、支那婦人の股引姿は
好まない。此頃は倫敦でも男子の服の無趣味を改善の會など出來て、仕立も色彩も色々工夫を凝らし、
エリザベス時代に復歸したやうなものゝ展覽會などが開かれて居る。子供には好いかも知れぬ。私は
婦人の服については、英吉利の皇后さんと同様裾寛かな袴の賛成者だ。英吉利も皇太后時代までは諸
買物は宮中に取り寄せてされたさうなが、今の皇后さんはクリスマススの買物でも女官一人連れて一頭

立の馬車でさつさと町に出かけ、人の氣がつかぬ間にぐんぐん買つて歸ると云ふ風だから、寛かな袴は所謂お上品を意味するものではない。私は私の皇后の爲におとなしい *Syle* を擇んだ。而して 50 Pounds の手金を拂つて店を出た。

自動車を返へして、私共は唯有る飲食店に入り、茶とパンと *Ginger Beer* で午を濟ます。婦人連れと思ふて、女ばかりの處に興を据ゑたら、其處は *Lady's Corner* だと注意をされた。多くの倫敦の果物屋は花屋をかねる。これも宮内省御用と云ふ一の店で、私共は故國を偲ぶ柿二個と、西班牙産の生栗を一封度買った。菊の切花や、鉢植が美しい色と佳い芳を舖に満たす。日本出來と云ふ菊や櫻や梅の造花は無下にまづいものであつた。

Taxi や *Hotel* に歸る。

暖爐の火で栗を煨つて食ふ、甘し。

Mantelpiece の上の剝曆に書して置いた文字が、今日は十一月二十日 *Tolsroy* 爺さんの十年忌である事を告げる。*Leo* が粕谷に持つて來たあの爺さんのべそかいた寫眞を *Mantelpiece* に立てる。婆さんに私が書いた手紙を其處に並べる。爺さんが死んで滿九年。婆さん死んで唯十七日。會つて如何様な話をして居やう？

露西亞はまだぐら／＼煮えて居る。Daily Mailは大の過激派嫌ひだから、報道も一々當にはならぬが、それでもすべてが Too much である事は疑ふ事が出来ぬ。婦人に對する亂暴が頭を痛くする。Trotsky は Jew だ。Jew の Vindictive な強シ復讐心はイヤだ。然し露西亞人は終に露西亞人だ。其愛する天性が勝を竟に制するは疑もない。過激派征伐が露西亞の救済ではない。過激派をいぢめれば、彼等が露西亞をヨリ多く窘めるのみだ。無論暴力はいけな、過激派がするにせよ、外國がやるにせよ。

(十)

十一月二十一日。美晴なので、午後 Taxi で動物園に行く。Green Park で、晴々とした好い動物園である。茶店で茶など飲み、ぶら／＼歩いて見る。伯林の動物園住者がひもじい顔をして居るに引換へ、此處のは榮養十分で居る。象の子が愛らしい。丁度餌をやる時で、獅子や豹、黒豹の住む舎は見物が賑やかである。鉛筆寫生をして居る若い婦人なども居た。

大塊の肉を與へられた牡獅子が、ゆつくりと腹這ふて眼を細くして血だらけの肉の血を大きな舌で舐め舐めして居るのが、凄くもあれば、可愛くもある。食時には別檻に移さるゝ牡獅子が、宛てがはれた肉塊に不足を感じてか、Distain そのまゝの顔をしてつんとして居るのも、女らしいすべてがあらはれて居る。肉を貰ふと直ぐ後の洞にくはへ込み、ひらりと出ては躍りまた舞ひ戻りする豹もい

ぢららら。

時が晚いので、大部分を見残して、裏門から出る。見かへると落葉した Oak と Oak の間に洗濯
 壺大の紅い落日が今落ちて行く。横雲がそれを二つにしきる。

違つた乗合自動車に乗つて又下り、淋しい處をぶらつきつて Taxi を見つけ得て、直ぐ Hotel に歸る。
 淺君が来て、明日 Oxford 行きの相談をきめる。

第四 OXFORD

(一)

十一月廿二日。Oxford に行くべく Taxi で Paddington 停車場に往く。淺君も来て、汽車は十二時
 三十五分に出た。一泊のつもりなので、私共は寢衣を入れた手提一つ、淺君は小さな信玄袋一つの輕裝。
 雨が降つて居て、ゆつくりした車室は靜かな事である。

Slough に来た。Windsor へは此處で乗り換へる。淺君は先頃其處に往つて名高い Eton の中學を
 見、例の山高帽をかぶつた Eton boys の昔々した容子を見た話をする。

Reading と云ふ Oxford 道には似合はしい妙な名の停車場で、淺君は Lunch Basket を買つて午餐をする。内容は Southampton で私共の食べたのと似たやうなもの。

雨はまだ降つて居る。しつとりと濕ふた牧場、ゆつたりした小川の流れ、ゆるく起き伏す丘、處々の田舎町や村やすべてのんびりして少しも齷齪した島國の心地はせぬ。都會には夥しく寄りこぞつても田舎は並はづれてゆつくりと住みなして、傍晚には隨分地所が遊んで居るやうにさへ見える。世界に跨げて居るから、本國はゆつくりして居るのだと、山の上まで開かれて田畑になつて居る九州生れの私共や山陽生れの淺君は、我等の本國に思ひ比べて啻ち言も出るのであつた。

午後二時十分頃、Oxford に着く。停車場に待つて居た三十前と思はるゝ我等の同國人と相見て初對面の挨拶を交はす。N. Y. K. から留學して居る市君で、私共の爲に東道の勞をとつてくれるのである。手紙で打合はせはあつたが、淺君も初對面であつた。

(11)

馬車で Randolph Hotel に行く。此處も Hotel は繁昌である。私共のやうな遊覽の客も多いらしい。市君から話があつたので、私共も淺君も各其室を得た。未だ暮るゝに間もあるので、少しでも市君の先導で見て廻る可く出かける。

人口五萬の上を住まはす古びた大學町は、しつとり夜來の秋雨に濡れ、雨は止んだが鋪石の道路は水溜りが出來て滑りがちである。道路の眞中に Gothic 式尖塔がある。其中程に立つて居る三人の像は、約四百年前信仰の爲に此オックスフォードで焚き殺された殉教者であるさうな。市君は其塔の尖つた頂を指して、先頃大學の茶目が夜窓にあの頂に攀ぢ上つて、物もあらうに便器をかけて置いたのが、翌朝發見されて大騒ぎになつた事を話し、隨分命がけの惡戯ですと市君は曰ふた。十字架の時代は過ぎたと宣ぶる私には含笑まれる惡戯である。此處、茶目は猛烈で、新婚近い教授の家に花嫁に扮した大の男をのせた馬車を乗りつけ、無理に教授を拉して鳴物入りの行列で囃し歩いたり、私共が倫敦に逗留中此處の大學の連中が素人芝居の催を教授連に制止された爲他の田舎町に押し出して大々的に興行して物議を醸した事もあつた。戦後は殊に若い者の力が溢れて居るのだ。戦争と云へば、市君の話によれば Oxford から出征した大學生や若い教授達は總數の九割に上つたさうな。歸り得る者は歸つて居る。まだ歸れぬ者もある。永久に歸れぬ者も少くない。埃及や Palestine 以來私共が接觸した氣爽な開けた頭の若い英吉利將校の中には、斯處のや Cambridge のが随分居たらうと思ふ。今から二十年立つて、戦争を経て來た此處の連中が出て働く時が思はれる、と市君は云ふ。

暮れかゝる曇り空の下に、私共と淺君は、市君の先導で二三の College を見る。市君が屬して居る

Lincoln's College も其内にあつた。冬近く青々として居る芝生の緑。落葉木は疎らに、常緑樹は鬱葱とした園のさび。三百年四百年の眞黒になつた古建築を止むことを得ぬ修繕を加へてまだ日用に使ふて居る。如何にも英吉利らし Oxford らし College の落ちついた建物。殆ど何れの College にも添ふた薄暗い禮拜堂。其 College 出身の名士の油繪肖像を挂けた食堂。其禮拜堂には必しも出席を強要されぬが、食堂の晚餐には College の寄宿生は勿論、公認下宿住居の者も必ず出席し、教授連は一段高の Platform の食卓、學生は下の Hall で木の長櫛にかけてスウプに魚若くは肉の一皿、野菜の一皿、それに Sweet 位の食事をとる規定さうな。面白い事には、食堂即ち講堂で、日間は此處で講義がある。

市君に跟着いて其下宿に往く。寢室は階下に、居間は三階にある。石炭くべて煖爐近く近寄せくれた Sofa に私共はかけて、茶やパンや菓子などの馳走になる。市君は上總は茂原の生れ、東大法科を出て、N.Y.K. の神戸支店に勤め、更に擇ばれて此處に留學して居る。一高在學中、物議を起した私の「謀叛論」を聞いたさうで、萬更無縁の中でもなかつた。私は市君には何處かで會ふた事があるやうな氣がしてならなかつたが、後で思へば、それは「みみずのたはこと」の「曉齋畫譜」の贈り主に君が肖て居たのであつた。

市君が College の夕食に赴く時間が近づいたので、私共は浅君と Hotel に歸るべく立つ。市君も送ると云ふて、Undergraduate の Gown を被る。黒い毛襦子のひら／＼した半マントのやうなもので、學生の制服である。帽子はてんで冠らぬ習ひさうな。

一つの店で Oxford の晝はがきや案内記を買つて、Hotel に往く。市君は明日を約して College の夕食に往つた。

私共は浅君と夕食を終へた後、煖爐の火熾に燃ゆる廣間で色々故國の物語をした。以前は近しく往來して、其結婚すら實は私の發意でありながら、近年私が死蔭の谷から生きながら墓の中に埋れ一切を遠ざけて居た爲に、浅君はやゝに遠くなり、「新春」すらよく讀むでは居なかつた。私は私自身を Assent する必要に迫られた。私は自分の立場、私共の旅について、長々と力をこめて話した。後で妻が言ふた如く、浅君の額に蚯蚓の様な筋があらはれてぴち／＼動き、向ふの隅にかけて居た五十年配の英吉利婦人が日本語で話す私の顔を熟と見まもつたまでに。

(三)

十一月廿三日。昂奮の後の疲れで、眠るともなく眠り、寒い朝に眼ざめた私共を Oxford の Hotel に見出した。廣間や食堂には暖爐が燃えても、各寢室には火の氣が無いのでまた伯林に逆戻つたやう

に寒ふこと夥し。

似た色故に私自身取り違へて着て来た胴着の間違が原となつて、私共は此行第一の大喧嘩をしてふた。昨日 Oxford に來るに少しも氣が進まなかつたのは、斯様な事があらう爲であつたに違ひない。私共はよく喧嘩をする。而してそれはいつも愚にもつかぬ喧嘩だ。喧嘩はどうせ愚にもつかぬものだ。然し其れは同時に止むに止まれぬ喧嘩だ。喧嘩と云ふても、戦争と云ふても、皆そんなもので正堂々なんかいふ喧嘩や戦争がありやうはなく、同時に無くて済める喧嘩や戦争はない。私共は結婚以來廿六年喧嘩をしつゞけて居る。最初は私の獨喧嘩であつたが、妻が段々強くなつて追々立派な喧嘩になつた。粕谷では十一間の長廊下を隔て、私は重に奥に居り、妻は重に母屋か書院に居るので、喧嘩も一寸臆劫である。此旅に上つた以來、船は船房、汽車馬車自動車は同乗、Hotel は一室、四六時中一處に居るので、喧嘩の機會は存分に與へられた。而して存分に私共は利用した。此處を先途と喧嘩した。私共の滞在した殆ど何の場所として、私共の喧嘩を印しない場處は無かつた。陰陽電氣の組み合わせで段々森々世界を周つてあるくのでは、雷様の世界一周だ。到頭 Oxford へ來てまで、喧嘩の中の最大喧嘩をしてふた。それは昨夜來昂じた私の怒が一夜寝ても収まらず、小さな口火からまた大火事と燃え上つたのである。

火は燃ゆるだけ燃えて燃え下つた。

後には灰色の味氣無い燃え屑が残つた。

朝食を食はず、掃除に來た女中を退け、火の氣のない室にがっかり顔見合はせて居た私共が顔を洗ふて煖爐の燃えて居る下の廣間に下りて往つた時は、最早十一時近かつた。淺君には少し前に市君の所に往つてもらつた、私共なしに見物し、午餐には同道して來るべく。

(四)

一時頃に二君は來た。

私共はうまくもない午餐を終へ、面白くもない見物に出かけた。成る可く多くを見せようとする市君の厚意を無にしかねて、導かるゝまゝに歩いたが、最早私共の心は *Oxford* にはなかつた。

昨日私共は大學生の寄宿舎を見たいと云ふた。市君は入學して日がまだ淺く、英吉利學生にはまだ友と云ふ懇意な友もないので、外國人に談じて見ようと云ふた。*Oxford* には印度、埃及、大陸からも來て居る日本人も市君の外にまだ數名居る。市君は同じ *College* の瑞典人か何處の人かと喜んで其室を見せようと云ふて居る事を私共に告げた。然し私共は見る事をやめた。

創立者、あの神を捨て、王に捨てられた榮枯の夢の夢み主 *Cardinal Wolsey* の緋の衣着た肖像をか

けた Christ Church, Gladstone など其處に學んだ Christ Church の College, 五百年の餘になる一番古の New College, 某の畫家が描した Stained Glass, 削りまた削りして凹くなつた庖厨の肉切俎、それも見る。Cardinal Manning, Matthew Arnold, Swinburne など學んだ Balliol College, 其處の教授の一人に私は新嘉坡で私を取調べた Oxon の G——さんから紹介の名刺をもらつて來て居る、自轉車乗りすてある門に入つて、門番に聞くと、教授は居た。然し、私は會ふ氣にもなれなかつた。Magdalen College は Oxford 第一の美しい College なうなが、其處の禮拜堂にはあまり美しくもなす Magdala の Maria の畫像が挂つて居た。

總つて Oxford の College 二十二、其出身者には英吉利の名譽になる子等の幾人が有たぬはない。先の Edward VII. 今の皇太子、先の首相 Asquith から今の労働黨の首領の Henderson, ちまぐの人が出て花を咲かして居る。Tennyson だのいふ詩人、Wesley などの宗教家、Ruskin や Cardinal Newman 私共の記憶から這ひ出す會ての此處の住人は限らない。然し戦後の疲勞で唯休息を思ふ私共は、そんなに心を遊ばす暇がなす。

折角 Oxford に來ながら何氣にとめて見るでもない私共を、それでも市君は親切に尙引張り廻はしてくるのであつた。私共は私共の今の氣分のやうに降りはしないが霽れやらぬ鬱陶しい空の下を、

Over かけた靴引きずるやうにして昔 Addison が散歩した並木の蔭、名物對 Cambridge 競漕の艇庫が臨む Thames の支流、昨日の雨でまだ濡つて居る柳の垂るゝ小さい運河に沿ふた路、河と河の間から名づけたであらう Mesopotamia の牧場なども廻つて見る。College でも外でも時々遊覽の客にも會うた。日曜で競技か散歩からでも歸る六尺ゆたかの無帽の學生もあつた。學生らしいのは成程何れも無帽であつた。

Sheldonian Theatre や書籍館などを他所ながら見て、Hotel に寄つて勘定を済ますと、四人は馬車で停車場に往つた。

相濟まぬ心で市君に禮を述べ、四時三十五分の汽車で Oxford を立つ。

(五)

外は直ぐ闇い夜になつた。内では私共も淺君も疲れて黙つて居る。それでも Reading では賣りに來たお茶に一同咽を濕した。

Paddington に着いたが、Taxi が居ない。地下鐵に乗ると、正金の三君に會つた。三君は紐育の正金から來て間はないさうだ。亞米利加は活氣があつて面白く、英吉利に來ると氣分が違ふと三君は語る。私共の入獨を聞いて、三君は「獨逸は憊れて居ますか」と問ふた。「憊れて居ます、蒼くなつて」

と私は答へた。而して「今の私の如」と心に付け加へた。

例の Kensington High Street で三君に別れて、私共三人は十字架から耶蘇が取り下ろされた夜の歸りの小さな群の如く、悄々と Hotel に歸つた。

火をつけるばかりにして女中が置いた煖爐を燃しつけた。私共も淺君も長い息をついた。それから三人は夕食に往つた。

歸つてまたしばらく煖爐の前に憩ふ。

私は曰ふた、少しも心配はいらぬ、暴風雨の後には、世界霽れだ。

淺君が去ると、私共は昨日來疲れ切つた心身を慕のやうに私共を待つ Bed に投げた。

第五 倫敦日記(續)

(一)

十一月廿四日。午後 Taxi で Nicoll に妻の天鵝絨服の假縫試しに行く。

(二)

十一月廿五日。ギクトリア女皇の誕生した Kensington 宮はつい近くにある。今日はそれを見に往つたが、戦後まだ公衆に閉ざされて居る。宮の前には即位當時の十八歳の女皇の像が、器用な其末女 Beatrice 内親王の手で造られて、而して此 Kensington の民衆によつて此處に立てられて居る。好い娘ぶりの女皇である。Kensington 宮前の此像から、Buckingham 宮前のあの雄大な像まで、ギクトリア女皇に現はれた Womanhood の發展は、即ち英吉利の誇である。

私共は Kensington 宮から其裏手の淋しい巷を辿つて、今國有になつて居る亡畫家 Leighton の美しい家を見る。小さな Mosque of Omar でも見るやうな其 Arab Hall は、可愛 S. Dome, 其一枚一枚も苦心して東方から蒐めた四壁の Tile, Damascus 出来らしい賽の目格子の Blind, 天井から落つる五色の光、室の中央の四角い Fountain に絶えず小さな飛躍をつゞけて居る水のちよろこ、夢を見るやうな静かな薄明り、はつと電燈をつければさゞめきわたる一切の美しい Detail, まことにめでたいものであつた。其他階段の作りにも、庭のとりやうにも、残された畫にも、器具にも、器用な彼が Racon から脱化した力人巨蟒を搾め殺す彫塑にも、靜かに落ちついた古希臘趣味がよくあらはれて居る。Royal Academy の President として、素行正しく、愛嬌あり、男爵に叙せられ、皇室の覺え、社會の寵遇、交游の敬愛何一つ缺けた處なく、而して生涯獨身の清く美しい生涯を送つた Leighton の

生活は即ち Leighon の藝術で、それは古希臘の白大理石彫刻でも見るやうに、美しいが血の氣が足らぬのが私には物足らぬ。私には彼と雁行した Nilais, Ruskin の妻を奪ふた Nilais が却てより好くさへ思はれる。より温かいからである。罪の無い人、血の氣のない藝術、香か臭のない花、それは私を満足せしめないものである。

Lyon tea で午餐を食ふて、街上花賣りの婆さんから紅の Carnation を買ひ、また Orange や梨を果物屋で買ふて歸る。去る五月の頃まで Palestina でさんや Orange を食ふたが、最早新しい Orange を倫敦で食ふて居る。

浅君が來た。紐育までの船の切符が手に入った。和蘭船 Rotterdam、二萬四千噸、一月十八日に Plymouth 出帆の豫定である。一等船賃二人の磅、前金の磅を拂ひ、餘は一月拂ふさうな。支店の儲英人が骨折りの結果である。先づ大西洋も渡れるといふもの、ありがたい事だ。

(二二)

十一月廿六日。今朝福書店から「新春」が十冊届いた。やがて手紙も届いた。福君が氣を利かして留守の無事を報ずるかはりに店員に撮らした小さな寫眞の數枚をよこした。母屋の縁にりん女が腰かけて居る。地藏さんがにこ〜立つて居る。奥の書齋に百日紅の影が映つて居る。此等の寫眞が私共

に多くを語つて慰めた。猫の B が見えないのが物足らぬが、寫眞送りは好い思付であつた。

昨日大使館から晚餐の案内状が届いた。直ぐ返事を出したが、まだ着かないと見えて大使館から電話がかゝつた。禮を云ふて、ついでに郵便物廻送の禮を云ふて、不圖氣づく、それは珍大使其人の聲だつた。

妻は女中の Ada と言ふて Iron を借りて、私の袴や自身の紫のかさねの皺を長いことかゝつて駈して居た。伯林では其 Iron が借りられなかつた。

(四)

十一月廿七日。朝妻に髻を剃つてもらふ。十二三の男の子が硝子窓から長いこと覗いて居て、私も剃つて下さいと云ふ風をする。

静かな横丁だが、矢張人が通るので時々面白い事がある。先日は小兒車にのつた女の子が泣きむづがり嫁婦らしいのが持て餘して居た。私が硝子窓越しに泣く子の注意を牽いてあやしたらこつきり泣き止んだ。心機一轉の原に氣づかず嫁婦は小兒車を押して往つた。

新聞を見て、米國の白黒人の衝突が心を傷める。私の「還元」が唯一の方法らしい、それが自然であるから。

午近く歩して Kensington Garden から Hyde Park を過ぎ、それから市街を通つて Nicoll に往つて、妻の天鵝絨服の二度目の Fitting をする。書籍で英語に親しむ私に、裁縫屋だの醫者だの、お供通辯は骨である。面倒臭いから大概にして置いて、妻に叱られる。拂ひ残りの 20 Pounds 19 Shillings を拂つて歸る。

Nicoll に居る頃から、室内急に暗くなり、まだ正午過ぎたばかりだのにと不審をうつた。出て見れば霧だ。Piccadilly Circus の一茶店で、茶を飲むで居る頃は、ますく濃くなつて來た。それでも乗合自動車に乗る事が出來た。妻は内に向け、私は込んで居るので二階の席にかける。冷いやりした煙のやうなおぼろの中を、速力を緩めて、笛を鳴らしながら自動車は走る。薄黄ろい薄明り、つけられた街燈や店頭の電燈が滲んだやうなぼけた光りやうをして居る。通り馴れた Kensington road が幻の世界を行くやう。倫敦に來て二週間餘、案外に好い天氣の日が多く、今日初めて名物の Fog に會ふた。然しひどいのは中々こんな事ではないらしい。

歸つてかはるく入浴。此處の Bath は貧しくて、少し熱いのが出るかと思ふと直ぐ水になる。餘程調子をとる要がある。

私は例の紋付羽織袴に草履、妻は紫に金鎖をかけ紫の草履を穿き、Park で日本大使館に走らせる。

霧も収まつた。自動車の道が少し變と思ふたが、走るまゝに走らせる。大使館の前に止まる。下りると館前には赤白段だららの天幕を張り、歩道にも白い敷物を敷いて、玄關は晃々と如何にも仰山まげやまな設しつらである。時間が定刻からちと早過ぎるので私共はしばらく其邊をぶらついてもうよからうと玄關にかゝる。白に金、赤に金など恐ろしく美しい装した玄關番が立ち、勳章光らした燕尾服などが往來して、少し變だ。招待状を出すと、これはしたり此處は西班牙大使館であつた。西班牙の皇后が先日來見えて、倫敦に滯留中の事は、新聞で知つて居る。今夜は其夜會の催があるのだ。日本大使館は Grosvenor Square で西班牙大使館は Grosvenor Garden だ。Japanese と Spanish は音相通ふ。それでの間違と分つた。同じ Grosvenor だからどうせ近所と思ふたら、中々遠い、Taxi でお出でなさいと燕尾服が云ふて、私の手帳に日本大使館の Address を書いてくれた。

私共の Taxi は往つて了ふた。夜の事ではあり、淋しい處で、中々 Taxi が居ない。ぶらついて居た私共は、圖ずぬけて大きな體で直ぐそれと分つた巡查を見つけ、事情を話すと、巡查さんは私共を目標しるしの瓦斯燈が立つ自動車の Stand に連れて往つた。其處には一臺も居なかつたが、少し待つ内に赤と緑の眼が流るゝ如く來て其處に止まつた。私共は巡查さんにお禮れいのものを贈つて、直ぐそれに乗つた。而して十分の後には、何の事もなかつたやうな顔して日本大使館の玄關を上つて居た。

戦争中から來て働いて居る小さん、漫遊中の鈴さん、宮内省や住友の人々、來客十二人程の内輪な晚餐會であつた。初對面の挨拶をした珍夫人は奥州訛りの物馴れた好い小母さんである。好い小父さんの珍さんと好い一對と見受けられた。妻は倫敦の世帯向きの事や洋服の事何くれと話を聞いて居た。婦人の客は妻一人。皆洋装の中に私共の和服が調子を破る。

日本食の馳走がある。「*レゾ*」の話が出て、富士山が幾個もころげて居たり、ある王宮の招宴に勅使が玉座と正賓の間を數往復した小さんの話が皆を興に入らせた。

私共は今夜の喜を述べて先づ席を罷り、呼んでもらつた「*オヤシ*」で歸る。

珍さんの話で初めて知つた從兄の横さんが日本で中風になつたと云ふ一事が、私の頭に暗い翳を投じた。横さんは戦争中倫敦に居て珍さんを扶けて何角と働き、日本に歸つてまた米國に働きに出かけるつもりで、夫婦郷里に歸省中發病したと云ふ話である。切つても切れぬは血の縁だ。一切を絶つて *Adam Eye* になつた私共も、やはり血には牽かれる。横さんの中風の知らせは、つい先頃まで此倫敦に居て、今は日本への歸途米國に居る横さんの同輩で、妹夫の海さんが同志社々長に招聘されたと云ふ淺君の話と共に、あまりに著しい *Contrast* が私を黯然たらしめるのであつた。「有つ者は與へられて猶餘あり、有たぬものはその有てりと思ふものをもとられる」と耶蘇は全くうまい事を言ふた。

(五)

十一月二十八日。私は全く此旅に出て來た事を感謝する。よくぞ出て來た。改造は自己に始まらねばならぬ。宇宙の中心は自己だ。中心から始まらぬ改造は、空中樓閣に過ぎない。

新しき村の武君は私を評して、よい人だがふるいと云ふた。全く其通りだ。私は自分がよい人である事を知る。同時に私は自分のふるい事を知つて居る。母胎を出てからだつて五十二年になる。歴史あつてよりすら何千年になる。人類あつてよりなら何萬年か分らない。その位ふるいのだ。

ふるいと云ふ事は唯ふるい爲にわるいのではない。それが中心生命の發動を礙げるやうになる時わりのだ。其様な邪魔ものは掻き落し掻き落しせねばならぬ。樹木だつて落葉をしたり、皮が剝け落ちたりする。少しは痛く共頑皮くわんひはそれが成長の邪魔になる時掻き落されねばならぬ。

私は夥しい古皮の持主である事を自ら知つて居る。此旅行は鏽落さびおちしの旅である。摩擦の間に自他の鏽を落すのだ。私共の喧嘩も其爲である。

私は日本を出てからでも最早餘程色々ものを後にした。餘程身軽くなつた。

私は私が何を與へて居るかを自分は知らぬ。然し自ら得つゝあるものは著しくそれを感じる。私は人間學實修の爲に、*Husband* 學實習の爲に、*Democracy* の洗禮を受けに、歩いて居る。過ぐる所何

か古いものを落し、何か新しいものを得て居る。就中英吉利に來ての一日々々は、大なる獲物を感じる。私は小さくなる。私は凹む。私は嘔る。私は苦しむ。而して終に笑ふ。私は私が日に――身軽くなり、日に――自由になり、日に――力が充つるを感じる。Adam Eve は日に――成長をつゞける。

午後一時近く Kensington Garden に散歩に出かける。今日は寒く、霧白く、Garden 内の周圍五六丁には過ぎぬ池が、茫々として大海のやうだ。波打際の砂上を歩く。鷗などの水鳥が無數霧に入り、霧を出で、水に入り、水を出でゝ居る。倫敦の感じが少しもせぬ。此霧が英吉利氣質をつくるに何程働いて居るか知れぬ。十一月も末になつて、此處の Garden や Hyde Park の榭やなんどの大木は皆大抵落葉し、時には霧が降つたり、寒い風が吹いたり争はれぬ冬であるが、眼一たび地上の芝生芝草に落つれば、其處は眞夏の時を其まゝ染むるやうな、萌ゆるやうな生々した緑に驚く。此緑が英吉利人を如何に育てるかはまだ料り知られぬ程であらう。而して此緑も霧のお蔭で、すべてが英吉利特有の自然の位置の結果に外ならぬ。猶太が猶太人を造つたやうに、英吉利人は矢張英吉利が造つた英吉利人だ。

(六)

十一月廿九日。朝食は大抵食堂の女が持つて來る。私共の女中の Ada は根性者だが、朝食の Tray

を持つて来る小さい女の Ellen は、Harebrained Girl だ。私共は朝食に Herring 或は Onagete を食ふ。Herring が無くて一度 Sausage を持つて来たから、昨日の註文傳票に、Sausage は不要と特に注意の赤鉛筆をひいて置いたら、今朝白ボンネットに白 Apron したり顔に Ellen さんが擔ぎ込んだ Tray には、麗々とおの大芋蟲が横たはつて居る。うんざりして了ふ。極稀に来る Mary は濇かい大女で、前掛の Pocket にがちや／＼入れて居る中から、いくらでも Spoon を出してくれる。

私共が倫敦に来て間もなく Lady Astor が Plymouth の補缺選舉に打つて出た。立合演説に敵の候補者が、私は子供が八人で、Lady Astor は七人しかない、私が一人多だけ私が選ばれる資格があると戯れると、「まだこれからですよ」と Lady Astor が聲をかけ、演説者が「私もまだこれからだ」と答へて大笑ひになつたり、皆が喝采を浴びせるので Lady Astor 「喝采はお向ふへやつて、私には何卒投票を下さい」なんかうまい事を云ふたりして居たが、到頭當選した。米國では Rankin 女史が已に代議士として先鞭をつけたが、英吉利で女の代議士が出るのは始めてだ。私共の女中の Ada に嬉しうかと問へば、Plymouth は私の故郷ですものと答へる。而して Lady Astor は田舎に居ても皆に親切にしてくれると語る。其 Plymouth から私共は來一月米國に渡るので。

米國と云くば Lady Astor も亞米利加合衆國生れの Yankee girl だ。英吉利の名士で亞米利加妻を

もつ人の數は少くない。何様しても新家の血は舊家のそれより動いて居る。英吉利あつてより開闢第一の女代議士も米國女に占められた。

三百年前双方死ぬ思ひして分れた Anglo—Saxon の血が立歸る時節となつたのだ。新家が舊家に報ゆる時節、新しい血が舊家の或は滯る患ある血を新しくすべく逆流する時節が來たのだ。米國が來なかつたら、昨年十一月十一日に休戦にはなつて居ない。

米國はどん／＼舊家に自己を注ぎ込みつゝある、英吉利が少したじろくまでに。戦争中英吉利に歸化した James 教授が英吉利人を満足せしめたはもとより、英吉利を Dry にして了はうと云ふ大計畫で英吉利に乗り込み、衆議院議員の一人をして政府はそれを見過しにするかと質問を發させ、若い大學生等を躍起とならせて到頭彌次馬の爲に一眼を潰された Pussy foot の Johnson、倫敦目貫きの某公爵の屋敷を買取り米國式大々ホテルを建てる目論見をして居て倫敦人の神經に軽い何かを與へて居る紐育の Hotel 業者の某、Regent Street なみ歩いて倫敦根生ひの老舗の中に Yankee 靴店帽子店などの地歩を占めて居るのも、亞米利加が如何に英吉利に注ぎ込んで居るか分る。舊家は舊家の權式を保つて、然し營養分を吸ふを怠らぬところが英吉利の身上であらう。

今日は自動車で Piccadilly Circus の探花樓に支那料理を喰ひに行く。少し英吉利化して居るが、然

しうまい。英吉利の婦人や *Klanin* などが大勢。日本人も居た。

満腹してぶら／＼歩いて居ると、四十餘の少し酔つたかと思ふ男が私の前に立ち塞つて何か分らぬ事を言ひながら右の拳を突き出した。破落戸が喧嘩を賣るのか、但は掏摸か、と少し逃身になる。拳固が開くと、中から出たのは玩具ニツケル製の可愛い豆靴であつた。『For Luck』と云ふてくれるのであつた。西洋人も縁喜をかつぐ。靴の縁喜は、旅人の私共にはうれしいものであつた。『Thank you』と云ふて、私は二志やつた。而して可愛い靴の一対を Pocket にしまつた。

地出来の *Muskrat Grapes* など買つて、尙歩して居ると *Empire Theatre* の前に來た。Russian Ballet がかゝつて居て、*Karsavina* の評判が高い。二時半から始まるとある。時計は三時を過ぎて居る。

最早一幕は過ぎて居らう。然し二志拂つて私共は入つた。平間の椅子に導かれる。大入である。

幕間の *Orchestra* が拍手の中に終ると、『*Petroushka*』の幕が開く。舞臺は *Petograd* の *Carnival* の騒ぎ。派手な服装の男女が大勢。ちらり／＼雪が降る。東洋人らしい老魔術師が活人形を出して見せる。魔術師が笛を吹くと人形に魂入つて、左甚五郎の京人形を頬の赤い裾短かな西洋の女人形振りで行く *Karsavina* の舞子、*Petroushka* に、緑衣黒面の *Moor* が小舎の中からもうすでに手足動かし居るが、たまりかねたやうに舞臺に躍り出して來る。其躍の軽さ、自然さ、鮮やかさ。二人の男が

舞子を争ふて、トド黒が Moor Petroushka を追ひ出す。

舞臺換はると、Curival の眞盛り。Gipsy girl 二人に扶けられた富豪が踊りの群に紙幣を投出す。馱者が長靴、嫁婦も加はつて踊り狂ふ。熊が出て踊る。果ては面を被つた人皆踊つて、舞臺は革命以來の露西亞を其まゝ大亂ちきの騒ぎになる。

其處に先刻の人形がまた飛び出す。緑衣の Moor が曲つた刀で到頭 Petroushka を斬り殺す。Petroushka は人々に圍まれて雪中に死んで了ふ。

巡查が老魔術師を連れて來ると、魔術師はこれは人形だ、人ではないと云ふ風をして、木の頭に鋸屑つめた體、魂ぬけた人形を手輕に提げて見せる。安心して群集は散る。魔術師が一人になる。と忽ち小舎の屋根に Petroushka が現はれて、生きて居るぞと嘲笑ふ所で幕となる。

今の露西亞に應用すれば、色々解釋もつきさうな、有意無意の間に面白味がある。

すつきりした幕間奏樂があつて、「夜半の太陽」の幕が開く。夜半に日が出る北の地方で、日の神 Yarilo を迎ふべく村中が踊る。露西亞式天安河原と云ふ處。長い袋袖のぶら／＼した Fool が出る。村で擇んだ日の御子の若人が兩手に日の盾を廻して踊る。Balasin の開祖 Bab が不圖思はれる。ト其若人を擔ぎ上げて日の出に向ふ處で幕。

私共はこれを見つゝ露西亞の夜明け、日の出の幸を祈つた。

露西亞の Ballet を見ても、私は Russia 人が世界第一の Artistic な People であるを想はない譯には行かぬ。伊太利人や佛蘭西人はあまりに Artist としてスレて居る。若々して、自由で、自然から人へ、人から自然へ、即かず離れず、それで居てそれらしくない、これを天成の Artist とせずは何と云はう？ 過激派的一幕ですら、露西亞は眞面目にあの Scene をやつて居るのだ。私は露西亞人を愛するを禁じ得ない。

自動車で Hotel に歸る。

葡萄は好かつた。

支那料理の南京米が腹にあるので、夕食はぬき、手煎の茶で壺をあける。

Japan Society Reception の案内が来た。Uniform か Evening dress とある。袴や紫でまた出かけるもいやだし、燕尾服の持ち合はせはなし、平人で無論 Uniform はなく、生憎 Evening dress もなしからと云ふことわり状を書く。Reception の場所は Carriage Hotel & Palestine で二度會つたあの Miss C. が言ふて居た其緣故の Hotel である。

十一月三十日。今朝は霜がある。

ぶら／＼ Chelsea を Thames の方に歩く。電車自動車の往來も少なく、日曜は一番好い歩き日である。

倫敦に来て直ぐ気がついた事は、大きな貸家賣家の澤山にある事だ。それで居て一方には住宅難に皆苦しんで居る。政府も極力何とかしようとして居るが、間にあひかねるやうだ。露西亞のやうにそんな家が押入主人を迎へるやうになりはすまいか。英吉利の赤くなりぶりは、注目に値ひする。

Bible 手にした老婦人達に會ふ。Carlyle の Chelsea は古い落ちついた處である。扉がしまつて居る由緒ありげな古本屋などが見えた。唯有る辻の煉瓦壁の Recess に小さな十字架の耶穌の像があつて、黃菊の花が獻げてある。側に出征者の氏名を掲げた Roll of Honour がある。聖像の下に金字で耶穌の語が「人其友の爲に命を捐つるは、これより大なる愛はなし」と書いてある。哀しくなつた。

霜の白い墓場に迷ひ込んで、子供に道を問ふたり、しば／＼地圖を按じたりして、Thames の岸に出た。薄霧の中から赤い太陽が覗き、Thames は汐干時で泥の渚が露はれて居る。處々に設けた Bench に息ひつゝ Thames に沿ひて到頭 Westminster 橋まで歩いた。日曜で、此處らの Restaurant や Café は大抵閉ぢて居る。困つて居ると通行の一人が開いて居る店を教へてくれたので、橋を渡つて小さな

店で軽い午食を済ます。

それから乗合自動車で Trafalgar Square に下りる。Nelson 像の四隅に大獅子が腹這ふて居る礎石の上に赤い Jacket の二十一二の娘が金切聲で演説をして居る。大勢立つて聞いて居る。私共も聴衆の中に加はる。夕暮近い薄光りの中に、Note を左手につかむだ彼女は、Capitalist は云々 Government は何もしない云々、と激越な調子を張つて居る。聴衆は冷やかしもせず、感激した容子もなく、ぢと聞いて居る。娘の背後には男が二三人。下では斜面臺に小冊子數多列べて賣つて居る。皆 Red の冊子である。見て居ると、他にも色々持つて来てすゝめる。私は買はなかつたが、例の英吉利腹で、よくこんな言はせ、賣らせて置くと思ふ。日本では出来ない。然し私は自分の娘が Nelson の像の下の礎石に飛び上つて、金切聲をふり立てるを喜んだであらう乎？ それは私にはあまり嬉しい見ものではなかつた。

日曜新聞など買つて、Bus で歸つた。

(八)

十二月一日。雨が盛に降つて居るが、私は大外套、妻も三越仕立の大外套の着ぞめをして朝から出かける。Kensington Garden を北へ横切る。黒い Coat の若く女が傘もささず物案じ顔に Bench に

もたれて居た。通りすぎてしまつて、言をかけなかつたのが長く私共の氣になつた。

Queen's road の停車場から Tube に乗つて、Post Office 停車場で下りる。郵便本局は案外小さいものであつた。至急電報は今取扱はぬ。そこで普通電報で「新春」の書店に一千圓送金の普通電報をうつ。電報料三磅ポンド。

更に Tube で大英博物館に行く。英吉利のやうな世界的大泥棒でなければ出来ぬ寶の庫。Bronze Room を少し、Asiatic Saloon を少し見ただけで、私は疲れて汗になつたので、其處の大圖書室も、何もかも又の事にして出る。戦時には此處も軍用に使はれて、まだ全く復舊しては居ない。館内の茶店なども休んで居る。玄關の Fountain で水を飲んで出る。

それから唯有る店で茶とパンをとり、西班牙栗と梨を買つて、Tube でもとへ戻つて、また Kensington Garden を通つて歸る。先刻の女は勿論もう居なかつた。

女中が皇太子の歸りを御覽でしたかと云ふ。此處の皇太子が加拿大から合衆國を廻り、大持てに持て歸つた事を私共もよく知つて居る。國の元首はます／＼空位でなくなりつゝある。戦争中の働きは勿論、米國に往つては自身機關車によつて汽車を運轉して米人をあつと云はせたり、よく Brazil からは皇后と飛行機で英吉利にやつて來る甲斐々々しい白耳義の君と云ひ、伊太利は勿論、西班牙など

も評判の好い王様である。此處の嗣君もよく時代に相應したギクトリア女皇の曾孫たるに恥ぢない若人らしい。それにつけて私共は、我儕われらの皇太子殿下がちとお出かけを願はしく思ふ。私共は我儕の嗣君に新しい時代にふさはしき Democratic な元首の候補者を有つことを信ずる故に、特に斯く念する。Napoli の下さんから手紙。それは思ひがけない Analfi からの手紙である。十月には日本に行くと謂うて居たあの彫刻家の Uccola 君が病氣になり Analfi に療養中、急に重くなつたので下さんは往つて介抱中と云ふのである。患者の U さんと、見舞の一人 U さんと私共を Napoli の停車場に見送つた Yanco 君が伊太利語で二三行書き添へて居る。下さんは手紙の中に紅に染めた鳶の一葉と矛盾の小さな一葉を入れてよこした。

Dannunzio は Finne, U は病氣で、日本に往けないのは、残念な事だ。あの頭の禿げた、眞面目な、而して少し幽鬱なおとなしい眼をして居た U さんの顔が私共の眼にある。よくなつてくれればよすが。

(九)

十二月二日。朝 Nicoll から妻の服が届いた。上品で美しい。持つて來た Boy に Chocolate を三つやる。

Knights Bridge の店の、あつて Beef steak と Ginger Beer で午餐をする。而して地出來の Muskeet grapes を買つて歸る。

兩足のない人に妻が三片を與へた。而して急いで來る拍子に、妻の Bag の口が開いて、懷中鏡が落ちて二つに破れた。結婚前に彼女が買った小さな四角い鏡。縁喜を擔げば、破鏡は離婚を意味する。新し縁喜を祝へば、何もかも新しくなる時節だ。Hyde Park の Oak の根もとに置いて歸る。

Hyde Park の Rotten Row は騎馬の男女で賑やかだ。夫婦轡を並べて行くも好いが、大きな黒光る馬上の父に引添ふて、小さな子が小さな駒をうたせてひよこ〜走るも中々可愛い。

今日はまた珍しい美日だ。空が眞青で、日が晴々と輝やき、倫敦の冬に斯様な日があるかと驚かれる。Hyde Park を過ぎ、Kensington Garden に入る。毎日此時刻には、子供がきまつて散歩に來る。或は歩き、或は小兒車で、赤ん坊から十歳前後のが、日曜には母や父、Weekday には嫁姆に連れられて來る。大概の雨には、子供もすつぽり雨装束で、幌かけた小兒車に納まつて、薄鼠の mantle 長々と着た嫁姆に押されて來る。幌の中ですよ〜眠つて居るのも可愛い。差向ひの相乗りもある。おもちゃの熊を抱いて居るのもある。雪白の毛糸にくるまつて、卵色の Bonnet から大きな碧い眼をぽつかり聞いた朝日のやうな顔は見る眼の喜びである。尖つた白い毛糸帽、全身白い毛糸の服

に包まれて、白熊の子などのやうによち／＼と手をひかれながら歩くのは、また剽軽つらぎんで可愛い。おもちやの犬や雉子を引張つたり、眞物の犬を前後に走らせたり、鞠を持つたり、少し大きいのは女の兒も片足乗り片足地を蹴つて走る滑走車くわつぎしゃを走らせたり、護謨風船を飛ばしたり、嬉々として来る。此様な可愛いものを見るのは私共が樂の一だ。Banchベレンチに腰かけて前を通るを眺めたり、行き會ふて眼顔の愛想をして振り顧られたり、見ると曇つた心も霽はれ々する。あんまり氣分が重い時は、顔を見せるが氣の毒でつい傍向く事すらもある。

散歩道に傍うた石楠しやくなげや躑躅つづじ、薔薇、其他の宿根草越年草の花壇には、今園丁がしきりに堆肥たいひを埋めて居る。春回つて此等の花壇が花になり、今黒つばい公園の○オーグの大樹などが若々しい緑を着けた時が思はるゝ。

美晴と子供で好い氣もちになつて歸る。

今日出る前に、武道會共濟會の發起者小君が来て、共濟會で日本人に講演をしてくれとの事であつた。私は別に言ふ事がないと斷わつたが、來月出發前に言ふ事があつたら言はうと答へた。小君の言ふには、日本から習ひに英吉利に來る者は多いが、教へに來る者は少ない。武道會は日本を英吉利に知らす爲の會で、重おもに英吉利人に聽かす講演をするのださうな。小君は倫敦に居る九年、本業は漆器

商。共濟會は倫敦に千人から居る日本人の相互扶助の爲に設けたものと云ふ事であつた。

歸つて、妻は女中の Ada に Nicol の服を見せたりする。

私は新聞を讀む。1917年の合衆國衆議院で、歐洲戰に参加の決を問うた時、最初の女代議士 Rankin 女史は涙と共に戰爭反對に其票を投じた。これは本當に女らしく上げられた女の聲だ。これでこそ女の代議士である。男の眞似は男で澤山だ。女は如何な場合にも女であつて欲しい。而して如何なる場合にも女は居て欲しい。

で獨逸娘が英吉利の大佐の子があぶなく汽車に轢かれる處を飛び込んで救ふた。禮に何なりと云はれて、獨逸娘は前 Kaiser の萬歳を三たび唱へて下さい、と望んだ。其望は遂げられた。娘出かした。大佐も出かした。

但最近伯林を觀察したある米人、ある英人の説によれば、Hohenzollern 家の日は過ぎ、人民は戰熱がさめたと云ふて居る。私もさう思ふ。

(十一)

十二月三日。雨。文淵堂の第二次の爲替が着いたので、私共は朝から雨仕度で出かける。例の如く Kensington 公園を横斷し、Queens Road Station から Tube を Liverpool Street まで行き、それから

正金支店に行き、^{ポンド}磅餘を受取り、^{三百}300 磅を預け、残を懐中に入れる。三君の話によれば、昨夜は珍らしく好い月夜だつたさうな。私共は寝て了ふて月に負いた。

三君で思ひ出したが、私が不如歸で ^{Wrong}Wrong した大公爵夫人は私の母と前後して死んだ。母の小さな顔が出て居た新聞に、公爵夫人は大きく死んで居た。その後の新聞によれば、大家の墓は残らず青山から那須野に改葬されたさうだ。浪さんも成佛して先づはめでたい事である。

文淵堂の送金が、云ふてやつたより餘程多過ぎたので、變と思ふたが、彼が氣を利かしたのであらうと假定して、受取の電報を出す。

英蘭銀行近くで、^{Mustcat Grapes} 辻賣の ^{Mustcat Grapes} Mustcat Grapes を買ひ、妻は辻賣りの燒栗を三片ぶり買った。

それから ^{Tube}Tube で ^{Queen's Road Station}Queen's Road Station に歸つたが、まだ少し時が早いので、^{Department}名高の ^{Department} Department Store の ^{Whitley}Whitley に往つて見る。可なり大きいのが、^{Bon Marche}Bon Marche の後には驚く程でもない。花屋、果物屋、肉屋、魚屋、郵便取扱所、銀行の outlet、劇場切符まで賣つて居る。^{Xmas}Xmas に唯三週」と云ふピラが、今年も暮れ近いと云ふ事を旅の私共に思はしむる。客の多い筈。

軽い午餐をとつて、^{Hotel}Hotel に歸る。女中がまだ掃除をして居るので、入浴をする。今日は熱い湯が澤山出て、運の好い日である。

讀書室に往つて、誰も居ないので、HotelのBoyと語る。名はGeorge。父は1916年に戦死し、兄も戦死し、他の兄は跛になり、自分は毎日High Gateから乗合自動車で此ホテルに通うて来て、夜の一時頃歸るさうだ。此ホテルには、Boyが五六人居る。Georgeの身上は、多分他の身上であらう。私は室に歸つた。妻は髪を洗うて、Bathから下りて來た。私が何か笑うて居ると、女中のAdaが入つて來た。妻が笑ふことを窘める。尤だ。原因が分らずに笑はれたと思ふ程いやな事はない。私は氣をかへる爲にAdaに私の齡をあてさせた。32だと云ふ。年のまる二十年若く見られたわけだ。自分の了簡の若さを見れば、Adaの推測は當つて居ないものでもない。私が五十一で妻が四十五と云ふと、Adaは呆氣にとられて居た。彼女は廿四ださうだ。兩親はなく、一番姉だ。Mysticな書など讀むらしく、中々威張つて居る。

文淵堂から電報が届いた。過日一千圓、今三千五百圓送るとある。何で五百圓増したか。後で聞けば文淵堂に届いた電報には四千五百圓送れとあつたさうだ。何で先生が五千圓としなかつたかと變に思ふたさうな電文のまゝ送つたと云ふ事であつた。私共には好都合のChanceのいたづら。

週のBillが來た。中にTeapot及び銀のDishの損害として1と105の記入がある。何時破したらう?と思ひ返へすと分つた。朝食が何時もぬるくなつて來る。妻がそれをあたゝめるとて、

暖爐の火近く置いた。それで燻くすつて黒くなつた其損害なのだ。然し聞けば Dish 洗ひは一時間 8 片さうな。それにしては「磅 10 志の損害は少し多過ぎる。

新聞を見ると、巴里 Genève 間の汽車事故で大分死傷があつた。千法の罰金を拂ふ前夜私共が通つたあの線路だ。時處じよの隔てこそあれ、これもナボリの天井であつた。

(十一)

十二月四日。卵もいらぬ、Bacon も不用、魚も御免、Sausage は眞平——Simple tea をと Card に書いてやつたら、No. と云ふ語に赤の二重線まで引いてやつたら、Ellen の Fool がどっこしよとばかり擔ぎ込んだ盤臺には、卵と Bacon、魚にあの恐ろしい Sausage までちやんとおつて居る。あまりの事になつかりして腹も立たぬ。運命に頭を低れて、Sausage の外すべての物を平たひらげる。然しよく考へるとやはり此方がわるい。何も不用なものを不用と取り立てゝ云ふ要はない。入用の品だけ云へば澤山なのだ。積極的に斯くせよと言へばよい。「なかれ」の要はない。ちよつとした事だが、此様な處にも東洋と西洋の違いが出る。

髻を剃つてもらつて、私は日露戦争前に造つた Morning 妻は Nicoll の仕立下ろしで凜として、議會見物に出かける。先日大使館に依頼して置いたら、Lloyd George が答辯の日がよからうと、今日の

木曜を擇んで大使館から紹介券を二枚送つて來た。

Lady Astor も議會入りが済んで、其評判が新聞を賑はして居る。初入りの時、當人の Agency さん

は平氣の平左で、紹介者の Lloyd George や Balfour など云ふ剛の者が却つて大あはてをした事や、

此 Lady 議員の爲に特に一室が設けられた事や、彼女が議場で立話して議長の注意を吃うた事や、蘇

格蘭出のむくつけな議員が「吾輩は婦人の參政は嫌ひです」と彼女に面と向つて言ふたに對し、「あな

たは正直だけでおありです」と彼女が答へた事を私共は知つて居る。彼女は再婚で、先夫の一子が居

る事は最近に知つた。良人を二人もち、子供を七人ももてば、男を子供に思ふのも自然であらう。

私共の議會見物が Lady Astor 見である事は勿論である。

地下鐵で Westminster に行く。Lyon tea でパン、薑パン、茶を喰べる。

午後二時半には House of Commons の玄關 Hall に入る。議會歴史の Scene を描いた壁畫や、議

會を飾つた歴代名士の塑像立像が賑やかにして居る廣間である。大勢傍聽が來て居る。中に先夜大使

館で會つた鈴さん達もあつた。やがて若い日本人が三名來て私共と並んで腰かける。條約實施委員の

一行さうな。向ふに並んで居る二人の守衛の恐ろしく偉大な體格について色々話して居る。

相對して二列にかけて居る傍聽志望者は、向ふの上頭から四五人宛入つて行く。中々間がある。鈴

さん達は到頭待ちかねて去つた。飽くまで待つて、五時過ぐる頃私共と若い三人の中の一人は中に入るを許された。

大使館の紹介券を出して、Panorama の道のやうな狭い廊下、階段を上り、現住所姓名を傍聴簿に記入する。係の一人が私共に厚意を見せて、外套を脱つてくれ、今日の議事日程をくれたりする。

それを貰つて私共は傍聴席に往つた。其處は議長席に向うて五段位列んだ二階の席の三列目であつた。期した事だが、議場の狭さが一番に私共を撃つのであつた。次に硝子の天井が黄色い夕方の明りを

落して、議場らしくない感を私共に與へた。頗る非演劇的である。向ふが議長席であらうが、其處に議長の影響も見えぬ。向つて左が政府委員の席であらうが、持参の Opera Class で物色して見ても、

Lloyd George も面知る他の人々も見えぬ。議席は疎らである。今日は佛蘭西の Carpenter と英吉利

の Joe Beckett が拳闘争覇の決戦日だから、其方に出かけた連中も多いにきまつて居る。適か向ふの

傍聴席は、以前格子の隔てがあつた貴婦人傍聴席であらう。婦人の多數は勿論 Lady Ascor の議員顔

を見に來たのである。此方の傍聴席に印度の若い紳士、若い印度 *Lady* が數見ゆるは、今日の議事日程が印度に關する方案だからである。後數日、此席から「印度に完全なる自治を與へよ」と印度の青年が叫んで守衛に出された事は新聞で知つた。誰でも自分に關係ある議事を傍聴したら、高い處から

飛び下りて見たり、乃至大聲に叫んで見たりしたくなる。

Division の鈴が鳴る。議場の通路を向ふさまに行く大男、老男、髯男、無髯男——Lady Astor と前後して議會に出た人に、Daily Mail の持主 Northcliffe の若い甥が居る。廿二歳の議員は、女代議士に次いで Record 破りである。——の中に、撫肩の黒服に白いレエスの襟大學生の冠るやうな黒い角帽を被つた後姿が現はれ、向ふさまに歩いて扉の後に消えた。Lady Astor の後姿である。傍聽席がさゞめく。然し Lady は他の路を通つて歸つたか、其後に影を見なかつた。

Gladstone と Disraeli の舌戦や、Bright の Crimea 演説、Parnell だの、さまざまの名士が雄辯は斯様な平凡な事務的な狭い處でふるはれたのか。成程英吉利ではある。

印度法案の議事に入つて、軍人上りの某議員が長々と演説する、質問の。私にはよく分らない。政府委員が前屈みになつて、卓に兩手をつきつゝ返答する。訥りがちの辯が頗る Homelike の好い感を與へる。

果しがないから私共は六時過ぎには傍聽席を罷る。外套を脱いでくれた其人がまた外套など着せてくれる。拳匪の頃、三年も日本に居た人さうな。婦人代議士が出来て新面目を開いた House of Commons の悦びを述べ、握手して別れる。

私共が議院に入つた頃は可なり降つて居た。出る頃は綺麗に霽れて、月が皎々と照つて居る。地下鐵で Hotel に歸る。

(十一)

十二月五日。雨。雨を冒して外出。新聞賣の Stand を見ると、Vive la France! と大きく書いたビラがある。Carpenter が Joe Beckett に勝つたと見える。Evening News を買つて、Kensington 公園を歩き、讀む。果して色男の C が Bulldog の B に電光石火の勝をして居る。機慧が蠻力に克つたとの衆評。

後で Beckett は自分の稽古臺にした若者が自分の打撃が原になつて死んだ事を勝負の少し前に知つたと云ふ事が分つた。C 自身も B が何だかぼんやりして居たと云ふて居たさうだ。

亞米利加から歸つたばかりの皇太子が見物に往つて、勝つた C に握手し、負けた Joe にも同じく握手して "Good luck, next time!" と云ふた。此一語が英吉利の偉大の Key である。敗北を敗北とする、而して最後の敗北とせぬ。Sport もそれである。戦争もそれである。實際英吉利人は戦争にも Sport 氣分で臨んで居る。餘裕が羨ましき。

(十二)

十二月六日。小雨。今朝から朝食を Simple tea にする。さんぞ Sausage に惱まされた揚句だ。

Knights Bridge Street の S の店の店に往つて、Beef Steak を食ひ、公園を通つて歸る。

正金支店の堀君が來て、倫敦に十人ばかり若い法學士が居る、それに何か話してくれぬかとの事。私は別に話す事をもたぬが、諸君の顔が見たいから、出るには出ると答へる。堀君欣然として歸る。

戦後の倫敦は、日々の活劇應接に遑ない程である。維新後の日本が少し似て居たであらう。常備陸軍が英帝國を通じて七十萬に過ぎなかつたに、戦争中は總計五百七十萬からの兵を動かした。皆大學から、工場から、店から、銀行から、畑から、船から、馳せ参じ或は強徴された非常兵である。戦争が止んで日々何萬と云ふ軍人が復歸除隊される。もとの仕事に歸らうとすれば、位置は大抵ふさがつて居る。女が男に代つて居る場合も多い。勢い無職者が洪水の如く氾濫する。倫敦に集まつて居る無職將校ばかりでも萬を以て數へる。坐食は出來ぬので、皆が色々の事をする。某の大佐は馬車屋になつた。自分馭者座に鞭をとつて辻に立つと色々の事に遭ふ。ある時は客をのせて往つてある俱樂部の門前に待つと、内では大佐の以前の同僚等が歡會の聲が賑やかに響いて居た。ある時は若い少尉かなんぞをのせて往つたら、ある處で若い美しい娘が來て同乗し、ある Restaurant で散々待たせて、それから出て來て十志札一枚もとの大佐に握らせ、今から叔母の家に往くが途中の事を言ふてくれるなど口

止したりしたさうだ。ある年若の士官は器用で自製の玩具の立賣りをはじめたが、恥かしいので半面をかぶつて巷に立つた。祿にはなれた昔の士族が編笠あみがさかぶつて謡を歌ふた事などが思ひ合はされる。ある若い女が職業紹介局に出頭して、失職の旨を申し出た。戦争中は砲弾加工で随分の日給をとつて居た。係が女中の口を云々すると、件の女は斃然おつげんとして戦時の日給を云々し、侮辱すると嘔いひつて出て往つた。汽車賃が無くて Manchester の方から打連れ徒歩露宿で Buckingham 宮に直訴に來た無職兵士の一團もあつた。陸軍の Haigs 大將、海軍の Beatty 提督、共に伯爵になつて、各十萬磅ぼんどを賞せられ、部下に働いた諸將もおのゝ酬むちひられたが、一方此様なや、大道に金乞ふ前兵士が居る。戦後は諸般の改造を斷行して、Hero の住むに適當した國たらしめる、と云ふた約束は如何どしてくれと Lloyd George 君はしきりと窘ぢぢめつけられて居る。これで血氣にはやる國民だつたら革命總崩れになる外はあるまいが、此様な難局を此位にやつて行くのは、やはり英吉利人だからである。

(十四)

十二月七日。今日は美しく晴れたので、日曜ではあり、また動物園に往つて見ようと、地下鐵に乗る。電車で隣り合ふた親切な中老の Lady が懸念けねんだつたと見え二度も三度も私共の下りべき停車場を教へて後に下りて往つた。Regent Park へ下り、Primrose Hill を歩く。日曜で賑やかだ。栗鼠りすが人

馴れてちよろ／＼木から下りて子供がくれる落花生など兩手に擎げて食べる容子が愛らしい。こんなものが何の位人間の愛をそだてるか分らぬ。演説などして居る者も、聴く者もあつた。

特別觀覽料各三志（三）を拂うて動物園に入る。いつもの口からでなく、構外の動物學協會の建物から入つて、地下道を少し行くと何時しか園内に出て居た。RestaurantでLunch。満員の賑ひ。模擬山の幾組の熊にパンをやつたり、園丁が投げる魚を宙に受ける海豹の眼さましい馴業（馴業）を感じしたり、さまざまの蛇を見たりする。今日も大きな赤い夕日が悠々と落ちて行く。園を出て少し行くと群衆の中に十一二の男の子がふりかへりふりかへりして居たが、手をあげたりお辭儀をしたりして「——様よ」と歌ふやうに曰ふた。

大分倫敦馴れたつもりで居ると、歸りに違つた電車に乗り乗換驛を過ぎてHammersmithまで往つて了うた。驛夫が注意でまた中途まで逆戻りして、今度は間違なく歸る可き所に歸つて來た。切符をやかましく言ふ者もなかつた。切符と云へば乗合自動車などにのつても切符はくれるが、下りる場合は受取りもせぬ。信用を原とする民と、不信用を根にする民とは、そこに情けない差違がある。

女中のAdaが休む日に代つて來る他の女中のHildaは近々結婚して香港に往くと云ふて居る。

(十五)

十二月八日。曇つて寒し。冬が眞剣に來た感がある。冬は寒いが好し。

巴里の Bon Marché で妻が誂へた服が一月になつても未だ來ないので、今日は催促狀を出す。

各個人は歴史の總計である。各個人が全宇宙の中心である。一切の祈は聽かれ、一切の祝福は生かす。一切の努力、一切の勝利は全人類全宇宙の得である。我儕は成長する。宇宙は成長する。神は少しまた少しづつ自己を現はす。何を怠つて濟まう？ 何を急ぐ要があらう？

(十六)

十二月九日。Knight's Bridge の食店に往つて、例の如く午食。Beef Steak が今日はうまくなし。公園を通つて歸る。子供の愛らしき事例の如し。

Ada が投島田と云ひさうな髪に結ぶて居る。

新聞を見ると、エルサレムの SONS 知事の阿父八十何歳の老人が、息子のつとめるエルサレムに行くと云ふ記事がある。嘸双方で嬉しいだらう、と羨ましい。

(十七)

十二月十日。乗合 Bus の Piccadilly Circus 行。街を横ぎるとして、夫婦はなればなれになり、妻は後に残り、突貫した私があぶないとして妻は驚いて後から叫びを上げ、共に冷汗になる。探花樓の支

那料理、南京米を食へ過ぎて、後で少し腹痛を覺える。英吉利の若い女達がよく喰ふには驚く。全くよく喰ふ。よく食べる、さうしてよく運動する。だから血色が好いのだ。戦争で緊張し、克己し、消費し、容色相貌また復舊しないのであらうが、それでも伊太利女、佛蘭西女と比べて著しい女性の力強さを感じる。

Green Park の池は氷結して、鴨や鷗が尻を振り／＼氷の上を歩いて居た。

先刻の横斷冒險から恐氣がついて歩きつづけ、Hyde Park Corner に来てやつと Bus に乗つて歸る。我儕のホテルの料理はまづい。それは洗濯のひどいのと正比例して居る。米國經由で勉強に來た若い T 君なんか、あまり此處のがまづいので泊るだけで食事は他のホテルに往つたりして居る。新聞で廣告して、素人下宿を探がし、二三軒見つかつたさうで、近くに引移るさうな。然し此處でも少し改善の兆が見えて、今夜は生の Oyster が四個ついた。珍らしい事である。

(十八)

十二月十一日。雨。今日佛蘭西から Clemenceau が協議にやつて來た。其おみやげであるかの如く、Bon Marche から妻の服が届いた、と云ふたよりが日本大使館から來た。來たら田舎まはりに出かけようと謂ふて居たそれが來たのだ。

随分雨が降つて居て、内に居たいが、部屋の掃除もあるし、運動不足は好くない。そこで雨仕度よろしく先づ近い *Street* の新古靴店に往つて、やゝ大ぶりの *Suit Case* を買ふ。七磅十志。Mark をつけてもらう爲に残す。其處に天井に届く程積み重ねられた古、中古、殆ど新しい小さな手提から一身代入つてしまひさうな大きなトランク、がた／＼になつたのや、姓名の黒々と残るさま／＼の靴相を見ると、其一個々が何かを物語りたげに私共に向ふかのやう。

妻はレエスのカラを二つ買った。あれこれと妻が擇る間、ぢつと待つて居るも、*Husband* 學修業のそんなに易くない一課程である。

それから自動車で大使館へ。*Grosvenor* 違ひでまた西班牙大使館へ運ばれる。これは最初 *Hall Porter* が *G. Square* を *G. Garden* と間違へて教へたが原なのだ。しつこい間違ひを直して大使館に往つて紙包を受取る。それは小包郵便でなく、通運で來たのだ。だから長くかゝつた。*Bon Marché* からは先日の照會の返事が來て、云々日に仕出したが、戦後で長くかゝるから、と辯明して來たのであつた。歸つて、妻は早速着て見る。少し寸法が長過ぎたが、黒い毛皮で縁どつた絹の様な羅紗の上下、ふわりと見ても着心地が好ささうだ。これで何時でも田舎まはりに出かけられる、と妻は喜ぶ。

私は入浴して、暖爐の前で今朝読みさしの新聞を見る。忽ち *Daily Mail* の一項が私の眼を射た。

それは昨日の Times に出た Edmund Gosse の寄書を轉載したのだ。Northcliffe の新聞は Times でも Daily Mail でも近來殊に猛烈に過激派征伐をやつて居る。過激派の慘忍を摘發し、ひどい寫眞を出したりして、英吉利人の血を大分沸かして居る。それについて Gosse の投書が出たのだ。投書によれば、Tolstoy の末女 Alexandra は、戰爭中はカフカスで看護婦として働き、近頃は莫斯科で氣の毒な人達の母として働いて居たが、過激派政府は彼女を牢獄に打込み、殺さうか殺すまいかと思案中と謂ふのである。

Come 湖畔の Bellagio で暴風雨の空のやうな眞黒い眉目で脅すやうに私共に迫つた露西亞、Tolstoy 夫人の死と共に遠のいた露西亞が突然とまた私に迫つた。私は息を呑んだ。父は死に、母は死に、同胞は離散し、誰かあの元氣な娘を世話するであらう？ 同族同姓同胞の多くは皆國外に避難して居る中に、若い女の身そらであの露西亞に踏み留まつて働いて居た Alexandra、それでこそ Tolstoy の女と私共を喜ばせた彼女を Borschevini が牢に打込んだとは眞實であらうか？ 順禮紀行で父と私をのせた馬車の馭者座に坐つて母が撮つた寫眞に面影を留めて居る彼女、あの小雨上りの夏の夕 Varonka の川のほとりに迷子になつて居た私を馬車で迎へに来てくれた Alexandra、其面影が今私の前に歴史と跳り出して來た。

今朝の事である。此同じ新聞で Tolstoy の “Reparation” が明日倫敦の一劇場で演ぜられる事を私は讀んだ。座頭自身ペンをとつて露西亞の天才に敬意を表する意味を書いて居た。“Reparation”は何の劇か私は一寸思ひつかかなかつたが、妻も見たがるので明日は往つて見ようとほゞ決して居た。巴里で “Faust” のオペラを見て獨逸に往つた。伯林で “Salome” のオペラを觀て英吉利に來た。倫敦で Tolstoy の劇を見たなら、露西亞に行く事になりさうだ。と私は戯れのやうに曰うた。共同新聞で今私共は Tolstoy の愛女にかゝる不測の運命を知つたのだ。

兎に角 Gosse に會つて報道を確めよう。Edmund Gosse の名は英譯の露西亞小説の序文やちよいちよゐした論文などで知つて居る。Daily Mail の年鑑を見れば、貴族院の圖書係で、齡も七十を越して居る。紹介がなくては會うてくれまい。然しぶつかつて見よう。

時計は五時を少し過ぎて居る。私は服を更め、順禮紀行をポケットに入れ「十三年前 Yasuaya Polyana で Tolstoy 家と相識の者、Alexandra 嬢の事について五分間の面會を請ふ」と名刺に書いて、獨りタクシイを年鑑で知つた G さんの Address Hanover Terrace に走らせる。

随分遠かつた。それは瀟洒とした高等棟割の一つであつた。石段を上つて鈴を押すと、三十前後の切口上の女中が出て來て、主人は疲れて床に入つて居ると云ふ。七十翁だ、擾はすは不躑だ、然し兎

に角名刺だけは通じて見よう。往つた女中はやゝしばらくして下りて来て、病氣ではないが休息して居るから、と「Sign」を連發して、丁寧に然し嚴重に斷わる。夫人に面會は出來まいかと駄目を押す。無論それも駄目である。無紹介の夜陰訪問、Gさんが達者で居ても會つてくれるか疑問である。如何に戦後、如何に改造中の英吉利でも、それは此方が無理だ。年來何百と云ふ數を知らず面會謝絶を吃はした私が、倫敦で敵を討たれるも自業自得だ。

まだ去りもやらず入口の廊下に思案にくれて居ると、私と同年配位の紳士が入つて来て、女中からGさんの就床を聞き、G夫人の面會も不可能と聞いて、後で上げて下さいと用意して來たNoteを女中に渡して、靜かに出て往つた。思ひ切りのわるい他の客も、今一葉の名刺に、御都合の好い時十分間の面會が願ひたい、と走り書きして、ほつと顔の女中に渡した。

私の心の如く闇い夜を衝いて、タクシイは私をホテルに連れ戻つた。

夕食後、暖爐の前で私共は夜更くるまで話した。露西亞を如何しよう？ 如何してAlexandraを救はう？ 露西亞に往けぬ事はない。此處英吉利の勞働黨の手藝をたどつても、往くには往かれる。然し往つて如何する？ 露西亞はなるやうにしかならぬのだ。而してそれが屹度一番好いのだ。私共の旅は冒險の旅ではない。神を試みる旅はすべきでない。私共は生命を大切に使はねばならぬ。露西亞

は見合はず事だ。然し Alexandra は？ 難問題が千史の譬の如く私を壓する。

(十九)

十二月十二日。昨夜から Borscheviki に攻められ、今朝もまた攻められる。露西亞を如何する？ それよりも先づ Alexandra を如何する？

私共は例刻にホテルを出る。而して夫妻語りつゝ黙しつゝ Kensington Garden を徐々に歩く。あの池のほとりの Bench にかけて、散々氣を揉む。出るものは汗ばかりである。今日は空曇つて池の面寒く、水鳥の影も寒い。人々が私共の Bench の前を過ぎる。犬などが過ぎる。不圖日本語を耳にする。頭を上げると、日本女中が小兒車を押し、五六歳の女兒を連れて歩いて居るのであつた。

やをら立上つて、園外のいつもの店で午餐をする。盲者の爲に金を集むる女に、妻は六片を與へて居た。赤と淡紅の薔薇を買ふ。色は美しいが香の少ないが憾である。

Hotel に歸り、室に戻つて、また一苦みする。

而して終に思ひ切る。

私は Alexandra を捨てる。私の父と母とを捨てたやうに。私はあの勇敢な娘を捨てる。私は露西亞に往かぬ。私は露西亞を露西亞に任せる。私は露西亞に死んではならぬ。一切は自然に委ねる。

妻は私の決意に同意を表した。彼女は曰ふ、然です共、露西亞に生れたのですもの、Alexandra さんが露西亞に自分を與へるのは、少しも間違つた事ではありません。

私は Alexandra を捨てる、Russia を捨てる如く。それは Alexandra が假令 Bolshevikin に殺されても、犬死ではなうと思ふからだ。私は Alexandra の爲に祈る、露西亞の爲めに祈る如く。Tolstoy, Dostojevsky, Krojotkin の露西亞が獸類の國となつて了ふ筈はなう。

私は捨てた。即ち自然に委ねる。而して安心するつもり、安心したつもりで居る。

然し Bellagio で彼の本家 Tolstoy の寡夫人から出されたあの問がくり返へしくり返へし私を惱ます。「誰が援けて下さるのでせう？」

「それは私だ。私だ。私が露西亞を援ける。私が援けて上げる」

斯く云ひたくてならぬ。

然し私はさう責任を以て言ひ放つ事が出来よう乎？ 否、否。私の答はこれではなければならぬ。「誰も露西亞を援ける者はない。日本の兵でも、亞米利加の金でも、獨逸の學術でも、英吉利の常識でも佛蘭西の趣味でも、露西亞を救ふ事は出来ぬ。唯露西亞が露西亞を救ふ。私をお信じなさい。お信じなさい。唯露西亞が露西亞を救ふのです」

昨日からの苦惱で私はすっかり疲れた。疲るゝ私と共に苦しむ妻も疲れた。

夕方 Suit Case が来た。日本流に Tokutomi Kenjiroh と Mark を入れさせた。初めてだ。而して John と H. を入れたも初めてだ。私は思ふ、固有名詞は其土地其人固有の稱呼に一定する事だ。他の風習に倣ふ要はなし。Napoli で、Naples ではないらぬ。Londres はやめて London にするのだ。Japan はしけなし。Nihon だ。Nippon は音が促進して小さい。鼻にぬけるやうだが大きく Nihon がよし。末節のやうだが、こんな事から着手も必要だ。

(二十)

十二月十三日。曇。今日は Alexandra が頭を去つたので、身軽になつた。私は無用の心配をやめる。而してまさかの時には曲りなりにも思ふ事を言ふだけの Pen は有つて居る。機に臨んで爲る事もあらう。憂慮は無用である。

Soyuz Tostoy 劇を見るひまりひ、Kensington High Street の劇場切符販賣所に往つたら、電話不良で埒が明かないので bus で Dover Street に入り、St. James' Theatre に往つて一等入場券二枚買ふ。「Reparation」は「生ける屍」だつた。

劇は午後二時過ぎに始まる。私共はそれ迄の間を近頃開催評判中の大戦繪畫展覽會に往つて見る。

會場の Royal Academy を聞き違へて、其界限を二周の無駄をする。

Sergeant

以下本職の畫家のが數點。大部分は實戰の目撃を描いた素人若くは半素人の國民への貴いみやげである。それは戰場から遠のいて居た私共の爲に特に戰を再現してくれたものと私共にはとられた。油繪、水彩、墨畫、彫塑も少し。立體派の大膽な描法、古い英吉利風、手法はさまざまであるが、技巧が眼につかない程何れも勁くもの言ふて居る。私共は悚然とし、惘然とし、あるひは涙に隣る笑を以て、あるひは異様な驚駭を以て、戰ひの日に引戻されつゝ、一枚々々見て廻る。多くの入場者も皆言葉なく熱心に見て居る。

「塹壕の頂を越えて」と題した一枚。雪の塹壕。其内には俯伏しの死骸も見える。裝劍銃を右の手に鷲掴み、ゲートルの足踏張り、洗面器見たやうなあゝの兜帽をかぶつて今向ふへ這ひ上る兵士の眼の睨み。「雨の曉、敵襲」灰色の朦朧とした畫面、今敵襲に應戰の *Platoon* が三五人、敵彈にうたれた手を押へて此方にふり向いた若い兵士は、*Nazareth* で埃及を論じた *Cambridge* 大學生の彼に肖て居た。白耳義から巴里への路で私共が通つたあの邊の夕の景色。向ふではまだ砲彈が破裂したりして、前景には、水溜りに死骸が倒れ、擔架にのせたり、負つたり、扶けたり、手を繻帶で釣つたり、斷續死傷の行列が来る。「戰の收穫」は其題である。

Alanby の活動で再會した Palestina に此處で三たび會ふのも少くなかつた。

出征兵士の深夜停車場に着いた光景。疲勞と睡氣と麻痺した頭の状態が其まゝに若い兵士の輪廓もないやうな顔にあらはれて居るのや、病院の Bed に起坐した若者がきちんと行儀よく兩手を膝についたのもうぢらし。

海の晝も、飛行機もタンクも數々出て居る。敵機の眼を眩ます爲の "Camouflage" の製作や Sargent は "Gasod" と題して毒瓦斯に中てられた兵士の眼隠しゝて覺束なくも迎る行列を描いて居る。

日間飛行機の來襲 探照燈の光八方から空を射る夜の儼戒。敵機の落した爆弾に壁落ち、窓蓋はづれ、鋪石散亂し、おむねをつけた男の子が一人靴の裏を見せて俯伏しに斃れて居る "A Taube" は唯其一枚でも戰爭を否定するに足る雄辯な叫びである。金ピカの禮拜堂に傷病兵の Bed がずらりと並び、Tide の Station が國をとられた白耳義の避難家族や飛行機よけの Asylum になり、Garden が畑に割られて女達が馴れぬ甘藍を栽培したり(私共が日々散歩する Kensington Garden の一隅に甘藍や花椰菜などの栽培されて居るのは、其名殘であらう) 獨逸の俘虜を手傳はしてゲートル凍々し Land Girl が甲斐々々しく畑に働いたり、戰爭中の英吉利此倫敦が如何な生活をして居たかの一斑を私共に語るものであつた。

私共は此處に感傷的のものや、誇張したものを見出さなかつた。John Bull さんはもつと Matter of fact の國民である。彼が描くところはすべて實際をはなれぬ。それだけ私共に語る力が尋常でない。私共は彼があゝの緊張の中によくこんな感じ、見、而してそれを再現してくれた事について深い感謝を禁じ得ない。

唯有る店で午餐をとり、午後二時少し過ぎ St. James' Theatre に往つた。一寸有樂座と云ふやうなちんまりした劇場である。入りは満場。支那服の支那 Lady が何かぼつり／＼口に入れつゝ觀て居るのが氣になつた。

「生ける屍」は「闇の力」程の力ある作ではないが、Tolstoy の Drama の内で劣作ではない。漱石の「心」「それから」「行人」等に取扱はれて居る問題と共に、私には無關心であり得ない作物である。私は特に私自身の爲に演ぜられたものかのやうに熱心に觀た。主人公 Fedya を活かす Henry Ainley は確にうまい。然し Tolstoy の Fedya ではなし。それは Fedya より寧ろ Enoch Arden になつてしまふ。露西亞人と英吉利人の相違が其處にある。Fedya が強過ぎたばかりでなく Masha も同様であつた。"I am genius, Nobody understands me," と Declaim して Fedya の酒鐘を傾ける若し Good-for-nothing が苦しむ中に私共を破顔させる。Masha が Mandin を抱きつゝ Gypsy の歌を歌ふと、私共

は何かは知らず黯然とした氣もちになつた。

私は Tolstoy の露西亞の爲に、Alexandra の爲に、禱るを禁じ得なかつた。

午後二時半に幕が開いて、五時半には終つた。時間は短く、舞臺は緊縮し、觀覽席は靜肅で、まことに氣もちのいゝ觀劇である。

(廿一)

十二月十四日。雨。例の如く Kensington Garden に往つて、持參のパン屑を水鳥にやる。細雨糸の如く、霧は春のやう。

園を横ぎつて、いつもの食店で午餐。此處は菓子も賣る。クリスマス近いので、窓には美しく、うまさうな菓子がさまざまと飾られて居る。私共が午餐を食べて居ると、十三四から負られて居る三歳位までの男の子女の子がすべて五人、硝子窓からしげしげ覗いて居る。菓子を覗いて居るのである。出て歩くと、彼等も共に少し歩く。皆同胞さうな。後で思へば貧しい家の子供であつた。何故菓子を買つてやらなかつたかと残念に思ふ。それは Italia からナザレへの途で、地びたにべつたり坐つて私共のやつた菓子を嘗めるやうにして食べた跣足のシリア子供等と共に、長く私共の心に残つた。

歸ると、淺君が來た。紐育に問合はせの結果、三月の十日に Korea 丸が桑港出帆する、三月には

他の船はない、私共の爲に一等船室をとつたが、それは内側の船房、と云ふ事が分つた。三月三十日は少し晚い。聞けば二月二十日に春洋丸が出るさうだ。乗る程なら大きな春洋丸にしたい。淺君は私共が已に田舎に出かけたと思ひ、Korea^{コレヤ}丸に取りきめの返事を出したさうだが、春洋丸に變更のたよりを追かけて出してもらふ事にする。

明日出發のつもりなので、淺君が歸るを待ちかねて、荷造りをする。今度は成る可く荷輕に出かける。お氣に入りの此室を失ふも惜しい。帳場に言ふて、留守中も室料を拂つて借り切つて置く。而して荷物萬端其まゝに扉をしめ切つて置いてもらふ。

第六 SCOTLAND

其一 FLYING SCOTCHMAN

(1)

蘇格蘭から少し英吉利の田舎を廻つて來るつもりで、十二月十五日の朝 Taxi で King's Cross Station

に行く。春洋丸の事が氣になるので、淺君に手紙を書き、*"Prefer February Sunno. Cabin at all cost, please."*と紐育東洋汽船支店に打電してもらふ。停車場の雑沓の中に、*Khaki* 服の日本軍人を二人見る、血色、身材、全く悲しいやうだ。嘸私共夫妻が他の在外日本人の眼に見すばらしい事であらう。

十時發車。車室には私共の外に田中正造さんに肖た無髯の英吉利人。

汽車は *Edinburgh* 急行、所謂 *"Flying Scotchman"* で、倫敦を出たが最後、停車場も亦停車場も駆けぬけ、走せ通り、二時間走り通して *Graham* に來て、はじめて最初の停車をした。午鷄が鳴いて、田舎に來た感が長閑である。ボギイ式の車室幾箇か通つて、私共は食堂に行く。

歸つて新聞など見る。先日倫敦に一寸來た *Clementau* が、來がけに海峽の驅逐艇の甲板で、海荒れ艇搖ぐ拍子にしたゝか脇腹を撲つた。ひどい痛だつたさうだが、黙つて上陸し、倫敦滞在三日の間ちやん／＼と用を濟まし、應酬滞りなく、四日目に巴里に歸つて初めて醫者に見せたら、肋骨の一本が挫けて居たさうだ。剛情な爺、我慢の強い *"Tiger"* ではある。七十越して、偉大な「老人」と云はるゝを嘔り、戦時は佛蘭西の魂を燃やす火元、ピストルでうたれても執務をやめず、今も此様な氣力で戦の後始末をやつて居る健氣さは、何の位佛蘭西に對する外人の敬愛を煽るか知れぬ。 *Madame France* も此様な老人をもつて居る間は、老けたとけなす事は出來ない。

米國ではキルソンがまだよくないやうだ。氣の毒である。理想に向つての大踏歩が思ふに任せぬのは、お互につらい失望である。然し順序は踏まねばならぬ。書齋出の學者政治家、人情にまだ通ぜぬ。最初から共和黨に十分わたりをつけて、内を固めて置く事が足りなかつた。榮の冠は單獨では戴かれぬ。一人の英雄をつくり、一位の神を築く時代は過ぎたのだ。キルソンさんも *Sadder and wiser* にならう。早くよくしてやりたいものだ。

同室の英人は *Lytton* の "*Rienzi*" を読んで居る。

少し話を交はず。鐵道線路は特急に適すべく特に堅固に出来て居るので、速力の割に動搖が少いさうな。窓外雨に滴るやうな牧場の緑について、それが濕氣の爲である事、蘇格蘭に行けばすべてが山地風物になつて、こんな緑を見られぬ事など話す。

外は織い雨が小止なく降つて居る。*Heat* が通つて居る車室の内は暖かで、硝子窓から雫が滴り／＼する。私共も英人もこくり／＼をはじめぬ。

霧雨を衝いて汽車は飛ぶ。午後二時に *York*。四時に *New Castle*。英人は會釋して此處で下車する。私共は車内に茶を呼ぶ。

(11)

昔國民新聞社で新聞翻譯などさせられて居た頃見た畫が不圖私の頭に浮ぶ。それは安全燈片手に坑夫の裝した John Morley が、同じ裝の Gladstone を先導しつゝ「此 New Castle は瓦斯が危険だから、親分、氣をつけねえ」と云ふ戲畫であつた。Tyne 河上の New Castle は、昔から製鐵工業地で、社會主義風が早くから吹いて居たのだ。其 Gladstone は死に、其 John Morley は貴族院に入り、英吉利は赤くなりかけ、而して新聞社の片隅でその畫を見た蟲の様な男一疋は、天つ日の金光線で世界を一拵げにしようとする途轍もない事を考へて、夫妻で今其 New Castle——on——Tyne を過ぎつゝある。私は氣障な男として一度捨てた Gladstone を思ひ浮べ、彼がやはり正直で、時勢と共に新になる政治家であつた事を思ひ、今もあんなに面倒な愛蘭自治の問題で、年來の股肱同志に見捨てられ、あの老齡で獨りぼつちになつた胸中を今更のやうに思ひやつた。而して Gladstone から他の正直漢の John Bright に思ひ及び、歸途には墓でも訪ねてやらうと思ふた。妻にそんな話をして、汽車の窓から眺める。雨の夕暮、蒼茫とした中に黒く大きな工場や煙突が幻の如く、電燈の光がちらちらする。

(11)

英吉利人が下りた後に、二十三四の少し Snow と云ふ顔をした婦人が來て腰かけた。毛皮の外套を脱ぎ、手提鞆を開けて子供の繪本などあれこれと見て居る。クリスマスの買物でもしたのであらう。

New Castle^{ニューカastle}を出て、闇を衝く汽車がもう蘇格蘭に入る頃、Edinburgh^{エジンバラ}のホテルをきいたを口きりに、私共と彼女との間に四方山が語られた。Edinburgh^{エジンバラ}の石炭鑛主の娘で、今はしもたやの父母と住んで居るさうな。英吉利人でなく、蘇格蘭人である事、English Church^{イングリッシュチャーチ}の信者でなく、Presbyterian^{プレズビテリアン}の信者である事を努めて辯ずる。外套をほめると、彼女はそれを私共に見せ、毛皮は眞の Skunk^{スキUNK}で、300 Guinea^{ギニー}、父のクリスマスの贈物と誇り顔である。約三千圓の外套だ。喪は綠縞子に朝顔の花などの模様がついて居る。Edinburgh^{エジンバラ}出来たと云ふ。花の朝顔を彼女は知らぬ。矢張蘇格蘭の花で、名は忘れたと云ふ。何でも角でも蘇格蘭に持つて来る處が蘇格蘭人らしく面白い。三千圓の外套を被るお嬢さん、臺所を覗いた事もあるまいと思へば、料理も出来て、妻は後で其手の大きい手、働いた手である事を私に告げるのであつた。

Edinburgh^{エジンバラ}にも獨逸の空中攻撃が二度位あつたさうな。兄は出征して負傷し、飛行機隊に屬した甥は獨逸の捕虜となり、休戦後にやつと歸つて來たと云ふ。

私共はいつもの「平和は唯婦人の自覺と結束で成就する」事を述べた。それに彼女も異論はなかつた。印度や埃及や愛蘭^{アイルランド}については、那威^{ノルウェー}に往つた外あまり國外に踏み出した事がない年若い彼女にま

午後七時汽車は Edinburgh に着いた。私共は娘に別れて直ぐ構内の Station Hotel に往く。

(四)

娘が教へてくれた其ホテルは大きなホテルであつた。私共は四階に導かれた。寢室は狭いが、浴室は馬鹿に大きい。顔など洗つて、食堂に下りる。娘が自慢したやうに、料理は少なくとも倫敦の我儕のホテルの比ではなかつた。“Wood Cook”などの腥ものが Dessert の後で出現したりするのも、蘇格蘭風で面白い。

室に歸ると、直ぐ入浴。湯は濁つて少し不氣味だが、それでも好い氣もちに温まつて、くたびれ切つた體を Bed に横たへる。私共は少し汽車酔ひの氣もちであつた。“Flying Scotchman”で 394 哩を九時間で走つたのだもの。

其二 EDINBURGH

(一)

十二月十六日。十時頃から Edinburgh 見物に出かける。Edinburgh は好い。典雅な都だ。丘と平地の按排も面白く、倫敦あたりに見るを得ない高い建築、雅致ある建築が見る眼を悦ばしめる。私共の

ホテルの前通り、Princes Street は歐洲一の美しい街と誇稱される。一方 Edinburgh Castle を見上げ、公園一帯を前に、此處は電車も通さぬ片側街のまことに氣もちの好い街である。街側公園に二百呎の Gothic 尖塔、其中央に腰かけて居るのは Scott である。Kensington Garden の Prince Albert 記念碑に似て、遙に大袈裟である。Scott の蘇格蘭人に愛されやうは眼ざましい。名が已に Scott であり性格がまた蘇格蘭人の愛をあつめるやうに出来て居る。私共の泊つて居る Hotel の Station も、Scott の小説の名をとつて Waverly Station と呼ばれる。Scott, Burns, Stevenson と引張れば英文學を飾る名がずらり出て来る。亞弗利加の道開き Livingstone も此公園に立つて居る。これも蘇格蘭の正當な誇りの一つである。

(11)

私共はすべてを措いて先づ古城に上る。悉皆石でたゞんだ急勾配の阪を大分上つて、城の大手口に出る。觀覽料二人一志を拂つて入る。古城は Queen Mary 時代のまゝに残されて、其處には兵士が今住んで居る。蘇格蘭兵士の頑強は古來響いたものだ。北方の沍寒、山地の礪礪が、剛健な蘇格蘭氣風を造つた。Sydney Smith が「蘇格蘭人に洒落を分らすには、鑿と鎚が入用だ」と云つたやうに生眞面目さも其産物だ。Waterloo で嵐の如く寄するナポレオンの装甲騎兵を頑として喰ひとめたそれ

も蘇格蘭人の頑強が大分働いて居る。今度の戦争にも蘇人の健闘は敵味方の認むる所であつた。蘇人は英人よりより多く獨逸人に似て居る。“oh”發音が獨逸に近いのもたゞ事ではない。米國人で死んでも“Carnegie”は“Scotch”であつた。“Scotch”は何の世界に出ても“Scotch”だ。蘇格蘭が蘇格蘭人を造るのだ、英吉利が英吉利人を造つたやうに。

近くを見て歩く私は、Edinburgh に来てからは時々噴き出す事がある。太縞の短い Skirt をひら／＼させて、膝ぎりの靴、薔薇色した股の一部を露出して、Gin が来る——眼を上げると大の男、兵隊さんだ。それがあの兜巾の様な帽をのせて、左の肩からたゝんだ外套を斜に負ひ、Palatine あたりの水撒夫がつるす革囊に聴診器をあまた挿し込んだやうな Badge でもつるして來ると、全く破顔せずには居られぬ。そんなのが此處の城中には大勢居て、私共を悦ばせるのであつた。

蘇格蘭人は氣位が高い。決して自己を下さない。今の英國皇室は、即ち蘇格蘭王統の血を承けて、其實蘇格蘭が支配して居ると謂ふて居る。それは萬更自惚ではない。城の上は即ち古王宮で、昔のものが其まゝに保存されて居る。私共は王冠寶劍などを見る。それから Queen Mary の居室と寢室を見る。Monastery のやうな王宮。尼寺の一室のやうな素朴な室。寢室の狭さが驚かれる。王宮は城の丘の南に寄つて、懸崖の上に高く聳え、此處から南面の眺望がうち開けたものであつた。居室にかけ

られた Queen Mary の像は、いづれも人の好い美人である。従姉の Elizabeth に妒まれ陥られる資格は立派に備はつて居る。其後裔が今英吉利の王位に坐すとすれば、薄命の彼女は負けて而して勝つたのだ。

何百年の風雨に黒ずむだ門樓、建築、舊式の砲門が昔のまゝに並んで居る。屈竟の見晴らしたが、惜しい事には此日空は清く晴れながら濛氣が Edinburgh 全市を掩ひ、白濛々たる中から赭黒い建造物の高低參差を望む外、海かけて心地よく眺むる眺望が得られなかつた。

城を下つて、南側の静かな通りを歩む。小學校歸りの少女等が珍らしがつて挨拶し、行き過ぎてもふりかへり／＼手を擧げ愛想をして私共を悦ばせる。

Princes Street の妻は Overshoes を買った。店の老人が私の Hat の着け方が左右違つて居ると注意して手づから直してくれた。

Academy に繪畫の展覽を見る。繪畫はそんなに面白くない。人少々の Bench に憩ふて、買った葡萄など喰べる。尙少しぶら／＼してホテルに歸る。

室がまづいので、帳場に變更を談判したが、空室がない。讀書室は人多く、静寂に馴れた私共は落ちついて物書く氣にもなれぬ。室に歸る途中中女中に會つたので、それを云ふと、直ぐ卓子と革の椅子

を持つて来てくれた。電燈つけて書きものをする。これで暖爐か Heat があれば申分なしたが、戦後の事で暖爐は空しく、Heat は唯 Bath にのみ通ず。

(三)

十二月十七日。亞米利加の天文學者の一人が、星學の觀測から 1919 年の十二月十七日天變があり、地の終になるかも知れぬ、と云ふ豫言をして居る事を私共は新聞で知つて居る。それがかなりの不安を民衆に與へて居た事も知つて居る。英吉利の天文學者氣象學者から安心すべく宣言が出た事も知つて居る。世の終末の觀念は、常に人間につきまといふ。曠古の大戦を経た昨今は、殊に其感が強い。誰も古いものゝ死を期待して居る。現に私共は第二の創世、新天新地の開闢を主張して居る。それは必しも此地球が減びて他の地球が出現する、我儕の現身が亡せて他の自身が化生する、と云ふ意味ではない。私共自身は、此地球は飽くまで我等の住家で、人類の活動は地球の續かぎり絶ゆる時なく、而して地球の壽命は昨今に盡きるものではないと信じて居る。何故なれば、これを自己に徴しても、人類が發展進化の絶頂に達して居るとは決して思へぬし、ある完成に達しないで其生命が中途に斷絶する事は萬あり得べからざる事である。私共の新天地は、ふるいふるい此地球が新しい光に照らされたのだ。私共の第二の開闢は、人類の新しい Sky なのである。そこで私共は一九一九年十二月十七

日を以て此地球が終るとは信じなかつた。私は妻に曰ふた、萬一罷り違つて此十二月十七日に世界が終るとしたら、Scotland から昇天してもよいではないか？

此頃私はわるい習慣がついてしまふた。夜の一時から二時迄の間にさめる。それから長いことさめて居て、また曉近く眠るのである。此さめた間がまことに快い。それは鴉片の如く、健康によくないと思ふが、さめた其數時間がたまらなく好い。色々の顔が現はれる。様々の場合が浮ぶ。こぐらかつた紛紜が解ける。不快の苦さが甘くなる。疑問の暗が照る。愛が支配する。私は私が日に／＼成長しつゝある事を感じる。私共は本當に愛された子女である事を感じる。私共に托された使命を疑ふ餘地はない。

今しもこんな甘い現と夢の境に横たはつて居ると、突然硝子窓がぐわたく／＼と鳴り、からんと硝子が落ちて破はるゝ響がした。轟と云ふ海嘯のやうな響が家をうつつた。それはだしぬけに猛烈な南風が私共のホテルを襲つたのである。四階の南面にある私共の室は、眞正面の其衝に當つたのだ。

妻も其音に駭いてさめた。

私共は Bed から Bed に語つた。世の終りにならぬまでも、何か天變地異があらうも知れぬ。針一つ落しても全宇宙に影響なしには、濟まぬ。星界の異變が地球に無交渉であり得やうか？ 私は十二

の昔京都は同志社の教場で、突然火薬庫が破裂したやうな響がして、教室の硝子戸が破れ落ちた當時を思ひ出した。學生も教師も外に走り出た。それは白晝であつたが、私共は西天に當つてばつと光るものを見た。衝突した星の破裂か、單獨の爆發か、いづれ其光るものは隕星であつた。教師は目測で彼の光る物體の距離を何里とか云ふた。それを今思ひ出した。自然と人事の交渉を見れば見る程、疾風迅雷に色を變じた古聖も、天象地變に喜憂をかけた古い習慣も、少しも陳腐な無意味ではない。我等は如何に威張つても、支配されて居る。一部であつて、全體ではない。子であつて、父ではない。父ではないが、子ではある。敬虔と從順とが私共をしんみりと念じさせ、また悟らせた。地球の壽命人類の壽命について私共は祈つた。

突風は唯一陣吹き過ぎて、あとは靜かになつた。

私共はまた明方近く眠つた。

八時半に起き、十時に朝食に下りる。Porridge がうまい。鹽が加へてある。「Scotch は Oatmeal で文學をかい立てる」と云ふ諺もあつて、此處の Oatmeal は確にうまい。鯡の生の焼き立てもうまいものである。地中海の魚を坡西土でうまいと思ふた。英吉利の魚もうまい。然し Turbot だけは佛蘭西で Palstina の Mutton 程にうまい。鯡はうまい。

(四)

今日は **Forth Bridge** に自動車を走らす。

Edinburgh 市をはなれ、雨後の道路は、低い丘や畑地や貴族富豪の廣潤とした別邸などの間をうねうねと北西に走る。初冬の風物、空も曇つて淋しい。西北の地平線に青い鋸齒状の斷續した山と見たのは雲であつた。

二十分走つて **Queen's Ferry** に來た。自動車を下りて、水に突き出た埠頭の端近く立ち、所謂 **Forth Bridge** を眺める。北の風が颯々と吹して、寒さ。

Forth の入江に架した此橋は、**Colombo** の防波堤や、私共は見なかつた **Nile** 上流 **Assuan** の堰などと共に、英吉利の偉大を語る記念碑である。約三千五百萬圓、七年の日子、鋼鐵五萬噸を費やして約三十年前に出來した此橋は、長さ一哩と五分の一、高さは水底から四百五十呎で、汽車の線路は最高水平上 **100** 呎を走つて居る。丁度汽車が其線路を此方へ來つゝある。其處は高架式になつて、水を出づる石だたみの支柱は高い爲に一見危げな感があるが、水中五十呎乃至九十呎が程は、底部の直径七十呎、頂部直径六十呎の堅固な基礎が支へて居るのだ。高架式の **Bridge** は直ちに鋼鐵の **Suspension Bridge** に連なり、それは二つ半の **Span** を開いて、可なりの汽船が今しも其最北のを潜らうとして居

る。橋の鐵面約十町步餘に上り、鋌びやうをうつこと八百萬、毎日ペンキを塗つて居て、塗り上げるに三年かゝるさうな。これで蘇格蘭の東海岸線が Forth の入江を迂廻うくわの要がなくなつて、二十哩の距離が近くなつたと云はれる。

寒い風に吹かれて橋を見上げ、濁つた水を眺め、更に北岸の方を眺める。入江向ふは低い丘、其處に人家の群がりも見えて、私共は丁度新嘉坡は Johore の渡しにまた立戻る氣がするのであつた。

晝はがきなど買つて、また自動車で Edinburgh に歸る。

而して Princes Street で下りて、妻の屋内用のかざり靴、編棒に Scotch の毛糸を買ひ、それから果物店で Suisse で會て會ふたやうな大粒の紫葡萄を買ふ。一房の目方二封度近く、價も十志餘に上つた。歸つて數ふれば一房の粒は七十七、味も相應に好かつた。六月エルサレムで未だ酸い葡萄を食うて以來隨分色々な葡萄を喰ふ。白耳義の Muscat は最上であつた。Scotland のこれも好い方だ。

私共の Bath は Bedroom より遙かに廣く、Heat が通つて温かい。私共は歸來一浴。卓子椅子を Bath に運ばい、Bath で新聞を書き Bath や Charlotte Corday に殺された佛蘭西革命の Trotsky——Marat の事など思ひ興きじつゝ書き物をするのであつた。

猛風まうふうの一陣に驚かされたきりで、曇りながら日は靜かに暮れ、靜かに夜になり、夜は靜かに更けた。

私共は地球の壽命が今日で盡きなかつた事を感謝しつゝ Bed に上つた。

Edinburgh は氣に入つた。見る所は數々ある。それから Edinburgh を踏出しとして北へ湖國の風物、荒寥とした山地の風俗も見たい。然しそれは湖に月眠り、野山に Heather の花さく頃にしよう。それ等はまたの樂みにして、明日は Glasgow へ往かう。

其三 GLASGOW

(1)

十二月十八日。朝十時五分の汽車で Edinburgh を立つ。車外は雨曇りの景淋しく、車内は別に人もないので、私は新聞を見、妻は Edinburgh で買った Scotch の毛糸をほぐして球に纏ねて居る。一時間にして Glasgow の Queen's Street Station に着く。電話して置いたので Station Hotel に行く。廣場に面した二階の室に導かれる。二つの窓は銅像など多く立つた廣場を見下ろし、深紅の被をかけた Bed や深紅の Sofa が美し。

然し Lunch を終へて室に歸ると、中々寒い。女中を呼んで暖爐を燃すべく命ずる。Sorry——お氣

の毒さまと答へる。暖爐の傍にはちやんと石炭箱が備へてあるが、Mantelpiece に注意のカードが立つて居て、病人以外石炭を焚くこと無用とのお布令を書いてある。1918年十一月の日附だが、一年後と同様と見える。蘇格蘭も戦争をしたのだから、無理はない。

下の Drawing room には火があると、女中が教へてくれる。一階下りると、小さな客間を見つけた。人は居なくて、暖爐の火が美しく燃えて居る。私共は椅子を火近に引寄せて、書き物などする。鈴を押して茶など取り寄せる。六時半になると、此處で Reception があるからと給仕に立退きを命ぜられる。

(11)

十二月十九日。Glasgow に來たが、造船所など別に見たくもなし、Edinburgh の後に、市中の見物する氣にもなれぬ。例の大觀す可く、自動車を南の郊外に走らす。倫敦では見なかつた女の電車々掌を Glasgow に見る。Burnside と云ふ處が Glasgow を見晴らすと聞いて、其處まで自動車を走らす。寒風の飄々吹きすさぶ丘の上からは、Glasgow の一部を見ただけで、大觀の快活は獲られなかつた。車掌は物好き客をもてなす可く夏は好ささうな溪流小瀧などのある幽雅な遊園に私共を連れて往つたが、茶一杯飲むでもなく其處を出た。古い英吉利畫に見るやうな田舎の片影を見ただけがせめてもの

獲物であつた。

午後は前の廣場を散歩する。Gladstone や Burns や James Watt 其他數々の記念像の中央に、八十呎の高柱が立つて、其上に Walter Scott がちゃんと澄まして居るのは、Scott さん少し高上りが氣障である。

第七 JOHN BRIGHT

其一 MANCHESTER へ

(1)

十二月二十日。雨。朝 Caledonian Station に自動車で行つて、十時の汽車で Manchester に向ふ。一時間程も走つた處で、妻は卒然 Muff と毛皮の Scarf を Glasgow の Hotel に忘れた事を思ひ出した。手紙を書いて、車掌に頼み、途中驛で投函する。

一路雨。車内無人。私共は午餐に食堂車に往つたきり、車室に相對して新聞など見る。米國の若夫

婦が、妊娠中の二番目の子を望手あらば賣ると云ふ廣告を出して居る。生活に困るからと云ふ。而して分娩迄には費用がかゝつて居るから、たゞはやらぬ、賣る、と謂ふのだ。惻然とする。米國に大分行はるゝ出産制限、所謂避妊と共に、胎内から子を賣る、と云ふは大問題である。私共の尺度は「自然」である。「自然」だから人情である。「不自然」即ち「不人情」は私共の尺度にはづれる。避妊も、胎内の子を賣るも、共に自然でも人情でもない。それを餘儀なくする様な生活上の缺陷が社會にあるならば、それは端的に改められねばならぬ。それが當人の缺陷にあるならば、それは改められねばならぬ。何は兎もあれ近代人が自然を侮どり、神に負き、吾儘をする傾向は著しい。

私共は先日倫敦で見た新聞の記事について話した。孤兒を養うて居た家族が、實子が出來たので、孤兒を他に譲る廣告をし、而してそれを引受くる家族が出來たと云ふ記事である。義理體面を主とする日本では、ちよいと Shock を與へやう。然し無理は人情でない。無理をする處から無用の悲劇も起る。胎内の子を賣るに比すれば、實子が出來て養子を譲るのは、沒義道のやうで人情に適うて居る。すべて英吉利人のやり方は象形文字で行く日本流の及ばぬ妙味がある。これは日本に取り入れても怪しうはない。尤も人情からすると、單なる打算厄介拂ひからすると混同してならぬは勿論である。

其土そのちに居て其土の出來事を新聞で見るのは大なる興味である。私共は毎日何か面白い事に會ふ。妙な裁判があつた。夫婦喧嘩をした。夫が嘔ぶつて家を走り出し、池に身を投げた。細君もつゞいて走り出して來たが、夫の身投に驚いて救を求めた。池の周圍に十二人の男が居た。皆投身者を見た。一人の若い男は飛び込むべく靴をぬいだ。然し寒い日であつた。彼は脱いだ靴をまた穿いた。而して十二人の見物男と、一人の細君の目の前で夫婦喧嘩の敗北者はあはれや溺死した。細君は十二人の男の卑怯を罵つた。裁判は十二人を自殺ほうじせき幫助罪に問ふたか如何か、それはまだ書いてなかつた。興味ある問題である。見殺しは無論よくない。然し妻と喧嘩して自殺する男を、他の男が流行感冒の危険を買して救ひ出す勇氣が出よう乎？ また自身は乾いた地に立つて居て、他の男性の無爲を咎むる女を、十二人の男は尊敬し得るであらう乎？ 英吉利の裁判は大岡式で中々面白い事がある。私は十二人が有罪であつたか否を知らぬが、これは興味ある問題である。

英吉利の法廷では人間の裁判が面白いばかりでなく、面白い動物の裁判さへある。何某の飼犬ボブが巡査さんに吠えついて足に少々の傷をつけた。巡査さんが告訴して犬に死刑の宣告が下つた。すると其犬を知つて居る人々大勢が連署して平素の行狀を申立て、死刑の免除を願ひ出た。被告の犬が法廷によび出された。眞黒の人中に被告ボブは尻尾ふり／＼世にも無邪氣な顔をして居る。それが裁

判官の心證を動かし、向後を誡めて無罪放免とせられたなども、英吉利でなくては決して見られぬ裁判である。

新聞と云へば、近頃の英吉利の新聞漫畫は總じて使はれ人の跋扈、若い者や子供の早熟と跋扈、女の跋扈畢竟新時代の新勢力の跋扈に殆ど限られて居る。肥え太つた *Bull* さんの改造活動は見物である。何れにもせよ、あの大戰が世界の局面を打破した事は恐ろしいものだ。あれで英吉利は若返つたまた若返りつゝある。それを思へばアメロングンの維廉も、飛んだ敵役の毒氣をぬいたにも比せられる。何はともあれ一切を使ふて一切を生かす阿爺の手腕には全く以て恐れ入る。

高からぬ山に雪あり、雨にすぶ濕れた岡の牧場に黑白羊の散點する南蘇格蘭の景色は、何時しか北英吉利に移つた。Carlisle で海近く、地圖を見て Wordsworth 等の湖郷を其方と雲間に隱見する青い遙嶺を眺め、午後三時 Manchester に着いた。大きな停車場。Lift で荷物と共に歩廊から橋に上つてまた Lift で次の歩廊に移る。妻が Muff と Scarf を氣にするので、更に Glasgow のホテルに驛から電報を打つ。

(11)

Midland Hotel は素晴らしく大きな Hotel である。戦後と云ひ、殊に近頃は紡績株の賣買が烈し

い熱を起し、成金が出来たり、亡びたり、凄まじく人氣が沸騰して居るので、此大酒店も満員の繁昌。其 Reading room にも雑誌の“Cotton”が幅を利かして居る。Liverpool が近いので、此處には殊に亞米利加風が吹いて居るかのやう。

私共は右腕無しの兵隊さん上りが操つる Lift で、400 番室にをさまる。全く迷子になりさうな大きなホテルである。

食堂に下る。Glasgow よりまさり、Edinburgh と雁行する料理。食終つて、ゆる／＼階段を上る時、今しも自室に入り行かうとする立派な服装をした四十格好の婦人が小戻りして、會釋した。日本に往つた事があるさうな。明日は私共も逗留と聞いて、ではまたお目にかゝりませうと愛想して室に入つて往つた。翌日は私共も終日出あるき、翌々朝はホテルを立つたので、其名さへも知らずじまつた。

其二 ROCHDALE

(11)

明治廿二年の五月であつた。紺飛白の單衣白木綿の兵兒帶と云ふ装で數へ年二十二の私は熊本から上京した。其前々年の暮に破れかぶれで京都の同志社を出奔した其勘氣がゆるされて二年ぶりに親許

に歸つたわけである。五月に上京して九月に「如温武雷土傳」（じんぶんぶらいとでん）を兄の民友社から出版した。私の嗜好は最初から文藝にあり、私の力は宗教にあつたので、政治には大して興味を有たなかつた。John Bright（ジョンブライイト）なんか私には何でもなかつた。「如温武雷土傳」は其頃 Manchester School（マンチエスタースクーール）のコブデン、ブライイトなどに共鳴して居た兄が私の筆を使つて書いたものである。材料から校閲、序文から廣告まで皆兄の手に成つて、私は唯漫然として聴き、漫然として書いたまでである。廿三の春に出した理查士格武電（リチャードゴブデン）も、廿五の秋に出したグラッドストーン傳も、似たやうなものだ。私の處女作は明治卅一年の春に出した「青山白雲」のスケッチ集である。然し兎も角も書いて、印刷されて、私の名を以て一卷として公にされたは、何と云ふても武雷土傳であるから、私の處女作は矢張武雷土傳だ。専門の型に踰躄し拘泥（きこくせき）のみに囚はれた時代は、私にも已に大分過ぎて居る。政治も實業もすべての活動すべての生活は皆藝術で、一切の知識は宗教であらねばならぬ見地に立つ今の私に、あの正直者、あの本當の Democrat（デモクラット） John Bright（ジョンブライイト） はやはり可愛い男の一人である。Manchester（マンチエスター）に來たのは、それから十一哩しか隔つて居らぬ Rochdale（ロックデール）に處女作で縁を結んだ John Bright（ジョンブライイト）の墓參をしよう爲であつた。

(11)

十二月廿一日。雨がちの日晒。辨當にサンドキツチなどつくらせ、汽車に乗る。

Manchester から一時間を出でなす距離に Rochdale はあつた。Roche の小川を帯び、低い丘をかけて建てられた Bright の故郷は、人口十萬、煙突の數多立つた工業市であつた。

Rochdale に下りて、改札係の爺さんに Bright の墓を問ふ。少しも知らぬ。多分共同墓地だらうと云ふ。自動車も馬車も日曜で居ないが、電車が走つてゐる。私共は兎も角も電車に乗つた。改札係の爺さんが跟いて来て、車掌に私共の行先を何かと言ふてくれて居た。

何とか Bright と云ふ名譽書記の名を以て、Rochdale 看護婦協會の義捐募集の廣告を車内に掲げてある。これが John Bright の息子だらう、と思ふ。改札係の爺さんもよく知らなかつたが、車掌も Bright の墓地を知らぬ。傍へ聞きした五十左右の婦人が John Bright ならば Friends' Church に葬られて居ますと教へてくれた。Bright は Quaker であつたから、Quaker の墓地に葬られて居るのだ。

私共は教へられたまゝにある所で電車を乗り換へ、ある所で下ろされた。其處は狭い裏町で、坂になつた、淋しい巷路である。昨日から降りつき、今も小雨が降つて居る。唯有る角の、小さな家で Quaker Church を問へば、五十餘の男が細々教へてくれた。私共は行き過ぎて居たのであつた。やゝ後戻りして、阪路を上りかける。誰やら後から呼ぶ。それは先刻路を問ふ時通りかゝつた二人の男の子であつた。其方でないと云ふやうに手を反對に振つて居る。それでも構はず上つて居ると、今度は

先刻道を教へた男が後から呼ぶ。民衆運動の癖の如く私共はまた反對に行き過ぎたのであつた。私共は匆々に後戻りした。その人は私共を連れて坂の中途の煉瓦塀に圍ふた角屋敷の赤錆びた鐵門の内に入り、あれが Church の玄關と低い石段の方を指し、これが墓地と芝生の一區を指し、少しばかりの謝禮を收めて歸つて往つた。

緩い斜面になつた緑の芝生に、やゝ黒ずむだ白大理石の板碑が嵌められて、芝生も碑面も雨にうたれて居る。私共は傘を傾けて、足下から見上げて居るやうな平たい碑の面を読む。

John Bright

Died

March 27 1889

Aged 77 Years

それつきりだ。「好いなあ」と私は妻と相見て云ふ。好い生き様だつた。而して好い眠り状だ。私の武雷土傳にも「一句の讃辭を銘するなし」と書いて置いたが、正に其通りであつた。

阿父の Jacob Bright は 1851 年に死んで居る。それに “Aged nearly 76 years” とある。“Nearly” が好い。一紡績職工として Rochdale に移り来て刻苦産をなした阿父 Jacob さんの誕生などもしか

と覺えられてなかつた平民的 Origin も、阿父の年齢をはつきり知らぬ息子の John さんの率直も、此一語に語られて居る。五十七歳で 1878 年に死んで居る Margaret Elizabeth Bright は John Bright の後妻で、1841 年に二十六歳で死んで居る Elizabeth Priestman は先妻である。此先妻に死なれて弱り切つて居る處に、Cobden が來り慰め、勵まして共に穀法廢止の運動に活動しはじめたのだ。John Bright の政治的 Career は此先妻の死から發足して居るとも云へる。Bright 一族の外にも、さまざまの板碑が雨を浴びて横たはつて居る。

一禮して墓邊を去らうとする時、集りが果てたのか、扉が開いて婦人が二三人石段を下りて來た。黒い服のお婆さんが私共を見つけ、小戻りして會堂内に入るべく誘ふ。誘はるゝまゝに私共は入つた。若い婦人がお婆さんから受取つて私共を内に請する。

前室の次は三十疊敷程の廣間。木のベンチが數脚、卓子、Quaker 式に何の裝飾もない。禮拜は濟んで、男女五六人其處に居た。四十左右の連りに吃る人が主として應對する。牧師格の Moffat 君であつた。私は三十年前 John Bright の傳を書き、今日は Manchester から墓參に來た事を話した。皆の顔が輝やいた。M さんは John Bright の生前常に此會堂に來て禮拜を共にした事を語り、此處が即ち Bright の席で、記念の爲め斯通り空席にしてあると Bench の一端薄く Cushion を斜いで木地

を出して居る部分を指した。私も妻も、かはるゝ其空席にかけて見た。Mさんは John Bright の傳を書いた人の娘が居ると云うて、三十許りの婦人を私共に Miss Robertson と紹介した。私は私の Bright 傳の材料の内に、主として William Robertson の “Life and Times of the Right Hon., John Bright” に據つた事を思ひ出した。William Robertson は即ち Miss R. の阿父である事が分つて、小さな群の驩喜は大なるものとなつた。

(三)

Mさんは私共を直ぐ John Bright の家に案内するのであつた。三人は傘をさして、會堂を出で、先刻私共の誤つて上つた阪を上る。John Bright の嗣子は父の選挙區 Birmingham をついで久しく自由黨の名士で居たが、Boer 戦争で退隠し、今は靜に老を養ふて居る。父と同じく Quaker で非戦主義とするに、其嗣子は今度の戦争に出征し、埃及から駱駝に乗つた武者振りの寫眞を送つたりなどして、今、父子仲違ひになつて居るさうな。Carpet 工場など持つて、家計は豊らしい。Rochdale の Quaker は三十名。英吉利全體では二萬も居る。今度の大戰には、飽迄非戦主義を執つて、入獄した者もあり、出た者も衛生隊などに廻つて、殺傷はしなかつた。Mさんの談話は時々其吃りで螺旋狀をなすが、氣の毒とばかり思はれぬ程一種の和らかく強い印象を其爲に残す。

此様な話をしつゝ私共は“One Ash”に來た。“One Ash”はBright邸の名である。もと大きなAshの木があつたからの名。邸は小高い處にあつて、可なり廣く、石楠花など植わつた路を支關にかか。二階建の質素な然し住み好ささうな家である。

私共は直ぐ導かれて階下の奥の小さな書齋に通つた。主人は七十越した好々爺のやうで、私共の來訪を喜んだが、私に英語が分るか少し懸念らしく見えた。夫人も出て挨拶する。親子の仲違ひして、老いた夫人は淋しげに見受けられる。書齋には背革の同じ仕立ての英書のぎつしり詰まつた書棚が並び、其硝子戸の棧には「非穀法同盟から感謝の表として」と金字で署してある。英譯のCigarettesなども其内にあつた。Deskは父Brightの日用品。數脚の革椅子は非穀法成功で俱樂部解散の時、記念に贈られたので、椅子の背にその旨が記されてあつた。

Brightの畫像がある。白髪の爺さんの膝にもたれて居る六七歳の男の子は、當主人には甥に當る孫の一人で、日本にも往つた事があつたが、先年工場の汽罐破裂で變死した、と老夫人は悄然と語るのであつた。

主人夫婦は私共を案内して、階下の室々を見せる。人數が少ないのに、家が廣過ぎると主人はこぼして居た。Bright終焉の室は二階さうな。それは見なかつた。客間で夫人の取り出して來たLincoln

のステツキを見る。Lincoln は Bright も推服して居た。同時に亞米利加も Cobden, Bright の名を California の一對の大樹に負せた程親しみを持つて居た。Lincoln のステツキは、金頭、黒檀のステツキで、最初誰か Lincoln に贈つたのを、Lincoln が在英米領事に贈り、米領事がまた Bright に贈つたのである。金頭には順々の贈呈が順々に刻されて居る。Lincoln が刺客の手に斃れた時、遺骸を掩ふた Sheet もあるさうだが、それは見なかつた。Lincoln の記念碑が近頃英吉利で除幕され、米大使の演説に Bright の言など引いた事も思ひ合はされて、興味が深い。好い靈魂は本當に世界のつなぎである。

廊下には Bright には兄分の Cobden や Gladstone やまた Bright 自身の畫像、塑像數多あるひは挂り、或は立つて居る。Reform Club で Bright やさまざまの知名政治家の集つて居る銅版額がある。今の Bright 其人が Asquith 其他自由黨名士と一緒に銅版も挂つて居る。

私共は客間で茶の馳走になつた。

廊下に出た時、私は電車の内で見え看護婦會費用義捐の内と言ふて、一磅 Note を贈らうとした。看護婦會の名譽書記は、當家の主人でなく、同姓の従弟と云ふ事であつた。主翁は少し困つて、教會の費にしたらと云ふて M.さんに渡した。然し私共が日本に歸るとやがて Rochdale の看護婦會の名

譽書記の Bright さんから丁寧な禮狀が届き、面會せずに残念と云ふて來たのを見れば、矢張最初私の言ふた通りにせられたのであつた。

Mさんは教會の費用の事で云々し、主翁が何磅出さうと快く言ふのを聞くともなしに私共は聞いた。初代の Jacob さんは純労働者から築き上げた。二代の John さんは其處から出發して花を咲かせた。三代の主翁は少し強弩の末の憾みはあるが、まだほとぼりが残つて居ると私は思ふた。四代の茶目も確に好い男に違ひない。父子の和睦を祈るの情に堪へなかつた。

主翁夫婦の健康を祝して、私共は Mさんと "On Ash" を出た。まだ降つて居る。少し往つて、私共のランチの包みを忘れて來た事を思ひ出した。私を押とどめて、Mさんが一走り取つて來てくれる。

(四)

三人は會堂に歸つた。午餐の用意が出来て居て、私共夫妻は主人夫妻と相對して食卓についた。皆黙禱。日曜で何もないと M夫人が詫ぶるのであつた。パン、チイス、セロリイ、スパイト。私共のサンドキツチも出た。Mさん夫妻は結婚十七年、未だに子が無い。私はナザレの土人牧師 Mansur 君夫妻が事を話した。Mさんは Quaker の立場から平和について話した。私は Mさんの間に答へて

日本に於ける Militarism の現状と將來を話し、婦人の力でなければ平和は決して來ないと云ふ私の素論を主張し、ナザレで詠んだ妻の和歌を話した。「姉いもと睦びしひたにかたからば、戦ふ子等はあらじあらせじ」と云ふ歌だ。Mさん領き、M夫人は感嘆してそれは翻譯して遍ねく知らすべき歌と云ふのであつた。

午後は日曜學校があるさうで、ぼつ／＼教會の人が来る。Mさんは若い仁王さんのやうな髯無し青年を私共に紹介する。George Neddeman と云ふ。非戦主張の爲、三年間入獄したさうな。握手する。私の右の手が碎けるかと思ふ程強い握手が痛快であつた。Neddeman 君は、日本にも非戦主張者で官憲の迫害を受けた人がありますかと問ふ。私は少々面伏せであつた。斯く言ふ私自身最初は獨逸が憎く、今でも噴毒の焰、憎惡の炎、燃え立つては眞先きの主戦論者になりかねない危険がある。私は此愛す可き若者を欺く事は出来ぬ。そこで斯く云ふた、日本であなたのやうな人はまださう多くない、然し種子はあります、而して種子は小さなものです。

Mさんはまた他の若者を紹介するのであつた。Charles Foucard、入獄二年の強者。
婦人や子供も来る。

Mさんは Quaker 教徒の特殊の服装について話す。今は日常の風習も變つて居るが、古來のには

捨てるに惜しいものがあると云ふ。日本の禮容を見たいと云ふので、私は靴のまゝ床上に端座し、兩手をついてお辭儀の鄭重な所を見せる。

Bright が縁になつて、相識つた昔の Puritan を見るやうな氣もちの好い敬虔な小さな群れに「神共に在せ」の挨拶を交はし、M 夫人に謝して、私共は教會を出た。M さんは電車まで私共を送つてくれる。

(五)

M さんは中途に私共を唯有る家に誘ふた。それは先刻紹介された Miss Robertson の家であつた。Robertson 翁は故人と思ひの外、八十五歳でまだ生きて居り、娘から私共の事を聞いて、今出て來た白髯の顔は欣喜に溢れて居た。私共は手を握つた。三十年前處女作としての Bright 傳の日本の著者は、八十五歳の英吉利の Bright 傳作者と Bright の生きて住み死にて眠る Rochdale で手を握つたわけである。R さんは Maurinus 島で生れ、Bright の生時親しく此 Rochdale で相識り、老夫人は十三年前になくなり、今は娘の介抱で老を養ふて居る。極東日本のしかも R さん自身の著から材料を得て Bright 傳を書いた日本人の來訪に接し、其 Bright に献げた愛が日本まで Bright を及ぼすたよりになつた事を知つたのは、R さんの晩年に思ひがけなく咲いた喜悅の花の大なる一つであつ

たらう。私の参考したのは何年の版であつたかと R さんが尋ねる。しかと覚えぬが、赤表紙の厚い一冊物で、*Routledge* の版であつた事を話した。R さんは五冊物になつたのを、自ら抱へて来て、見せる。頁をめくつて、挿畫を見せたり、自分の愛兒を共に賞翫したげである。*Miss N* が私共の心急ぎを承知して、父御を賺かし、R さんを手傳ふて私共に贈る父の寫眞に署名させたりする。R さんが少し震ふ手にそれでもはつきりと署名した「執筆中の自身」の寫眞をくれ、尙 *Bright* の寫眞などくれるのであつた。*Bright* 邸「*One Ash*」の繪葉書は先刻近所の店から M さんが取り寄せてくれたのを買った。英吉利に私共がまた來るとも、また會ふ事は覺束なさうな R さんの健康を祝して、私共は R さんと懇ろに握手をかはず。

M さんが電車の乗換まで私共を送つてくれる。赤筋帽の救世軍人が行く。M さんは救世軍が *Rockdale* でも好い働をして居る話をする。

M さんに別れ、汽車で *Manchester* に歸る。停車場から自動車で *Manchester* の目星し處を一わたり廻はる。雨後の街、夕暮近い見物は、大きな建物の外構を見るに過ぎない。廣辻に立つた *Bright* や *Cobden* 其他の銅像も、唯黒い人形の影を見るのみ。

今日は喜ばしい一日であつた。

第八 EDWARD CARPENTER

(1)

十二月廿二日。午前九時の汽車で Sheffield に向ふ。英吉利には珍らしい長い隧道がある。沿道には雪も見えた。

十一時 Sheffield 着。Royal Victoria Station Hotel に入る。

Sheffield は鋼鐵で生きて居る。此處には鋼鐵専門の學校もあつて、其處の一教授が最近鋼鐵の硬度を在來のものに倍する方法を發見し、英吉利政府がそれを採用すれば諸般の設備に費用を要する處から、先々と閑却して居ると、ほのかに聞き傳へた亞米利加が逸早く人を派して其發明傳授の交渉を開始したとかするとか云ふ事で、新聞が騒いで居た。其爲でもあるまいが、ホテルも賑合ふて居る。見學の若い日本人も二人程見受けた。然し私共が Manchester に往つたのは、紡績株の爲でなく John Bright の墓の爲であつたやうに、私共が Sheffield に來たのは鋼鐵の爲でなく、其附近郊外の Holmesfield に Edward Carpenter の村莊を訪ふて見よう爲であつた。

實は私は Carpenter の數々の著書を唯の一冊も通讀若くは精讀して居ない。石君の「哲人カーペンター」に序文を書いて居るが、あれは石君の爲でカーさんの爲ではなかつた。然し通讀精讀はしなくも、人物と思想の大要は領して居る。英吉利の好爺さんの一人である。John Bright の墓詣でした私共は此爺さんの村居を訪ぬるも無様ではあるまい自信がある。

Derbyshire の Holmesfield とだけは、Daily Mail の年鑑で分つた。然し金が一番よくものを言ふ Manchester だけは、ホテルの Hall Porter なんぢは Carpenter も Holmesfield も知らなかつた。石君から何れも Sheffield の近在と聞いた覺があるのでやつて來た。此處のホテルでも Carpenter は知らなう。然し Holmesfield と云ふ處はあると云ふ。私共は兎も角も往つて見るべく自動車に乗つた。

(11)

Sheffield の町をぬけ、場末の片側町をぬけ、郊外に出る。煤煙で眞黒になつた町から、打開いた田舎に出るのは好い氣もちだ。頃日來の雨で、如何に英吉利の道路も可なりわるくなつて居るのを、兵隊歸りの若い車掌は委細構はず突進する。毎日降つて、今日も降つて居る。

雨に疊る硝子窓を拭き拭きあたりを眺める。うね／＼した低い丘は残りなく拓かれ、今は十二月で畑は淋しいが、木立の處々、田舎家の點々として、のびやかな心地である。鋼鐵の市に隣るだけに、

對照が殊に著しく感ぜられる。

三十分の餘も走つて、全く田舎に來た。道の傍、丘のあなた、小さな家がそれではないかと度々私共を思はせる。最早 ホルムスフィールド Holmesfield であらう。除隊間もなさうな、カイキイ Kiki のおふるを着た車掌は、私から エドワード Edward カーペンター Carpenter の名を聞き取つて、自動車を止めては下りて聞きに往き、少し走つてはまた下りて聞きに往き、側路に入り込んで後戻りをしたり、汗としぶきにびつしより濡れた眞赤な顔からぼつぽと湯氣が立つて居る。三度目に問ひに寄つた道傍の家は、田舎味たつぶりの レン レン であつた。車掌は此度こそはと勢よくゆるやかな丘の路を走らせたが、また不安になつて自動車を止め、尙一度人家に聞いて、今度はまた後戻りして、道に傍うた木立の盡くる處に自動車を止めた。

道の下手に形ばかりの門が開いて居る。入つて往つた車掌はやがて出て來た。

「此處です。今、出て來ます」

「何、出て來る？」

「早く下りませう、洋傘なんか」と妻が促す。

私共が下り立つか立たぬに、丈の高い爺さんが門口に現はれた。主翁である。帽も被らず雨の中に

立つて居る。私共はかほるく主翁に握手する。

無造作に先導する主翁のあとから、私共も遠慮なく歩いて行く。物置きなど過ぎて、食堂とも覺しい室に入る。四十近い男が立つて挨拶する。門弟子の Merrill と云ふて、二十一年も同棲して居る人と後で知つた。主翁は私共を暖爐近く請じ、自身も椅子引寄せて何くれと話す。妻の顔を熟々と見て先に一度倫敦でお目にかゝつたやうな、と云ふ。それは日本人の類似が、主翁をさう思はせたのであつた。何れにもせよ、日本の男子は時折り來り訪ふ人もあらうが、日本婦人の來訪は恐らく妻が最初であらう。

私は日本の思想界が Carpenter 翁に負ふ所について、あらためて謝辭を述べた。而して年來の種蒔きが生えて來て、面白い世の中になつて來た事について慶を述べた。“Toward Democracy”の初版は1883年で、四十年近い昔である。おくれ馳せでも世が眼ざめて來る事は、先覺の唯一の歡喜で且報賞であらねばならぬ。Canaan を望んで死ぬのが多くの Moses の運命であるのに、わが蒔いた種の幾分でも自ら刈ることをゆるさるゝ者は幸である。

私は露西亞について翁の見込を問うた。露西亞は畢竟往く可き所に往きつゝあるので、新聞が報ずる Bolsheviki の Excess には、中傷的の棒大が多くと云ふ。私は曾て Tolstoy を訪問した事を話し、

「Joy 如何に思ふ乎を問うて見たが、翁はあまり憚らぬ顔をしたので、私は其話をやめた。それは私自身にも覚えがある事で、飛びはなれたものには自然に Generous であり得ても、似寄つたものには自然に自己を保護する意味で隔てたい情が動く。Bahaim の Abbas について私自身それを感じた。Abbas Effendi と云へば、主翁も會つた事はないが、所説の要領は知つて居る。「擴めた基督教です」との斷案であつた。日本の武斷的精神について、翁は二三の問をした。私は日本人の好戰國民でない事を斷言し、可なり深く喰ひ入つて居るそれも追々過ぎつゝある事を話した。ラフカヂオ・ヘルンのものも主翁は讀んで居る。私は自らベンの人であることを名のりながら、これが私のですと主翁の前に提供するものがない事を羞ぢた。而して私の仕事はこれからです、といつも言ふ事を言ふた。

主翁は七十五歳。しゃんとして居るが、Chair 持つ手が震へる。魚と野菜を重に食して居ると云ふ。「睡眠は如何です？」と私は問うた。私は私の父が老齡になつて睡眠の少ないに困じ、數を數へたり、詩を案じたり、色々に努めて眠らうとして居た事を知つて居る。私自身五十やつと過ぎたばかりで、時には眠られぬ夜がある。「よく眠るです。身體も健やかで、良心も安らかで、な」と微し晒ふて居る。「Lovers Coming of Age」な書きて居るが、翁は一度も結婚した事はないさうだ。「戀をなすつた

事は？」とは問はずしてしまつた。印度の遊から思ひついて、自ら靴のかはりに Sandal を作つて穿いて居る事は聞き知つて居る。今日は穿いて居なかつた。雨天、雪泥にはやはり普通の靴、長靴を穿くと云ふ事である。

翁は更に私共を一段高い自身の書齋に導いた。此處にも暖爐が燃えて居る。翁は椅子を足代にして二三冊の書籍を取り下ろして私共に見せた。石君の「哲人カアペンタア」が出て來た。妻は私の序文を指して、良人が書いたのです、と言ふた。翁は喜んで、石君の消息など物語つた。“Howard Democrazy”の日本譯も、譯者の自署を以て贈られてあつた。心を寄する若い日本人の寫眞などもあつた。それ等が如何に此哲人の血の氣の少ない生活に温か味を寄與するかを思ふと、私共も嬉しい氣もちになるのであつた。翁は自著の“Pagan and Christian Creeds”が近々出版さるゝ事を話し、自ら寫眞や住居の繪葉書に署名してくれ、“City of the Sun”の譜をくれた。日子日女への贈り物に“City of the Sun”はふさはしき。翁は Piano をよくし、曲譜なども自らつくるのであつた。私は横濱出發の朝、書店岩君がくれた“Kleine Schritten”の著書ケエベルさんを思ひ起すを禁じ得なかつた。

私共は一時間の餘も翁の靜閑を擾はして、立上つた。私共が來た時は、多分晝食が済んで居た。翁は何か“Refreshment”をと云ふたが、もとより私共は辭した。日本に來遊の期は多分あるまいとの

事であつた。それは Rochdale の “One Ash” の主翁も同じ事である。歩くのは若し内の事、七十過ぎての世界漫遊などは、仕事をもつ人には望まれぬ。

私共は書齋から食堂に下りた。M. さんが私共に園から折つて來た白の Christmas rose と黄ろい Jesamine の芳しい花をくれた。私のボタン孔に Christmas rose の一輪をピンでとめてくれたりした。

二階建になつて居る長細い二段の此家は、門弟達が師翁の爲に建てたものさうな。前には小さな花壇の黄ろい花が雨にぬれて居る。物置きの中には、鶏舎があつて、五六羽の鶏が啄むで居た。果樹園には、梨や桃など百本からあつて、時には自身 Hoe をとる事もあると、主翁の話であつた。

師弟は雨にぬれながら門口まで私共を送つて來た。私共は主翁の健康を祝し、今日のよろこびを述べ、師にも弟にも懇懇に握手して、待ちくたびれて居る自動車に乗つた。

(三)

今後に残した靜寂な師弟の生活について、私共は自動車の中に語り合つた。情慾ぬきの Tolstoy と云ふやうな感が私にはする。それは清淨で、透明で、精舎のやうな、科學者の試験室のやうな清さと寂しさがある。悟り、觀じ、靜かな歡喜と、穩健な戰ひと、平らかな勝利との其生涯は、好い生涯に違ひない。然し其處は Eden ではない。女氣がないから、血の氣が足らぬ。私共は此哲人を憐むの情

に堪へなかつた。

然し私共は今日の訪問を、昨日の Bright 墓参と共に英吉利の田舎まはりの獲物として感謝した。Rose と云ふてもばらではなく白玉葵に似た Christmas rose の白く淨い花は、英吉利が日東の日子日に贈つた好い Christmas の贈物であつた。黄ろい花の素馨と共に、それは寂しい師弟が私共に持たせた花であつた。

ホテルに歸つた私共は、車掌が求むる二磅を惜氣もなく拂うた上に、心附の三志も添へた。

晚い午餐を済まして、私共はまた馬車で買物に出かける。そろ／＼ Christmas 近いので、何れの店も大繁昌である。私は書店に寄つて、Carpenter 著の "Love's Coming of Age" を買はうとしたが、近い所は閑却されて、翁の著は何もなかつた。

名題双物屋に寄つて、少しみやげ物など買ふ。片手の人の爲に作られたナイフ、フォク兼用の双物が私共の心を傷めた。

然し今日は私共に愉快な日であつた。英吉利の好い爺さんは訪ふ。Bath は快く、食堂は Home like の Manager は Milano のホテルのそれを想はせる Engaging な人であつた。

硝子戸の外は夕暮の雨が降りつき、電燈がちら／＼。Sheffield の夜が近い。内には小さな花瓶に

生けた Christmas rose と Jessamine の花が黄ろく白く電燈に笑んで、私共にあの師弟を思はせ、なべての英吉利に祝福の心を満たす。

第九 AVON のほとり

(1)

十二月廿三日。Shakespeare の墳墓の地 Stratford—on—Avon に行くべく、十時半の汽車で、Sheffield を立つ。

連日の雨で、沿道は水びたりである。救世軍の故の Booth 翁が故郷の Nottingham あたりも、水郷のやうな水の溜りやうである。Booth は好い爺さんだつた。Yasnaya Polyana で Tolstoy 爺さんの手を握つた翌年の春東京で Booth 爺さんの手を私は握つて居るので、殊になつかしい。Nottingham はまたパレスチナのエスドロン平原のアフウレで私共の荷物下ろしを手傳ふてくれたり、それから緑茶を共に喫した坊さんのやうな Deacon 君の故郷であつた。

Woodford で支線に乗り換へる。幸ひ空も霽れて、私共の心もちもあたりの景色と共に長閑なもの

になつた。英吉利の田舎は平和其ものを見るやう。分けて Woodford の乗換以來は、淺い谷、低い丘ゆるやかな小川、林や畑、村や人家も、二十世紀を思はずものは一もなく、Fenny Compton だの、Kington だの云ふ小さな驛が十九世紀から十八世紀を通り越して、十七世紀まで私共を連れ戻すかのやう。Kington はカイントンであらうが、キネトン——杵とん、と響く。

三時半頃 Stratford—on—Avon 驛に下車。馬車で古風な静かな町を Falcon Hotel に行く。Sheffield から電話をかけて置いたが、今日の處は兎に角、明日は豫約で満員と云ふ。Shakespeare の故郷で静かな Christmas をしに来る人達も多いと見える。困じて居ると馭者が好い Hotel に案内しませうと、私共をまた馬車にのせて少し往つて、此邊では濶い通りの一のホテルに下ろした。それは Red Horse Hotel と云ふのであつた。馬方などでも泊りさうな名のホテルである。

私共は狭い帳場の暖爐の前の椅子にかけて、兎も角も空の用意が出来るを待つ。其處の Desk には若い女が、Kinas の贈物であらう、紙包を拵へて名宛など書いたりして居る。背後は柵になつて、酒の瓶が澤山に並んで居る。若い男が二人、初老が一人、来て何か云ふと、女は立つて瓶を取下ろし、コップについてやる。ゆる／＼立飲みしては、錢を拂つて行く。「赤馬」らしい居酒屋である。用意されつゝある部屋も賑かしと思はれる。

掃除が出来たと云ふて、^{ホテリ} Porter が私共を案内に來た。手荷物テリモノを兩手に提げて行く彼の後から、狭い階段を二階に上る。思ふたより手廣で、古いが、氣もちの好いさまである。沙翁劇のさまじくの銅版額を掛け列べた狭い廊下を上り、曲りして、^{ロム} 〇と云ふ室に案内された。

入るより先づ私共を悦ばしたのは、暖爐に炎々と燃えて居る石炭の赤い火であつた。倫敦のホテルの自室の ^{ファイアサイド} Fireside をはなれて以來、随分大きなホテルに泊つても、寢室に石炭の火は勿論、^{ヒート} Heat さへなかつた。「赤馬ホテル」と投げて居た此處で、石炭火の御馳走は、何と云ふ嬉しい事であらう！
^{シャクスペア} Shakespeare が日東の日子日女を歓迎は、全くこれに越したものは無し。

私共は喜んで室を見廻はした。天井は低いが、^{カナピー} Canopy 附の二人寢臺と一人寢臺と二つ並べて、一通りのものは備はつて居る。硝子窓が二方に一つ宛開いて、其處から靜かな裏巷路が下し見られる。青蔦アヅナの這つた煉瓦の壁が見えて、下は馬車など入れる ^{コートヤード} Courtyard になつて居るやう。

私共は期せずして、創立以來三百年にもなる、亞米利加の ^{ワシントン・アイヴィン} Washington Irving なども昔泊つた、其古い古い名うでの ^{ホテル} Hotel に泊つたのであつた。

暖爐の前にくつろいで、茶を呼ぶ。さらめの砂糖が惜氣もなく ^{トレイ} Tray につて居るのも嬉しい。夕食には階段を下りて、鋪石を向ふの食堂に渡る。靜かな食堂。四十左右の女が給仕して、品數少

ない料理は、家庭料理のうま味あるものであつた。

私共は食後の運動に、ホテル前の大きな淋しい通りをあるいて、向ふ側の雜貨店で妻の香水や、案内記や、大陸で探がして得られなかつた私の大ぶりの黒革の褌口など買った。

歸つて入浴。大きな浴槽は白いやき物のそれながら、周圍にたつぷりと塗つた木の縁をつけたのが、また私共を悦ばせた。それは偶然に宇治の萬碧樓で私共が温まつた甕かめの風呂を聯想さした。

外は瓦斯、寢室は蠟燭を二本つけて、ます／＼古の氣分である。

寢臺に上つたが、何だか嬉しくて、急に寝つかれない。讚美歌の合唱が何處からか響いて来る。

(11)

十二月廿四日。朝食後私共は Shakespeare の誕生の家を見に行く。ホテルを出て、ホテルを見れば、ちやんと赤馬の頭がにこ／＼高塗りに入口の上に出て居る。而して葡萄果々の看板が出て居るのは、居酒屋の標榜であらう。

ホテルの前通りを少し西へ往つて、直ぐ斜に北西に入つた Henry Street に、保存の手を入れた古風な正面に三つ破風の並んだ横長い家が即ち誕生の家であつた。

下階の厨跡から入つて、Museum に陳列のさま／＼を見る。入場料は各一志宛しんげん。案内者が色々説明

する。Shakespeare の名の出で居る黄ろくなつた Parchment など、よく見れば面白いにきまつて居るのが並んである。

私共はそれを大抵に見て、古い木造階段を二階に上つた。Library がある。人間を知り悉して人間に愛想をつかさず、靜に人生を觀じて穩やかに五十年の生涯を涉つた好い小父さん顔をした主人の古い油繪や、半身像、雑多な額の外に、古書蒐集者の垂涎に値する主人と同時代、或は以前、或は直ぐ後の版にかゝる珍籍や、縁邊の人から主人に宛てた古風な綴字の手紙などがある。中央の卓には來訪帳がのせられ、日本人の姓名も數々あつた。七十餘の婆さんが番をして居る。妻は婆さんに彼女の母校の一女生が贈り物の紹刺しの紙入を贈つた。

私共は一旦 Library から下りて、別の案内者について、別の更に古い狭い木造階段を上つて、誕生の室に入つた。厨の眞上で、恐ろしく天井の低い室である。此處に三百五十六年前の四月二十三日にあの小父さんは生れたのだ。成人した塑像が一つ置かれて、他に何物もない。壁と云ふ壁、天井、通りに面した唯一つの窓の硝子、それ等は來觀者の樂書で一ばいである。今は禁ぜられて居る。案内者は私共に樂書の署名の中に就て、眼ぼしいところを四つ五つ教へてくれる。案内者が指で拭ふ下から、硝子戸に白く Scott の姓名が讀まれる。Browning や Thackeray などの名も壁にある。天井にはあの

つむじ曲りの Carlyle が書いて居る。「印度を失うても、Shakespeare には代へられぬ」と彼が云うた言を思ひ出す。此等の多くの名を見ると、好い爺さんの膝に群がる孫や曾孫の心地がする。

誕生の家を見終つて、Chapel Street にある Shakespeare 晩年の家“New Place”を見に行く。黒ずむだ、古風の木造家屋が其處此處に昔の Stratford を語る。廣場に白大理石の Chapel 形 Fountain がある。米國のある個人の寄附にかゝり、Victoria 女皇の即位五十年節に、英吉利第一流の Shakespeare 役者の Irving が除幕したものだ。

“In her days every man shall eat in safety

Under his own vine what he plants; and sing

The merry songs of peace to all his neighbors.

God shall be truly known; and those about her

From her shall read the perfect ways of honour,

And by those claim their greatness—not by blood.”

(彼女の世には如何なる人も吾が植ゑし己が葡萄の蔭に安全にして食し

凡ての隣人に對して歡ばしき平和の歌を歌ふ。

神は眞實に讃らるべし。そして彼女に就き、又彼女よりの、

それ等事柄に依りて人倫の完き道を悟り、

人々の卓越を示さん——それは決して流血によつて示さるゝものに非ず。

の句が題してある。イスラエルの豫言者イザヤの言葉でもありさうな。然しそれは Shakespeare の Henry VIII 中の文句であつた。現實の觀者は、即ち理想の豫言者なのだ。平和の詩人 Shakespeare は Elizabeth 時代に適かに Victoria 時代を見越して、尙適かに女によつて世界の平和が來る時代を望んだのである。男の力で平和が來ないのを、男の Shakespeare はとくに見て居たのだ。此英吉利の世界的詩人豫言者の斯金色の夢が、實現さるゝ時代は來た。此 Fountain が Victoria 女皇の在位五十年祝節に、亞米利加人によつて此處に建てられたはまことに偶然でない。而して日本の日子と日女とが今此處に會心の笑を漏らして居るも、面白い。

“New Place” は Shakespeare が帯びて生れた使命をほゞ果して四十二歳で倫敦から歸り、餘生を樂むべく購つて最後の十年を暮らした家の跡である。彼は 1616 年の四月二十三日に此處で五十二歳で死んだ。日本流に云へば、私も五十二歳だ。彼が終つた齡から私は始めようとして居る。彼の生月

日と死月日が同じなも面白い。何方も誕生であるのだ。彼は 1616 年に死んだ。今年は 1919 年だから、1919—1616 年で、丁度彼の死後 303 年目に私共は來たのである。今の家は先の家の跡に建てられた家で、Shakespeare の家其ものではない。然し随分古い家で、其處には Shakespeare 及び其時代に關したさまざまの古い物が陳列されて居る。

裏に出て、發掘された舊家の基礎を見る。墓に埋れた井は、彼も飲んだ水であらう。後園は園丁が大勢作事をして居た。

歸途は書店で自身の爲に Irving Shakespeare 一卷を買つた。妻の爲に買つた二十冊もの『豆 Shakespeare は Shakespeare 女優の Ellen Terry 版であつた。Christmas 前日、町も店も賑合ふて居る。

午餐後は Shakespeare の眠る Holy Trinity Church に往つて見る。Avon の流れに傍うた古い會堂である。Christmas の用意で忙しい中を無心して入れてもらふ。硝子箱入りの黄ろくなつた帳には、彼の受洗や埋葬の記入が出て居る。來弔簿に私共は記名した。沙翁の墓は、禮拜堂内の壇下の好い位置にあつて、遺塵を動かす者は詛はると云ふ古風な四行詩が刻してある。私共は番人から其石摺を求めた。赤い胴着の圓滿な顔の半身木像が横手の壁からこゝ私共を眺める。それは誕生の家にもあ

つた。此方が原物なのだ。

埋骨の會堂を出て、私共は少し上手の沙翁記念建造物を見る。Avon の南岸の好い位置である。鷺ペンを持つた右手を右の伸ばした膝頭ひざかしらにかけ、左脚を引込め、ゆつたりと椅子にかけた詩人の像は自然の品位を具へた好い像である。碑の下に、詩人が所生の Falstaff は “Comedy” を、Prince Henry は “History” を、Hamlet は “Philosophy” を、Lady Macbeth は “Tragedy” を代表して居る。

私共は記念圖書館や、詩人及び其作に關するさまざまの繪畫を陳列したものを見、更に記念劇場を見る。それは八百五十席の小さな劇場で、詩人の誕生日には年々此處で其劇を演ずるさうな。劇場に傍うて百二十呎の塔がある。それには上らなかつた。

歸りには Avon の川に沿ふてぶら〜あるく。

連日の雨に川水増して、濁流漫々緑の草地を洩し、岸の矮い柳も半は水に浸つて居る。白鳥や鷺鳥や鷺が川淀かはよどに泳いで居る。川幅は二十間もあらう。どつしりとした眼鏡の橋が架つて居る。柳は裸に水は濁つた今すらのんびりとした眺である。柳が緑になり、青い流れに白鳥の逾いよ白はくい春も四月の末詩人の誕生日の頃が思はれる。沙翁を生み、而して沙翁を葬るに好く Stratford—on—Avon である。

私共は歩を返へして、停車場に汽車の時間などたゞし、それから店で Muscat grapes を買ひ、

た植木屋に寄つて私の文卓を飾るべく花ざかりの Begonia の鉢を求めて歸る。朝来よく晴れて居たが午後は曇つて、ホテルに歸る頃はほと／＼落ちて居た。

夕食に給仕の若婆さんの小さな Boy に Christmas Present として十志紙幣をやる。Boy の父も出征して、つい此程歸つたばかりであつた。かみさんは曾て停車場で手提鞆をなくし、巡査に伴はれて此宿に來た日本人の話をした。宿帳には、數々日本人の名が見えた。

(二)

十二月廿五日。Shakespeare の誕生地で、耶蘇の所謂誕生日を祝ふなんか、しやれて居る。

私共が寢て居る内に、女中が珈琲を持つて來る。顔も洗はず寢ながらそれを飲むのも古風でよい。

女中は名を Florence と云ふ。氣の利いた、良い女だ。妻が Xmas Present に「磅やつたら、喜んで眞赤になつた。やゝあつて、小さな花瓶に淡紅色の菊を生けて持つて來た。『As a little answer』と云ふ。日本の國花の菊が嬉しい。

吉例の七面鳥で午食を祝うて後、私共は洋傘片手に Avon の橋を渡つて、少し田舎を歩く。雨後で路が悪い。葡萄を食べ／＼あるく。Xmas の田舎の晝は靜かな事だ。雨で濕つく牧場を横ぎり、埒を乗り越え、小さな然し自動車も通ふ路を歩いて歸る。小ぢんまりした住居が並んで居る。Sunset Glow

など家の雅名を書いた枝折戸、ダリア、カアネエシヨシなどの枯れ残つた支關前の小園、小さな二階の出窓、如何な Xmas dinner が、と想はれる。子供がボオルを投げあつて居る。Avon の橋にかゝると、勞働者らしいのが五六輩、“Merry Xmas” を私共に浴せる。私共も“Merry Xmas” を酬する。Hotel の Xmas dinner は冷肉と菓子だけで、却て好かつた。Xmas をしに倫敦あたりから來たらしい客が、町には可なり見えた。私共の赤馬ホテルにも、若い夫婦連れの客など來て居る。人も物も皆物靜かに、しんみりとした好い Xmas であつた。

(四)

十二月廿六日。今日は Mrs. Shakespeare—Anna Hathaway の Cottage を見に行く。それは Stratford—on—Avon から約二十丁西に距つた Shottery の小村にある。

町をぬける。先日とは別な停車場附近の Ground に、若者大勢 Football をして居る。連日の雨に Ground は濕り、蹴上ぐる Ball も Player 等の顔も、泥だらけになつて居る。

Alcester 街道、素裸になつた栗やなどの並木の大路をやゝ久しく西に行く。若い詩人が三百三十幾年前に戀人を訪ねに往來した路の一つだ。詩人の妻は夫に八歳の姉であつたさうな。如何して若い燕が彼女に引つかゝつたかは、臆測の限りでない。何れにもせよ、何から始まつたにせよ、夫婦が立

派に添ひ遂げたのを見れば、やはり好い夫婦であつたに違ひない。少なくとも天才の翼を折らなかつた事について、Mrs. Shakespeare に感謝すべき理由がある。

路標が立つて居る、Shooter 村への。私共は其處から南にきれ込むで、少し細つた路を行く。野薔薇の實などが赤くなつて、路傍には牧場がある。路を教へた子供の群に、妻が少しづつ葡萄を分けてやつた。私共は子供の教へた近路で、直ぐ Anna Hathaway の Cottage に来た。これは Stratford の Shakespeare の家同様公有となつて丁寧に保存されて居る。來觀者の注意を掲げた枝折戸を入ると、霜に弱つた小園に對して、横長い草葺の Cottage から、煉瓦の煙突が出て、鉛筆畫の手本に毎々出て來る古風の Cottage 其まゝである。今日は Xmas の翌日で、戸がしまつて居る。私共は唯田舎家の外見だけ見て出た。亞米利加らしい男女が五六人、これも空しく枝折戸の處に立つて居る。沙翁夫婦が死んで三百年、この Cottage がまだこんなにして居る。内も昔のさまが偲ばれるさうな。残りも残り、残しも残したものだ。

村を通り、會堂の前を過ぎ、先の路をまた並木の大路に出て歸る。雨が降り出した。Football の連中は雨なんかものともせず、泥だらけの顔は眞赤になつて、蹴たり、飛んだり、組み合つて泥草を沼のやうにして揉み合ふたりする。見物の老幼男女も平氣に濡れて見物して居る。全く英吉利人の Sport

好きには、今更のやうにうたれる。Wellington が Eton の中學遊戯を見て、Waterloo は此處で勝つたと云ふたも、誣言でない。あの大戰で英吉利は立おくれであり、無準備であつたと云はれる。海軍については、論外である。陸軍についても無準備と云はれやうか？ 第一、Sport や Exercise で非戰鬥員も身體が出来て居る。競技に關する修養で、心身の戰鬥準備が出来て居る。獨立自尊の傳統的蓄積で、第一に「自己」が出来て居る。「自己」が出来て居るから、常識で規律に服する節制が出来る。犠牲の精神も練られて居る。第一等の原料が出来て居る。これは平素の準備である。一旦緩急の早こしらへでない。すべてが「人」の問題だ。而して「平素」の問題だ。直ぐ疲れ、直ぐ倦む、息の短い日本人ではいけぬ。第一もつと強健な肉體でなければならぬ。

こんな事など話しつつ、私共はホテルに歸つた。空腹に午餐がうまい。空腹のせいではなく、全く此處の料理は家庭料理のうまさだ。Palestina で鑿いて以來、見るもいやであつた Mutton なども、私共は此處でうまく食うた。本當に此處の料理はうまい、とほめたら、かみさん得意になつて「古式英吉利料理ですもの、どなたもうまいと仰いますよ」と云ふ。かみさん給仕の傍らには、好きだと云ふて小説を読んで居る。

私は Shakespeare が夫婦喧嘩をした事があるや否を知らぬ。Shakespeare も若い時は可なり茶目で

あつたらしいが、成人しては男同志喧嘩した事もなかつたさうだから、夫婦喧嘩もなかつたらう。あんな伶俐な、而して性情の和平な人だつた。一方は八歳も年上の細君、亭主は通つた男で、喧嘩のありやうがない。然し案外あつたかも知れぬ。

何れにもせよ、Shakespeare 夫婦の先例如何に關せず、私共は此おだやかな Stratford-on-Avon の地下の Shakespeare も駭いて眼をさましさうな大喧嘩をやつた。それは Oxford の喧嘩と共に、英吉利に來てのいや世界一周中の二大喧嘩であつた。而してそれは例によつて私の敗北に終つた。女との喧嘩に男に勝味がないのは、初から知れて居る。女は勝てるものではない。女と喧嘩するのは大地を蹴るやうなものだ。脚を傷めるだけの事だ。兎に角私の古皮がまた一枚此喧嘩で脱けた。妻は曰ふ。あなたは氣に入つた場所では、去りづらいから、何時も喧嘩をなさる。私が子供の時、仲好く遊んだ従弟と、別るゝ前には必ず喧嘩をした事を思へば、妻の言は中つて居る。

Shakespeare が「若く」と笑ひさうな氣がしてならぬ。然し笑はれても詮方はない。全く私は若いのだ。Shakespeare が辭世の齡で出世する私が若いのは當然だ。太陽は常に若い。

第十 倫敦日記(續)

(1)

十二月廿七日。倫敦に歸る日。

女中の Florence が黄、白、紅、紫、これはと云ふ程菊花を饑別に持つて來た。妻が悦んで無理に牛志與へ、それから懷中鏡と櫛をやつたら、顔を紅くして嬉しがる。

中三日、前後五日に涉つて、私共を At home にし、Old England の篤い驕待をしてくれた赤馬ホテルの一同に、よろこびの微意をそれ／＼表して後、私共は自動車で停車場に行き、十二時二十分の汽車で Stratford-on-Avon を立つ。

やよなら Stratford よ、Avon の川よ。静かにおやすみ、Shakespeare 夫妻！
Woodford で倫敦行の汽車に乗り換へる。

先刻私共が赤馬ホテルを出る少し前は、夏の夕立めいた雨がざあ／＼降つた。出る頃は雨は止んだが空は眞暗であつた。Woodford に来ると、一天からりと霽れ、近頃珍らしい青空になつた。白雲が

ふわ／＼浮び、西の窓から大きな太陽が金光線を雨とふらす。何と云ふ天氣の變化だらう！ 昨夜の喧嘩を象徴したやうなものだ。

中學で名を知る Harrow—on—the—Hill なう過ぎ、午後三時 Marylebone 停車場に着く。直ぐ自動車で Kensington のホテルに歸る。

(11)

十三日目に歸ると、家に歸つた氣がする。女中の Ada が私共を迎へて喜ぶ。妻は彼女に二磅を與へ、日本から持つて來た黒と赤剝ぎ合はせの紙入をやつた。Ada は喜んで、生涯大切に持ちます、と禮を云ふのであつた。食堂に出ると、給仕の皆が歡び迎へる。私共はいつもの私共の席について、いつもの給仕に Xmas として一磅をやつた。食堂の顔ぶれは大分變つて居る。日本人の新しい顔も見えた。

久しぶりに綿入、丹前にくつろいで、暖爐の前に椅子引寄せた心地は何とも云へぬ。いろ／＼のたよりが私共を待つて居た。

春洋丸の船室が出來た、と云ふ淺君のはがきが一番に私共を悦ばせた。武君から銀杏を送つたと云ふ手紙。日本からの小包、殊に食品の小包は唯一つも私共に届かなかつた。武君の銀杏も其一つであ

つた。然し出したと云ふだけで、志は届いた。若い夫妻が藝術に身を委ね、而して未だ子供のない渡
夫妻から自畫の「松」の畫はがき二葉は私共の歸心に一吹を送つた。私共はそれを Mantelpieceの上
に立てた。一人は病み、一人は健やかな八重と八千代のたよりも私共の心に關した。福書店の爲替も
着いて居た。

大西洋を渡る船も出來、太平洋を渡る船も用意された。最早私共もそろ／＼歸つて好い時分である。

(三)

十二月廿八日。今日は雨だ。Kensington Garden を北に横ぎつて、いつもの店で午餐。

私共のホテルのボオイ等は、赤襟の新制服を着て居る。Kings を祝うて、各十志と白扇を一本やる。

日本の新聞を見ると、私共の出發當時工事中であつた隣村松澤村の精神病院もほゞ工事成つて、巢
鴨から引越しが濟んださうだ。新しい引越しで、女の患者などもお白粉をつけたりしてはしやぎ、蘆
原將軍も悠然と新居に納まつたらしい。

孔子曰、徳不孤、必有隣。

滅多な隣に來られるより、巢鴨の引越しは何程嬉しいか知れぬ。好いものが近くにやつて來た。何
時でも入られる。何時でも入れられる。自分と世間と双方の安心だ。昔は「憂鬱」で入る資格があつ

た。今後は誇大妄想が資格であらう。

そんな事を曰うて、夫妻相見て咲ふ。

(四)

十二月廿九日。Napoli の下さんから自著の伊太利文 *La Guerre Italiana* と伊太利文雑誌を、それから病氣になつた Uccella 君及び Yenuo 君の寫眞が送つて來た。U 君の病氣は如何な容體やら、Taxi や London County Westminster and Part's bank に往つて、福書店の送金を受取らうとする。それは Closed Cheque であつたので、更に附近の Shipley & Co. 其者に往つて受取る。壹千圓が 124 磅と 10 志である。倫敦の日本橋區、銀行だの會社だの寄りこぞる此處の繁昌は何時來てもさうだか、年の暮は別してさうかとも思はれ、自動車の目白押し、船詰、ぎつしりと詰まつて、中々まどろかしい。地下鐵で往つて、足で足した方が何の位早いか知れぬ。それでも皆が順序を守り巡査の指揮に循ひ、而して自身注意するから、怪我も混雜もしないで、一尺すけば一尺進み、前路が開けば快走する。時間がかゝるもどかしさもだが、密集した人間の自己を中心として一糸紊れぬ運動を見るのはまた一つの樂である。それもやはり私共自動車掌を信頼する信仰があるからで、私共が信するの車掌に自信があるからだ。信だ。信だ。孔子が曰うた、民無信不立。如何に改造しても、基

礎の「信」が崩れぬ限り英吉利は崩れはせぬ。

色揚げして来た私の冬帽もいよ／＼勇退さしてよい時が来たので、今日は銀行の歸りに Piccadilly 街で帽子を一つ買った。先のやうな鍔廣のはなかつた。然しあるが中で尤も鍔の廣い黒の Soft を買った。一磅 15s.、心もちゆるいので、裏縁を少し狭めてもらふ。今日初めて店の者に聞いたが先のは伊太利出来さうな。伊太利帽が英吉利帽にかはる。

それから靴屋で私の靴と Overboots を眺める。一磅 11s. 6d. 私共の倫敦出發迄には間に合はぬ。桑港の日本領事館に送つてもらふ。

地下 Restaurant で午餐、15s. 餘の拂ひに札を一枚出したら、喫驚する程つりをくれる。如何した事かと思へば、一磅札のつもりで出したのが、50 磅札であつた。

葡萄や林檎を買ひ、Hyde Park と Kensington Garden を通つて歸る。公園のベンチにかけて、憩ひつゝ葡萄を食ふ。補綴だらけの服を着た Boy が四人、葡萄をやるから来いと手招きしたが、此方を見かへり見かへり來なかつた。

疲れてホテルに歸る。

今夜から二つの瓦斯の外に、電燈が二つしく、More Light の要求が五十日ぶりにやつとかなふた

わけだ。

夕食に私共の隣に日本人が二人。一眼に縋帯して居るのは、人造肥料の苦君くきみで、私共の粕谷近く徹底的土の生活をして居る江君の親戚であつた。私共より早く、此ホテルに來、伊太利に遊びに往き、Napoli の Guide の手帖に私の書したのも見たと云ふて居た。眼は埃が入つたのさうな。

夕方 Ada のかばりに Hid が Service に來た。H は結婚すると謂ふので、私共が小旅行に出かける時、Ada に託して心ばかりの贖はなむなどやつた。結婚は延びたさうな。浮かぬ顔して居る。

(五)

十二月三十日。粕谷の留守を頼んで居る篠の金さんに、母屋の疊替其他歸り前の用事を種々頼んでやる。それから福書店と文淵堂におほよその歸期を知らせのはがきを書く。

しよ〜歸りが近くなつた。

Kennington High Street に午餐に行く途、毛皮店で、私の大外套の袖口と襟に Skunk の毛皮をつけさす。16 磅と 16 志である。半仕立になつて居る獺よほの毛皮附外套で 11 Guinea のがある。店の女は頻にそれをすゝめる。妻も軽い外套がもう一領あつてもよいとすゝめる。然し私はやめた。而して新しい毛皮附外套の値段よりヨリ高價な毛皮を日本から着て來た外套につけさす。妻は私の頑愚を

囉わらはず、そこが私の強味だと云ふ。夫を妻が知る——當然で、然もあり難い事だ。

Christmas 過ぎて、町は非常な賑合ひだ。女の世界と思ふ程、女ばかり。Christmas の前日などは、店の賣子の女も男も、鉛筆が持てぬ程疲れ切つたさうだ。平和の第一年の Christmas だもの。昨日の新聞に買物のお伴ともをする男の述懐が面白可笑しく書いてあつたが、全く同感である。今日は Lyons tea で軽い午食を濟まし、妻の旅行用スリツパや私の書籍數種を買つて直ぐ歸つたので、私は助かつた。

先日小雨降りに夫妻で公園外の片側街を歩いて居ると、薪の荷馬車を挽かせた男が、追ひすがつて薪を買つてくれと云ふ。私共が餘程世帯よとじみて居る事が分る。今朝出る前に、室の硝子戸越し、先日ではない別の薪屋が薪をすゝめる。これで二度目だ。石炭はあるが、Log を燃すのはうれいものだ。私共は硝子戸をあけ、薪屋が一本々々手渡す堅木の一尺位に切つたのを内から受取つた。二ダラスで四志。何處に置かうかと思案の末、室隅のあの料理品の昇降棚に隠した。而して今日を初とし、時たま一本二本取り出しては焚いた。Heat より瓦斯はよく、瓦斯より石炭はよく、石炭より Log は尚好い。櫓ぼたを焚く圍爐裡、其處に本當の Fireplace の氣もちはある。私共は明治に生れ、田舎でも中産以上の家にそだち、純粹な圍爐裡の樂は知らぬが、それでも私の生れ故郷の葦北あしきたあたりで燈火がはりに燃す肥松、あの松の脂の匂ひは忘るゝ事が出来ぬ。倫敦に來て櫓を燃すのは、粕谷で火鉢にあたる

より好い。私共は寒がり、日に大バケツ一ぱいの石炭では足らず、お代りする事が、毎度である。Log が来てから、其おかはりが當分減つた事を Coal Boy も變に思ふたであらう。

室の縁帷が眞鍮の桿に絡んで動かぬ。高くて届かぬ。若者が梯子を持つて来て、直してくれた。志やつたら、喜んで、梯子の先で瓦斯 Mantle を破はして了うた。それを直しに他の男が來たので、Xmas Present を受ける者がまた一人殖えた。

Glasgow のホテルに置き忘れた妻の Muff と Scarf が、Manchester のホテル經由で今日やつと届いた。

(六)

十二月三十一日。大正八年の 1919 年も大晦日になつた。日本で始めた年を倫敦で越す——わるくない。

午前は室内で書き物し、正午過ぎから Knight's Bridge の Grill shop に往つて、午餐をする。それから 1920 年の Calendar や Cocks Orange Pippin と云ふ小粒で黄ろく、甘い林檎や葡萄など買ひ、二つの公園を通つて歸る。朝來の雨は止んだが、空は曇つて、草こそ青けれ眼をあぐれば蕭條とした年の暮らしい冬景色である。Kensington High Street に廻り、晝はがきなど買うて歸る。

昨日 Hall Porter に頼んで置いたので、今日 Golf と云ふ中爺さんが箱を見るべく私を誘ひに來た。書籍其他を入れて倫敦から郵船便で日本に送るべき箱である。私は爺さんと初めて此ホテルの地下室に下りて見た。巴里のホテルの地下室に下りたのを思ひ出した。箱はうつくしくないが、大きくて間に合ひさう。午後爺さんがそれを室に運んだ。空箱でも 10 志しりんご。

夕食には日本人を多く見受ける。私共も小さな葡萄酒の饌を盡して、偉なる 1919 年を饒あぐつた。

室に歸つて、暖爐の前で林檎や葡萄など食べる。かさ〜と云ふ響がする。扉の下から白いものがさし入れている。ホテルの Bill であつた。それは昨三十日迄の計算で、大晦日の三十一日は明年に延ばしてある。セセツション式きちやうめんで差別區限を何事何物何人にもつけたがる私に、三十一日を新年に繰り越しは氣もちの好い破格で、これは私共のホテルが毎々食はすまづい料理以外私共への好いお歳暮だ。

私は妻に云うた。大晦日繰延べは好いね。所謂 Out だね。自然の子だもの、悠久に歩かなくてはさ。矢張日本人は息が短かい。せゝつこましい。要領を得過ぎる。此處の連中なんか、自然を恐れず、侮らず、一足宛歩ぶんでは遠く行く、要領を得ないやうで要領を得る、——全く John Bull は兄さんだけの事はあるよ。

それから私共は尙石炭の上に例の Log を二つくべる。而して妻が忘年の茶をいれる。恒春園の緑茶は盡きたので、羅馬で買った蘇州茶だ。

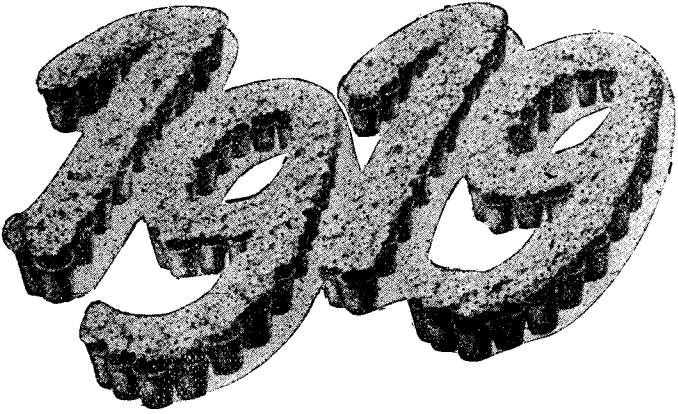
火が紅く燃え立つ。熱い茶で腹の中まで温まる。私共は丹前被つて、暖爐の近くに二つの大きな椅子を並べ、話したり、黙つたり、面白く燃ゆる火の中を眺める。火の中から、今過ぎて往かうとする 1919 年がさまざまの相で現はれる。日本で明けて倫敦で暮るゝこの年は、まことに忘れ難い年である。

此偉な年に抱かれて逝いた母の顔が現はれる。Tony 夫人の顔も現はれる。死んだ母夫人につれ、生死不明の Alexandra の顔も現はれる、小旅行から歸つても、勿論 Gose さんから何のたよりも待つては居なかつた。私は彼女についての焦慮をやめた。然しやはり氣にはかゝる。りん女一人に猫一疋、寂しい粕谷の歳暮の家が現はれる。妻をなくし母をなくした淋しい家も現はれる。横濱に別れた人々、一年間に過ぎた國々で、私共の眼に影を映したさまざまの人や光景が現はれる。而してそれは憂いもつらいも可笑しいも、腹立たしいのも、皆なつかしいものであつた。

汽笛が鳴る。時計は夜半十二時を指す。

今、年はあらたまるのだ。

さようなら、1919 年！ おまへは本當に偉い、めでたい新紀元の第一年であつた。おまへを忘れて



1 9 1 9

よいものか。

おまへを生んだ永劫えいこくの者に榮光あれ！

倫敦除夜

年の瀬の橋をわたしの汽笛鳴るロンドンの除夜のファイアサイド

瞬間のトンネル越すやロンドンの除夜は汽笛に年あらたまる

安らにも旅をつゞけて君とわれファイアサイドに春をむかふる あい

第十一 倫敦から

世界的維新、新紀元の第二年を迎へ、倫敦から我故國の同胞に年頭の祝詞を申述べます。

私共は昨年十一月の十一日、丁度休戦一周年の記念日に倫敦に來ました。而して舊冬二週間程田舎廻りをした外は、始終ケンシントン公園附近の高等御下宿式ホテルに埋れて居ました。近頃のホテル

大繁昌で急に以前のレストランを客室に直したと云ふ私共の室は、ホテルの Ground Floor の奥の奥の隅つこにあつて、階段を下りて行くやうになつて居るので、硝子窓の外は直ぐ静かな横丁になつては居ても、何となく地下室めいて居るから「埋れて居る」は適當です。潤さは約三十疊、堅牢頑丈金庫の中にでも居るやうで、若し私共に英吉利を嫌と思ふ氣が少しでもあつたらさしづめ牢獄ですが、さも無いのでまことにのんびりと納まつて居ます。家具は古物の寄せ集め、呼鈴一つなく、つい此程やつと電燈を取りつけてもらつて瓦斯の光不足を補つて居る有様も、改造時代にふさはしくて却々に嬉しい。到る處を我家に住みなす私共も、英吉利は殊に *At Home* です。一すくひ暖爐に石炭くべて椅子引き寄せ、和服にくつろいで、新着の故國の新聞など見て居ると、何の倫敦も精谷もあつたものではない。よく堅木薪賣りが荷馬車を駐めて硝子窓から覗き込み、薪の御用はありませんかとときまます。それどころか、ある小雨降る日に兩人で街を歩いて居ると、これも薪賣りが私共の顔をしげ／＼と見て、買つてくれと云ふのでした。世帯もちと見られる程私共は落ちついて居ると見えます。否、それは何様に騒いで居ても、やはり何處か落ちついて居る英吉利の落ちつきが、私共に映つて居るのに違ひない。

何を云ふても、今世界の大家族で總領はまだ／＼英吉利です。尤も此長兄殿も頑弟獨逸には散々手

古摺りました。狂弟露西亞にはうんざりです。洋向ふの新家には勿論びく／＼ものです。やれ愛蘭、やれ埃及、やれ印度と、氣の毒な程つゝかれます。此自稱獅子さんの牛さんにも過去現在に難をいへばいくらもあります。未來の不安を擧げれば際は限りありません。然し一切を乗除しても、此甚六でない總領を廢嫡はまだ話が早過ぎます。先月此處の皇太子が米國漫遊から歸つての演説に、英吉利は老いたと他も言ひ我すら思ひ做した時もあつたが、それは全くの妄想で、今世界動亂の眞只中に處して人類の進む可き道を示すものは我英吉利の外には無い、と大氣焰を吐いて一同を嬉しがらせましたが私共は此健氣な青年の抱負を頼もしくこそ思へ、空威張などとはさら／＼思ひません。私共は英吉利を信じ、其前途を祝します。勿論それは大英國の形容面目が未來永劫變らぬ意味では決してない。「其生命を惜む者は之を失ひ、其生命を惜まざる者は之を獲べし」で、新なれ、否なれば死、と云ふ自然の命が下る時、如何に落ちついた牛さんでも考へざるを得ません。アングロサクソンの常情常識が失はれない限り、如何なる切開、如何なる改造にも堪へて、當分總領の座席を英吉利は他に譲らないだらうと私共には思はれます。

今新年の初頭、冷ねく人類の幸を祈る私共をまごつかす黒雲はいくらもあります。自分の故國は暫らく棚上げて、我々の Ireland 朝鮮、一番近くて一番遠い親類筋の支那、足腰のまだ不十分な印

度、埃及、いづれ君斯丹丁堡を立ち退く土耳其、餓死しかけて居る塊地利、二ヶ月前雪空の下に私共の残して来た煮え切らぬ蒼獨逸、血迷ひ過ぎて熊が大好きの私共をさへ溜息つかす赤い露西亞、それから書齋出のキルソンさんを到頭病氣にしてのけた駄々つ子の米國、佛蘭西にせよ、伊太利にせよ、頭に上る程の國々でこれは安心といふのは唯一つありません。生きて居るから、すべてがXです。然し日の前の雲は、日を遮る事を容されても、日を消す事は出来ません。英吉利を信ずる私共はまた他の國々を信じます。それは一つ父から出で、一つ母から生れた兄弟だからです。私共は天の父を信じます。だから人間を信じます。區々たる私共の杞憂よりも生命は強く、自然は賢い。世界的維新の第二年に立つ我儕の唱ふべきは行路難の悲歌でなく、撓まず倦まぬ永遠の行進歌でなくてはなりません。

私共は居心地よい英吉利を後にして、来る十八日の船で米國に渡ります。申す迄もなく日本にとつて此上も無い大切な隣は米國です。世界の前途が日米の協力に俟つところの如何に多大なるかを痛切に感ずる私共に、亞米利加の土を踏む事は大なる樂みです。然し私共の旅も大分道草を喰ひ過ぎてそろそろ歸りたくなつたので、まだ倫敦に居ながら桑港から乗る船も最早きめてしまつた始末で、今度の米國は殆ど素通りです。素通りでも通らぬにはましかも知れませんが。

相變らず大東な不得要領を申して濟みませんが、先づは年頭の御祝詞まで。

新紀元の第二年正月五日 倫敦に於て

徳富健次郎

愛

第十二 倫敦日記（續）

(1)

大正九年正月元日。耶蘇前生は 1920 年。新紀元は第二年である。

倫敦で新年を迎へる。私は日本流の五十三。妻は四十七。二人を合はせて正に百になる。

硝子窓の外は雨が降つて居る。雨中元日 如平日と云ふ句がある。誠に其通りだ。三十一日主義の

生活にはこれもよす。

例の如く女中の Ada が Stove の火を燃し洗面の湯を持つて來る。給仕女の Ellen が朝食の Tray を運ぶ。“Happy New Year” を云ひかはず。それつきりだ。

ペンを執つて居ると、ちら／＼雪が降る。

元旦に筆とりそめしせこが窓にちらり／＼と初雪のふる あい

午後一時近く、例によつて私共は出かける。私は舊臘買った黒ソフトの冠りぞめをする。Kensington Garden を横断し、Queen's Road の店に往つて、パン、茶、Stewed Steak、オムレットで午餐。給仕女に一志。

花果店で Pippin 林檎と紅の Carnation を買ふ。毎々憾む事だが、英吉利の花の色は美しいが、香が十分でない。濕氣は香氣の敵らしい。然し其濕氣が英吉利人をつくる。

また公園を通つて歸る。今日は雨が降つたり止んだり、雪になつたり、而して止んだり、寒い／＼日だが、公園の運動場には、幼稚園から中學高女の初位までの少年少女が嚙々と運動をやつて居る。ぶらんこに乗るも、鐵棒にからむも、遊動圓木にのるのも、傘骨なりに廻はるのも、皆一生懸命存分に元氣を出して居る。赤い顔に小雨が珠と置く。露の薔薇を見るやう。Portland の寒い日の少年少女を思ひ出す。餘程衣服が關係する。日本の改造は、八方破れの何處からでも來いで、多過ぎて當惑するが、やはり衣服が手近であらう。衣につれて住が更はるは當然である。

私共の公園の樂は、子供を見る外に、栗鼠リスもそれだ。ちよろ、ちよろ、ちよろ、ちよろ、ちよろ、大木の枝から下りて来て、ちよこちよこ走り、ちんと坐わり、あの可愛いまる目、両手で木の實などかゝへて、口齧うごかし、もく／＼と食ふさまの愛らしさ。皆が栗鼠を愛する。而して栗鼠が人間を信ずる。呼ぶと来る。よく馴れたのは、ちよろちよろと人の體に這ひ上り、ポケットの中のクッキーナッツをさへとつて食べる。こんなのが英吉利人、英吉利の子供の愛を育つる働は、意外のものであらう。蓄犬税など取り立て、子供から犬を奪ふたりする日本人は、まだ／＼愛をそだつる所以を知らぬ。

歸つて日本の新聞を見る。普通選舉の火の手が大分あがつて来て居る。「財産奉還論」と云ふ書の廣告を見「奉還」の二字が「大政奉還」「藩籍奉還」の維新を思はせ、私共を悦ばせる。捨てねば取れぬ。大きく取る爲には、大きく捨てねばならぬ。すべての維新は「奉還」に原もとづく。私共が「還元」を呼ばうのは奉還を意味するのだ。何れの國民、何れの種族、何れの個人も皆奉還すべきものを持つ。領土にせよ、信仰にせよ、特權にせよ皆それだ。羅馬帝政時代に帝國全土の國勢調査をやつて、人おのの其戸籍についたと傳へられて居る。耶蘇などはそれで父ヨセフが臨月の母マリアと原籍ベテレヘムに往つて、そこで生れたとさへ云はれる。眞偽は別として、ある大きな刷新の場合、一度還元は自然も人事も萬止むべからざる事である。一切を奉還して元に還り、そこから新に出直す要がある。信仰

の事でも、基督者は耶蘇を抛り出し、佛教は釋迦牟尼を投げ捨て、回教徒はマホメットを奉還し、あらゆる信仰は其信仰の對象を脱ぎ捨て、さまざまの偶像をどろどろに鎔かした其鎔液から成る盃を手にとり四海一家の春を祝ふ瑞々しい新春の慶を擧げねばならぬ。

五十年前日本を襲ふた「維新」の渦巻が、今世界的に渦巻いて世界的大維新を現じつゝある。天の日本に期待する所は決して屑々たるものでない。それを自覺して自ら尊重せねば、日本は駄目だ。

米國が撤退し、日本が西比利亚に獨りぼつちで残された。個人として或は不正直な日本は、國として大方氣の毒な程正直だ。米國に對して、私の腹の蟲がそろそろ唸り立たうとする。恐い。自重だ。自重だ。喧嘩をすれば、相手以上にはなれぬ。自大はいけない。自小は尙いけない。日本は日本の脚で立つ事だ。自ら立つ事によつて、他を立てるのだ。

Carpenter の爺さんと、Kochdale の John Bright 傳の著者の Robertson 爺さんに、「新春」を贈る。

(11)

一月二日。今日は晴。午後はぶらぶら歩いて Olympia の曲馬を見に行く。大きな建物。一寸法師の馬をはじめ、色々の見世物がある。日本の柔道者谷と云ふ人の英吉利拳闘者と試合の廣告が出て居る。Mary—go—round のおとなしいのでなくて、麗大な青龍につて烈しく上下動をしつゝ廻

はるのがある。女も子供も乗つて居る。戦争の昂奮が中々収まらぬので、女子供に到るまで激烈な衝動を兎角喜ぶ。自動車などもわざと亂暴に運轉したり、それに女がのつて喜んだり、物議の種となつて居る。私共は淺草にでも往つた氣になつて、二志出して五分間寫眞を撮つたり、粕谷に留守する日の面影を偲んで一志出して此處でも縁喜にする黒猫の豆像を買つたりした。

曲馬は面白かつた。午後二時から四時まで、私共は男や女、馬や犬や海豹の藝に慰められた。高い處を、此臺から他の搖ぐ臺に飛びうつる時、小さな犬の後肢の傷ましい痙攣、張つた網の上に落ちてはまた這ひ上つて行くそんなに若くもない輕業師など、見苦しい事もあつたが、要するに面白かつた。Mademoiselle を相手の馬の Jazz Dance や、十三四の少女が使ふ海豹の人馴れた藝は、私共に涙をさへ含ませた。

歸りには夕月圓く空にかゝつて、穏やかな日本の正月日を思はせた。

(二)

一月三日。Taxi で Museum Street に往つて書籍少々買ひ、それから大使館。大使も夫人も居て、一時間の雑談。Bull dog は口が出て鼻が凹んで居て、相手に喰ひついて居ても鼻から呼吸が自在で、喧嘩の息が永いと云ふ話を聞く。

大使館を辭し、藥屋で郵船支店長の水さんに教はつた船景藥 Mothersill's Sea Sick Remedy を買ふ。それから一店で午食。Lyon 茶半封度を買ふ。

春の様な蒼い霧のこむる Hyde Park を横ぎる。倫敦も随分大きな好い肺臓をもつて居る。餘裕の經濟を Bull はよく心得て居る。私共の倫敦生活も Kensington Garden や Hyde Park の々蔭にふんなに愉快だつたか知れぬ。私共は Park を徐かに歩みつゝ、不日倫敦を後にすれば、此公園も思ひ出になると云ふ話などする。それから私は英吉利が島國である爲に自然に安全な感が深い事を話した。英吉利人が信用出来るからばかりでない、自然が與へた島と云ふ位置が自然に落ちつきを與へるのだ。大陸の様に國相接し、境相隣る地つゞきでは、中々あたりに擾はされ易い。英吉利が如何に赤化し、如何に騒ぐやうな事があつても、それは私共の船房の喧嘩も同様、家内の喧嘩で、自然に鎮まる外はあるまい。英吉利の落ちつきは、「島」が餘程與へる。それにつけても、日本が同じく島である事は、不利でもあつたが、矢張大なる天恵だ。

Bull さんは打算を忘れない。日英同盟は、英吉利の利益から出た事は争はれぬ。然し味方を選ぶには、われにもあらぬ何かと働くものだ。英吉利が日本を愛しなければ、見込まなければ、尙たものを見出さなければ、日英同盟は成立せぬ。天は尤もよく己に尙たものを Favour する。英吉利が假りに後

嗣を擇むとして、英吉利は何の國を取るであらう乎？ 加拿陀などは別として、血を云へば、亞米利加である。然し堯、丹朱に譲らず舜に譲つた例もある。英吉利は老いるを欲せぬにきまつて居る。然し子供はずん／＼成長する。四海は一家に睦む——それはきまつて居る。然し順序は自らあらう。仁に當つては師に譲らず、君子の争はなくては濟まぬ。他の國はしばらく措き、日本と米國の關係が今後の世界的大問題である事は必然だ。

寒中水泳なんか日本に限つた事のやうに思ふたが、先日此 Park の Serpentine の池では、盛に水泳をやつて、中には可なり高齢の水泳者もあつたと新聞は報じて居た。

(四)

一月四日。そろ／＼告別が始まる。今日は正午過ぎから私共の倫敦の宿について世話になつた人々を訪問する。Kensington High Street の停車場に Lily of the Valley を二束八志で買ふ。地下鐵で Edgeware に下りる。地圖で研究した其 Street を探がせど尋ぬれど私共の尋ぬる家は見つからぬ。散歩き廻はつた末、Taxi で一気に Hampstead に走らせる。水さんは在宅であつた。家族なしの淋しい新年を慰めるかのやうに燃ゆるやうな紅薔薇と Carnation が客間に生けてある。香氣が鼻を襲ふやうな。それはある日本の Lady の贈物と水さんは云ふ。而してそれは造花さうな。先日も家のボオ

イが其花瓶に水を入れたさうだ。全く私共も香氣を想ふた程眞に迫つて居る。巴里から持參の贈物。全くこんなものにかけては、巴里つ子に限る。私共の白い清い谷間の姫百合が他の花瓶に盛られて其横に飾られた。「雑煮は？」と憎くない問。ホテルで同宿の苦さんなどは、日本料理の生稻で雑煮を祝ふたと話して居た。私共は勿論未だである。早速雑煮の御馳走が天降る。その用意が出来る間に、私共は待たした「ピザ」を私共が倫敦の第一夜を其屋根の下に温かく過ごした清さん宅に走らす。それはやはり West Hampstead であつた。Hampstead ぬきの Street 名ばかり探がしたから分らなかつたのも道理だ。あまり倫敦を小さく見くびつた罰だ。

清さんは百合さんを連れて散歩の留守だつた。夫人に當時の禮を述べ、Bethlehem から買つて來た Mother of Pearl の Necklace など贈る。而して萩の餅の馳走になる。

つい近くの停車場を教へられ、降り所まで細かに教はりながら、一つ手前で下りてしまひ、水さん宅まで大分歩いた。其かはり萩の餅はこなれ、而して満月かと思ふ圓々の月を眺める。

雑煮や數の子さまの馳走になり、再會までの別れを告げ、呼んでもらつた Taxi で私共のホテルに歸つた。

歸つて日本の新聞など見る。朝鮮總督の Dinner で米國宣教師の演説が頗る癢に障る。米國に對す

る怒が燃えようとする。然し朝鮮の扱ひ方には、確に日本も手落ちがあるから、一概にいきり立つわけに往かぬ。

私自身が所謂卒業こそしないが京都は同志社の出である。同志社は亞米利加に往つて磨かれて來た新島さんが大部分亞米利加の金で建てたものだ。十一十二の小さい私に耶蘇を知らせたも其處の宣教師である。亞米利加がなければ私が無いかも知れぬ。淨瑠璃にもあるやうに「齋藤の恩祿を食らひ込んだる此五郎助」である。米國が何としようとも、米國が私に與へたものは金輪際消える事ではない。Give and Take の宇宙だ。かうして生命が流通するのだ。同胞だもの、一つだもの。やるもとるも自然で、勘定づくではない。あつてはならぬ。

與ふる方では、恩きせてはならぬ。受けた方では感謝が自然だ。

一方で恩被せ、一方で恩忘れ、したら双方の破滅だ。

米國が日本に與へたゞけ、日本は米國に與へつゝある。色々の缺點はあつても、日本は義理堅い國だ、恩知らずの國ではない。彼は負ふところを忘るゝやうな男でない。多くの日本の生命、汗、血、涙、腦漿、が亞米利加の土にも人にも滲みて居る。天道様の勘定は精密である。私は日本人として日本の立場に立つ。然し親心からは亞米利加の立場にも立たねばならぬ。否、私は双方の上に立たねば

ならぬ。生命は成長する。兄が何時までも兄ではない。天道無親、天命無常、常に尤もよく父の心に副ふ者が兄の座を占める。日本も亞米利加も努めねばならぬ。

太平洋の西に日本がある。太平洋の東に亞米利加がある。太平洋が太平洋でなくなつたら、これ程不自然な事があらうか。世界平和の鍵は、確に日米の手に握られる。喧嘩どころか。

(五)

一月五日。Taxi で正金支店に行き、^{ポンド}150を現金にし、^{ドル}150を信用状にする。

それから ^{ホーランド}Holland and ^{アメリカン}American 汽船會社に往つて、紐育迄の船賃残額を拂ふ。トランクなどに貼る名札や何ぞをくれた男に、只もらふのかと云ふたら、では ^{バクシース}“Bakshesh” だもど笑ふ。10 志やう。
“Bakshesh” や人を呼ぶに掌を鳴らすなどは、近東の新輸入だ。昔の十字軍は澤山みやげものを歐羅巴に持ち歸つた。今度も少しはあるやうだが、感心しないものがどうも多いやうだ。それ程東は貧しいのか。私はさう思はない。

葡萄酒など買ふて歸る。

日本狀を書く。

それから粕谷の留守宅に書く。

淺君が來た。Homestic^{ホームレスンク}で低い顔して居る。夕食を食ふて歸る。來る日曜日に淺君の新居^{リッチモンド} Richmond に往く約束をする。

外套の毛皮附が出来て來た。襟裏にトメの小さな^{スクワニ}ひごまが頭を出して居るなど感心が出来ぬ。

妻は Skunk^{スカンク}の毛皮の残りを平常の冬帽につけたりした。印度藍^{インディゴ}天鵝絨^{テリベロ}の地に褐色のうつり、ちよつと目さきが變つてわるくない。

毎夜の事だが、室の暖爐のうれしさ。唯それだけでも、私共の家は建直したい。

天井にストオヴの火のチラ／＼とをどるを見つゝうまいするかも あい

(六)

一月六日。よく眠れなかつた。而して脊椎骨の下部に奇體な冷寒を覺える。

中央郵便局に往つて、紐育日本總領事館宛に直ぐ三千圓送るやう文淵堂に電報する。

歸りに彼毛皮店に寄つて、外套の^{スクワニ}ひごま頭を短かめ、滑らかにしてもらふ。

非常に寒い。

歸つても寒い。石炭が乏しく、女中に云ふても中々來ない。I^{ロウソク}は燃してしまつたし、寒くてなら

(七)

一月七日。例の脊椎骨下部の奇寒が私を苦しめる。昨年五月ナザレで私が英吉利人を叱つた時、室に歸ると頸のつけ根から脊椎骨を傳ふて電氣のやうなものがすいと下ると、それが尾骨の上に凝つたかのやうに、非常の重さと苦しさを其處に感じた。今奇寒を感じる部分が其處なのである。

それは私が力をぬいた結果ではあるまいか。

門出の最初から、何方かと云へば、私の同情は弱いもの、負けたものにあつた。英吉利に對しても、批評の眼を證つて來た。然し二ヶ月の英吉利滞在は、私に John Bull を愛せしめ、愛を通じて知らしめた。私自身が元來 Bull であるのだ。私は「新春」巻頭の私の寫眞を「怒を含んだ Bull」と人に云ふた事がある。私は人間であるから地上一切の人間のもつものは多少共に集中されて居る。日本人は勿論、朝鮮人も支那人も印度、埃及、土耳其人も、獨逸も伊太利も佛蘭西も露西亞もそれから英吉利も亞米利加も、未だ往かぬ國々の人々の好きも悪きも私にある。私が伊太利人の血氣をうれしくなく思ふのは、伊太利の其血が私自身に流れて居るからである。私が獨逸の將來を信ずるのは、私は私自身私を信ずるからである。私が血だらけの露西亞をいよく愛するのは、私自身が露西亞であるか

らである。私は生きて居る。だから私は一切を愛し得る。また憎み得る。私は通る國々毎に自分を見て來た。而してあるものを憎み、同時にあるものを愛して來た。Bullの國に來て、私自身のBullnessがParamountになつた。私はBullに對する對抗の力をぬいた。ナザレで叱つた時のあれが、ここに照應したのである。私は力をぬいた。だから其空處が奇寒を感じる。

然し私はこれから亞米利加に渡らねばならぬ。而して日本に歸らねばならぬ。私共の仕事はこれから始まらねばならぬ。私の存在に空處があつてならうか？力がぬけてならうか？

東廻はり郵船便で返へす箱の詰め込みをはじめ。

外套のScrewが短くされ、滑らかにされて返つて來た。

公園で二十代の日本服の日本婦人を見る。やはり日本服は戸外の服ではなかつた。

Keystone High Streetの地下室で午食。寒かつ。

夕食に苦さんが明日倫敦を立ち、"Royal George"で米國へ、Siberia丸で日本へ歸ると云ふ話をする。苦さん欣々として居る。全く歸るは嬉しいものだ。酔さめの水の味の爲に二日酔の苦しさを厭はぬ人があれば、歸る嬉しさを味はう爲に別離の苦をさへ忍ぶ人情もあらう。

十日すれば、私共も立つ。然しやはり一足先きの苦さんが羨ましく。

一月八日。鼻水が出る。やはり風を引いてしまった。然し脊髄の奇寒が去つたのありがたい。
Goff 爺さんと呼び、荷箱の蓋を釘づけにしてもらふ。墨や朱で宛名や注意を書く。

今日は先日見出した Knight's Bridge の食店に往つて午餐。罐詰物だらうが、鮭がうまかつた。例
の如く林檎、葡萄を買うて歸る。

新聞を見る。埃及に於ける Milner と Mufu 會見の記事がある。Milner は英吉利の High Commis-
sioner で、Mufu は回教の管長見たやうな者だ。「英吉利は大國だから」と云ふた Milner の高壓的言
葉は、白耳義に對する獨逸を思はせる。それにまた日露戦争の破裂前、尼格拉帝が日本の使節に「露
西亞は大國だから」と云ふた言を私に思はせた。それに對する Mufu の言は堂々として、立派なもの
である。あのカイロの大示威運動の日、Shepherd's Hotel の前の道路に手をついて拜跪した白髯の埃
及翁が私の眼に浮ぶ。埃及の腰が大分しつかりして來た、埃及の日が昇る日も遠くない。

W. C. に往つたついでに、二階の Hall を覗いたら、Lady が Piano を弾いて、帽をかぶつた紳
士が二人で相抱いて Waive を踊つて居る。此 Hall なども先日までは Bed を入れてあつた。日本人
で廊下の Bed に寝かされたと云ふ人もあつた。倫敦のホテルは戦争中官衙に使用され、戦後も直ぐ

復舊が出来ぬので、ホテル難が往來の客を悩ましたが、最早少しは餘裕が出来て来つゝある。

(九)

一月九日。今日は倫敦の若い法學士會に、およばれに行く日だ。夕六時過、妻をホテルに残して、^{トキヤリ}で生稻に往つた。會者十人。家族同棲の高君の外は、獨身で来て居る若い人々。お醫者が一人。正金で毎々世話になる三——君堀君の外は、皆生面の人々。然し中には一高で私の演説を聞いた人が居る。露西亞から歸つて直ぐの「勝利の悲哀」を聞いた人が居る、「謀叛論」を聞いた人も居た。「謀叛論」と云へば、あの演説に關係があつた新博士も畔學士も今倫敦に居るさうな。

日本料理はうまくなかつたが、若い諸君の顔を見る事が私には嬉しかつた。取りとめもない話を私はした。英吉利と獨逸の相撲は奇數と偶數の戰である。獨逸は一切の準備をして居た。きちんとすべてが出来て居た。整ふて居た。それは人事を盡したと云ふてもよい準備であつた。ちやんとした整數であつた。それで居て終に腰砕けとなつた。無勝無敗の引分けと云ふても、矢張獨逸が負けたのだ。英吉利に準備が無かつたとは云はれない。然しそのやり方はてきばき、きちやうめんではない。英吉利の息は長い。英吉利單獨の勝でない^{オウ}と云ふても、やはり英吉利の勝だ。それは^{オウ}の勝、奇數の勝だ。奇數は偶數の末にあるものを残す。其處から長い生命がながる。自然は奇數を喜ぶ。割り切れ

てしまはぬ。英吉利がよく自然の骨を得て居る。獨逸は眞面目だ。あまり眞面目だ。眞面目は好い。然し眞面目くさるのはいけない。偶數は立派だ。然し奇數はヨリ自然だ。英吉利と獨逸の戦は自然と人の戦、信仰と知識の戦、奇數と偶數の戦、科學と人情の戦とも云へる。勝敗の決が多くを教へる。獨逸はえらいが、畢竟まだ若い。切迫して居る。あまりに主觀的だ。世間知らずだ。人情知らずだ。何を云ふても自由がない。獨逸に似た性情をもつ日本、獨逸に憧憬をもつ日本は、獨逸に鑑みて自ら養はねばならぬ。偶數日本ではいけない。奇數日本でなくてはならぬ。

私は此旅に上つてから、始終心にかゝる一の間があつて、何處でも話す機會がある毎に其間をかけた。それは日本の特別使命は何であらう乎？ 日本の生存理由は何に存するだらう乎？ 世界にすぐれた日本獨特のものは何であらう乎？ と云ふ其疑問である。或人は何も無いと云ふた。それでは日本は亡びてもよい道理だ。或人は萬世一系の皇室と云ふた。成程此は無類の面目だ。或ものは手先きが器用な事だと云ふた。これも嘘ではない。東西洋の文明を打つて一丸とする地理上の位置と、歴史上の經歷と、適用消化の性能、これが日本獨特のものとは、誰も云ふ事だ。

日本にあつて、他にないものは何？ 私はまた其謎を今夜の諸君にかけた。これは私自身に解けない謎であつたからだ。而して如何しても解きたく思ふたからだ。

諸君も色々に摸索した。つまり日本が若い事だ、未來をもつ事だ、日本のもつものは“^{ユース}Youth”である。と云ふに話は落ちて往つた。

世界に於ける日本の年齢は約そ何歳位であらう？

「先づ中學四年生位の處ですな」

とある一人は云ふた。

皆同する。

神武天皇紀元二千五百何十年と云ふ齡をして、中學四年は悪くない。前途洋々海の如きものだ。若いを恥づるに及ばない。宇宙は未だに完成して居らぬ。

「若い」事が日本の特長とは嬉しい。

埃及は過去をもつた。希臘羅馬は過去であつた。支那印度は過去であつた。大ざつばに云ふて、歐米は現在をもつて居る。未來をもつ日本は何をもたなくても「未來」をもつ。

日本特得のものに、日の丸の國旗がある。太陽はふるい、而して常に若い。日を旗じるしにする日本は、常に若くなければならぬ。

打明け話が出る。私は日本に持つて歸るみやげが無いとこぼした。これは長い間けちな私を苦めた

問題であつた。「中學四年の日本」を云ふた色白の一人が、「O.P.P. でいゝではありませんか」と私の重荷を取り去つてくれた。

私は今此一夕を書きつゝ、後れ馳せに書き加へる。「日本にあつて世界に無いものは何？」と云ふ謎を私はやつと解き得た。諸君が列擧したものは、皆本當だが、私にはそれでは足りない。「日本にあつて世界に無いものは何？」萬世一系の皇室、日の丸の國旗、古事記、日本語に片假名平假名、日本服に下駄草履、銀杏樹、山椒魚、鮎、尾長鶏、切腹、刺身、歌麿、廣重、能狂言、義太夫、尺八、日本刀、柔道、茶道、岐阜提灯、忠臣藏、犢鼻褌、五月鯉幟、三月雛、數へ立てたら、まだいくらもあらう。然しそんなものはつまりは何でもない。今の自然と過去の人間で如何に他にないものを有つたとて、それは畢竟何でもない。私は散々苦しみぬいた揚句、やつと一つ見出した。日本にあつて世界にならぬものは何？ 曰く、アダムとイヴ。其心は？ 曰く、私と私の妻。徳富健次郎と其妻愛は金輪際唯一である。鐵の鞋で探がして御覽なさい。徳富健次郎と其妻愛とは、エスキモオの中にもホツテントツトの中にも獨逸にも佛蘭西にも亞米利加にも英吉利にも居ない。唯日本の粕谷に居る。耶蘇でも、トルストイでも、私の父でも、妻の母でも、何でもない。宇宙間の唯一無二の徳富健次郎と其妻愛である。それは天地間唯一無二の何の三太郎とお釜も同じ事だ。自然は類型を造る、私共に似た者、私共

の肖た者はあらう。然し同一物を造らない。宇宙廣しと雖も、一の存在は他の存在ではない。全く同じ様に見えても、屹度違ふ。似たものはあつても、同じものは二つない。如何なる微物と雖も、其ものゝ宇宙の中心は其ものにある。我れ、而して宇宙、の關係だ。世界どころの話でない。それ程尊い自己だ。傳説に云ふ、誕生七歩の釋尊の唯我獨尊みづかどくそんも、耶蘇の「我はアブラハムの在らざりし先より在る者なり」も、ソクラテスの「汝自身を知れ」も、孔子の「天徳をわれになせり」も、皆そこだ。苔がつかぬでやすつぽいやうでも、「われ年五十にして身、五世界に繋かるものあるを知る」の佐久間象山も、「獨立自尊」の福澤諭吉も皆それだ。見たと思ふてもはつきり見ず、攫つかんだと思ふても後に退すさる。自覺はそんなに容易なものでない。輪廓が出来ても内容が満たず、半熟の果物をとかくちぎり易い。謎が解けた。私共は私共を見出した。重いものゝ水に沈む物理を風呂の中で見出した Archimedes のやうに「Eureka」分つた、分つた」と叫んで風呂を飛び出し赤裸で日本に馳せ歸つてもよし。

何のみやげがあるものか。私共自身のみやげなのだ。

色々な話が出た。蘇格蘭兵士スコットランドの S.ニコスコットの下は無禪むけんで、戦争の場合困つたから前かけのやうなものをしたなどの話も出た。

羅馬字ローマ字の話から、私は私の最後の一二作は多分羅馬字で書くだらう、と云ふた。

日米問題の話も出た。私は私の還元説から、日本が亞米利加から引揚げ、同時に亞米利加に東洋から引揚げてもらふと云ふ説を持ち出した。

宗教に關しては、既成宗教は其偶像を投出し、其傳統的成型の殿堂を焼き拂ふて、其灰の中から残つたものを拾ひ上げねばならぬ、と云ふた。専門的宗教がある筈はない。印度は佛教では救はれぬ。歐米は耶蘇教では救はれぬ。就中回教は近東の呪詛である。輝く日の如き宗教でなければならぬ。私は Bahism の話を少しした。Abbas Effendi の事を話した。既成宗教の廢墟に築き起して世界を一統しよう霸氣満々たる彼、可惜彼は個人として十字架の體驗之しく、波斯を追はれた流竄の子として、歴史的國民的背景を有たぬ。それは稀薄な盛氣樓だ。彼も炬火持ちの一人ではある。それ以上ではなし。

私は次第に熱して來た。諸君も興がのつて來たやう。私は諸君の自重自愛を懇に囑して十時半頃生稻を辭した。堀君が 12 時まで送つて來る。朝は好い天氣であつたが、生稻を出るとぼつ／＼雨が降つて居る。

ひいた風も何處へやら、好い氣もちになつて、ホテルに歸る。

悦喜の顔で私が歸つて來たのを迎へて妻も喜んだ。

(十)

一月十日。雨。疲れて居るので、久しぶりでホテルで午餐をする。

Plymouth のホテルに室の照會。

馬鈴薯を植ゑる事、庭園の枯葦を刈る事を留守を頼んだ金さんに頼んでやる。最早私共の心は粕谷に歸つて居る。

私共は人生を愛する。生活の爲に生活を愛する。方便として、道程としての生活でない、生活としての生活である。内に外に、八方に、肉に、靈に、すべてに於て豊富な潤澤な、眞實な、善い、而して美しい生活をするのだ。

天を地に引き下ろし、人に神を見出し、一切衆生漏れなく存分に生活し、氣もちよく生活する新天地を造る。これが現代の使命だ。一人の神をつくり、一人の英雄を拜する時代は過ぎた。一人の教主に罪を負はせて、皆がをさまる時代は過ぎた。新天新地は、Lincoln の言ではないが、By, Of, For, Each and All of the Members of the World になければならぬ。

佛陀は家に還らねばならぬ。耶蘇は結婚して戸籍につかねばならぬ。ソクラテスは Xantippe の面倒をもつと見ねばならぬ。孔子は鯉の阿母の顔位は人に見せねばならぬ。偉くなれ偉くならねばなら

ぬと幾干の秀才不秀才が苦しめられたであらう？ 私の母などがそれだった。息子の一人は相應に偉くなつたが、私は偉くなれぬとあきらめられた。十字架にでも上つて見せねば母の安心はつきさうもなかつた。ありがたい事には、十字架を私は後にした。世にも罪業深い馬鹿者の私は、眼を開けば宇宙に唯一無二の私であつた。妻も唯一無二の妻であつた。唯一無二同志寄り合ふて誰憚らぬ平凡の生活をするると云ふは嬉しい事だ。

早く歸つて好きな生活をはじめよう。すると天上の父は喜び母は成佛する。

(十一)

一月十一日。日曜。風雨。

今日は Richmond に浅君を訪ふ日である。生憎の風雨だが、構はず出かける。ホテルの附近から Richmond 行きの乗合自動車に乗る。

先日曲馬を見た Olympia の前を通り、Thames を渡り、そろ／＼田舎らしくなる。四十分にして Richmond に來た。一寸した町である。自動車に乗る前には、風で私の新帽を吹き飛ばされたが、下りる時には止まつた自動車からひらり飛び下りる拍子に妻が鋪石の上にころんで、べつたり手をついた。些の怪我もなかつたが見つけものである。

風雨の中を、傘さして浅君の下宿に行く。客間には色々の日本品が飾られて居る。上村彦提督の寫眞など飾つてある。此處の Turner 夫婦はもと倫敦に住んで居て、二十年來日本人と懇意で、今も此 Richmond に退隱しても、浅君の外に同じ N. Y. N. の進君も寄寓して居る。夫婦は老いて耳遠く、それでもちやんと獨立して居る。長男は印度で救世軍の首領、二番目は國教會の聖職に、三男は南米の商人、娘は倫敦で自活をして居る。出征中自宅を貸して、期限前で此家に同居して居ると云ふ寶石商の夫婦が居て、女中が居ない今日此頃は其細君が婆さんを助けて臺所をやつて居る。六歲位の Denny と云ふのが、客間に現はれて腕白ぶりを發揮する。伯林の一周汽車の中で若い阿母に尻つべたをたゝかれたあの小娘と夫婦にしてよささうな子。妻が紙で鶴を折つてやつた。

二階の浅君の室で話す。Celia のやうな室。硝子窓から裏庭を見下ろす。浅君が其家族の寫眞や、代々木に新築された二十五坪の自宅の岳父がかいた繪圖面などを見せる。私共は小さな福助おかめ人形を贈つた。機會があつたら家族を呼ぶやうにと勧める。浅君は二年越し寶生を習つて居るさうで、讀本を積んで居る。登山家だけに此夏は Mont Blanc に往つて見ようなど話す。

進君が挨拶する。大阪堂島の人、浅君より若く、戦争中から倫敦の N. Y. N. に居る。今度私共と同じ "Rotterdam" で紐育に轉任するさうな。

三時半になるが、午餐にならぬ。近來の空腹を覺える。進君が淺君を扉外に呼び出し、小聲で何か云ふて居る。歸つて來た淺君はいさゝか忸怩とした容子で、「失敗しました」と云ふ。お婆さんに今日の來客の話はしたが、午餐の用意を頼んで置かなかつたのである。

私共は興に入つた。風雨に倫敦から Richmond に來て、「空腹」の御馳走は一千法の罰金を佛蘭西で拂ふたり、獨逸の汽車で半身だけ Weimar に下ろし他の半身は要もない Naumburg まで乗りうちしたりするお客でなければ受けられぬ馳走だ。淺君出來した。やはり類を以て集まるものだ。私共は笑坪に入つた。

氣の毒がつて同宿の寶石商がパンや紅茶を持つて來てくれる。それを食べて、私共はそろゝ歸り仕度をする。お婆さんに妻がちよつとした紙入を贈つた。私の挨拶の言葉を、寶石商の細君が取りついで、お婆さんの耳についてわめくのであつた。耳は遠いが毎日讀書と散歩をかゝさぬと云ふお爺さんとも握手して私共は出た。

雨は止んで居る。淺君の案内で、Richmond の町を見る。夏の住居に好まうな。Terrace Garden は門がしまつて居たが、老樹の間から遙か下をうねり流るゝ Thames が下總は鴻の臺を私共に思はせた。

乗合自動車の發着所で淺君と別れ、五時過ぎには空腹をかゝへてホテルに歸つた。
Richmond の一場は、禪家の問答でもしたやうな一種の痛快味を私共に與へた。

然し淺君が自慢の家庭料理を食べなかつたは残念でならぬ。何故淺君の爲に用意された一人前を三人で分けて食はなかつたか、と後になつて遺憾に思ふ。

(十一)

一月十二日。雨。夕五時頃ボオイが小法學博士の名刺を取次ぐ。讀書室に往つて見ると、夫人も見えて居たので、歸つて妻と共に出る。小さんは郵船の水さんと同窓であつた。世間知らずの私の爲に小さんは自ら紹介して、自身の官僚でなく、始終 Danceray の異色を帯びて居る事を私の腹に入れてくれるのであつた。このたびは十八年ぶりに國際會議の委員として、去八月日本を立ち、亞米利加經由で佛蘭西に渡り、瑞西、白耳義を経て舊臘英吉利に來たとの話。夫人は石況翁の女、逗子で私の亡父母を識つて居る。先日水さんの宅で見た紅薔薇と Carnation の造花はその贈物であつた。小さんは私共と同じく子供がない。當分逗留して、五月頃東廻はりで日本に歸るとの話。西廻りで三月には日本に歸る私共と、丁度二つの帯が倫敦で合ふたわけだ。

紐育と桑港の日本領事館に郵便物の事を頼んでやる。

淺君が來て昨日の説を云ふ。而して東廻りで歸へず私共の荷札を持つて來て、送り狀を書いてくれた。月末の横濱丸で荷物は往くさうだ。

(十二)

一月十三日。疊。朝、田君來訪。田君はもと内さんの門弟で、一高在學中他の同窓とキユウゲルゲンの「生立の記」を譯して、粕谷にも一本を持つて來てくれた若い法學士であつた。卒業後官途に一年半ばかり就き、今は二年の期限で留學生として來て居る。専門は商法だが、一般的に吸收キョウシユをつとめ居る。Tolstoyトルストイに共鳴キョウメイの一人。

私共は讀書室の暖爐前で二時間ばかり話した。若い眞面目な魂に接する位喜ばしいものはない。田君は英吉利の宗教が傳統的で、苦痛も煩悶もなく、生命がない事を云ふ。

基督再臨問題について、内さんは文義通りの信者である。田君は違ふ。私は、再臨の基督はもつと人間的、世俗的であらねばならぬと云ふ。

西はもつと内入れねばならぬ。東はもつと外出せねばならぬ。位置の轉換が必要だ。

日米問題について、田君は往來が人類の本色で、米國のやうな廣大な地積を有つ者が他を排斥するは不自然だと云ふ。私はそれに對して、私の人類別居説を概論した。最初私は人類の混淆コンカウを理想し、

其爲雜婚なども必要と考へた。今は違ふ。自然は *Odin* を好み、自然は殊別を好み、自然は變化を好む。何となれば自然は即ち生命で、生命は常に生命であるからである。劃一に生命はない。調和は自づから衝突の中にある。Variety の中に Harmony はある。現代の大勢は、四海一家の一ならんとする力と、類を以て結束して、別ならんとする力と、兩様同時に働く時代だ。それは極めて自然で、少しも相戻らない。一になる爲には、分子の結束收縮を要する。別だから一致だ。別がなければ混淆だ。自然は個體を尊重する。和而不同が自然だ。おの／＼自己であらねばならぬ。自己が立たぬものが一致も共同もあるものではない。私は自然に従うて自己を別にし、自家を別にし、自國を別にし、而して日本からすべてをする。

握手して別れる。田君の握手がしつかり力が入つて居て、嬉しかつた。

Queen's Road の店に往つて午食。例の通り Kensington Garden を往來する。不日此 Garden に別るゝと思ふと、もうから名残が惜しまれる。

淺君の砂糖を盡したので、歸りには町で Golden Syrup を買った。

歸つて、日本の Mind の出來た由來について夫妻相語る。日本の原始宗教は何？ 太陽教。それは波斯の Zoroaster のそれに似て居る。生を尊み、死を汚れとし、太陽を拜し、神火を護し、潔め祓ひ

のそれまでも、よく／＼似て居る。高天原たかまがはらは他所でなかつたかも知れぬ。日本と波斯ペルシヤは近い／＼親類なのだ。波斯から生れた *Bahá'u'lláh* の主張が私共の言に背むかて居るも、不思議でない。

日本の原始宗教は太陽教の自然教であつた。次に儒教が來た。儒教は何を日本に與へたか？ 義を與へた。次に佛教が入つた。何を佛教は日本に與へたか？ 慈悲を與へた。太陽教は生を尊んで死を賤しめた。佛教は死の美を教へた。何を云ふても、佛教が日本の人心を和らげた事は争はれぬ。次に耶蘇教が來た。耶蘇教は何を日本に與へたか？ 死生を一貫した生命の信仰。神子の自覺、それに原づいた萬人の平等、それから發足した *Democratic Spirit*。耶蘇は第一の純デモクラットであつた。今世界を風靡するデモクラシイの發揚は、耶蘇の勝利と云ふてよい。「われ已に世に勝てり」と千九百年前の凱歌が今合唱されはじめたのである。「十字架の時代は過ぎた」と呼號する私共は、何を宣ぶるのか？ 第二の創世、新天地を宣ぶるのは何を意味するのか？ それは自然神道の太初に復へるのだ。然しそれは儒教も食ひ、佛教も食ひ、耶蘇教も食ふて血とし肉とし骨とした自覺した自然教である。太初の自然教が澤山のもの食ふて育つて自然人となつたのである。

眞に十字架の苦を味はひ、死して、葬られて、復活した者でなければ、「もう、十字架は澤山だ！」と呼號する權理はない。復活の耶蘇でなければ、「十字架の時代は過ぎた」とは云へない。耶蘇の復活

を邪魔にする者が、彼を墓に永劫閉ぢ込めて置きたがる。限りなく十字架につけて置きたがる。限りなく犠牲にしたがる。

私は英吉利に来て、會堂一度覗いた事もなければ、誰と宗教談をした事もない。然し新聞などで見ると、宗教的のものではあらうが、禮拜堂で活動寫眞をやつたり、牧師が Carpenter と Joe Beckett の拳闘試合を見物に出かけたり、要するに宗教が民衆化され、Every day 化されつゝあるは、著しい事實、而して喜ばしい事實であらうと思ふ。生活をはなれて、何處に宗教があらう？ それは生活をはなれて、何處に科學が藝術が哲學があり得やう？ と云ふに同じいのだ。

荷造りをはじめ。女中の Ada が夕方の湯を持つて来る。「如何だね、日本に來ないか？」Ada は悦んでさつと顔を赧くする。「あまり遠いのですもの」

“Holland and American Line” 汽船會社から、十八日に船客用特別列車を用意すると云ふ通知。

丁度 Plymouth からも室の用意をして置いた、とのホテルの通知。乗船前に一夜休息が欲しい。十七日に立つ事にする。

(十四)

一月十四日。午後一時頃、私共は Taxi で Sloan Square の小博士夫妻の寓に往つた。小夫人の教

師で、三十年間日本に自費傳道をした Miss Ballard 訪問の約があつたからである。小さん夫妻の新居は菓子屋菓子屋にはさまれた家の二階であつた。もと水さんの附近に小さん達は居たが、Miss Ballard が案内したり何かと世話をするに不便だから、と謂ふので、此處に Flat を借りて引越したばかりであつた。日本から荷物が着いたと云ふて、夫人は甲斐々々しく Apron 姿で働いて居た。私共は客間で夫人が丹念に集めて來た經過地の畫はがき Album や手撮の寫真など見た。其新しい Autograph Book の劈頭に、妻は「姉妹睦びし——」の歌を書いた。

「我々の時代は過ぎましたよ」

と私は小さんに曰ふた。

私には一つ年下の博士は、私が私自身の引き込み時を意味したと解したらしく、打消すやうな氣の毒さうな顔をした。

「いや、我々男の専制時代が過ぎたのです。誰やらの言ふたやうに、二十世紀はやはり女と子供の時代でした」

小さんも慥然とした。昨日來た田君も小さんの弟子の一人であつた。妻が書いた後で、私は「日子日女迎ふ島夷共」の歌を書いた。

「島夷つて、英吉利ですか？」

と小さんは少し Shock を感じたやうであつた。東夷物茂卿ではないが、日子日女も東の島夷なのだから、東の島夷が西の島夷に島夷呼ばはりは少し烏滸がましいかも知れぬ。然し私は改める要を感じないので、「ええさうです」と笑つて居た。

私共は Aerated Water や菓子 of 馳走になり、其横で小さん達は午餐をとつた

それから四人は Taxi で陸海軍婦人倶楽部に往つた。Miss Ballard は六十近い好いお婆さんであつた。私の "Zamiko" や「思出の記」をすら読んで居た。倶楽部には大勢婦人が寄つて、皆忙しうに見えた。

四人は Miss Ballard の案内で、附近の陸海軍用品店に往つた。陸海軍に關係縁故ある人々の來る處で、不用になつた軍需品などが廉價に賣られて居る。飛行機に使ふ透かしになつた麻の大幅物を、Curtain にすると謂ふて小夫人は大分買つて居た。其處には新しい生活の便利を取り入れようとする婦人の注意を捉へる臺所道具の數々や、廉くて良い、色々の物があつた。そんな買物のお伴を Miss Ballard は氣の毒に思ふたか足手まとひの男二人を書籍部に連れて往つてくれた。而して女三人が買物に没頭する間を、男二人は各自に好きな書を見て書棚の間を歩いた。此様な處の書籍部としては、

中々富んで居た。小さんは其道の書籍を二抱へも買った。私は *Baderer* の北米合衆國案内記と昔買つて讀んで賣り飛ばした英譯 *Marcus Aurelius* を買った。男女は一つになつた。妻は何も買つて居なかつた。あまりに欲しいものばかりで、手が出せなかつたのである。

忙しい *Miss Ballard* に別れ、それから小さん達に別れて、*Taxi* でホテルに歸つた。

(十五)

一月十五日。雨。昨夜は粕谷の吉さんが、私共の恒春園が灰になつた事を報ずる夢を見た。さめて、正夢であつてくれればよい、と夫妻語り合ふ。どうせ改造の運命が待つ家だ。

Taxi で日本大使館に行き、大使と夫人に告別の挨拶をする。大使歸東の消息は、倫敦の新聞に已に傳へて居る。大使は私共が旅券の裏書を取りに日本總領事館に行くに、あの界限は今頃非常にこみ合ふので、自動車より地下鐵が早いと館の若い人と呼んで近い地下鐵の停車場を聞き合はせたりしてくる。夫人は毎日の事で今から徒歩勝手元の買物に出かけるとて、身輕の仕度。手輕で好い。

置き忘れになつて居た私共宛のふるい郵便物を受取り、待たしてあつた *Taxi* で直ぐ日本總領事館に行く。旅券の裏書をしてもらふ。米國行きには二週間前に米國領事館に申出る要があつたさうな。領事代理が米國領事館に紹介狀を書いてくれた。

此行出發以來 *Passport* では全く弱つた。新嘉坡で難辯がついた以來、埃及パレスチナは先づとして、歐羅巴大陸では其爲何程苦勞したか知れぬ。言葉は多く不通だし、勝手はよく分らぬし、私のみか妻までも人ごみの中に立往生、腰かけ往生、一つの裏書をとる爲には、全くぐつたりする程根氣を潰した。英吉利に来てやれ〜と思ふた。最早 *Passport* の面倒は後にした氣で居た。英吉利から亞米利加を通つて日本に歸るのは、親類縁者の屋敷内を通つて自宅に歸る位に思ふて居た。顔見たら聲かけよう。居なかつたら黙つて通らう位の氣で居た。二週間前に願出の必要——一寸意外の感であつた。それは勿論此方が不念なのだ。

私共は「*Paris*」で星と縞の旗が出て居る合衆國旅券事務所に往つた。支關番の黒人は特に厚意を日本人に表した。受附の若い女 *Clerk* も丁寧であつた。それから狭い廊下の *Band* で長いこと待たされる。女小使が編物しながら取次をする。後から來て先きに奥へ入つて往くのは、米人であらう。やつと奥から鈴が鳴つて、女小使が私共を奥の扉内に案内する。

正面のテーブルに若い男が一人。向つて右にも一人。左のデスクに若い女が一人。暖爐が燃えて居る。

私は裏書願書に貼るべき私共の寫眞を唯一對しか持ち合はせなかつたので、妻は「*Paris*」を飛ばして

ホテルに他の一對を取りに往つた。

正面の若い男は私の Cross Examination を始めた。

落つつかなく早合點の “Yes, Yes” が正面の男を含笑ませ、右の男と左の女を呵々と笑はせた。
Bolshevik ではなつか、の間が生憎其 “Yes, Yes” に該當したのである。

私は陣を立直して、明瞭に答へた。

政體については、私は頓着はない。立憲王政可也。共和政でもよい。何れにもせよ耶蘇基督の精神を活現する政治が私の採る所です。

妙な事を言ふ日本人と、正面の男は思ふたらしい。倫敦に於ける私共の知り合ひを問ふた。私は日本大使を擧げた。何時からの知り合ひ？ 倫敦に來てから、二ヶ月の知り合ひ。

若い男は冷笑した。

私は日本に於てすら一部分の人にしか知られず、日本以外ではてんで知られない私を恥づる外はなかつた。私は英文不如歸の一冊も最早持つては居なかつた。而してそれが日露戦争の年、米國は Boston で出版された事を何故か此處であらためて言ひ出す氣にもなれなかつた。唯私は、旅券の御互に面倒さ、戦争前はまさかこんなではなかつたでせう？ と問ふた。若い男はやはり戦争からの事と答へた。

而してやがて立つて往つた。

右のテエブルに居た男が先刻笑つたその詫びを云ふた。『Bolcheviki』の間に對して、あまりあな

たが Yes, Yes お言ひなものですから」

私は答へた。「構ふものですか、可笑しいに笑つたつて。あなたの片言まじりの日本語を私自身笑ふかも知れません」

而して私は旗券の面倒臭い事をあらためてこぼした。Ochik はちつとも面倒な事はないと云ふ。其答だ。Ochik 君はそれで衣食をして居るのだから。

其時、ボオイが私を呼びに來た。玄關に出て見ると、妻をのせて往つた自動車が來て居るが、妻は乗つて居ない。意味が分らぬ。兎に角往つて見ようと乗る處へ、遽しく乗りつけた一臺の自動車が妻をのせて來た。待つて居れと妻の言ふた言が車掌に分らなかつたと分つた。

妻が持つて來た私共の寫眞が願書の他の一通に貼られて、奥に齎らされた。手数料として米貨二弗分を英貨で拂ふ。先刻笑つた若い女が其金を受取る。私は曰ふた「先程は好い慰みでしたね、まづい私の英語が」娘は顔を赤くしてしまつた。

明日午前十時に來い、との事で、私共は其處を出て Taxi で Paddington Green の警視廳に往つた。

即ち入國當初滞在登録を受けに來た處である。登録簿に出國許可を書いてもらつて、直ぐ此處を出る。まだ此上に出國の手續があるのかも知れぬ。念の爲、自動車で方角違ひの St. James Park の Passport Office に往つて見る。勿論此處の要はなかつた。

大くたびれで、午後四時ホテルに歸る。若い兵隊上りの自動車掌も、私共のお伴で、空腹大弱りは氣の毒であつた。

米國との第一接觸に私は色々考へさせられた。「郷に入つては郷に従へ」千古の金言である。何人も何國も其立つ地の上に於ては絶對無二の主人である。其外は客である。客は主人に對する禮儀を守らねばならぬ。それは主人が客に對して禮儀があるべきと同様である。皆おのゝ立場がある。あまりに心易立てをし過ぎてはならぬ。如何様な面倒でもおとなしく忍ばう。

ホテルに歸つて、茶を呼ぶ。而して大使館から受取つて來たふるい郵便物を披く。來なければならぬ手紙が來て居る。思ひがけない手紙も來て居る。届かなかつたと懸念した此方の手紙も着いて居る。「私の所望」の反響のはがきが少々。少しでもありがたい。

私共の出發前一年近く薪水の勞を扶け、而して私共の出發後に突然其母に死なれた秋の心そのまゝ

の手紙が妻を泣かせた。私共の可愛がつて居る女高師の生徒八重子が卒業式にも出られず病んだ事は已に知つて居たが、他の一人信子も同じく卒業式に出られず今もぶら／＼病んで居る事を彼女自身の筆で知らしてよこしたのは、私共の驚きと憂であつた。

何は兎もあれ、出發開際まで澤山の故國だよりを控へて置いて一度にどつとくれるなんか、おやぢの疎腕うづわん毎度ながら言語に絶する。

多くの子女の手紙が私共の心を日本に引寄せる。さうだ、もう私共も歸つてもよい時だ。私共は日本から來た。私共は日本へ歸らう。倫敦好しと雖も、私共の家は日本である。

日本へ歸らう！ 日本へ歸らう！

(十六)

一月十六日。晴。朝、タニで米國旅券事務所へ往く。奥で少し待ち廊下で大分待ち、午後三時半に來いとの託宣たくせん。黄石公わうせきこうの脊せきをとる子房こぼうではないが、私共はおとなしく午後を期して其處を出る。

文人向きの書店 リテラリー ラウンジ Literary Lounge に寄つて、二三買物をする。

それから オックスフォード、サーカス Oxford Circus の支那料理杏花樓ぎやかうに行く。此處は地下室になつて居る。支那料理は全くうまい。こんなものを食はず支那人を愛せず居られやうか？ この磅紙幣ポンド紙幣で拂ひをしたら、給仕の支

那人が萬年筆を持つて來て、紙幣の裏に私の姓名と現住所を書いてくれと云ふ。私は悦んで書いた。上海、香港などではよく紙幣の裏に色々記入した筆跡を見せられる。支那のやうに政變改姓の續出した國は、國家として鞏固な何ものも出來なかつたかはり、個人尊重對人信用が發達した。その點は餘程西洋に近い。國家として隨分見られる日本も、個人が兎角出來て居ないので著しい對照だ。一長一短一概に褒貶は出來ないが、大に考へる餘地がある。Democracy が日本に行きわたるまでには、個人がしつかり出來ねばならぬ。私は日本を立つ前東京の瑞西公使館で人に頼んで旅券の裏書をしてもらふ時、居村々長の身元證明を持つて來いと公使館で云ふたと聞いて腹を立て、旅券は日本政府の信用だ、日本政府の信用が其配下の村長の信用にだも如かないではたまらん、と怒つて到頭裏書を取らずに來た。然し公の裏は必ず私である。公私對立して初めて全い。日本政府の信用に村長の裏書は私を全いものにしてくれるのだ。瑞西公使館の言がやはり尤だ。公と私は相對だ。それは個人と宇宙の關係である。公を先に私を後にする日本の中で、私は性來それを逆に往つて居る。私は私位私を先にする者ありとも覺えぬ。それですらもまだ何かと云へば公を先にし公を重んずる日本人の癖が出る。公私は一になつて全い。日本のやうに表がちでもいけぬ。支那のやうに裏がちでもいけぬ。二つの合體が初めて全い一をなす。個人もそれだ。社會もそれだ。國家主義の日本の進路は Democracy へで

ある事は分り切つて居る。それについては、日本も大に修業を要する。其 Democracy の修行に出て來た私は、色々に古い皮を脱がされる。私は戦争の結果が思切つて下落したとはいふても、まだ富を以て世界に覇たる英吉利の英蘭銀行發行の紙幣に私の裏書をさせた蒼黒い瘡せた支那人に感謝しなければならぬ。

獨逸の大潜航船で戰時嚴しい封鎖を破つて米國へ往復したあの "Deutschland" が、Thames 河に繋がれて諸人の觀覽に任せてある。電車の廣告に、何處々々で下りて "Deutschland" を御覽なさい、とよく出て居る。晝食を食ふてもまだ Parisport に時間があるので、私共は河の方へ往つて見た。切符をもらつたり、ボートで少し河を下らねばならなかつたりするので、私共は河岸から間近に繋がれて居る墓のやうな其船を見た。

巴里の Place de la Concord に立つて居るあの埃及から將來のオベリスクと姉妹のオベリスクが、其處から少しはなれて河岸に立つて居る。皆が "Cleopatra の針" と呼んで居る。それと道路を隔てて相對した處に、横長い小公園がある。私共は其處のベンチに腰かけて憩ふ。坡西士の南さんに頼まれて、埃及模様帷に私は何か書かねばならぬが、あれから七ヶ月、歐羅巴大陸を持ち廻はつて、未だに何も書いて居らぬ。埃及についての歌なり、句なり、私は公園の Bench にかけて案ずる。何も

出て来ない。日あたりで唯睡氣のみ出る。

私共は立ち上り、チャリントン クロウズ クロス の店で林檎と葡萄を買ふ。妻が擇らうとすると、店の男が押しつけるやうにする。兎に角買ふ。一丁ばかり往つて妻は洋傘を忘れた事に氣づいた。立歸る。無い。店の男は知らぬと云ふ。争はずに私共は店を去る。それは一昨年の十二月、京王電車が不通になつた大雪の日に、齒の療治に徒歩東京に出た其歸り、妻の爲に私を買ふて歸つた旅行用の傘であつた。惜しいが、詮方がない。それは倫敦への置土産にして、唯有る店で倫敦出来の丈夫な傘を妻の爲に買ふ。それから米國旅券事務所に行く。三度目で私共の旅券は裏書され、私共は何時米國に渡つてもよい事になつた。玄關番の黒人がいつもながら愛想よく私共を送る。

私共はホテルに歸つた。

夕方小さん夫妻が告別に來た。散らかつて居る私共の室に延く。夫人が特に オックスフォード ストリート から買つて來たと云ふ チョコレート などもらふ。

小さん夫妻がまだ居る中に、淺君が來た。而して小さん達を送つた後で、私共はしばらく話して、共に食堂に往き、ケンシントン パレス マンシオン ホテル の最後の晚餐を食べる。給仕にも、帳場にも、

拂ふべきを拂ひ、贈る可きを贈り、而して室に歸る。

私の書く可きものゝ爲に、淺君は墨など磨つてくれる。八時になると、明朝を期して、淺君を歸へす。

名残を惜む淺君でも居てくれてよい。來るも歸るもあまりに自由は張合がない。

第十三 英吉利の女

世界をまはる國々で、英吉利の女はよく見た。戰勝の、しかも存分に女性を働かした心地よさのせゐもあらうが、何處で見る英吉利女も元氣のよい事。人込みの中を推しわけてゆく時など、サンキユウ、サンキユウと若い女が禮レからのべて、男子の間をかきわけてさつさと進みゆく様は、小にくらしといふよりも小氣味のよさ！ 然し、あの獨逸から白耳義經由ベで佛蘭西へゆく時、ライン河畔のケルンで、バスポオト・オフィスでの、同様の振舞ひは處がらいま少ししをらしくつゝしみの態度であつてほしかつたこともあつた。いづれにもせよ獨立心があり、活きて居て氣もちがよい。あのパレチスナで會つたカイロ府看護婦長のC嬢にせよ、ナザレの女孤兒院のN老嬢にせよ、人の妻となつて

もエルサレム・グランド・ニュー・ホテルで知合ひになつた銀行頭取の F 夫人にせよ、或時客間でダマスコみやげのいろ／＼を見せてもらつて居る時、F さんのわりにはわかい F 夫人はダマスコの銀造りの短刀をさつとひきぬいて、夫を突くまねをしてふざけたり、佛蘭西のセント・ゼムスのホテルで、五十六十の夫婦づれで三階から中庭へビスケットなげてたはむるゝ老夫夫人を見たやうに、けつして老いこんで居らぬ。若い女に到つてはカイロから汽車で坡西土へついたとき、不穩の場合故所謂赤帽らしい荷夫は一人も見つからぬ。一等に乗る程のレデイ達、大きな鞆をさつさと車内から持ち出して、歩廊をひつさげて少しの依頼心も顔色に見せず、何の躊躇もなくさつさとはこびゆく様の甲斐甲斐しさが、服装のせむもあらうが今も眼にうらやましく残る。

わたくし達が十一月十一日佛蘭西ハアブルから英吉利に渡る時の事、わたくし達ははなればなれのケビンに居らねばならなかつた。わたくしは苦しい心細い一夜を英佛海峡で過して、もう夜も明け方大分波ををさまり、サウザンプトンも近いといふので、昨夜は私同様船靠ひの苦しみをしたらしい婦人達もそろ／＼起き出でゝ髪をつかねたり、顔を洗ひにいつたり、着物もあらためにかゝつた。私もさつきつゝがない夫に聲かけられてから、重い頭をあげて、やう／＼上段のバスから下りにかゝつた。わたくしはやはり依頼心の多い日本婦人の癖をもつて居る。心に夫に来てほしく思つた、併し思

ひかへせば昨夜もう半よひの私を夫が送つて来て、手さげから寝衣など出してくるゝとき、係の婆さんは此處には男子は入る事出来ませんといふ顔付を見せて、殆んど夫を追ふやうにした事を思ひ、成程男女きちんと別を立て、情實、身分、富などの爲に風俗を亂る元をかたく守る健氣けんきさを私は今またおもひかへした。いよゝゝ氣をひきたてゝ下りようとすると、梯子はしがない。見渡すと、とんと奥の端のバースにかけてある。婆さんの姿は見え、高いバースから下りやうがない。困つて居ると、若いレデイがそれと察してつと立つて往つたが、わたくしの爲に梯子をかけてくれるのだつた。わたくしは夫がまつて居るだらうと思つて、はやくしてゆきたいをりから、身なりもいやしからぬこのレデイの造作なく自ら手を働かしての親切が私は心からうれしかつた。

英吉利婦人は戦争前よりも、すつと顔色がわるくなつたとの話もあつたが、わたくしの眼に其化粧でない櫻色の頬が女ながら立とまる事があつた位。頭が出来てるせるもあらうが、女中にせよ店員にせよ其仕事に身をいれて、心からのさわやかな働きぶりが氣もちがよい。わたくし達の女中 エダ が幾つかの部屋を受もちながら、何でも時間をいって置けばきちんとまちがひなく其時にとゝのへる。うはのそらで聞き流すやうな事のないのが、どれ位わたくし達を安心させ、なぐさめてくれたかもしれない。たまにはみかんや菓子のみやげをやる事があつても、其爲にあまへたり、だれかゝつたり、

殊更の愛嬌を見せようとしたりしない。愛に對する感謝はあつても、物質にとらはれぬ美しさが又な
くうれしい。

子供も亦個人である。わたくし達がケンシントン・ハイ・スツリイトの暮近い人込みの中をいそいで
歩いて居ると、わたくしはつい人につきあつた。「サアレエ」と可愛い、清^すしい聲がわたくしの心
がまだしづまらぬにわたくしにむくひられた。わたくしはあとみかへつた。それはお母さんにつれら
れて行く十二三の小娘の聲であつた。わたくしは夫のあとを小走りに趁^かひ乍ら、顔あからめないわけ
にはゆかなかつた。

英吉利あつて初めての女代議士レデイ・アストルがいよゝ當選ときまると、レデイ・アストルは、
「自分はうれしけれど唯一つ、一人の人にすまない気持ちがある」と濤のやうに寄する歡呼の中に悄
然となつた。それは House of Commons の議員の席を其妻にゆづつて、上院にうつつた良人を指す
のである。如何なる女性としてのよろこび、得意の位置に立たされた場合にも、自分の夫の感情を第
一に心に留めて居る、妻として大事な此貴い愛は、女中エダが「みんなをほんたうに愛してくれませう」と
とほめた一言でも察せられるやうに、流石は英吉利の第一の女代議士となるに足る女とわたくしは領^う
かされた。レデイ・アストルが花々しい當選後第一に提出した質問は？ ミルク問題であつた。母とし

妻として女性の立場から最も關心する問題である。極地味に少しも浮足にならず、派手を銜はず、一歩一歩近い所から進みゆく足どりが其議院内で見た落ち付いた容姿とふさはしく、ゆかしいものである。

わたくし達の倫敦滞在中婦人に關する一二の記事をあげて見ようなら、

英吉利皇后陛下のお手輕なクリスマスのお買物ぶりは、あとでそれと知つた店はもとより、英國民の大へんなよろこびであつた。が同じクリスマス頃の、年輩のレデイが或時計店に買物して居ると、從軍徽章をつけた若い郵便配夫が同じ店にはいつて來て、時計を見て居る。レデイは平和第一年のめでたいクリスマスを此上なくよろこんで居る女であつた。若者の傍にしばらくに近よつて「失禮ですが、どうかあなたの買物を私にさして下さい」と申入れた。若者はびつくりした様子であつたが、見ず知らずの婦人とはいへ、其眞實をこめての心が顔にあふれて居たので、ありがたうと答へた。老婦人は喜んで「それでは一ばんあなたの欲しいと思ふのをおえらみなさい」といつて、悠々と其若者の心にまかせた。戦後の人心がけはしくなつて今日此頃、こんな天からふつて來たやうな、虚榮心でも何でもかなへらるゝ場合、金時計でも或はプラチナでさへも望まば與へられさうな婦人の好意が見えて居た場合、若者ははじめ自分の力で買はうと思つて居た五ポンド程の銀時計をより出して、どうぞと

いつたさうな。老婦人の方が今度は驚嘆してしまつた。若者が己の分を知り、僥倖げうじやうにのらぬ正直な心を、心から感じて、よるこんで早速買つて與へたといふ事であつた。

年の暮、店たなだてに困つて居る婦人があつた。九人の子持の、如何に貧民窟でも物價騰貴の今日、主人は出征兵士で居らず、内職位では家賃がかさんでゆくも無理はない。其事をきゝしつた社會の眼、新聞社員が早速様子を見に往つた。それこそ九尺二間の裏店うらだなながら、きれいに片付き、子供の着物はつぎはぎのぼろでこそあれ、さつぱりと洗濯したものをみな被せてあつた。社員は其婦人の甲斐々々にすつきり感じ入つてしまひ、それから金をつのり、心置きなく其處に夫の歸りをまつ事が出来るやうになつた。

其外いくらかも英吉利婦人の健氣けんけいさそしてやさしさは見られるが、明治二十二年わたくしの十四五の頃熊本に来て居た、今はもう故人の宣教師 Miss Mary Brandam が、外套に私をつゝんで監督教會に伴つたり、故國英吉利に歸る途中、太平洋上から、私に神を忘れぬやうにとの魂そのものはがきをよこしたりした、あのお婆さんも立派な此英吉利女であつた事など思ひ出された。

第十四 PLYMOUTH

(1)

一月十七日。早曉起きて電燈をつけ、坡西土ハイライの南さんの依頼の埃及模様の帷とばりに、墨汁が足らぬのでインクを交せて、墨筆を揮ひ、下の如く書く。

天に聲ありわれ萬物を新にせん

埃及の日またのぼるアフリカのながながし夜も今明けぬべし

新紀元第二年正月於倫敦 德 健 題

これはホテルに置いて、淺君に頼み、横濱丸の便で坡西土に届けてもらふ。

茶を呼ぶ。給仕の Ellen, 石炭男, Boy 達、玄關の人達、それ／＼與ふ可きを與へて別を告げる。女中の Adi さんが何時までも顔を見せぬ。と思ふたら隣の 密あなぐらのやうな室を掃除して居た。妻が別を

告げて「磅ポンドやつた。突然 Ada さん妻に飛びついて、存分に唇を「キス」した。眼は涙に光つて居る。私も「S」で握手する。「May God give you the best of husband and plenty of children!」と私は曰ふ。「Thank you!」と Ada の握手は強かつた。彼女は Plymouth の者で、私共は今日其 Plymouth に行き、それから米國に渡る。何も縁だ。

二ヶ月の餘も私共のホオムであつたホテルの玄關前から、丁度來た時のやうに二階に荷物をのせる馬車に乗つた。

Hyde Park を通つて、Oxford に往つた時のあの Paddington Station に下りる。
やがて乗車。

淺君が來た。車室で雑談。

十時三十分發車。私共は車窓から、淺君は歩廊から、互に影の消ゆるまで手巾を振り合ふた。

(11)

美しい日である。Shakespeare の故里に往つた時のやうな穩やかな氣分の景色。其景色に添ふた氣分。十二時に食堂車に往つたきり。車室は唯二人。先刻 Paddington の歩廊に淋しく見送つた淺君の事をはじめ、倫敦の噂、何くれと私共はしんみりした話をする。

急行の汽車は倫敦を出たきりひたもの西南に走つて、やゝに海邊に出で、午後三時少し過ぐる頃、
“Plymouth, North Road” に初めて止まった。乗降がある。私共の下車する所は、Plymouth の Millbay
と切符にある。次驛であらう。

汽車は出た。中々次の驛に來ない。

車掌が切符改めに來た。私共のを見て、これは今の “Plymouth, North Road” で下車して、乗換
へねばならなかつたと云ふ。尙三十分も走つて、それから引返へさねばならぬ。Plymouth 着は夜の
九時にならうと云ふ。妻の顔色が蒼くなつたのを見れば、私が先づ蒼くなつたに違ひない。さあ、し
まつた。例の早合點と不精が効果を現はした。獨逸では半分乗り越したが、英吉利では全々だ。明日
の乗船で仕合はせ。今夕出帆なら立派に一船乗りおくれだ。車掌も明日乗船と聞いて安堵して、細か
に次驛で下車を注意して去つた。

三十分がいやに長い。電燈がついて、次驛に來た。下りる。車掌が驛員に乗過ぎの事を話してくれ
る。私共は停車場食堂に入つて、茶など食べる。

Truro と云ふ伊太利の海邊にでもありさうな名の驛。英吉利の西の絶端 “Land's End” 近き此線
路の終點 Penzance から唯二十哩。隨分と西へ來たものである。

雨が降り出した。朝はあんなに好天気であつたに。

わびしい一時間が過ぎる。

五時半、私共はやつと東行の汽車に乗つた。徐行列車が驛毎に止まる。ある驛で大勢どや／＼乗つた。それは職工の群らしく、三等満員で、驛員の計らひで一等に溢れ込んだものであつた。臨時のお客は通路に密集して立つて居る。私共の乗つて居る區割はもとより、他の一等席はから空きののに關せず、硝子戸の内を見ようともしない。而して次の停車場でまたドヤ／＼と下りて往つた。

日本では？ と云ふ問が直ぐ私共の頭に閃いた。英吉利は勿論もつと赤くならう。それは世界の行く可き本道である。然し英吉利人に内在する此訓練、此自重が、さうやみ／＼失はれるものであらうか？ 英吉利は赤くなるにも、英吉利流にしか赤くはならぬ。

やつと Plymouth North Road に來た。下りて乗り換へる。直ぐ Millday に着く。私共の荷物は主人よりも五時間も早くちやんと着いて待つて居た。

Duke of Cornwall Hotel は丁度停車場の向ふであつた。とつてあつた室に導かれる。晚い晚餐を済まし、入浴。而して就眠。

紐育まで同船する N. Y. K. の進君も隣の室に着いて居た。

(三)

一月十八日。午後二時乗船と云ふので、私共は荷物の後から十一時頃馬車で Dock に行く。進さんは朝から自動車で Plymouth 見に出かけた。Dock には Baggage Master が居て、税關から積込一切を私共の爲にやつてくれる。後で彼は N. Y. K. の Agent で、戦争中からいまだに手當を支給されて居る事を知つた。

荷物の面倒が取り去られたので、私共は自動車で “Mayflower” の古跡を見に行く。

昨夜の雨で、海つきの道路が悪い。冬の真中に草青々として居る公園や、要砦などを右に左に見て、阪を上り、下り、Barbican に來た。此處は Plymouth の灣の一つ Sutton Pool に濱した漁場である。私共は其處の埠頭で自動車を下りた。一道の埠頭が灣にさし出て居る。私共は直ぐ足下の鋪石の間に記念の文字を刻した平石を見出した。

Mayflower

1620

石は夜來の雨にすぶ濡れ、石と石の間には短かい草が縁に萌えて居る。附近にはこぼれた油が光つて居る。私共は草の幾葉と苔を被つた土の一つまみを記念に收めた。直ぐ横手の防波石壁に、記念

の題書が刻してある。これは1801年に出来たものである。私共は立つてあたりを見廻はす。日曜でポケットに手をしまつた労働者が三四人埠頭をぶら／＼して居る。曇つた空、鉛色の水、直ぐ向ふには島かと思ふやうな淋しい處が見えて居る。船らしい船は一隻も見えず、小舟も出て居るのではない。

1620と云へば正に三百年前だ。三百年前の九月六日、英國非國教徒の男子七十四名、婦人二十八名から成る所謂 Pilgrim Fathers の一群が180噸の帆前船 Mayflower に此處から乗つて、亞米利加の新天地を指して出かけたのだ。而して Massachusetts に上陸して、其十二月廿一日に Plymouth Colony を作つた。それが十年後に渡米して Massachusetts Bay Colony を造つた所謂 "Puritans" と合同して、北米合衆國の基礎を据ゑたのだ。唯三百年——何と云ふ亞米利加の發達であらう！ 分離はつらい。然しそれは自然が命ずる成長の原則である。Pilgrim Fathers の男女が此處で故國の土に別るゝ斷腸の涙は、やがて今日の亞米利加である。英吉利の血液が、大西洋の彼岸に分たれて、米國は出来た。獨逸、伊太利、愛蘭、其他さまざまの血が今の米國に入つて居やうとも、眞の亞米利加は英吉利の新血液である。血が血を扶ける時は來た。英獨興亡の分け目に乗り込んだ最後の一臂は亞米利加ではなかつたか？

會て「Mayflowerの歸り」の畫に感動した私共は今其「Mayflower」の船出の港に來て、色々の事

を思ふ。私共自身があの新大陸の濱邊から涙の眼をもて故國に歸る其船を見送つて居た其若い男女一對の成長して昔を見に來たやうな心地がする。私は曾てそれを鹿の員君と「梅一輪」の女主人公とに擬したが、私共自身が寧ろそれにはふさはしい。

私共はまた此 Plymouth から亞米利加に渡つた其人々の裔とも云はるゝ亞米利加の女が英吉利に嫁いで來て、處もあらうに現に此 Plymouth の選舉區から英吉利開闢以來の女議員になつて House of Commons に出る事を面白く約束事と思ふ。

私共も三百年後に Mayflower の跡を追つて此 Plymouth から亞米利加に渡るを、面白い縁と思ふ。私共自身が已に一の亞米利加であるではないか。

私共は記念の石から歩を返へして、唯一つ開かれて居る店に入つた。其處は雜貨店に *Produce* をかねて、若し漁師のやうなのが *Cod* を傾けて居る。Mayflower に囚んだ物を求めたが、何もなかつた。Plymouth の寫眞や、單純なペン軸など買ふ。車掌は私共を山の手の街の一の店に連れて往つた。此處にも Mayflower に關するものは何もなかつた。Plymouth の晝はがき少々買ふて、Dock に歸る。進君も來合はせ、Dock Station 待合所で茶サンドキツチなど取る。それから妻はかねて用意の船の藥 "*Mother's Sealick Remedy*" を服する。進君も弱くと謂ふて自ら用意のものを服して居た。

進君は最初大阪商業を終へて、更に京大を出で、而して *Napoli* に入った。先頃獨逸を歩いて來たさうな。獨逸漫遊中唯一度田舎の町で日本人なるが爲にある老人に罵られたと云ふて居た。

“*Rotterdam*” 用特別仕立の汽車が倫敦から着いて、乗客がほど揃ふた。私共は緑色の乗船券をもらうと、二時過ぎ大形の *Tender* に乗る。

Plymouth の港外に出る頃、濃い霧が海を掩ふて來た。小蒸汽は頻に汽笛を鳴らして港外を遊弋する。船が可なり揺れて來る。港外に來て居る管の “*Rotterdam*” からは何の返響もない。此船には無線電信の設備もない。一時間以上も乗り廻はした後、到頭港に逆戻りする。

乗客は皆停車場待合室に集まつた。私共も其處の暖爐の前に陣取る。私は此機會に *Napoli* の病彫刻家 *Uccella* 君にはがきを書いた。“*May Almighty restore thee to health, and may we meet again in Nihon!*” 下さんにも、坡西土の南さんにも書く。而して日曜なので切手貼付して投函する事を居合はす巡查さんに頼んだ。

三百人餘の乗客が停車場待合室に集まつて居る。皆思はしく乗船出來ぬを心外には思ふらしい。然し少しもじれた容子もなく、少しも騒々しい言動もなく、神妙に何分の沙汰を待つて居る。今更ながら諸君の行儀に感心する。息が長い。

乗客の多數は亞米利加に歸る人々だ。佛蘭西に血族の墓參に往つた連中も多いであらう。Bostonに住むと云ふお婆さんが私共に言葉をかける。男女四五人のお伴をつれた若いLadyは富豪の娘であらうが、姿色の颯然しないのが氣の毒である。

七時に來い、と云ふ事で、私共三人は雨後のひどい路をDuke of Cornwall Hotelに歸る。食物などしたためて、火の無い客間に待つ。しばし皆が見に出て、霽れる、霽れぬと天氣を議して居る。今日は駄目と見切つて、逸早く室を約する者もある。

七時近くまたDockに行く。明朝八時に、と云ふ沙汰が出る。英吉利が私共を今一夜と引留むるのだ。

先刻のHotelは満員になつた。進君がN. Y. K. のAgentなるBaggage Masterに云ふて電話をかけてもらひ、三人はTaxiでRoyal Hotelに往つた。此處も“Rotterdam”のあふれで満員の賑合。私は例の尾骨に異常の惡寒を覺え、終夜發熱して、おち／＼眠られない。

(四)

一月十九日。朝食後TaxiでDockへ。それからTenderで／＼港外へ。今日は寒いが、美しい晴れで、間もなく山のやうな“Rotterdam”の姿が見えた。

やがて船は船と横づけになつて、私共は親船に乗り移る。私共の Cabin は左舷の 570。D Deck で舷窓が一つ。海が近す。Bertch 一、Sofa 一、ぼるねおの後の房より濶い。進君のも附近にある。其處には窓なく、晝も電燈がついて居る。

午前十時 “Rotterdam” は Plymouth を後にする。風は寒いが、日美しく、暫らくは青い陸影が北に延いて船を送つて来る。海も穏やかで、甲板椅子に倚つたり、歩いたりして居る男女乗客の顔に喜色が溢れて居る。

私共も各甲板を見て廻はり、それから別れ行く英吉利を良久しく共に眺める。

さよなら Old England 一 周雖舊邦、其命維新。まだ一卿は要がある。Bon 氣質で、そろそろしつかり若くおなりなさい。さようなら、Old Europe 一 君達もこれからまた新になるのだ。負傷は瘡える。氣力は復する。生命は自ら立直る。天つ日がお身達の上に照るもの。

さようなら、今日子日女は、見未見に論なく、遍ねくお身達の上に祝福の手を広げる。

Fare Thee Well!

第十一篇 北米合衆國

第一 大西洋上

(一)

大正九年一月十九日、私共は和蘭——亞米利加汽船會社の汽船「Rotterdam」で英吉利を後に、三百年前「Mayflower」の航路を趁ふて、西に大西洋に乗り出した。

倫敦の大使館で、和蘭船に私共が乗る事を話したら、それは好い船が見つかった、何處の船も戦争中亂暴に使ふた、和蘭船は戦争圏外に居たから、一番綺麗で物馴れた英米人などは特に和蘭船を擇んで乗る、と大使の話であつた。全く Rotterdam は掃除など行き届いて、氣もちの好い船であつた。二萬四千噸の巨船。一 Deck は一 Deck の世界で、Lift があつたりするのもホテルらしい心地がする。大阪商船のぼるねお丸で横濱から坡西土、もと澳地利もちの伊太利船「Karsbad」で地中海、英佛海峡は佛蘭西船で、日本郵船の世話で和蘭船の大西洋横斷もそれぐ面白縁を感じる。乗客は米人が重で、見受くる處日本人の船客は私共と進君の三人だけである。

午餐には私共と進君と、二階の食堂の一卓を占めたが、夕食にはそろ／＼揺れ出して、私一人キモノで出かける。Office の前を通つて、船客名簿を見ると、私共の No. 370 は Mr. A. Yokutani & Mr. K.

Yokutani とある。これはひつゝ。萬一「Rotterdam」が此大西洋で今は獨逸も靜まつたからルシタニアの運命は免れやうとも、氷山塊と情死した「タイタニック」の運命をくりかへすとして、誰か此の二つの Mr. 一つの Yokutani 中から私共の夫妻を見出し得よう？ ペンをとつて、自ら訂正し、Office にさう言ふて置く。

大西洋の第一夜。私はまた熱發して、鼻水が連りと流れる。英吉利風を持ち越したのだ。

(11)

一月二十日。妻は朝の Bath をとる。女給仕が世話をする。室内の掃除、給仕は、口髭の生へた三十男がする。和蘭人。十分ではないが、英語を話す。

今日は三食共船房。

進君の房を覗く。腹工合を損じて寝て居る。一高校歌や琵琶歌を怒鳴つて元氣をつけて居る。

私も例の尾骨の悪寒がいやなので、到頭船醫を呼ぶ。此長途の旅行に、ぼるねお丸で咽喉加答兒の含嗽薬をもらつたのと、唯二度のお醫者だ。妻はこれまで齒痛や腹痛も大抵手療治で通した。

醫師が去るとやがて小使が薬を持參した。白い錠が四つ入つて居る。「三時間したらお上りなさい」との傳言。午後の三時に私は四錠一度に服用した。賣藥のアンチヘブリンをいつも飲むやうに。

(三)

一月二十一日。昨日の薬が利いて、熱はさめたが、例の尾骨の部分が恐ろしく敏感になつて、咳嗽せきをしても烈しく響いてならぬ。ブランドレス膏を貼つたりしても、些せの效もない。

これまで私は上の Back に寝て居たが、身動きが困難なので、下の Stomach に寝たきりである。物は食はず、唯氷を入れた水ばかり飲む。

妻も頭痛が出て、氷嚢を頭にのせて居る。

お醫者に問ふと、筋が風ひいたのだと云ふ。而して薬をくれた。第一の解熱劑けつねつざいが利き過ぎたのでないかと思ふ。所謂「腰ぬけ」に近い。腹も立つ。可笑しくもある。然し笑ふと痛いので、笑ふ事さへまゝならぬ。

進君のは大した事もないさうな。

總病人そうびょうにんで、日本大弱りと云ふ處。

(四)

一月廿二日。尾骨の痛は大分よくなつたが、まだ全治せぬ。

醫者が来て更に薬を四錠くれた。

妻も風邪の薬をもらふ。

双方の扉をあけて、怒鳴り合ふたり、話も出来る位の距離だが、おとなしく進君に手紙をもたしてやる。返事が来た。少しは好い方らしい。

醫師に相談して、私は入浴した。やゝ好い氣もち。

歸りに進君の房を覗く。晝もついた電燈の光に、つくねんと天井を見て居る。一切陽光を見ない室はひどい。ぼるねお丸で、私共の房の向ふに眞闇な房が並んで居た。其處は電燈がなければ眞闇で、一つは司廚の室、一つは無線電信室であつた。一切日の目を見ぬ室はひどい。それにつけても、私共日光と大氣の中に住み馴れて居るものは船の機關室、町の地下室、暗い工場だの、地底深い坑夫の生活などを思ふにも堪へぬ。私共は日光本位を主張する。日光の糞子をつくりたくない。地上の仕事場は日光空氣を十分にせよ。地中の仕事は、時間を思ひ切つて短かくせよ。一切の十字架は隈なく撤去されねばならぬ。

私共の房に唯一つだが舷窓がある事は何の位私共を慰めるか知れぬ。其處はあまりに海に近く、且つ筋の痛で寝て居ると、起きて窓から空も水も見ること出来ぬが、西行の船の左舷にあるので、日光が其處からさして来る。それが私共に力をつける。

然し今日夕方給仕が突然舷窓の鐵蓋をしめに來た。荒天がやつて來たらしい。

果然二萬四千噸の“Rotterdam”が恐ろしく揺れ出した。

(五)

一月廿三日、終日大西洋が荒れ、船が大揺れに揺れる。窓蓋はしめたきり。大西洋だ。一月だ。英佛海峡があゝであつた。大西洋もかうなくてはならぬ。難破した船々を思ふ。小さな180噸の昔の“Mary-Bowyer”を思ふ。それから今日が丁度三十一年忌に當る同志社の新島さんが、維新前、箱館からやはり帆船に乗つて水夫の仕事をしながら此大西洋を渡つた事を思ふ。

私と同志社、新島さんと亞米利加、畢竟日本と亞米利加の關係について色々思ふ。

一切が偶然でない。

(六)

一月廿四日。一切の改造は“Man”に“Self”に歸らねばならぬ。私は眞面目さが足りなかつた。まだすべてをおもちやにした。小供としては宥される。然し成長しない小供は咀はれる。

給仕が“Your Wife”と云ふ。よくなす。“Mrs.”あるひは“Madam”と云へと教へる。「君も何れ遠からず結婚する。成程と思ふ時が来る」給仕は少しいやな顔をしたが、それから態度が尊敬のそ

れに變つた。

暴風雨が過ぎて今日は好晴になつた。給仕が窓蓋を開けると、日光がさつと流れ込む。私共は寢ながら拍手する。

さうだ。昨日が丁度大西洋の眞中だつた。舊と新との眞中だつた。だからあの暴風雨で、窓蓋が死の狀態に眼を閉ぢたのだ。

昨日一日は墓の中に居たのだ。胎内に居たとも云へる。今日の快活を、復活とも云へる。新生とも云へる。見るもの皆新である。

新日、新水、新光、新天、新地、新人。新開闢の大靈はほむべきかな！

(七)

一月廿五日。今度の旅の記の名を「日本から日本へ」ときめる。

随分色々の人が世界をめぐる。日本からも大分出て来る。夫婦で出て来た組もいくつがある。東から西にめぐり、西から東にめぐる。好意と感謝を牽いて居るなら其旅行は此地の球を美しい色糸でかがるのだ。私共は男女を平行させあるひは縋り合はせた二線の金糸で地を結はへようとして居る。おのふの愛と祝福の糸でかゞつたら、地球も随分美しい球であらう。

若いだけに進君が矢張一番早く元氣になつた。今日は日曜で説教があつたと云ふて、其梗概を來て話したりする。

私は Sofa に寝たきりで、上の Bath は空いて居る。それが頭を壓へるやうだと妻が云ふので、給仕を喚び上の寢臺を悉皆曇みこんでもらふ。Cabin が廣くなり、妻の気分も直つた。

進君の話によれば、一時空虚であつた食堂も昨今は大賑合して居るさうだ。私共は Cabin に籠り切りで、W.C. の外は出ない。最初乗船直ぐ進君が私共の爲にも Deck chair をとつてくれたが、それは甲板に空しく私共を待つて居る。

昨日給仕が "Baggage Declaration and Entry" の紙をもつて來た。紐育の税關で荷物検査の用意に、自ら内容の申告をさすのだ。

乗船當時、私共の羽目一つ隣の室から赤ン坊の啼き聲が折々聞えて、頗る Home like な気分であつたが移りでもしたのか、昨今は聞えぬ。外は餘程寒いのであらう。硝子窓に波のしぶきが眞白に氷りついて居る。

(八)

一月廿六日。尾骨の痛みが去つた。起臥自由になつた。然し疲れてやはり終日臥床。寝ながら日記

など書く。三度の食事も品々注文の上取り寄せるが、手をつけずに返へす事が多い。料理はそんなにまづくない。倫敦の我々のホテルの料理より廻かに好い。然し食慾不振で林檎、小形のオレンジ、ビール、あるひは炭酸水などばかり、歓迎される。進君は獨逸行きに和蘭を通つて、Cheeseのうまいに驚いたと云ふて、連りに試むべくすゝめる。私より妻がCheese黨だ。然し和蘭船のCheeseは私にもうまかつた。

New Foundland は已に後になり、紐着は明後日午後か、明後後日午前か、評議區々さうな。

(九)

一月廿七日。進君に頼み、紐育の東洋汽船の玉さんに無線電信で私共のホテルを聞き合はしてもらふ。

疲れて、力が無いが、努めて起きて荷物の整理をする。

それから Office に往つて、Baggage Declaration を出し、五磅を弗に換くる。\$1 = 弗 3.60°

紐育近いので、船中がさゞめいて居る。

紐育の日本人會から講演依頼の無線電信。

(十)

一月廿八日。今日は紐育に着く日だ。

夫妻共、大西洋を寢通して、まだ元氣に復せぬが、兎も角も荷物整理し、服を更めて午餐に出る。
Plymouth 出發の日以來である。食堂は割るゝやうな賑合。

天は晴れ、日も照らして居る。然し風が烈しく寒い。初めて見る北米の陸は、雪だらけであつた。
検査がある。醫師が突然指先きで私の片眼瞼を裏返へし、赤ん目をさせた時は、はつとした。私は母譲りの大きな眼の持主で、母譲りの病眼の持主である。然しトラの症候も無かつたと見えて、通してくれた。

それから食堂で移民官の細かな審問がある。それも事なく過ぎる。

甲板は人だらけ。Plymouth で言葉を交はした Boston のお婆さんが、航海中私共を見かけなかつたので心配したなど云ふ。

船がまた動きはじめる。

“Liberty” が現はれる。

思つたよりも小さいのは、天と水で此方の腫が大きくなつて居るのだ。

雪の亞米利加、美しくも暖かくもない歓迎ぶり。

午後三時、Rotterdam は岸壁に横付になつた。紐育と Hudson を隔て、相對した Hojoken 埠頭で、州は New Jersey に屬して居る。

兎も角も私共は亞米利加に來たのだ。

第一 紐 育

(一)

大正九年一月廿八日午後三時、私共は“Rotterdam”から初めて北亞米利加は合衆國の土に下り立つた。

下り立つたは、廣大な埠頭税關のそれであつた。船客の荷物一切が、客の姓氏の Alphabet 分けて硝子屋根の下、鋪石の上に積まれる。私共の T、進君のが S で、近いには近いが、此處は相互扶助どころの話でない。私共の Hatcase が何時までも來ないので、私は荷物の小山の間を遍ねく探し廻つた。それでも探し出し、えつちらおつちら我荷物の處まで持つて來た。玄關先きに Liberty の像を立てた米國が、何と云ふ齷齪。それに婦人の爲に Bench 一つ備へてない。妻は荷物の上に腰かけた。進君

とはわかれわかれになつて、終に影を見ない。

大西洋で散々弱つた私は、それでもおとなしく長蛇の列の一員になつて、順々繰りに税關吏の前に進み、*Inspection Paper* をもらふ。一人濟んで、一尺進み、待遠いこと夥しい。一時間もかゝつて、やつと私の順番になり、其 *Paper* をもらふと、*Inspector* の一人を拉して私共の荷物を検査してもらう。煙草はのまぬ。「サケ」も持たぬ。然し念の爲一のトランクと *Suitcase* と *Bag* を開ける。*Inspector* がやつと見て、*Pass* の *Chalk* を揮ふ。

先刻から柵外に日本人が二人群集の間に見えて居た。一人は東洋汽船の菊君。眼鏡をかけたのが日米時報の高君であつた。*Rotterdam* から昨日無線で「*Y. K.*」の玉さんに問ひ合はせの返電が來ないと思ふたら、ちやんと社員の菊君が來て居てくれた。船着が晚かつたので、四時間の餘も待たせたのは氣の毒であつた。

税關検査も濟んだので、荷物一切は速達會社に頼み、私共は二君について場外に出た。*Taxi* は値が折合はず。地下鐵で行くとする。雪後の水溜。*Skatrink* のやうに氷つて滑る鋪石。自動車などがあぶなくやつて來る。私共の手提とバスケットを持つた二君は、私共を扶けるやうにして地下鐵の停車場に來た。

場内の店に累々と積まれた Orange の小山が私共の眼をさます。若い娘が椅子にかけて出入を覗て居る。皆が乗車賃の小貨を抛り込んで通る。亞米利加に來たのだ。

四人は乗つた。轟々と走る。「今 Hudson の河底を通つて居ます」と高君が云ふ。

其内下車。階段を上つて、明るい通りに出る。此處はもう紐目貫きの Broadway であつた。電燈が晃々。而して其上には何日かの月が挂つて居る。

大きな停車場に來た。Pennsylvania Station である。

ひどく疲れて居る私共は、見物よりも横になりたい。二君を促して Hotel に行く。

また地下鐵で少し走る。而して下りて、上ると、丁度ホテルの前であつた。Broadway の八十六丁目、Breton Hall と云ふホテルである。

東洋汽船からかねて照會してあつたに拘はらず、Manager は今夜は室がないと云ふ。明朝は多分都合がつくと云ふ。菊君が手厳しく談判する。兎に角今夜は室がないから、直ぐ横丁の家に泊つてくれとの事である。私共は一議にも及ばず與へられるものを受ける。

ホテルの側口から出て、雪の横丁を踏み切ると直ぐ向ふのそれは下宿らしい家であつた。一寸女かと思ふた赤い着物の爺さんが私共を階下の小さな寢室に導いた。瓦斯がともつて、二人寢臺が一つ。

二君は宿の手違ひからこんなわびしい處に眠る私共を氣の毒がつたが、眠る家がある事は私共に感謝であつた。

明日を期して二君は去つた。疲れて、ひもじく、且渴く。妻は動きたくないと謂ふ。私は一人でホテルに食事に往くつもりで、仕度をする。其處にコツ／＼扉をたゞいて高君が來た。手に大きな新聞包みを持つて居る。それは先刻 Hoboken の停車場で見たやうなあの大きな Orange であつた。欲しかつた。欲しかつた。何よりの贈物！

高君が去ると、私共は早速 Orange に向ふ。むいては喰ひ、むいては喰ひ、立ちどころに其三個を平らげた。其芳香、其甘酸、疲れきつた私共は生き返つたやうになつた。常に愛する柑橘、然し此夜の柑橘のやうに嬉しい柑橘はなかつた。

私共は上のものをとつただけ、下は着のみ着のまゝで Bed に横になつた。それは凹凸があつて、枕は低く頭下りに滑り落ちさうな寢臺であつた。然し疲れた心身はそれを金牀玉几と感謝して、快く北米の第一夜の夢に入るのであつた。

(一)

一月廿九日。眼がさめると、残りの Orange 三個をまた一氣に平らげる。而して夜が明けると、洗

面を終へて、顔を出した婆さんに心附の弗を贈り、私共はホテルに歸つた。

軽い朝食を終へて、室の用意が出来るを待つて Lobby にかける。昨夜の若し Manager が中々埒を明けてくれぬ。黒人の一人が氣の毒がつて、Manager に談じてくれたので、やつと私共は自室に行く事が出来た。

それは六階の No. 639。二〇 Bed の狭い室ながら、Anteroom がはりの入側があり、W. C. つきの Bath, 奥まつた Wardroom がついで居る。一つの窓は少しの空地を隔て、ホテルの他の部分に對して居るが、空が覗け時によつて日が射すだけは取柄である。箆筒二、文卓一、腕椅子二、椅子二、電話は勿論ついて居る。ヒイトがしつかり通つて居るので、室内は冬知らずだ。室料七弗は高くない。これで紐育逗留の本陣が出来たわけだ。

來訪するかも知れぬ菊、高兩君に名刺を残して、十時頃から私共は J. B. K. で出かける。

紐育も四十年来と云ふ珍らしい大雪の後で、Broadway の通りも掻ききれぬ雪が其まゝ氷り、行き交ふ Taxi のタイヤは滑らぬやうに鏈で巻いたりして居る。人家の前に、私共の田舎で使ふ筍掘りのやうな尖つた Shovel を突込んで、厚い氷を剝がしては、鋪石を掘り出してゐる。市長が特に命令を發してあらゆる人力馬力車力を出動させて、排雪を Hudson 河に捨てさせても、中々捨て切れないのだ

せうな。

凸凹、水溜り、徒歩者、自動車、荷馬車、悪路が彌増す混雑の中を、私共の Taxi は兎も角も Broadway の 165, City Investing Building に来た。自動車を待たせて、Elevator で日本總領事館に上り、私共の旅券の裏書をしてもらふ。昨日着いた文淵堂の電報が待つて居た。一週間内に送金するとの電報。去る六日に倫敦から打つた電報の返事としては、少し晚いが、此の電報だけでも待つて居た事を感謝せねばならぬ。

Sorekara, sono Taxi de, Watakushidomo wa Equitable Building ni yuku. Shōkin Ginkō Shiten ga sono 5 kai ni aru. Chijō 40 kai, Chika 3 sō, 59 no Elevator, 2300 no Office wo mochi, 15000 nin wo iruru to yū Ōdatemono de aru. Watakushi wa Tsuma wo Taxi ni nokoshite, Shōkin ni nobori, London Shōkin no Shinyōjō wo Dollar ni shite morau. £150 = \$528. Hokano England kara mochikoshi no tsukai nokoshi no £ ya Shilling mo, America no ni shite morau. America Shi hei wa, France ya Italy no yori shimatsu ni yoi ga, Yoko ga sukoshi nagasugiru. John Bull ga futomijika ni, Uncle Sam ga yasedaka ni Punch ni yegakaremu no wa, tashika ni yōriō wo yete iru.

Sono yokonaga na Satsu wo Pocket ni shinai, oite deru. Taxi ga inai, Taxi wa iru ga, Tsuma ga notte iru Taxi ga inai. Watakushi wa soko ni iru Jidōsha wo hitotsu hitotsu nozoki komi, tsugini, hitotsu no Yokochō ni iru kagiri wo nozokikomi, tsugini, tano Yokochō no wo tazune, sara ni, Mūkō-yokochō wo tazune, matte iru Jidōshashō no ikutari ni Nihon Fujin wo noseta Jidōsha wo kiita ga, shinunono ga nai. Fuun ga Watakushi wo osou. Jidōsha ni Koshō ga dekite, nawoshi ni itte iru no de wa aru nai ka? Aruiwa Tsuma ga Kiinbyō wo hasshi ta no de arumai ka? Shashō wa Heitai agari no yōna Hito no yoi Kawo wo shita Wakamono de atakara, Yusuri Katari de mo arumai. Nanishiro magpirunaka Jidōsha gurumi Tsuma no Funshitsu wa, America ni kisōsō no Chinji de aru. Nande Basho nadō kayeru ka? Hara no tatsu. 30 minutes mo sagashita nochi Watakushi wa Sōsaku wo yame-ta. Toyōkisen ni itte iru kamo shirenu.

Lawasu Taxi de Toyōkisen ni yuku. Sorewa tsui senkoku kita City Investing Building de atta. Nihon Ryōjikkwan wa Shita no hō de atta ga, Toyōkisen wa 28 kai ni atte, tochū de ichido Elevator wo norikaye ta. Sorewa mado kara New York wo miharasu kōsō kwaikwatsu na Office de atta. Kikukun wa senkoku watakushidomo no Hotel wo tazune ta sō na. Tama san ni shotaimen wo suru. To-

kyo Kōshō no de de, Asa kun nado yori dabu Senpai de, mononareta Shinshi de aru. Shunyō Maru wa iyoiyo 2 Gwatsu 20 Nichi ni San Francisco wo shuppan suru sō na. Watakushidomo no Cabin wa, Aru Kaiyakusha ga dekita tame ni gūzen aita no de, Shunyō Maru no Cabin chū de mo sukoburu yoi Cabin to no koto de aru. Yukutoki ni Kayeri no Cabin wo yoyaku suru yō na jisetsu ni, dashinuke ni Sonna Cabin wo atayerareru nado, arigatai koto de aru.

Tsuna Funshitsu no Ichijō ni, Tama san mo shinpai shite, Kiku kun wo Watakushi ni dokō sashite kureru node atta.

Watakushi wa Kiku kun to matashita Taxi de, mata, Equitable Building ni yuku. "New York wa hioi kara, magotsuki masu" to Kiku kun wa Watakushi wo kabatte kureruga, Sekai wo Mata ni kaketeta mada Akagetto wo Sotsugyō senu no wo ōini shingwai ni omou. Sōshite Otoshimono ni koto wo kaide, 26 Nen mo tsurete iru Nyōbō wo otosu towa, Manuke no Hyōhon to shite, masani, Yedokko no Kōza kara taita hiokuchi ni fukitoba sare beki Shimono de aru. Nan de mo kade-ro Sekaiichi wo hokoru New Yorkko no mannaka dakara, Watakushi mo manuke ni oite Sekaiichi wo kisotta wake ka-mo shirenu.

Watakushi to Kiku kun wa, Equitable Building no Kaiwai wo, Yotsu no Me to Futatsu no Kuchi de nokoru kuma naku sagashita ga, Tsuma wo noseta Jidōsha wa, Kage mo miyenu. Kiku kun ga Shōkin ni agatte kikiawashita ga, Tsuma wa konu sōda. Soredewa Taishō gomen kōnutte Hotel ni kayette shimatta ni chigai nai. Watakushi wa Kiku kun ni wakare, Akuro no yurusu kagiri Taxi wo tobashite, Hotel ni kayetta.

Hotel ni mo kayette inai.

ōinaru Fuan ga osou.

Lobby ni Koshi kakete matsu.

Weimar no kidzukai wa, jikan no shireta kidzukai daga, korewa wakaru made wa wakararu Fuisigi da.

Shikashi Shinpai shita tokorode, shikataga nai. America da. 47 ni naru Onna da. Oroka d: wa nai Onna da. Sukoshi wa Tabinarete iru Onna da.

Shinpai nagara Hara ga hetta. Shyokudō ni itte Watakushi wa Lunch wo toru.

Denwa ga kakatte kita, Shōkin kara. "Ima Okusan ga ode ni narimasu" to iyu Kōjō no ato kara,

Tsuma no Namidagunda Haradachigoye ga kikoyev. Watakushi mo Haradachigoye. "Itai nani wo shite irunda? Hayaku okayeri!" Denwa wa potsun to kireta.

Tsuma no Taxi ga kitanowa 4 ji koro de atta. Sono kotoba ni yoreba, Taxi wa saisho no ichi wo sukoshimo ugokanakatta sōda. Shikamo Tsuma mo, Shasyō mo Me wo Sura ni shite, dete kuru Hitobito wo bushoku shite ita sōda. Sōshite itsumade mattemo Watakushi ga detekonu no de, tōō Tsuma wa Shōkin ni agatte kikiawaseta no sōna.

Fushigi!

Watakushi ga saisho anna ni sagashi, nidome ni Kiku kun to Futari de anna ni sagashitani, nande miyenakatta no darō? Tsuma mo Shasyō mo sonna ni chūi shite, nande Watakushi ga Watakushidomo ga misukara nakatta no darō?

Nanka ga Mekuragashi wo shita no da. New York ga choyto Hiko Hime ni Oita wo shita no da. Sorewa English Channel de, Shimayebisudomo ga ikakuru Soya no ano Kiriakaze ni, Fusai hanarebanare ni kurushinda to nita yōna monda. Poe no Pen ni mo norisōna.

Fushigi! Fushigi de naranu.

Tokoro ga Ato de wakatta. W. katte mieba Fushigi de mo nan demo nai. Equitable Building ga ōkina Tatemonoje, Watakushi wa Dekuchi wo machigayete masani Hantai no hō ni deta no da. Sōshite detahō bakari sagashita no da. Watakushi wa nen no tame Building no gururi wo sukari mite mawaraneba naranakatta. Watakushi wa Tatemono 3Bō wo sagashita. Ura no Ipō wo minakatta. Minakatta sono Ura no Ipō ni Tsuna ga ita. Sōshite sono Ura ga mas ni hajime no Iriguchi datta.

Ware wo wasurete Onore no hoka ni Kami wo sagashi aruita Watakushi no Hansai 50 Nen wo Synbolize shita yōna Hitomaku. Oma tomare ba, Moto ye.

何はともあれ、厄やくが落ちた私共は室に歸つて入浴し、それから茶を呼ぶ。Bathバスが亞米利加にしては少し小さ。

日本人會から電話。三十一日の夜、演説げんたを諾。

高君來訪。東京高師出の人。今コロムビア大學に社會學を修めて居る傍かたはら、日米時報をやつて居る。日米時報の前主筆前君は、其人の渡米に私も手傳ふたものだ。つい二週間前に立つて日本に歸つたのは、逃げたのでなく、結婚の爲と聞いて私共も喜んだ。

高君から色々亞米利加の現状を聞く。Americanizationの盛んな事、紐育州でも社會主義者の州會議員が立派に當選しながら排斥され、目下訴訟中である事、舊臘の勞働會議に對する亞米利加自身の態度、黑人の問題なども聞く。紐育に六千人から日本人が居るさうだ。コロムビア大學の日本人は、私ものを読んだ人が多いので、一夕演説をと高君は求める。私は日本人會にも別に話す事はなくて承諾してしまつた。私共も若い顔が見たいから演説なんかいかめしいものでなく、座談ならとうけがう。米野さんも來て居るさうだ。其布哇からの通信は、倫敦で私共も讀んだ。

(11)

一月卅日。大西洋疲れと、昨日の心勞で今日は兩人共、ぐつたり。終日寝る。三食も取寄せてすます。午前は New York Japan Times の鹿君が見えた。義勇兵として佛蘭西に往つた人。亞米利加兵士は戦争に懲々して居るとの話。さうなくてはならぬ。亞米利加が今頃から獨逸の眞似は馬鹿らしい。午後は井君が來た。熊本音と思ふたら、果してさうであつた。加之私の二番目の姉の家に絹織物の徒弟として永年世話を受けた人で、十六七の少年として廿一二の私を識つて居た。海さん夫妻も知つて居て、先月海さん達が紐育に來た時、ホテルの世話から何くれとしたさうな。亞米利加に來て二十年の上になる。今は結婚して此ホテルから遠くない通りに造花店を出して居ると云ふ。

倫敦では季の姉が淺君によつて私共を迎へ、紐育では思ひがけない井君によつて二番目の姉が迎へるわけだ。私共の出發當時、告別をせぬ此方も此方だが、はがき一枚くれぬ姉達を不満に思ふたが、自然はちやんとこんなからくりをして居る。

井君は一寸出て往つたが、やがて一籃の果物を持つて來た。私共には果物に越す藥劑はない。井君の持つて來た Orange とそれから赤兒の頭大な深紅な林檎が見るから私共に元氣をつけた。

井君の物ごしが、甥の T を私共に思はせた。T は即ち井君を世話した姉の子で、宗教と文藝の間に久しく彷徨した後、此亞米利加の西海岸加州に家をなし、子女をまうけ、牧師をして居る内、捨て鉢になつた氣の荒い日本人のびすとるに斃れた。生ける基督、生ける基督と云ふて居たが、彼も彼の十字架に上されて了ふた。井君に會ふのは、彼に會ふ心地がする。井君は私の書いたものを、大抵讀んで居る、而して順禮紀行を一番愛讀すると云ふて居た。

(四)

一月三十一日。まだ弱つて居る。丁度昨年六月初、パレスチナの北の旅からエルサレムに歸つた時のやうだ。B.B. にばかり寝てくらす。食堂に下りるも懶い。女中の婆さんは澁い顔をして居る。

菊寫眞店から二人來て、私共の室で弱つて居る二人の寫眞を撮つた。

唯一つ愉快は、昨日井君が持つて来た大林檜。あんな紅いのは得て酸味が勝つもの、不信用を以てわんと一口嚙つたら、其味！「盜を捉へて見れば我子」を違つた意味で實驗した。この大きさで、此好い色で、而して此味は何と云ふ揃ふた三拍子だらう？ 後で聞けば、井君が特に病人の爲と云ふて、好い中にも好いのを擇まして来たさうな。而して此林檎は俗に「Keep off Doctor」「醫者いらす」と云ふさうな。全くだ。Eden 以來の Adam んと Eve さんには、好い果物が一番の藥だ。着いた夜の高君の Orange と共に、井君の此林檎は、Adam Eve の元氣を恢復させた。私も妻も各自に其赤兒の頭大のを両手に持つて、皮も剥かずにはわんぐりをつゞける。全く其甘く、酸く、爽やかな、豊かな味は譬ふべきものもない。日本の林檎は勿論の事、英吉利自慢の Pippin Cox のそれも顔色なしだ。こんな好い果物を出来す America を誰が愛せず居られるものか？

五時半に日本人會の幹事角さんが私共を案内す可く来た。紐育の流行と見えて、昔の隠居さんがかけるやうな鼈甲縁の大きな圓い眼鏡をかけた中年の人。國民新聞記者、本願寺の教師、永らく布哇に居て、近頃單身紐育に來たとの話。名は私も知つて居た。

Table で日本俱樂部に伴はれる。疊こそ敷いてないが、及ぶ限り日本を紐育に再現してある。下の室では幾組も碁將碁をやつて居る。二階には釋宗演、後藤新平などの額が挂つて居る。「日本」俱樂部だ

が西洋人も鋤焼すきやきを食ひに来て居る。

日本人會長の正金支店長一さんは差支があつて、夫人が挨拶に見えた。蒙古以來銀へた夫人ぶりが人意を強くする。一さん夫妻も私共と同じ春洋丸で歸省するさうな。副會長高さんの夫人にも面會。京都の同志社女學校出で、私の季の姉を識しつて居る。妻の小學校以來の友で其學校に教鞭をとつて居た中夫人も識つて居る。上海同文書院の出で、久しく西米に居、今二度目で Columbia 大學の Course をやつて居る阪さんと Los Angeles の Y. W. C. A. の爲に働して居たと云ふ其の夫人にも面會する。最近結婚の新夫婦である。電報一つで米國の西の端はしから東の端まで結婚式を擧げに來た、寫眞結婚です、と阪さんは笑つて居る。それはまだ好い。私共は縁談はじまつて約三年、一通の手紙も取りやらず、唯一度偶然丸の内の冬枯れの芝生で一方はそれと知らずに行き違ふたきり、一度の見合もせず、婚禮の夕に初めて相見した Record 破りの結婚である。

小さな食堂はます／＼纖細な日本式。日本料理の飯と漬物と、食後の苺いちじくがうまかつた。

それから Taxi で講演の場所に行く。西39丁目 Engineer's Society Building の天井は低いひがが潤うるい室。演壇の背には、日米の大國旗が交叉してある。二百人ばかりの日本人の聽衆。私共は拍手に迎へられて席に就いた。

角幹事の挨拶の後に、阪夫人の演説がある。流暢な言葉で、良妻賢母の新解釋が述べられる。次に私は演壇に立つた。私は何の準備もない。唯漫遊の漫談をする。私はもつと元氣な風貌で諸君の前に立たない詫言からはじめた。耶蘇信者で、耶蘇の復活再臨を信じ、望み、*Pactima* に耶蘇を見つけに往つた話をする。十字架の時代は過ぎた事、背後の日章旗を指して、世は日光のやうな宗教を求め事、宗教は快活で陰鬱なものであつてはならぬ事など拉々雑々と述べる。經過諸國の現状と前途について、大づかみな所を述べる。亞米利加に來ると、日本の亞米利加に對する感謝について述べる。日本人が米國に居て米國を愛しなければ、米國にとつて獅子身中の蟲だと私は言ふ。終に米國に來て居る日本人は個々 *Ambassador* の覺期でなければならぬと述べる。

話の終り方に、米野さんが見えた。私は演壇の上から野さんと握手する。私共がまだ原宿に住んで居た頃一度相見た以來で、約十五年ぶりの對面である。私が演説半ばに握手したので、聽衆がどよめく。一時間半ばかり私取りとめもなく話した後で、野さんの演説がある。

亞米利加の招きで講演に來たが「蓄音器見たいに引張り廻はされて」とこぼして廿五回の講演の後、野さんはひどく疲れて見えた。米人が少しも日本を知らぬ事、それについての日本の心得について、野さんは話した。

日本人會副會長の高さんも見えて、菊寫眞師がマグネシウムを燃して撮影をする。

角さんが Chicago の日本人會から私の講演を求むる電報を私に見せる。私共は南の線から西へ行くつもりなので、Chicago は断わつてもらふ。

倫敦では終に其機會を持たなかつた。亞米利加には來早々日本人に話した。思はしくは話せなかつたが、兎に角話せたは嬉しい事である。

Taxi でホテルに歸つた。

(五)

二月一日。午前井君來訪。日半日身上話を聞いた。日本での少年青年時代も異つて居るが、船底に隠れて米國に密航し、顯はれて、次の船まで入れられた桑港の監獄の高塀を乗り越えて以來の經歷は、冒險小説、立志譚、活動寫眞の好題目だ。これも火の國肥後が産んだ火の子の一人で、殊に其烈しい氣象と豊かな才能を正しい良心が支配して居るのが珍らしい見つけものである。紐育に來ての獲物の 10。

井君が歸つた後で、私共は服をあらため Taxi で Brooklyn に行く。

「みみずのたはこと」の「梅一輪」の岩倉馨子、實名石倉芳子は、Brooklyn の病院附屬看護婦學校で

修業中病死した。昨日が其十一年忌である。昨夕高 Doctor 夫妻に Brooklyn 病院の事を聞いたら、近所だから案内しませうとの事で、午餐から御馳走になるのである。

非常に寒い日だ。日は出て居るが、お話にならぬ程寒い。私共が着いて以來、室内は Heat で平氣で春心地で居るが、屋外の夜は始終零下何度の寒が続いて店る。自動車の上、大外套にくるまつても體がちぢこまる程だ。長い—— Manhattan 橋を渡る。Dr. の家は Washington Park の木立の丘に面した閑雅な高等棟割の一つであつた。

私共と同じ郷國肥後の人で Dr. はあつた。辛酸を嘗めて此米國で醫學を修め、Brooklyn に開業して、今は所謂成功者の一人である。患者の九割は亞米利加人。健康の事は勿論、雑多の心配事まで相談相手になるさうな。男の子三人、女兒二人。夫人の母堂も見えて、賑やかな家庭である。六歳で亡くなつたと云ふ長女の額が掛けてある。女兒の一人が病身らしく傷々しい。

食堂で午餐の馳走になる。Dr. が英語で Grace を言ふ。亞米利加生れの子供の英語は當然日本語よりうまい。學校の教へで、日章旗を日本の旗と云ひ、星章旗を我旗と云ひ、戦争があるなら亞米利加人として日本と戦ふと云ふさうな。Dr. は云ふ、排日は日本人の責、Propaganda などは何にもならぬ、誠實であれば米人は信頼する。同志社出身の三井物産支店長が、American Board of Missio-

navy に往つて、昔 Missionary の世話になつたから何なり寄附の要でもあらばと申出でたら、Board は頗るうたれ、個人的に禮に來たは貴君がはじめてと喜んだ、と云ふ話を Dr. がする。

感謝は美しいものである。日本人は忘恩人種ではない。米國が日本に盡しただけは、日本も隨分酬ひつゝある。日本の頭腦も米國で働いて居る。日本の筋肉も米國で働いて居る。日本が亞米利加に與へつゝある所は生絲と茶ばかりではない。感謝は相互であらねばならぬ。

食後私共は Dr. 夫妻や長嬢と自動車で Brooklyn 病院に行く。Dr. が運轉する。

病院は公園を廻はつて、十分とかゝらぬ所にあつた。病院も、看護婦宿舍も改築中で、校長は留守、十一年前の昨日此處で死んだ日本人の娘の名をだに知る者は一人もない。それ所ではない、つい先年此處を卒業して、佛蘭西の戰場に赴いた關と云ふ日本娘の事を Dr. が問ふても、少しも知る者がない。私共は事務の婦人の案内で病院を見て廻はる。白の Apron に小さな白の Cap の看護婦が往來する。外出する者は、其上に緋裏の短かい黒マントをかけて居る。あんな装ひして芳子さんは働いたのだと思ふ。看護婦宿舎を見る。小さな客間がある。看護婦寢室は、二人室もあり、一人室もある。戸があるきり、何の家らしい飾りも温か味もない。血の氣のない其室を見廻して居た妻は到頭泣き出してふた。内は改造のごたごた。外は「今雪が降つて居ります、中々融けません」と芳子さんが死ぬ少し前に

妻に寄せた手紙に書いた其雪が、十一年を経てまだ其まま融けずに居るかの様に眞白に氷つて居る。私共は Dr. を介して案内の婦人に、看護婦の客間に何か Comfort になるものでも添へてもらひたいと 10 弗紙幣を贈り、私共名刺の裏に下の如く書いて手渡す。

“For the Memory of

Miss Yoshi Ishikura

who died in this hospital

while serving as a nurse,

on 31st of January, 1910.”

案内の婦人は喜んだ。

私共は病院を出て Dr. の自動車から下り、夫人と嬢に送られて地下鐵に乗り、更に Taxi でホテルに歸つた。

それから少し休息して、更に日本倶楽部の東洋汽船の御馳走に赴く。米・野さんをはじめ、穂さん新夫妻、東洋汽船社長の末子の淺さん、支店主任の橋さん、玉さん、紙さん、菊さん達と、先夜のあの日本式食堂で日本料理の馳走になる。卓上は美しい花で飾られ、御馳走も入念のものであつた。

「亞米利加はお氣に入りましたか？」と誰やらが問ふ。

私は答へた。

「えゝ、氣に入りました。私共は果物黨。あんな好い Orange や林檎を産する亞米利加を好かない事は不可能です」

(六)

二月二日。ホテルに来て初めて二人共朝食に下りる。パンがうまい。乳がうまい。クリームがうまい。 Grape Fruit がうまい。茶は紅茶も緑茶もうまい。砂糖は潤澤だ。歐羅巴の後には、全く勿體ない心地がする。

外は非常に寒い。内はほか／＼する程暖かだ。氷水を私共も喜んで飲む。 Stove の前で Ice cream を食ふ、亞米利加氣質を、私共も自然に有つて居る。亞米利加が若いやうに、我々も若いのだ。

紐育案内と新聞を帳場前の Stand から買ふて見る。私共が大西洋を航海中佛蘭西の Oceanic 舞臺からのいた。戦争の動力がのいた。 "Tiger" の要は濟んだ。鮮やかなものだ。佛蘭西の局も新しくならう。

一昨日は大毎の人が來たが今日は最近大阪に生れた大正日々の人が來た。取りとめもない話をする。

今夜はコロムビア大學の日本の學生達に話す事になつて居る。午後五時頃高君が私共を連れに來た。日本料理の馳走があると聞き、三度目でまた日本俱樂部かと思ふたら、自動車は直ぐ、日本基督教會館に往つた。

これは純粹に日本の金で出來た建物であつた。澁さんなど肝煎り久原が二萬弗出したさうだ。案内につれて三階の寄宿を見る。二人詰の寢室を覗く。Bookish看護婦學校の看護婦の寢室の荒寥としたのに思ひ比べて、男ばかりの生活も此方はより温か味がある事を嬉しく思ふ。

下りて、御馳走の用意の出來るを待つ。コロムビア大學の荒さんに初對面をする。荒さんは私共が二人で歩いて居る事を取り立て、美むのであつた。荒さんは波斯語を修めて居て、新婦の夫婦で波斯の方を廻りがてら日本に歸るつもりで居たが、生家に病む人あつて、新夫人は先づ歸つたさうな。其結婚の事は私共も一夜倫敦の宿の暖爐前でゆくりなく披いた日本の新聞から傳へられて、大きな芽が出たばかりと思ふたそれが、何時の間に花さいてもう人妻になつたかといさゝか驚きもした。今荒さんに會つて、流石に相互の選擇が誤まらぬものであつた事を咄嗟に確かめて、私共も安堵したのであつた。「みみずのたはこと」の「梅一輪」を殆んど暗誦して居ると云ふ他の若い人にも初對面をする。

食堂に導かれた。食前の祈禱をと云はれて、先づ私は喜んだ。「日本語で可いでせうな」「え、い

いです」私は日本語で祝禱をした。

飯、鯛らしい刺身さしみ、豆腐汁、鰻あじの天麩羅てんぷら。皆諸君の手料理である。快感をぬきにしても、それは侮どられぬ手際であつた。私共は片端から平らげた。私が天麩羅を平らげると、諸君は各自の皿から寄せ集めて特におかはりを持つて來た。私はます／＼悦んでそれをも忽ちに平らげた。

満腹して二階に上る。公堂に聴衆がもう揃ふて居た。コロムビア學生が大部分、他に基督者も加はつて、六七十人程の人数。日本人會の演説には婦人が極めて少なかつたが、今夕は少なからぬイッの裔すまを見受ける。

私の勧めで、妻が先づ演壇に立つた。お茶の水女高師を二十一の三月に卒業して、其五月に結婚した以來、四十七の今日まで二十六年の永の月日を、ハズバンド Husband と云ふ魔神の手で世間から神隠しかみかくに隠された彼女の出現は、何も知らぬ諸君にはさもないが、當の私には一つの破天荒の珍事であつた。座談や出發の際の挨拶位はしても、壇に立つての演説は、彼女が女高師に入つたばかりの十七の年、實兄が丹念たんねんに演説の際の心得まで添へて書いてくれたノオトによつて、郷國肥後の一名物「不如火しらぬゑ」について／＼ものの演説をして以來の出來事である。彼女の洋服が二十七年ぶりなら、演説は三十年ぶりである。

妻は細い然し明晰な聲でナザレの談はなしをした。而して平和に關する婦人の責任を話して「姉妹、睦みし——」の歌を誦よして、話を結んだ。

最初彼女の爲に私がついだコップの水を妻は飲まずに演じ終つた。

次に私が壇に立つた。

日本人會でも無準備だつたが、此處では尙の事何もない。若い顔を前にして心に浮ぶまゝを話す。「朝嵐馬の眼で行く頭巾づえかな」と云ふ俳句がある。私も私の妻の眼にたよる事の如何に多いかを先づのべた。主觀の私は、客觀の彼女によつてしたゝかに補はれる。

東洋は夫婦連れが困る場合、不快な場合が多い。東洋人は何と云ふても婦人を尊敬する事が足らぬから夫婦を尊敬せぬ。歐羅巴に來ると餘程助かる。其かはり愚圖々々すると、亭主の役目を他の男がしてくれるので、大に勉強を餘儀なくされる。其點では、獨逸に往くと餘程氣樂で、獨逸が一番男の私には居心地が好かつた。斯く云ふと、皆がどつと笑つた。

然し獨逸の女は英米の女に比して Outlook が狭い。獨逸皇后は獨逸婦人の典型と云はるゝ。所謂妻とし母とし相應に良い婦人には違ひないが、一國の國母として其立場に立つては博大の愛が足りぬ。自國を愛して他に及ぶ事が出來ないでは、それは本當の女ではない。それは十分婦人性に立たぬから

である。而して獨逸女を造つたのは獨逸男子であるとすれば、こゝは大に考へねばならぬ。

こゝに私は英吉利は奇數で獨逸が偶數で、奇數と偶數の戦は獨逸の敗に歸した事を言ふた。如何しても獨逸の天地は狭い。其の如く獨逸女の天地は狭い。天地が狭いのは、しつかり自己が出来て居ないので。自然性に立たないのだ。男が男を發揮する如く女が女を發揮すれば、決してあの大戦にはならなかつた。兎角獨逸に共鳴する日本は、此點に於て大に省みる處がなくてはならぬ。

妻の歌にあつたやうに、世界の平和は單に國際聯盟で來るものではない。世界の婦人が眞に婦人としての立場に十分立つ時に於て、而して其結束が成る時に於て世界の平和は初めて來る。“League of Nations” よりも大切なは、“League of the Daughters of Eve” である。此處の女代議士 Rankin 女史が對獨戰に反對して擧げた聲ほど女らしい女の聲はなかつた。

全く Ellen Key の「兒童と婦人の世紀」は本當だ。現代の基調は生命が自ら Assort する時代、從つて強が弱に仕へ大が小に事ふる時代、現在が將來に盡す時代。「爾曹の内大ならんとする者は人に仕ふる者となるべし」と云ふた耶蘇の精神が徹底する時代。要するに耶蘇復活の時代である。

私は此處の Lincoln が大好きだ。Tolstoy も好きだ。何方が好きと云はれぬ位好きだ。然し何と云ふてもやはり耶蘇が一番好きだ。私は四十年來聖書を讀んで居る。而してます／＼其新味を感じる。

耶蘇を捕へに往つて感心して素手で歸つた捕吏のやうに「未だ此人の如く語りし人あらず」である。私は斷言する。世界が何億萬年續いても、耶蘇の言は恒に新である。「天地は失せん、されどわが言葉は失せじ」だ。(私はこゝに書き添へる。好きは所謂崇拜でないは勿論である。モオゼの十誡の第一條に曰く、爾わが前に「我」の外神ありとす可からず。私は唯此「我」を拜する。但私の神は眼が開いて居るから、他に私の分身を見出す時、神と神とが頷き合ふのだ) 洵に神子觀に立つた耶蘇は本當の Democrat の第一人者であつた。今世界を渦捲きつゝある Democracy の大潮流は、實に其中樞に於て耶蘇の精神が打勝つて往きつゝあるのだ。

今は新紀元、第二の創世である。第一の創世では、アダムの脇からイヴが生れた。第二の創世ではイヴからアダムが生れる。(私はまた言ひ足す。第一の創世では、太陽から地球が生れた。第二の創世では母マリアの腹から子耶蘇が生れた。第三の創世では第二のアダムと第二のイヴが新天地のイザナギ、イザナミとして並立する。今が其第三期だ) 此男女一對が中心になり基礎になる。一切が夫婦に基づく。夫婦の在る處これ家だ。家が社會の單位である。本末を誤まつてはならぬ。個人あつての宇宙だ。家あつての社會だ。よく家庭の社會化を言ふ人がある。それは正に違ふ。社會の家庭化である。世界の家庭化であらねばならぬ。故に *Family* は云ふた、「爾の家は爾の世界である」と。私は曰ふ「爾の世界

は爾の家である」と。自己が主だ。家が本だ。自己と自家とを世界に擴げるのだ。

私は米國に對する日本の感謝について述べる。双方の感謝の美しい色糸を以て世界を花の毯じゅうのやうにかぶりたい。日本人が米國に十萬人から居ると云ふ。それが米國を愛すれば米國の力になるが、若し米國を愛しなければ十萬人は直ちに獅子身中の蟲しししんちゅうのむしである。米國は生存の爲に其蟲を退治せねばならぬ。而して私は私共自身の支那に對する感謝と愛の不足を懺悔し、此方こちらに來て居る支那の男女學生を可愛がつて欲しいと訴へる。

私の口頭談は終つた。

司會者が私の妻や私の「含蓄ある」演説について謝辭を述べた。

演壇から下りて、私共は先づ三四子さんと握手する。十年前粕谷に見えた時より却て若い。亞米利加が若くするのだ。若い婦人達がかはる／＼挨拶に見える。巖さんの嬢なども見えた。若松賤子が若くなつて來て居る。ある若い婦人は、目下「Drink water」作の「Lincoln」劇が大入りで、是非私共に觀て欲しいと勧める。私共は其厚意こゝろに背いて、終りにリンカン芝居を見なかつた。然し米國も近來リンカンに歸れと競ひつゝあるのは喜ばしい事である。米國はおくればせに獨逸の眞似などやめ

て、リンカアンの博大なデモクラシイの精神に歸り、リンカアンの始めた黑人解放の事業を完成す可きである。それは黑人を擧げて其故郷亞弗利加に歸へす事だ。

妻は「姉妹」の歌を鉛筆でいくつか需に應じて書いて居た。

それから食堂の懇親會に移る。主にコロムビア男女學生。四十人位もあらう。二列の長卓に相對してかける。番茶にカステラ、Orange や林檎が出る。

高君が、一同の自己紹介を提議する。私共に質問でもあらば遠慮なく、と高君は言ひ添へる。

むしやく／＼食べる音、茶碗を置く音の間に、自己紹介は先づ婦人側からはじまる。

三四子さんは、角筈の東京女子大學から新聞研究に三年の期限で來て居り、近々コロムビア大學に入るつもりと云ふ。私共夫妻が來て小父さん小母さんの心地がすると三四子さんは云ふた。あるMissは心理學。ある一人は兒童研究。數學のMissもあつた。産婆もあつた。其他色々。青年男子に立ちまじつて恐びれず、氣どらず眞率な彼女達の言動が私共を悦ばせる、全く男女は近いに限る。

婦人を終へて、男子になる。單に姓名と仕事を名のる人がある。長演説を添へるものもある。私が「自然と人生」に「良教師と良醫者と良牧師を村々に贈りたい」と書いた事を引いて、好い病院と學校と會堂を建てる爲に百萬長者になりたいと云ふ人がある。「新春」で一番好きなのは、ヤスナヤ・ポリヤナの難産、

と云ふ人がある。私は大悦びで拍手する。皆が哄と笑ふ。ある一人は「みみずのたはこと」の一驟雨浴で、早く上つてお出でなさいと良人に云ふた奥さんは那樣な人かと思ふたが、今夕見て満足したと云ふ。「新春」に Hyattical な所があつて不満だつたが、今夕元氣な私共を見て満足したと云ふ人がある。これには他の賛成者があつた。ある人は新春の髻を剃つた寫眞を見て、恐い（若返り過ぎる意味に於て）やうであつたが、今夕は髻の私を見て安心したと云ふ。私は髻を撫でて、さうか喃と思ふ。

紹介の興はますます加はる。私共の悦は高調する。

私の演説を五度聞いたと云ふ人がある。あまり演説をせぬ私の五度の演説は、恐らく東京に於ての私の演説の總てを聞いたのだ。哲學研究者は、自分は單に自己の爲に研究して居るので、支那學生などに傾着する暇はない、と云ふ。私が從來あまり注意しなかつた日米問題に注意しはじめた事を喜ぶ人もある。露西亞に往かなかつた事を残念がる人がある。三四子さんに勧められてある一人は好い聲で「うるはしの白百合」を歌ふ。花の種子を私共が携帯した事を、日本の新聞で知つて居る。あの種子は如何なつたかと問ふ人がある。また鞆の中にある、と私は答へる。それは露西亞にお送りなさい、又 Lincoln の墓にお送りなさい、と Suggest する。私は感謝したが、後で思へば他の手でするより、年

月が立つても、私共自身の手で播くがよいと思ひ直した。紐育で Leo Tolstoy に會ひ、Leo が私の事を言ふて居た、と話す人がある。私が英文で書いたら如何様によいだらう、と云ふ人がある。「思出の記」を讀んで、菊池慎太郎を手本にしたと云ふ人が二人あつた。

Lincoln の等身像を送つた彫刻家は、私の著作の總てには背後に宗教があると云ふ。ある聖書研究者は、私が聖書について今夜言ふた言が、彼自身に力づけると云ふ。ある一人は私が訪客を門前拂ひすると云ふ恐ろしい評判に引きかへて、案外 *social* なのに愉快な喫驚をしたと云ふ。ある一人は其友達の淺君に私への紹介を頼んだら駄目だと斷わられた事を話す。私は其淺君に倫敦で會うた事を話す。而して「鎖國は徳川時代に限られます」と云ふ。皆が拍手する。

阿父は Princeton 大學で歿し、叔父も亞米利加で亡くなつたと云ふ石文學士、中學生としては私の著作を讀み過ぎて卒業の際同志社出の先生から注意されたと云ふ石さんは、私の好きな *Out* ではないかと、冒頭して三つの問を出した。一つは妻に Tolstoy 夫人へのみやげは何であつたか？ 私は今も蘆花の雅號を用ひるか？ 今度の紀行の名は？

妻が先づ立つて、Tolstoy 夫人へのみやげは、上等の水飴であつたが、露西亞行が困難と分つて厭めてしまいました、と答へる。百合の花の畫や、名刺や、花の種子は、Tolstoy 夫人も今は墓になつ

たが、他日露西亞に往つて募參する時持つて往く、と云ひ添へる。

私は次に立つて、私が最初「蘆花」の號を採つたのは、多分其清瘦せいきうを愛したからで、それは後にしてふた。本屋が無斷で廣告に使つたりするが、私自身は親がつけてくれた名「徳富健次郎」と呼ばれたい。

次の間を忘れた。向ふから石君が Promptプロンプトする。さうく、今度の紀行の題であつた。

「それはつい先日、丁度大西洋の真中で、二人でかうきめました」

「日本から日本へ」

諸君が一齊に拍手する。

私共は悦喜と感謝に満たされた。紐育に斯様な御褒美が待つて居やうとは、誰が思ひかけようぞ？ 私は口を開いて、心のまゝを打出した。

「私も永年筆を執つて居れば、日本に居ても讀者から毎々同情の手紙を貰ひます。然しこんなに日本選りぬきの若い男子若い婦人の方々と一席で、心から心の打開け話をして、親子のやうな睦みをするなんか、全く望外の悦喜です。私は今こそ本當に苦しみ甲斐があり、書き甲斐があり生き甲斐がある

と思ふ。何卒皆さんしつかり勉強して下さい。私共も日本に歸つて勉強します」
而して此會はめでたくお開きになつた。

私共は悦喜に益ちて「Taxi」に乗つた。高君がホテルまで送つて来る。外は零度以下の寒さ。
然し「Taxi」の内は悦喜で春心地。空には十五夜の月がまるくと掛つて居る。

今日は嬉しい日であつた。

(七)

二月三日。暖かくて、雪が融けはじめた。先日は子供が横丁の雪の丘で橋に腹這ふて「Tobogganing」をして居た。

今日は徒歩で井君の店に往つて見る。造花の店は美しい店だ。一寸見には、菊、櫻、ダリア、其他すべてがあまり不自然に思はれるが、「General Decor」は甚だ美しい。實物の通りなら、生の物がある。造花は大づかみに美しい「Decor」を目的としたのだ。佛蘭西あたりの造花と違つて、此處のは紐育向きだ。自ら違ふ。水盤などもあつて、趣味が支配して居る。附近にも生花屋はありながら、年「1000」弗の家賃を拂つてやつて行けるを見れば、随分造花の需要も多いものと見える。家主は「Asor」で、造花は美しい商賣だから、特に家賃も廉いのさうな。店番の紐育娘が色ついた櫛の葉を花束に取りつけて居

る。地下室に下りて、造花用の鋼鐵製の型など見る。井君は數年前七十五仙持つて紐育に來たさうな。而して造花なども別に傳授を受けたわけではなく、造花を買つてほぐして見て、造り方を自得したと云ふ事である。

井君の案内で、地下鐵で紐育第一の高き建物 Woolworth building に往つた。五十五階、地上 793呎、ビルミッドより約五十呎高く、人の住む建物として世界一さうな。エツフェル塔に上つて巴里を見下ろした日のそれに反し、今日は生憎霧があつて、紐育の大觀は出來なかつたが、茫々たる中から建物高低長橋斷續、また別様の面白があつた。頂上の賣店で晝はがきなど買ふ。店番の女が三十五センなど日本語を使ふ。此大建物を築いた Woolworth と云ふのは、拾仙均一の廉物店で成功したのさうな。どうしても金儲けは紐育に限ります、と井君が年來の經驗から言ふ。

高架鐵道で歸る。其處の步廊の自動計量器にのると、私が 153 封度、妻が、105 封度あつた。

店に歸ると、細君が待つて居る。Long Island に家を成して米國婦人を妻にして居る其叔父さんが井君を見込んで成つた結婚さうな。細君は日本で音樂體操の教師をして居、米國にも一人で來て、遠からず母さんにならうとして居る。私共はこれまで持ち廻つた淺草海苔の一箱を贈つた。

四人は支那料理に往つた。紐育には Chop Suey が多く、倫敦のよりヨリ平民的で、しかもうまい。

私共は井君夫妻に謝して、「トウキョウで東洋汽船に行く。昨日菊君が見えて、早く汽車の寢臺をとつて置くやうにと注意を受けたからである。會社の手からすると色々都合が好いのだ。

二十八階を十八階と間違へて、ありもせぬ東洋汽船支店を空しく捜がし廻つた後、更に十階上つて到頭其處に來た。先夜の御馳走の禮を述べて、私共は春洋丸の船賃五百弗を拂つた。それから送金電報が未着なので、桑港迄の汽車賃寢臺料等は一時會社で立替たてかへてもらふ。頗る蟲の好いお客さまだが、玉さん一寸考へて快く引受けてくれたので、ほつと息をつく。六日に立つときめる。

(八)

二月四日。文淵堂の金がまだ來ない。總領事館に電話をかけたが、電報も手紙も未着。正金支店にも未だ電報が來ないさうだ。

それから電話で正金に信用借金を申込む。若い行員の聲として、ちよとお待ち下さい相談して見ますからと云ふ。やがて其聲がまた私を呼びかけ「お氣の毒ですが」と斷わられた。これは斷わられるが當然だ。

「あなたのやうに藪から棒に電話で借金するなんか亂暴な」と妻は呆れて居る。

金が着かずに困つて居る事を知つて居る井君が今朝ほど電話をかけて電報の着否を問うた。正金が

駄目になると、私は井君に電話をかけた。早速井君は果物の一籠を持参し、500弗立替を引受けてくれた。井君は私共が此旅行に約二萬圓を使うた事を聞いて、それでは贅澤な旅行は出来なかつたでせうと云ふた。井君は私共が金はあり餘つて居るだらうと思つて居たので、金に窮する事は井君にとつては愉快な驚きであつた。

(九)

二月五日。雪が降り出した。終日降り、降りつゞける。朝、井君が500弗持つて来てくれた。汽車旅行中、萬一の事があつたら電報してくれと云ふ。それで此方も氣丈夫になる。妻は持ち廻はつた三越仕入の紙入の一つを細君に、一つを細君の手から店番の娘に贈つた。

夕方東洋汽船から電話で、十日迄は寢臺賣り切れ、十日後も New Orleans 以往は不確で今電報照會中との知らせがあつた。明日出立のつもりで居たので、氣がぬける。

其處に菊寫眞店から寫眞が届いた。而して寫眞一ダアス代五十弗とられた。

私はうんざりした。今朝 500弗借りた。それに此五十弗。それから出發延期でホテルの拂ひが高む。困つた。

(十)

二月六日。今日も終日雪。

(十一)

二月七日。今日は晴。朝々食堂に下りる毎に、物の豊富に勿體ない心地がする。獨逸は如何、塊地^{クハチ}利は如何、露西亞は如何と思ふ。Syria^{シリア}、Palestina^{パレスチナ} 地方も如何と思ふ。私は給仕長に曰ふ、君達は亞米利加人で仕合はせだ。

White^{ホワイト}の黒人が今日私に日本の Minister^{ミニスター} ですかと問うた。牧師かと問うたのだ。「否、文學者」と答へる。

ホテルの電話交換の女や Boy^{ボーイ}の黒人は毎々日本語の斷片を使うて喜ぶ。電話交換と云へば、西洋の女の聲の好いのと、調子に抑揚があるのは耳に一方ならぬ快感を與へる。つい無愛想の私でも「お早う」位此方から云ふやうになる。「Yes^{イエス}」と云ふ一語にすら、山形に抑揚をつける。私共が逗留した Nazareth^{ナザレツ}の獨逸ホテルで、其處の主婦で三十寡婦の Maria^{マリヤ}さんが、土人の女中の Jamrich^{ジャムリチ}を呼ぶ聲に毎々妻は聞きとれた。「ジャ——ミイイ——レ」と一語に三曲節があつた。聲の美しいのは、全く美ましいもの一つである。

東洋汽船から電話。寢臺がいよくとれたさうだ。出發も十一日、南方線と云ふ事になつた。

唯困つたのは、文淵堂の金がまだ着かぬ。紐育は倫敦よりも日本に遠いやうだ。實際井君が言ふ通り、紐育は日本と背合はせ、踵合はせだから、遠い筈だ。電報も當にはならぬ。井君なんか、細君を呼ぶについて戸籍の事から二三回電報の往復をしたら、手紙の方が却て用を辨じたと云ふて居た。私は最初紐育は二三日にして、加州へ急ぐつもりで居た。然し私共は案外紐育逗留を餘儀なくされる。それは無意味でない。亞米利加は紐育で、紐育は亞米利加だ。亞米利加を愛する程なら紐育を愛せねば嘘だ。

紐育は明るい處だつた。Skyscraperスカイスクラッパなんかちつとも邪魔にも何にもならぬ。紐育はちつとも成つて居ない。新家の新普請あらぶしん、がさつは却てその好所であらう。唯紐育の女が小さいのは著しい。自然に遠く Office や Shop と電鐵エレクトリックと Apartment で生活して居る爲ではなからうか。日本の女より小さいのが居る。

夕方伊豫宇和島うわじまの人で二十年近く亞米利加に居ると云ふ松さん夫妻來訪、今治教會の露牧師や、横濱で、十字架問答をした益君なども松さんは識つて居る。其十字架無用論、を時事新報で讀んで、尙細かに私の其れに關する意見を聞きに來たのだ。松さんは加特力派カトリックの信者である。斯様な質問は、私の悦喜である。三十分ばかり話す。松さんは十分に私の意見を領し、説教も問者も悦んで別れる。

夕食に下ると、受附の女が一通の手紙をくれた。それは桑港の角夫人から妻に宛てたものであつた。日米時報で私共の紐着を知つたのだ。最早西から糸がかゝつた。

(十一)

二月八日。今日も晴。朝、井君が來た。尙五十弗貸してくれると云ふ。それから私共は井君の案内で其住居に往つた。高架線に對して、靜かな Apartment 四室で一ヶ月三十四弗さうな。水彩が多く掛つて居る。皆主人の手に成つたもの。一時は畫を以て立つつもりで、Mexico の百度以上の暑い處で勞働した金で Chicago の畫學校に入つたが、天分に見きりをつけてやめたと云ふ。そんな嗜があるから造花の色彩などもうまいのだ。電気爐で、鋤燒の馳走になる。井夫人に告別して、井君の案内で Hudson 河畔の所謂 Riverside の Fashionable な通りを少しあるいて、ホテルに歸る。先のが融け切れぬところ、あと二日降つた。それが氷つたので、道路はひどいものである。靴で滑るまいとして、汗になる。

高君から電話で博物館や何かに案内しようとの事。Columbia 大學も見る事をすゝめられた。然し見物はすべて打切りとした。井君も、劇場を見せたいと云ひ、Wall Street に金がうなる處も見せたいと云ふが、それ等は見てもよく、見ぬでもよく、要するに又の事にする。金が來ないお蔭で買物も出來

ないのが、少くも私にはありがたい。

フィフス・アベニュー
Fifth Avenue の金もぢ街、Pennsylvania の大ホテル、と活動寫眞の前は、殊に五彩の電燈美しい紐育の夜景。そんなものもあるものは通つて見、あるものはなれて見たが、別に私共の感興をそゝるものでもなかつた。

午後七時頃、珍らしい來客があつた。それは三年來紐育に来て居る木君夫妻。夫妻は私共と同郷國の人。木君は昔同志社に居た事があり、夫人は私の伯母の經營した熊本女學校を出て居る。私共は「觀自在術」を読んで居る。淺草ではチエホフの「犬」で女優としての木夫人を見た事もある。紐育の眞中で、各自郷音を出して、色々打明け話をする。眞新婦人會の事を聞く。

妻は木夫人から化粧品化粧用品の贈り物お土産をもらつて喜んで居た。

(十二)

二月九日。晴。井君が百弗持つて来てくれた。五十弗と云ふたが、足りさうもないので、百弗持つて來たと云ふ。實は私共も百弗欲しかつたのだ。井君とても、Broadway にあの店を張つて、やつて行くのだ。一弗だつて遊んで居る金がないは知れて居る。面倒を見た百弗に違ひない。井君は林檎とOrange を一籃持つて來た。それは最初井君がくれたやうなあの“Keep off doctor”林檎であつた。

それから井君は私が居村へのみやげにと名高い種苗店の Henderson に往つて甘藍の種子を澤山に買つて来てくれた。感謝して、存分に井君の親切を受ける。

午後四時半から、私共夫妻は徒歩で木君宅の晩餐に赴く。それは極めて近かつた。Riverside の横丁、Ground floor の敷室を借り、木君夫妻、十一になる Boy、女子大學出の若いのと四人暮らしである。

木君は羽織袴で患者に接して居る。木君の精神治療は、米國に来て醫者の見離したものを活かしたり、跋を立たせたり、色々 Wonder をして居る。米人の如く肉體を器械視して、手術などもあまりに手軽るくやつてのける者には、生命の中樞に働きかける治療が往々 Miracle を現する、も極めて自然であらねばならぬ。米國人は實際的人間だから、治療の効果をさへ見れば、直ぐ信する、而して信じた上は任せて、何週間でも何月でも云はるゝまゝに通うて來ると云ふ。其點にかけては、木君も不信仰がちの同胞の間より餘程働きよいであらう。

木夫人は色々の寫眞を私共に見せる。淺草劇場での色々の役がある。辨天小僧のなどがある。露西亞の Ballet の名人夫妻との寫眞がある。露西亞人夫妻が日本服で饌に向うて居る。可なり年配に見受けられるが、身輕で護謨毯のやうに窓からでも飛び出るさうな。木夫人は紐育に來ても舞踊をやつて居る高等寄席のやうな所に出るが、三味線の相手がなく、ピアノや Violin で踊るのは踊りにくい

とはさもあらう。婦人参政権運動行列に、日本服丸髷で行く寫眞がある。木君が甲冑、木夫人がお姫様姿で撮つて居る寫眞の中に、小さいお姫様が今一人、それは知られた社會主義者片君の愛嬢で、上下姿のぎこちないのが片君である。私は片君に一面の識もないが、嬢の爲めに眞面目に上下姿をした父としての片君が私の心を動かす。環たまきさんとのが幾葉かある。此頃は評判が少し落ちたさうだ。大概にして歸ればよいに。新聞で其出發を見た上君夫妻はまだ Seattle に居るさうな。藝で立つ事も中々困難である。

木君が患者の隙を見ては、時々來て話す。Macerlinck の寫眞がある。木君も會つたさうな。先頃來遊した白耳義の王様は平民的で評判が好かつたが、Macerlinck は先夫人が生きて居るに、娘のやうな若い婦人を妻とし件ふたりしたのが此處の婦人の機嫌を損じ、それに興行世話人の不注意から Macerlinck の英語が講演の際よく分らなかつたりして、評判があまり芳よしくないさうな。金があるまゝに、藝術家でも藝術品でもドシ／＼取り寄せ呼び寄せて、思ふやうになると思つて居る駄々つ子の亞米利加人にも困る。

私共は Aldrim に記名する。妻の手蹟を木夫人がほめる。私は富士の絶頂で妻が私を生かした話をしてやさしい字を書く妻の力を少しほめかけた。信州松本の劇場で術を見せた時何かの行違ひから

大騒ぎになつた其折木夫人が、木君を後に庇かばひ一喝亂暴者を退けた事を木君は話す。二人の良人は本尊を前に据ゑつゝ互に妻の自慢をし合ひ、二人の女房は好い氣もちに納まつて、二對四人の其樂悠々たるものがある。

木君夫妻の間に「生死」と命名された今年十一になる Boy が居る。晝をやつて居る。教師も見込んで居るさうな。頗る Oriental なものを出して居る。自分編輯の雑誌を一抱へも持つて來て見せる。中々面白い。

木君の患者の一人は、小さな Girl の聲をして居る。腕が動かなくなつて居たのを、大分動けるやうになつて來たさうな。一人は、治療を斷わつて居た。梅毒らしいと謂ふ。總じて見込のない者は、始から斷わると木君は云ふ。

「ヘボンさんでも、草津の湯でも」と俗歌に歌はれ、精鑄水せいさうすいでお馴染の Hepburn さんなどのお世話に日本もなつたが、今は米國の醫師の手におへぬものを木君の手で助けたりするのは、私共にも誇らしい事であつた。私は醫藥を馳しりぞけない。然し精神治療を疑はない。

私共の註文で、家庭料理の洋食の馳走がある。木夫人は最初狹帶せまなびの隨分くたびれた振袖で出現したので、私は長襦袢かと思ふたが、一向着更へる容子もなく、到頭それで通したのは可笑しかつた。自ら

玉を綴つて流行の手提の袋を造つたり、帯を直して洋服を造つたり、女らしい工夫は妻を悦ばせた。

木君は紐育に來た當分は活動寫眞ばかり見て人情を知る事を努めたと云ふ。木夫人が淺草の劇場に立つた間の木君の態度について打明け話を聞く。煮ても焼いても食はれぬ社會を相手にして、二年に渉る長試練に、立派に勝ち通して來て居るのが氣もちよい事であつた。

私共の旅行李の中から持つて來た小さな三番叟人形と、踊り弾く二人人形を置土産にして、私共は十時近く暇を告げる。

雪の巷をゆる／＼歸りつゝ、私共は日本から亞米利加に斯様な若い元氣を放射する喜を語り合つた。

木君夫妻が私共と郷國を同じうするのも、悦喜の一つであつた。こゝにも火の國の火子火女が居る、
Oflspring すゝ添くじ。

ホテルに歸ると、Lobby に若い日本人の夫妻が私共を待つて居た。森村組のT君夫妻は子供なく、
Christian Science の信徒であつた。日米時報や紐育新報で私の演説を読み、私が復活の基督をパレスチナに捜しに往つたりしたので、Christian Science を話して來たのだ。私も亞米利加に Christian Science の流行は聞いて居たし、現に木君の處でも其噂をした位なので、先方からそれを話して來てくれ
た篤志の夫妻を歡ばぬわけには往かなかつた。夫妻の、かはる／＼言ふ處を聞けば、Christian Science

が在來の基督教以外に進出した點は、(一)耶蘇と基督を分つ事。即ち耶蘇は死んだが、基督は靈で生きて居る事。(二)基督の再臨は、實際已にあつた。新時代は婦人に始まる。Mrs. Eddy が即ちそれである事。私が「第一の創世は Adam から Eve が生れ、第二の創世では Eve から Adam が生れる」と云ふたそれは正しく Mrs. Eddy に中つて居る、と夫妻は謂ふ。アブラハムから基督までの年代と、基督から Mrs. Eddy までの年代が、正に相同しい。要するに Mrs. Eddy が第二の基督だ。

私共は疲れて居たが、興味を以て其説を聞いた。Christian Science は信仰治療をする。私は耶蘇の Radium 治療を疑はない。私はつい今し方其處から歸つた木君の噂をした。それから岡田虎次郎君の靜座法の話をした。健康が幸福で、幸福が人間の常態であらねばならぬ。信仰に健康を置く點に於て、Christian Science は無理がない。(男の祖師達の輩出した後に、女の祖師達の輩出は自然だ。日本でも天理教祖其他に女祖の師が出た。婦人の頭を抑へる者のない亞米利加に、女基督の Mrs. Eddy が出るのも不思議でない)

私の頭が低かつたので、夫妻の意氣は颯つて來た。「多分お分りにならうと思つて居ました」と T 君大に其處を得て居る。

私の横で妻が少し焦々する。

私は僞ならず Mrs. Eddy に興味をもち、傳記の有無を問うた。あるさうだ。Mrs. Eddy が Inspiration で書いた Text Book と其傳とで五弗餘、買つて上げませう、と云はれて私は少し困じた。買物でもあらば妻が御案内致します、と云はれてまた困つた。井君から借りた二百弗で、已に寫眞の五十弗を拂ひ、これから宿料を拂ひ、道中の食費、小使ともせねばならぬ。みやげ物一つ買へぬのに、Mrs. Eddy に五弗は困る。内實は黙つて傳は桑港で買ふ事を宣言する。Text Book は T 君が自用のをくれると云ふ。それはありがたい。署名して下さいと云ふと、Christian Science では Personality を避けると云ふて唯年月日場所だけ書いてくれる。私のやうに Personality 一つで押通さうとする男に、Mrs. Eddy は其點で少し合食らし。

春洋丸で、一さん夫妻に同伴して日本に歸る雜種の婦人に、Christian Science の篤信者 Miss 小があるさうな。それは好い都合である。私は春洋丸で、Text Book を讀まうし、その小さんにも話して見ようと約する。Christian Science の新聞や雜誌などを置いて、夫妻は私共と握手して歸つた。

(十四)

二月十日。また雪だ。早朝井君が電話をかけ、此雪では路がふさがるかも知れぬから、早く荷物を送り出すやうにと注意してくれた。

東洋汽船に電話をかけると、丁度ニウオリアンスまでとそれから以往桑港迄の寢臺を私共の爲にいよ／＼取りきめたとの報。荷物の世話には菊君が来る。

十一時に木君夫妻が見えた。寫眞を撮るつもりが、光不足でそれは後刻に譲り、是非 Suffragette 本部を私共に見せたいと云ふ。Autograph Book を出すと、木君は「日本のトルストイなる」と私を書き「ニイチエの好きなる」と自身を書いたので、私は「トルストイはもう脱けた」と抗議する。木君も「ニイチエに拘泥はせぬ」と云ふ。木夫人は「やさしく強きあい子様の御發展を日本の婦人の爲にのみつゝ」と書した。

菊君が来て Porter を呼び、私共の重い荷物を悉皆停車場に運ばせた。而して菊君は明日を約して歸つた。

私共は木君夫妻と地下鐵で Suffragette 本部に行く。木夫人が自働菓子函に小貨を投げ入れとりだした Cheating Gun をくれる。それを口にする時、どうやら此方も紐育つ子になり澄ましたやうな氣になる。地下鐵を出て歩く。今朝の雪は幸に止んだが、氷つた道路は危い事夥し。

婦人参政權本部で At home の木君夫妻は私共を Elevator にのせて、先づ Miss White と云ふのに會はせた。年配はそんなでないが、名の如く髪が眞白で美しい。木君は我が日本では著名な Author で

あり *Novelist* である事を躍起となつて紹介するが、*Miss White* は *Women's suffrage* が一ぱしの其頭
に中々私共を入れようとはせぬ。室があまり暖かいので、少し窓をあけてもらふ。私はあとで「何と
云ふ美しい白髪をおもちでせう！」と *Miss* に曰うた。それは私の心からの嘆美だつたから、*Miss* を
不愉快にはしなかつた。

會長は居なかつたが、*Mrs. Harper* と云ふのに會うた。年は九十を越して、毎日本部に出て來ては
婦人參政運動の歴史を書いて居る。英吉利の *Mrs. Fawcett* の事を「何、あの *Grh* か」と云ふ元氣な
婆さん。私は曰ふた、私自身も *Author* です、あなたの元氣は私を勵ます。婆さん悦んで、自著の婦
人參政權史の第四冊には頁の大冊を私に、米國婦人參政權運動の大立物 *Susan. B. Anthony* 傳の第三
冊を妻に、おの／＼自署してくれた。「金ペンでなければ書きにくい」と云ひつゝ有り合ふペンで書
てくれた。

木君は二人のお婆さんを要して、屋根上の雪が小山をなして居る處に一同を立たせて寫眞をとつた。
エルサレムでは屋上生活も随分したが、紐育での屋上は好い記念である。

私共は *Miss White* の案内で本部を一巡見て廻はる。各課整然と分類され、何處に居る若い顔老い
た顔も明るい好い顔をして居る。婦人參政運動の大本營、參政作戰の參謀本部にふさはしい大きな合

衆國地圖が掛けられ、參政權を認めた州々には、支部が建てられた赤い Mark がつけられて居る。年又年運動が勝を制して、合衆國の政治に婦人が乗り込む機會は目睫の間に逼つて居る。皆の顔が輝やいて居る筈。(それは此書が書かれて居る内に事實となつた。亞米利加婦人が獲物を如何使ふかが見ものだ。) Miss White は七寶の Suffragette の徽章を妻に一個、木夫人に一個くれた。

雜誌部を見る。日本の婦人雜誌など唯の一冊もなかつた。各國の婦人參政に關する切抜が分類されて居る。日本の部では、木夫人に關する切抜が多かつた。

私共は Miss White に握手して、本部を出た。而して重たすと云ふては Mrs. Harper に濟まぬが重たい本を抱いて、途中で木君夫妻に別れホテルに歸つた。

歸ると、留守に正金から電話がかゝつて居た。今朝程總領事から電話で、私宛の電報が着いたと云ふ知らせがあつた。それはいよゝ文淵堂の送金が着いたのであらうと思うたが、果して正金の電話がかゝつた。明日立つと云ふ際どい場合に着いたものだ。

最早時計は午後二時を指して居る。私共は午餐なしで直ぐ taxi で出かけた。非常の惡路。正金に着くに一時間半を要した。途中で馬が二頭倒れて居るのを見た。二十年、ある者は五十年來の雪と云ふ。珍客の御馳走に、こんな雪を降らせたいたづら者は誰だ？



Suffragette の 妻 さん 達 と

正金で二〇〇弗と少し受取つた。三千圓の米化である。先日電話の唐突を詫びたら、若い店員が會釋して、お立替してもよかつたのですけれ共、未着の電報爲替を引當てでは、と云うた。全く惡例を造りますから、と私も言うた。

正金と同じ建物に郵船の支店もある。私共は大西洋を共に渡つた進君に告別かたぐい其處に寄つた。まだ初々しい容子で進君は事務をとつて居た。

私共は正金から東洋汽船に往つた。金が着いたので、私共はやつと汽車賃寢臺料等の立替二〇〇弗餘を拂ふ事が出来た。金は借る、面倒は頼む、随分厚顔しいお客さまではあつた。

同じ Building の總領事館に往つて、電報を受取る。文淵堂の送金電報で、大阪を九日發は、途中の一日が餘分にあるとしても、晚い方ではない。

菊君に送つてもらひ、地下鐵でホテルに歸る。此様な地上の大雪には地下鐵の有難味がある。それと云ふのも、紐育の地盤が一枚幣の様に堅硬なものさうな。地盤の脆弱な東京などで大急ぎで眞似しなくもよい事だ。

歸ると木君夫妻が待つて居た。伴はれて雨某の寫眞館に行く。Elevator の内で私が帽子をかぶつて居たりしたので、Elevator の内では男は帽子をとるものだ、と木君が笑つて教へてくれる。それから

街上を夫婦が歩いて居る場合、決して中を割るものでない、と云ふ。至極尤な話で、其點から云うと夫婦であるくのは歐米では強味だ。近東では安心が出来ない。日本などでは、中に押入る無作法者が恐らく却て多いであらう。何れにもせよ、女を大切にする事に於て、日本人東洋人はまだく大なる修行を要する。私なども全く男學 Husband 學實習の爲歩いて居るやうなものだ。氷つた道が非常に滑る。疲れて居る私共を若い木君夫妻がいたはつて、木君は私を扶け、木夫人は妻を扶ける。子供の無い私共に、若い力の介添は嬉しいものである。「何、まだ若い」と自力を見せるにはあまり惜しい快感で、私共は井君の金を借りたと同じ感謝で嬉しく木君夫妻の介抱をうける。

雨君の Studio で、白金紙の燃ゆる光で數枚の寫眞を撮る。それから歸りの途中で、木君夫妻と告別の握手を交はし、私共はホテルに歸つた。

忙しい一日、然し愉快な一日であつた。

私共の豫定外の紐育逗留も今宵限りとなつた。假初の宿も、滞留二週日に及び顔馴染も出來て來たし、澁い顔の老女中すら妻が一度彼女の子供の事を問うた以來氷融けてなつかし味を見せて來たので、立つとなれば流石に名残が惜まれる。

第三 入日を趁うて

(一)

二月十一日。朝食の後、私はホテルの地下室に下りて、髪を刈り、髻を短く剪んでもらふ。香港で一度、ダマスコで一度、伊太利の Firenze で一度、以上は五分刈りで、巴里と紐育では斬髪にとゞめた。巴里では髭を剃つたが、紐育では唯少し剪んでもらつた。これ一には井君が先日來私の長髮長髻病みほうけた人、越獄の人に似て居るので、もつと若く元氣になつて欲しいと云ふ註文に應じたわけで、髭を残したは、髭があるので安心したと云ふコロムビア學生諸君の意にかなはせんが爲であつた。

其井君が午後一時には來て、幾分若くなつたをほめた後で、まだ途中小使の不足があるかも知れぬと云うて、更にヨ弗持つて來てくれた。此は並々ならぬ親切である。私共は其厚意を感謝し、前日來の借金を返すのが濟まぬやうな氣さへした。まるで私の鼻を凹ませ、兎角金なんかと思ひたがる私に金の價を思ひ知らせ、井君の厚意を引立てる爲の送金の遅延見たやうなものだ。すべてあの人惡の阿爺がする事だ。あの阿爺め、轉んでもたゞは起きず、逆の手を使つてすら順なものを搾り出す。全く

阿爺にはかなはぬ。

不圖、思ひつけば、今日は二月十一日我日本の紀元節であつた。私共は手を拍いた。一昨年の紀元節は粕谷の恒春園で世界一周を目論見、昨年の紀元節は安南沖のぼるねお丸で祝うた。今年は紀元節に紐育を立つ。

菊君も来て、私共四人は午後二時にTaxiでHotelを出る。私共の荷物は多過ぎるが、トランクが小形なのは好い、と菊君は抑揚する。大形のトランクは運搬面倒でうちやられる事多く、先頃も紐育から日本に歸つた人が、日本に歸つてもトランクが着かぬので問ひ合はせたら、其トランクが大きかつた爲まだ紐育の停車場にころがつて居たと云ふ事である。

今日は晴れて居るが、道路は依然氷雪の劍の山だ。Pennsylvania State Stationの近くに、馬が一頭斃死して居た。早く取りのけるか、掩ひものでもして置けばよいに、と思ふ。英吉利ではしない事だ。何を云つても新しい國、若いだけ、われがちに前ばかり見て、横を見たり、後を見たりが足らぬ。感謝が足らぬ。味はひある國民となるべく、米國はもつと自反抑制の要がある。頭を抑へるものがないと云ふは恐い事だ。

たゝかひは雪になやみの紐育町の真中に馬斃れ臥す

涙かな汗は煙とたちのぼる馬は黙してゆきなやみ居り あい

Pennsylvania Station は、私共が「Rotterdam」を下りた夕、高、菊、二君が私共を連れて來た停車場である。私は心待ちしたが、高君の姿は見えなかつた。其かはり東洋汽船の紙君が見えた。紙君も玉さんも家族は日本さうな。紙君には此春から小學校に通ふ Boy がある。理由も色々あらうが、家族は海外でも同居の事にしたい。費用の問題であつたら、それは會社の責任にして欲しい。紙君は私が紐育風に髪を刈つたのを見て、長い方が好かつたと云ふ。井君は短い方が好いと云ふから短かくしたら、紙君は長い方が好いと云ふ。私は如何なれば好いのだらう？ 三國志で馬超に追はれ「髯の長きが曹操なり」と呼ばれるので、劍をぬいて大急ぎで髯を剪ると、今度は「髯の短きが曹操也」と呼ばれ、馬上に烟冠して逃げた曹操のやうに、妻のお類のそごろ心から友人葉山にあやかると爲に、髯を生やしたりとつたりさせられた「多情多恨」の柳之助のやうに、私は全く困つて了うた。

井君は私共が往つて了ふので、少し気がぬけたやう。東洋汽船の若い二君は汽車中での黒人 Boy に心附けの事から、ニウオリアンズではホテルにつく要はないと云ふやうな事まで、細々と心をつけて

くれる。

時間が来たので汽車に乗る。ニウオリアンズ以往は好いが、ニウオリアンズまで私共の座席が空は同じでも別になつて居たので、菊君が車掌に談じてくれる。荷夫の黒人二名が心得て、私共を相向ふた同席してくれる。

私共が席に落ちつき、手荷物も落ちなく運び込まれたのを見届けて、三君は私共と握手して下りて往つた。やがて二重硝子窓の外からほと／＼とくを見れば、それは三君が外から別を告げるのであつた。

午後三時三十八分、汽車はいよ／＼紐育を後にする。

(11)

紐育から桑港へ行く線路は、幾條もある。私共の擇んだのは、最南線で、“Sunset Route” と呼ばれる。Chicago 經由の北線に比して、一日長くかゝるが、雪景色ばかり乗り通すより、成る可く温暖なあたりを見たかつたからである。倫敦の大使館で、珍さんの注意であつた。“Sunset Route” の名にしおふ入目を趁うて行くのであるが、ニウオリアンズまではやゝ西に向うてひたもの南下するのである。ニウオリアンズから太平洋岸の Los Angeles までは一氣に西奔し、それから北上して桑港に

達する。ニウオリアンスで乗り換へる外、約4000哩六日間の汽車の乗りつゞけは十四年前西比利亞鐵道で二週間乗りつゞけの経験ある私には何でもないが、妻には最初の経験である。大西洋で厄介になつた船暈藥の“Mothersill's Seasick Remedy”を妻は早速取り出して服して居た。

pullman 寢臺車は、中央を通路にして、左右に相對した座席がある。二人詰だが、四人は樂にかけられる。

私共はホテルから持參のパンや井君の林檎を午餐がはりに食べた。室外通廊の隅に氷水のタンクがある。たゞんだ紙の Horn が供へてある。その一つをふくらまして、栓を捻つて、飲む水の冷たさ、うまさを。

紐育を出て以來一路白皚々。寒い景色である。然し車内の Heat が、私共に氷水を歓迎せしむる。昨年十一月初の獨逸を出る際の雪を思ふ。伯林は如何して居るかなと思ふ。

Philadelpia を過ぐる。

夕食に食堂車に行く。私共の向ふにかけた若い一紳士は、Argentine の領事として神戸に赴任するさうな。ニウオリアンスから大阪商船の布哇丸でパナマ經由で日本に行くと云ふ。私共が乗つて日本から出た Borneo 丸も、やはり Panama 經由で歸つたと坡西士で聞いて居る。今私共が太平洋を渡ら

うとすると、此方にお乗りなさいませんか？ と云ふやうに *O.S.S.* の船がニウオリアンスに待つて居る。それに乗つて、パナマ運河も通つて見たい。然し春洋丸が待つて居る。心をそらすべきでない。

Washington を過ぎる。今度の米國は素通り同然で、紐育に二週間居たが、其紐育すらあまり見ないから、ボストンにも行かなかつた。ワシントンも素通りである。

黑人 *Boy* が來て、寢臺をつくる。相向ふた *Sofa* を双方から引寄せると、下の *Board* は造作もなく出来る。それから上の出つ張りを鍵で開けて下ろすと、上にも *Board* が出来る。兩隣との間には、隔ての板がはめられた。カーテンを引くと、小さいながら完い寢室である。各自の枕邊に小さな電燈がつく。

私は上に、妻は下の *Board* に、今日後にした紐育と新しい知り合ひの人々を思ひつゝ、私共は穩やかな鐵路の夢に入つた。

(二)

二月十二日。さめて窓から覗けば、外の土が黒く、木が緑だ。雪の勢力圏をぬけたのだ。大分南に來た。

三食に食堂車に行く外は、別に仕事もない體である。窓から眺め眺めてくらす。終日細かい雨が降る。稀に賑やかな市を通るが、多くは松林や、板葺の家などが淋しく、無人の境の心地さへする處がある。

ある停車場で賣りに來た Orange を買ふ。加州のそれではなく、Florida あたりのかと思はるゝ中型の圓 Orange である。

最大速力でないせゐるかも知れぬが、汽車の動搖はそんなでない。然し停車發車の圓滑でないのは、英吉利をふりかへらせる。

私共のかはりに手紙だけでもパナマを通らせよう。大阪の鹿の彦君夫妻に手紙を書き、布哇丸の事務長に日本着の上投函してもらふべく、手紙を添へて、彼の Argentine 領事に託する。

(四)

二月十三日。下の Boat から妻が聲をかける。

「海邊を駛つて居ますよ」

起き出ると、美しい日。成程海邊を通つて居る。

南に來た。

雪に出て鉄路南へオルレアン一夜に春の草緑りなる あい

霧藻のやうなのが夥しくぶら下つて居る。前世界の林のやうな林を過ぎる。皆立枯れかと思へば、嫩葉が出かゝつて居る。緑、褐色、若葉は花より美しい。紐育の雪は夢のやう。

ある停車場では素足の黒人の子供が淡紅の日本椿を賣つて來た。

南に來て、黒人の數が著しく多い。

やがて入江を渡る。嚴めしい鐵橋でもなく、心易く海の上を平一文字に走せわたるのである。濱名を思ひ出す。

入江を渡つて、草洲がつゞく。澤草蘆花の間には、水溜りがあつて鴨が浮いて居る。

十一時過ぎ、ニウオリアンスに着。

私共は直ぐ Taxi で Hotel Grunwald に往つた。大きなホテル。五階の室に案内される。入浴。休息。室内に備へつけの魔法瓶の水が冷たく、五階の窓からぐるり見下ろすニウオリアンスは合衆國で十二番目の都市としてミシシッピイ河畔に繁華な相を見せてゐる。

午餐に下りる。硝子の燈籠が下つたり、芝居の舞臺面の様な食堂。Dentierの型に造つた大形の魔法罫が卓毎に備はり、墨西哥灣の牡蠣のフライやDessertの加州Orangeがうまかつた。

妻のHair Pinを買ひに少し街を歩く。無くて歸る。妻は先日紐育で木夫人に髪を結うてもらうて以來、其結ひ方を結うて居る。昔の日本の美鬢の様に兩鬢を垂らした結ひ方である。

午後五時半TaxiでUnion Stationに行く。待合室でアイスクリームなど食べる。噂に聞いた通り此處の停車場でもちやんとColouredの待合室を分けてある。黒人の社會を分つのだ。Lincolnの黒人解放は、手はじめをしたに過ぎなかつた。全い解放は、黒人の中にMosesが現れて黒い眷族引具してAfricaに歸る日にはじめて行はれる。今は此眷族が大じかけの年季奉公、留學中とも云へやう。

三十前後の鳥打帽をかぶつた無髯の男が來た。話して見れば露西亞人であつた。

「君はBolshevikですか？」

私が問うた。彼は驚とした、と後で妻が云うて居た。私は氣がつかなかつた。

「否」

「Bolshevikだと好くに」

「何故。」

「露西亞の現状が知りたいから」

私は十三年前の露西亞行、ヤスナヤ・ポリヤナ訪問の事など物語つた。

それに心解けたと見え、鳥打帽は忽ち假面を脱いだ。果して *Bolshevik* であつた。レニヤトロツキイとも懇意な男であつた。

私は先づ *Alexandra Tolstoy* の入獄消息を問うた。入獄なんか全然虚説で、彼女は *Soviet* 政府と意氣相投じて莫斯科で元氣で働いて居るといふ。舊臘倫敦で入獄の事を英吉利の新聞で聞いた以來、始終心にかゝつて居たそれが、思ひがけなく此處で氷釋して、私は一の重荷を卸した。

Kropotkin も無事。 *Gorky* も無事。 *Andreff* すら死んでは居なかつた。

紐育には *Tolstoy* の長子 *Sergei* が居る。然し父を賣り物にして、不肖な子だと鳥打帽は舌鼓をう

其内乗車時刻となつて、私共は行列に加はつた。五歳位の男の子を抱いた日本人と、赤ん坊を抱いた其細君とが居る。それは紐育に店を出して居る鐵器輸入商の守君夫妻で、東京の阿父が病氣の報に接してやはり春洋丸で歸國するところであつた。

一兩日前から來て、やつと手に入つたと謂うて、守君の家族は *Compartment* に納まつた。私共の

二月十五日。昨日は終日テキサスの乾田平蕪を奔つたが、今朝は New Mexico の沙漠を走つて居る。Cactus の類の短矮植物が沙に點々の緑を撒いて居る。夏熱は嘸。今二月中旬と云ふに、日は熱して、食堂車にも客車にもゆるく扇風機が廻はる。雪の紐育は、夢のやう。然し北方の連山には白いものが見えて居た。

朝食に對坐した若い飛行將校二名と、少し雑談。昨日のテキサスの話から私は曰うた。米國は美しい。随分潤くて、眼も心ものび〜する。日本はすべてが Small scale だ。然し日本の國は小さく、身材は小さく、すべてが小さくても、心は小さくない。

守君に教はり、今日は初めて車尾の展望車に展望を楽しむ。沙原の眞中に汽車が長いことすり換へる汽車を待つたので、私は下り立つて沙原の草など摘んだ。花と云ふ花は無かつた。西比利亚鐵道でこんな下り立つて草花など摘んだ事を想ふ。

New Mexico の Mexico は直ぐだ。停車場に例の鈔廣帽、義經袴の Mexican 装を多く見かける。棕櫚の木などが南を標して蟲々と立つて居る。

昨日も、今日も、官吏が車内に來て、特に日本人だけ旅券の檢閲をした。Mexico から國境を越え

守君の *Compartment* に往つて見る。洗面 W. C. もついで、子供連れや病人などには便利に出来て居る。

夜は W. C. 隣りの狭い喫煙室で、彼の若き *Holschewiki* と話す。名は B——。獨逸系露西亞人で、ある會社の賣り込み支配人をして居る。日本には玩具の買ひ込みに行くと言ふ。

私の耶蘇に對して、B 君は *Nietzsche* を擔ぐ。露帝の殺害を私が悼むに對して、B 君はそれを辯護する。「殺も止むを得ない、細菌を殺すのです」と云ふ。「それでは、君は *Kraut* も殺しますか？」少し踟蹰したが、やはり殺すと云はねばならぬやうな羽目に B 君は落ちた。私は曰うた、自然には何様な可能性もある、それを人間の獨斷で勝手に打切る事は罪惡です。

B 君は *Soviet* 政府を自讃し、一切の子供を家庭から取り上げて悉皆政府で養育教育する、それを見せたい、と云ふ。個人を絶対に尊重し、夫婦を尊重し、家と云ふものを確立しようと言ふ私は、それに感心が出来ぬ。私は云うた、あなたは若い、妻もない、子もない、あなたは淺薄だ、あなたが結婚したら、あなたの人生觀は更なる。B 君は靦くなつたが、嘖らないのは流石である。四五人首をふかしながら聞いて居たが、五十餘りのは終りの私の言に賛同した。「*Writer*」など私の事を言ひ合ふ聲が聞えた。

を「Hold up」する。「Hold up」が時々行はれる亞米利加の汽車、眞似事で濟むのはありがたい事だ。妻が新聞紙で日本流の兜を其子に折つてやる。名を聞いても、「I won't tell」と云ふ。其母はつんけんした女である。寡婦らしい。

(七)

二月十六日。眼をさますと、汽車は眼がさめるやうな緑の中を走つて居る。一昨日の「Oxas」の漢々とした乾田平蕪でなく、昨日の「New Mexico」の熱沙白漠でもない。本當に染めたやうに緑嫩らかな小山、黒緑の「Orange」には黄金果が累累とまだ生つて居る。紐育の冬から、ニウオリアンスの初春、New Mexicoの夏を経て、今酬な春に來たのだ。「Palestine」の「Ludd」あたり來たやう。また伊太利の「Salerno」に來たやう。日本のある南の田舎に來たやうな感じもある。嫩らかな緑が滋雨の如く私共の心目を養ふ。

みどりみどり山も草地も緑金の光みちたりロスアンゼルス

あめりかの寶の山よオレンヂのロスアンゼルスは明けし美しくし あい

やがて「Los Angeles」に來た。

て潜入する日本人がある爲とは、後で知つた。

列車内物賣りが頻々やつて来る。Mexico 名産の絹 Scarf は美しいものである。妻は六弗で黒いのを一つ買った。紐育でも到頭買物が出来なかつたからみやげにもつと澤山買ったかつた容子だが、我慢してもらふ。此處らは亞米利加のアイヌ Red Indian が多し所で、Yuna 附近に往つたら氣をつけて御覽なさいと、紐育を立つ時東洋汽船の紙君が注意してくれた。Yuna は夜に入つたので、終に American Indian の顔を見なかつたが、Indian ならぬ車内の物賣りが Indian の穿くやうな鹿のなめし革で作り、赤や青の南京玉を飾つた Moccasin を賣りに來た。私のを一つ、妻のを一つ買ふ。守君も子供のを買つて居た。

乗客満員で、食堂大繁昌。三食毎に食堂前の通路は、空席を待つ空腹の人が市をなして居る。男も女も大人も子供もおとなしく待つて居る。私共も「待つ」練習を大にさせられる。待つ人があるからとて、急いで食事をするでもなく、待つて居るからとていやしげにも思はれぬは、好い風である。汽車内でも、食事は相應によい。新婚らしい夫婦で、菜食のが居た。酒類が一切ないのは、私共には何の苦痛でもなかつた。

七八歳の Boy が居る。おもちゃの Pistol を持つて居て、人を狙ふ真似をする。狙はれた紳士は兩手

California Poppy の初花が、ちらほら地から金盃をささげて居る。

忽ち汽車は海に出た。

おお、太平洋！

私共の胸は盛んに波うつ。

出た、出た、太平洋に出た！

青黒い洋は、白く西亜米利加の磯に碎ける。見やる向ふは春霞に茫として居る。あの霞の奥に日本はあるのだ。

私は伊太利の Firenze で一人旅の若い亞米利加婦人に逢つた事を思ひ出した。亞米利加は何處です？ と問うたら、Los Angeles です、と彼女は答へた。「では近いお隣ですね、太平洋一つしか隔てて居らぬ」と私は言うた。

全く太平洋一つしか隔てゝ居らぬ。林子平の言ふたと全く反對の意味で、今私共の眼の下で白く碎けて居る此水は、日本橋までつゞいて居るのだ。

歸つた。歸つた。もうお庭の泉水端まで歸つて來た。一足跨げれば直ぐ日本だ。

おお、太平洋、おまへの向ふに私共の日本はあるのだ！ 歸らう、歸らう、日本へ歸らう！ 世界

Los Angeles, Los Angeles と皆が艶稱する Los Angeles, 私共も是非見物をすゝめられた其 Los Angeles に來た。汽車はしばらく停車する。客も可なり下りた。Bolshevik の B 君も一兩日遊んで來ると云うて下りた。

汽車が Los Angeles に入ると、突如私共の眼を衝いたものがある。曰く、備前屋。曰く、Chugoku-ya 日本の宿屋やさまざまの店は勿論、風呂屋のやうなものがわれは顔に並んで居る。

日本人の發展——私共に嬉しい感であつたか？

私共には寧ろ一の Shock であつた。

私は久しく私の衷うちに積まれて來た考が、此處に到つていよいよはつきり形を成して來るのを覺えた。
 “California for Americans!” と私の心が叫ぶ。

汽車は Los Angeles を後にする。

停車場、停車場に種々果物専用車が置いてあるのも、成程 California と思ふ。大西洋の船を下りたあの夕、Hoboken の地下鐵停車場で先づ私共の眼を射た黄金果の累々も、あれで來たのだ。

Pepper tree の大木が枝を垂るゝ並木道。二月を春とさまざまの花咲き盛る花園。畑や果樹園は今淋しいが梅ともつかず櫻ともつかぬ花が丘の上遠く淡紅に烟つて居るのは Almond の花と後で知つた。

Los Angeles あたりのやうな緑は段々見えなくなつたが、さりとて、紐育の白いものはふたたび此處に見る事は出来ぬ。

終り近くして、汽車がまどろかしい。Texas を潤すと思ふたが、California だつて馬鹿には出来ぬ。中々長し。其筈である。California の面積は朝鮮を除いた日本より少し潤い位であるから。而して人口は日本の約二十分一、三百餘萬に過ぎない。これでは日本から溢れ込む筈。而して亞米利加人が今に日本の布哇になつたやうに、加州も第二の布哇になると恐れる筈だ。何と云ふても亞米利加は大國だ。此亞米利加の大きな自然に對すると、人間が餘程丈夫にならねば對抗出来さうにも思はれぬ。靜座法の岡田虎次郎君が米國に苦學して居て靜座法を悟入會得した筈だと思ふ。

終の時間の長いこと。ほと／＼退屈でたまらぬ。

然し長いものも端はある。夜の十一時頃汽車は桑港の停車場に止まつた。日を経る六日、四千哩に近い汽車の長旅は果てたのである。

守君の家族は日本旅館に往つた。私共は Farnmont Hotel の自動車で丘を上つてホテルに往つた。東洋汽船の世話で、ちやんと室が用意してあつたので、直ぐ二階の No. 208 に入る。小さな室だが、Bath じや、不自由はなし。

の何處が如何好くても、私共の故國は世界に唯日本である。

のたりのたり洋太平の春の波亞米利加の濱によせてむかふる

春の洋かすみをこめていや遠く遠くのはてゆ梅が香にほふ あい

以前九十九里の濱や日向の濱から太平洋を東に見やつたが、今ぐるりと世界を一周して來て其太平洋を西に見やる。

汽車は Santa Barbara を過ぎる。紐育の井君の條に書いた私の二番目の姉の三番目の子が、彼の耶蘇を傳へて彼の十字架に非命の死を遂げた處だ。彼の墓も此處にある筈。妻子は何處か田舎に居る。彼が十歳左右の頃熊本其門前で米人の女兒に Miss Emily と一句浴びせて、匆々に逃げた彼の幼な顔が眼の前にちらつく。

海中に石油井などの櫓樓が簇立して居る處を過ぐる。

今日も車内の物賣りが來て晝はがきなど賣りつける。

やがて海をはなれて山にかゝる。

来て居た。他に日本人日本婦人も見受けられた。私共が作つて居る列の中に小柄の支那人が突と割り込んで私共より先きになつたのは、恥かしい氣がした。やはり東洋は東洋だ。

日本總領事館は時間が過ぎて居たので、直ぐホテルに歸る。

午後は「新世界」の記者が二人來た。寫眞結婚がやめになつたので、困つて居る向きも多く、日本の現内閣の米國に對する遠慮勝ちが、此地の日本人をもどかしがらせて居るさうだ。私、それから妻が、少し旅行談をする。妻の毛皮の Scarf の銀の Hook がとれたので、頼んでつけてもらふ。

紐育の Breton Hall の鍵の一個を誤つて持つて來てしまつたので、書留で返す。

私は倫敦以來思つた事が、亞米利加に來てます〜確められるを感じる。妻は私の身の上を心配してあまり思ひ切つた事を言うて欲しくないと云ふ。然し私は言ふ。言ふだけ言はぬと氣が濟まぬ。

(11)

二月十八日。朝昨日の新世界の記者の一人が見えて、昨日頼んだ妻の Fur Scarf の Hook をつけて來てくれた。其店で此様なのは、二十年前の流行と云ふたとの話に、私共も大笑する。私は倫敦で、大外套に毛皮をつけにやつた間、日露戦争前に作つた Inverness Cape の裏は少々破れて居るのを着て歩いて、物に動ぜぬ倫敦人士の眼を可なり側立たした事を思ひ出した。お婆さんに注目者が多かつた、

早速一浴。長途の疲労と垢とを流して、感謝して *Board* に入る。

第四 桑 港

(一)

二月十七日。紅の帷がくるくると捲き上ると、朝の光が其處に漲る桑港の町と灣とがあらはれる。紐育を冬の最中に出て、桑港は已に春だ。

食堂へ行く時、*Hotel* の一隅は賣物の花で眼がさめるやうに美しい。櫻そつくりのがある。食堂にはカナリヤの籠をかけ、支那人の給仕の感じが柔らかい。

朝食後私共は、早速自動車で東洋汽船に往つた。春洋丸の船客が一ぱい押かけて居る。中に倫敦の *Kenington Palace Mansion Hotel* で一度別れを告げた苦君が居た。苦君は私共より一足先きに、*Royal George* で英吉利を立つたが、非常の難航海で大西洋に十五日を費やし、到頭春洋丸で立つ事になつたさうな。

それから米國の旅券検閲所に行き、出國許可をもらふ。同じ汽車で *New Orleans* から來た守君も

居る。夫人は妻の母が其阿母おつかさんの結婚を成り立たした間柄で、娘時代に粕谷に來た事もある。黄ろい喇叭水仙の一束を贈られた。春らしい花の色香が私共の心を悦よろこばす。

角君夫妻は私共を「Taxi」にのせて、桑港見物をさしてくれるのであつた。見物と云うても、最早日も暮れがたである。角君の言のまゝに、自動車は走つて私共を Cliff House に連れて來た。太平洋の波が夕目にも白く碎ける。海豹あひるが其處に來て眠ると云ふ Seal Rock の岩は黒く見えて居る。金門公園を見る。それから Twin Peak 所謂二子山の上から夜の桑港を見下ろす。特に私共の爲に Illumination をしてくれたかとはかり美しい光の町は、私共に桑港を祝させた。桑港の大火は、1906年の四月である。私は丁度順禮行の船中、新嘉坡シンガポールで其事を知つて、それは桑港の罪惡が罰せられたやうなものだと謂ふた。それから十三年、桑港もまた面目を新にして居る。

角君夫妻は私共を日本料理青柳に導いて、夕食の馳走をしてくれる。電燈、テエブル、給仕の女も洋服ながら料理は勿論倫敦のよりも、紐育のよりも日本式にうまかつた。

此處らは日本人街で、五車堂など云ふ書店がある。私共は亞米利加に來て朝々の Oatmeal を殊に好んで喰べる。少し買つて歸らうと謂ふので、妻は角夫人とある日本店に寄つたが、ほしいものはなく、似寄つたものを少し買つた。

と妻は云ふ。流行なんかはくる／＼廻るから、根氣よく着て居る内には、流行の魁まきびになるものです。と私は曰うて、また大笑ひをした。

「メキシコで總領事館行。華聖やしんざう頓から廻送の手紙が一二待つて居たきりで、倫敦から靴の小包はまだ着いて居なかつた。

それから大統領の官邸ははなく、デパートメントストアの “The White House” に往つて色々買物。妻は佛蘭西歸りと云ふ係の女の手から佛蘭西縮緬の濃藍の ヴィジティングドレス を買った。印度洋の色から紫がぬけ、Napoliの海の色に藍が勝つたやうな春らしい色である。腕が短かく出来て居るので、白の長手套を妻は買った。それから紐育で買へなかつたみやげ物などさまざま／＼買ふ。お蔭で小半日 White House に拘禁されて、私はほと／＼弱つた。紐育で金がなくて仕合はせだつたと獨り思ふ。

夕五時頃桑港日本人會幹事の一人齋君來訪。私が十八九、君が十五六の昔、伊豫は今治いまざりで廢校した中學跡に英語では師弟のやうな、遊食では友達ともだちのやうな生活をした仲の人。加州大學の日本學生が私に話して欲しいとの事。此處の日本新聞にも其所望しよぼうがある。私は少數の大學生より一般日本人に演説したい。齋君は相談の上と云ふて去つたが、間もなく電話で明晩演説と取りきめたと云ふて來た。

齋君が歸ると角君夫妻來訪。角君は同志社出、永らく加州に居り、今は鐵器藥劑等の輸出入をして

平洋岸の亞米利加に二つある。一つは兩三日前過ぎて來た Santa Barbara にある甥の墓。一つは此處の Oakland にある義兄大——の墓である。彼は私の父が亡くなつた同じ月に Oakland で死んだ。私の三番目の姉の良人である。姉は其女夫婦に要せられて日本に歸つたが、義兄の墓は Oakland にある。往つて見ようと思つて居ると、恰も其案内をす可く Oakland から根君が電話をかけた。

十時頃根君が來た。根君は上州安中の人で、私が順禮行に出發の前月、妻が安中教會で洗禮を受け、根君の家で、蕎麥の馳走になつた事がある。思ふ所あつて先年家を擧げて米國に來たと云ふ。根君の先夫人も、先夫人が臨終の推薦にかゝる今の夫人も、妻の母校出身で、今の夫人は郷里が九州なので、妻と同行歸省した事もあると云ふ事は後で分つた。

私共は根君の先導で、電鐵で Oakland の渡船場 Station に行く。随分ひどい勾配の阪を下るに、新嘉坡あたりに見るやうな二方打開きの輕便式で、少し險沓に感ずるが、馴るれば却て此方が好いであらう。

Station の二階は California 物産陳列場になつて居る。標本の桃の大きさ、美しさ。玉蜀黍の喫驚する程の長大さ。何處の何を見ても、天惠豊かな California を語つて居ぬものはなす。

それから Ferry boat に乗る。それは伊太利の Como 湖や Suisse の Genève 湖に浮んで居たのと

角君夫妻は更に私共を其住居に導いた。阪の中途四室で二十弗さうな。角夫人が手製の團子を馳走する。「*Hotel*」でホテルに歸つたは九時頃であつた。

夜晩よるく隣の室で西洋人の男女大勢が馬鹿騒ぎをする。その騒ぎ方は、「サケ」を飲む日本人の騒ぎ方そつくりの騒ぎである。藝者を揚げて騒ぐ騒ぎ方である。亞米利加人も其様な點に憧憬しんけいがあるかも知れぬ。

(三)

二月十九日。今朝妻が室の掃除をする *Maid* に一弗銀を與へたら、彼女は非常に喜び、弗をもらつたのは始めてと云うて禮を述べる。良人が病氣で居るさうな。有る所には多くあまつても、無い所には少しも無い。朝掃除に来て直ぐ歸るから、定まつた給金の外に客の心附こころづを受ける場合がないのであらう。亞米利加の資本は世界に漲るやうにして居て、一弗がこんなものを言ふ場合もある。遠く愛するのはやすいが、近くは中々後廻はしになるもの。妻が與へた一弗は、私共に多くの事を教へた。

數年前、米國のある日本新聞から、外國に居る日本人の心得を問はれた時、私は「米國で死ぬ、米國の土になれ」と云ふてやつた。其頃の考はさうであつた。亞米利加で死んだ日本人の數も多からう。*Columbia* 大學の石學士イサムの様に、父も叔父も亞米利加で亡くなつた人も居る。私にも血の縁近い墓が太

根君は日本語と英語の音意類似のものを澤山集めて居る。牽強もあるが、面白いのがある。馬鈴薯王、牛島君の別天地園から思ひついて、根君は此小天地を新天地園と命名し、Berkeleyの支那人の Professor に直してもらつたと云ふ新天地園之記など見える。道樂の水彩なども見る。季の女は見えなかつたが長女と長男は學校から下がつて來て、稽古中の Violin の合奏など私共に聞かせた。長男の良君は學校の木工課で手製の Necktie かけを私共にくれた。よく日曜には全家で蕨狩りに往つたり、汐干に往つたり、するさうである。自由な快活な空氣が子達の爲に親達の爲にも如何様に好いかも知れぬ。思ひ切つてふるきを捨てた勇斷の報いは多い。

同郷里の關係から根君が新島襄さんに關する色々の記念を有つて居る。新島家の舊宅を買つた際襖の張り紙にしてあつた古反故から見出したものもあれば、新島さんが最初其處から外國に奔つた函館で手に入れたものもある。新島さんの誕生祝に諸方から到來品の控へを阿父が書いて置いたものなどがある。格式も相應であつた事が分る。日本紙に和蘭語で彼得大帝の傳を新島さんが寫して居る。「官とならば閣老となるべし、妻を娶らば江西を娶るべし」と落書して居る。根君によれば江西は吉原の花魁であつた。新島さんの額に疵があつたのは、多分鞆當の結果だらう、と根君は云ふ。失戀して自殺の恐があるのでナイフを持ちあるかなかつたのが Lincoln の恥辱でなかつたやうに、新島さんの額の疵

似たやうなものだ。灣の朝光鏡の如く、四圍の山ゆるやかに高低し、晴々した眺望である。根君は四圍の山々を指し、河理學士の説によれば、桑港灣附近の山々は五百萬年の地齡で、灣其ものは太古の噴火坑であつたらうと云ふ話をする。日本人が California に纏綿するのは、土地の豐饒、氣候の快適の爲ばかりでなく、山水風土が餘程郷國の面影に同じものがあるからであらう、と根君は云ふ。

適向ふに見えて居た Oakland から大學が立つ Berkeley 一帯が見る／＼鮮やかになつて、桑港を出て三十分もしたかと思ふと最早彼岸に着いた。

上陸して直ぐ電車で Berkeley の根君宅に導かれる。新開町らしく、何處も自然が勝つて居る。根君の宅は電車通りから横に折れて、中流宅地の中の一つであつた。根君が先日自身塗つたと云うて、家は其附近に立つ白樺よりも白い。根夫人の名を忘れて妻は居たが、顔は互に覚えて居た。

私共は其處の質素な食堂で五目飯や茶菓の馳走になり、小さな Parlor で色々雑談をする。數年前全家を擧げて郷里を逃げるやうにして米國に移住し、長男は昨年歿し、夫妻二女一子で女中なしの水入らずの生活をして居る。夫妻は Berkeley 大學に聽講に出かけ、夫人は已に料理を習ひ、今は裁縫を稽古中で、着衣も皆手裁であつた。瓦斯と水道で簡便な臺所、料理を温かくして置く簡易な設備など妻は羨ましく見るのであつた。

私共には姪の落子が、其縁は此 *Oakland* 生活で結ばつた良人の久牧師と昨年の一昨夜横濱まで告別に來た時、私が彼女に社會的婦人たらんより先づ妻たれ母たれと一時間立てつゞけに叱つた事を思うた。久牧師が打込んで居た新設教會に、私共は旅費の中から少々の喜捨を其時した。而して私は遠慮する姪に曰ふた。「阿父の墓に花を献ずると久さんの會堂に喜捨すると、阿父は何方を悦ぶだらう？」而して久さんは悦んで私共の喜捨を収めてくれた。其言葉の如く今日私共は義兄の墓に手ぶらで來た。

墓地の草は緑で、附近には日本の櫻の退化したと云ふ梅とも櫻ともつかぬ花が咲いて居た。今日は空うち曇つて、時に小さな雨が落ち、寒からずまた暑からず、日本で所謂彼岸曇りと云ふ日で墓參にはふさはしい日であつた。人少々の墓地は緑しんみりとして、頭を上ぐれば *Butcher* 一帶の山は青く、亞米利加も日本も忘れるやうな境地である。義兄は絶筆に「恩寵滿天地」と書き、また其前に「平和」と扇面に書いた。此火の國生れの火の子の一人も随分燃えたが望通り平和を得たのである。「よくおやすみなさい」と念じて、私共は墓に別れる。墓の蔭から *Mischievous* な小さな眼が覗いて居るやうであつた。

私共は埠頭まで送つてくれた根君に別れて、*Ferry Boat* でまた桑港に歸り、*Taxi* で四時ホテルに歸つた。

が稍當の結果であつたにしろ、それは新島さんの恥辱ではない。それ程の熱情漢であつたればこそ新島襄である。

興に入つて、思はず永居してしまつた。私共は根夫人に今日のよろこびをのべて、根君に同伴してもらつて、Oaklandの日本人會堂に行く。額牧師は不在であつたが、夫人が私共を導いて新築の會堂を見せられた。小さな好い會堂である。藤の丸に大の字の紋を硝子窓に大きくかいてあるのが、私の心を動かした。私の姉夫妻が布哇から渡つて来て十年近く生活し働いたのは此Oaklandで、此會堂の基礎を据ゑたも夫妻の骨折に負ふ所が多い。後繼の人々がそれを記念の爲に義兄の紋を會堂の硝子窓に彰はしたのは、嬉しい思ひつきであつた。

額夫人に墓地の案内を聞いて、私共は根君と電車でPiedmontの“Mountain View Cemetery”に往つた。其處は名の如く山下の墓地で公園と云うてもよい晴れやかな好い眠り所であつた。其處の横長に劃られた芝生の一つに、披いた書型の小さな墓の下に義兄の大——は眠つて居る。墓表の文字を見れば、彼は日本齡の六十であつた。私は十一の年に初めて同志社で彼を識つて以來、彼が死ぬ九ヶ月前、日本に歸省した時、姉と私共の粕谷に來て芝生の晚餐を喜んだ時まで、さまざまの事を取り止めもなく思ふ。私はまた此墓が忘れぬ今日本に居る姉を思ふた。所生は皆死んで一粒種に残つて居る。

はびつくりさせられる。部内の何處も彼處もきちんとそれ／＼の働きで分類されて、其明晰な頭の働きぶりが心地よい。木さん夫妻の發意で、わたくし達は二人のお婆さん達と雪の屋根に上つて寫眞を撮りに行く。これから直ぐ歸宅と云ふので、お婆さん達は手提や蝙蝠をもつて階段をのぼり、氷の山を渡る。あまりの勞苦と私は見かねて、日本流に「持つてあげませう」と手を出した。ところが九十のお婆さんから、却て慳貪けんどんにはねられて恥かしかつた。おゝ其元氣！ 其獨立心！ 一方には感じ入つた、が他方には其やさしみのなさがものたらなかつた。尤も終日働いて精根せいこんも盡き、まだ親しくもないわたくしがいきなりの親切では老感らうかんに解せられ無かつたのに違ひないが、それにしても亞米利加婦人は明るいび／＼した快感はあるにしても、ゆかしい女らしい愛に缺ける處がありはすまいか？ それは戰敗國の弱味があつたにしても、ナザレで逢つたミセス・ミリアの獨逸婦人、又テベリア湖畔での英吉利婦人C老嬢シイにせよ自らの愛が見えた。

女の位置を高め人類大の愛の働きに於て色々の組織が成されて、それが成功してゆく女性として亞米利加女は世界第一であらう。又女らしい聲としても女代議士ランキン女史の如きやはり亞米利加婦人である。足元から鳥が立つてはないが、亞米利加男子が佛蘭西女により大きく魅みせられたり、紐育で體の小さい女性が持てると云ふも、一は女の香りが高く、一はせめて女徳の敬虔と愛を壓おさ搾さくした體に

(四) 亞米利加の女

泥まみれの氷雪に封鎖されたやうな嚴冬二月の紐育で、亞米利加婦人を彼是云ふはあまりひどい事であらうが、それにしても道の往き來に、チウブの電車内でもらと見た亞米利加女もやはり亞米利加婦人である。思ひの外に體の小さい女が多い。木夫人の話によれば、今は小さい女が持てはやさるゝさうである。歐洲から來て見れば、趣味が雜駁で派手な帽子などが眼につく。言つてきかしても分りさうな六つ七つの男の子を、少し身動きすると人前も憚からず打ちたく身装も相應な若いお母さんなどがわたくしの眼を引いた。戦後、生存競争の烈しい然も此寒い夕景のチウブの中ではあり、こんなあさましい我も思はず出るのであらうが、それはとにかく一體に婦人の顔に穩やかみが稀であつた。木夫人は垢ぬけした一婦人を眼顔でさして「きつと女優ですよ」と云ふのを見るに、其婦人の顔にも少しも愛の光が見えなかつた。

一日木さん夫妻の案内で婦人参政權運動の本部に往つた。一寸した印刷物は私達自身致します」とと整然とならんだ機械の一つに手をかけてにつこり迎へる丹の頬した若い女達、木夫人に参政權運動行列以來の親しみを微笑に見せて、輝かしい眼元のライブラリーの婦人達から、此寒空之毎日々々出勤して、事務をとつたり、此運動の最初からの歴史を綴る九十の齡を重ねたお婆さんまで、元氣なのに

う乎？ 夫を亡ひ、子を殺し、父を喪ひ、兄弟を不具にし、寡婦^{くわふ}を泣かせ、人類の幸福を生命を奪ふ恐る可き戦争から全然未然に救ふ事が出来るであらう乎？ 亞米利加婦人が眞の女であるや否、是からが大なる試験である。

あ い

(五)

Oakland^{オークランド} から桑港に歸つた二月十九日の午後六時に、齋君夫妻ホテルに來訪。私共が今夜の講演に臨む前に、日本料理の御馳走をすると謂ふのである。

四人は「^{タキシ}」でホテルを出る。運轉手は日本人。先日新聞記者の話に、桑港の日本青年には自動車の運轉手希望が多いと云ふ話であつた。仕事が奇麗で、収入が多くて、と云ふ意味なのであらう。

外はまだ明るい。齋君は過ぎ行くあたりを指して、此處まで1905年の火事は焼けた、彼の建物には自分^{自分}が昔居た、と私共に説明する。齋君は子福者で五人の子女がある。桑港の School^{スクール} と日本語の學校と双方に通はして居ると云ふ。二重教育は子供に重荷^{おもに}に過ぎはせぬかと思ふ。これも先日新聞記者の話に、最初渡米して來た日本人より、次の Generation^{ジェネレーション} また次の Generation と段々人間がまづくなると云ふ。日本の櫻が亞米利加に來て、梅ともつかず櫻ともつかぬ一種のいちけた花になるやうに、やはり腰かけ氣もち、二重心が段々にさうなるのであらう。考ふべき問題である。

でも濃く見たいとやうな象徴ではあるまいかとわたくしには思はれる。

高慢には愛が宿らぬ。女權擴張も婦人自らに微細な愛が閃めかぬでは決して愛の働きは完成されぬ。それは亞米利加女も新英蘭（にゆういんぐらんと）のふるい邊りには美しい家庭ゆかしい主婦が澤山あると聞いて居る。現にわたくし達が桑港（さんこう）に行くニウオリアンスからの汽車の中にでも、六十近い上品な夫婦でドミノをして遊んだり、夫人は孫への土産といつて車中で白い毛絲を出してボンネットを編み、淡紅色絹の細りボンで飾りなどつけたりして居る眼にも口にも愛があふれて見えた。

亞米利加の國が天恵ゆたかなる如く、亞米利加の女はたしかに天父の恩恵を世界の他の國々の婦人達よりもヨリ大に受けて居ると云はねばならぬ。禁酒運動にせよ亞米利加女はあの通り勝を制して、既に國法となつた。今度も亦參政權運動にいよく成功して、一州の代議士でも亞米利加全土の大統領でも女の見地から動かし得る國政の上の妻つまり國母の位置に立つた。亞米利加女は女性愛を亞米利加國內のみならず、全人類の福祉の爲に十分に延ばし得る絶好の機會を與えられたと云はねばならぬ。

此場合亞米利加女は女として澤山の働らきが待つて居るであらう、が其數ある中に最近込み入つて來た日米問題などがある。亞米利加の婦人達は此問題について其天與（てんよ）の女の力を如何に用ひるであら

記憶がヨリ確かでないとも限らぬ。私は聞きつゝ、*ニ・ノ・ノ・ノ*と云ふたり「それはあなたの小説でせう」と彌次つたりした。

やがて齋君は壇を下り、私は壇に上つた。

私は腹にあるものを拉々雑々と披瀝した。まことに私には稀有の好機會である。私の心腹談は要するに下の如きものであつたと思ふ。

私は人間である事を感謝する。私は日本人である事を感謝する。私共は世界を一周して來て、ますます此感を深うする。

私は亞米利加に渡る前に、誠心誠意神に祈つた。何卒踏りのない、穩やかな、明らかな、温かな心で亞米利加を歩かせ玉へと。私も人間、私も日本人であるからは、やゝもすれば私の血は自國に對する誤解や侮辱に對して燃え立つ。そんな血、そんな氣で亞米利加をあるく事は誠に恐ろしい。そこでさう祈つた。

私は亞米利加は唯紐育に二週間、それから南方線を通つて三日前に此の桑港に來たばかりで、最初望んだやうに此加州の日本人部落を歩いて、親しく見聞する機會も持たない。然し私が素通り同様

私共は桑港の帝國ホテルに誘はれた。日本人のホテルである。私共は寧ろ齋君の家庭料理を欲したが、子達の都合もあるので此處にしたのであらう。

御馳走も特に註文の果物もうまかつた。私は講演の聲が出るかと危ぶむ程食ふた。それでなくても、腹がふくれて居るのに、御馳走までもつめ込んだので、大に腹ごなしの必要を感じる。

それから今夜の會場の *Reformed Church* に往つた。立派な建物である。時間を待つ間、妻は齋夫人と日本人街の夜景を見に往つた。男共は留つて話す。 *Oakland* の額牧師と初對面の挨拶をする。今日 *Oakland* の會はなかつた義兄の甥の大君にも會ふ。

八時に會場に往つた。それは二階で、*Gallery* まじりばい人であつた。六七百もあつたであらう。雑多な聴衆。勿論皆日本人である。私は斯く、多數の同胞に私の心腹をうち明け話をする機會を與へられた事を感じた。

齋君が先づ壇に立つて、私を紹介した。私が十八九、自身が十五六の昔、今治で共に生活した當時を語り、私が文章軌範を背誦したり、其文章軌範を齋君に七十五錢で賣らせて牛肉を喰ふたり其世話に當時なつて居た私の従兄横井時雄さんのみやげに麥稈帽をもらつたのを、空氣ぬきだと云ふて天井に穴をあけたりした事を素破ぬいた。私には冤罪のやうに思はれたが、齋君が私より二歳年下だけに、

やはり私の愛が諸君に足らなかつた。然し獅子の子落しではないが、其爲に諸君が自動自立の習慣がついたと聞くは、望外の幸である。此處は水入らずのうち明け話をする處だ。私自身其經驗がある。私は此旅中に母をなくした。其母について思ふやうにならぬもどかしさがあつたが、一方から見れば其處が却て母の愛であつたとも云へる。

私は實は此演説を米國人にも聞いて欲しい。其機會がないは遺憾だが、私は今夜の話が何れは米人にも傳はらずには居らぬと思ふ。だから私は單に日本人が日本人に語るのではなく、亞米利加人にも語るつもりで語る。

私が思ふに、日米問題を解決する鍵は唯一つある。それは亞米利加の立場に立つ事である。自己の立場に立つて、先方の問題が解決されるものでない。日本の問題は、亞米利加の立場から解決されない。その如く亞米利加の問題は日本の立場からは解決されない。互に他の立場に立つ事によつてのみ、双方の問題は解決される。

私は日本人である。私は雪の紐育から New Orleans を經じ、Texas, New Mexico を通じ、Los Angeles に來た。誠にあの美しく緑の Los Angeles に來ると樂園の感がある。其 Los Angeles に來ると、汽車の上から私は何物を見たか？ 備前屋、中國屋、そんな宿札などが停車場近くにすらりとし

亞米利加を歴て、感じた事は、それは日米の間は現に米國に居る諸君が思ふ以上に切迫して居ると云ふ事である。私はそれを空氣に感ずる。旅人の通り目、岡目は却て永年の居住者よりも、眞を穿つ事があるものである。私の胸には色々な感想が満ちた。それを言はずに米國を去つたら、私は寢ざめも安くない。そこで今夜は斯く大勢の諸君に話す機會を與へられたを幸ひ、思ふ存分私の腹中を披露し、悉皆私の感想を傾け盡し、腹中無一物身輕になつて太平洋を渡りたい。

私共は昨夜ある人々の厚意で金門公園の夜景を見に往つた。其處には要砦やら何やらがあつた。澤山の大砲が西を向いて並んで居る。東の玄關には「自由」の像を建て、西の門には大砲の口を西向けるとは、亞米利加にも似合はぬ。これはよろしく取り拂つて、其大砲を鑄つぶして東の「自由」と一對の「平和」の女神を立つ可きである。私は亞米利加の爲に、此西の固めを恥づる。然し翻つて思ふと、日本自身が百足の如く細長い體の四方八面に外敵打拂ひの大砲を並べて居るのだ。自分の國を捨て置いて、他國への註文は無理である。米國の眼の塵をとる前に、先づ我日本の眼の梁をとらねばならぬ。

先日私共は、在米國同胞が本國の爲に捨兒同然にされた恨み話を聞いた。尤である。自白すれば、私自身諸君に對する同情が足らなかつた。私の近い血族親族で、此加州に骨を埋めて居る者も居るに、

つて、臣民皆一應其戸籍についたやうに、世界が搖り直しの時代である。一方世界的に聯結疏通すると同時に、一方各部分の結束がはじまるのは當然である。侵掠は其手を引き、蹂躪は其足を退け、租借は返へし、併呑は吐き出す時代である。

私は米國が第一に支那人を排斥し、今度日本人を排斥するを喜ぶ。更に進んで黒人を排斥してもらひたい。黒人は亞弗利加に歸るべきだ。Lincoln に始まつた黒人の解放は、亞弗利加歸還に終らねばならぬ。

私は此活きた精神にもとづいて、日本が米國を去るやうに、米國は東洋を去り、其宣教師も歸つて自國に宣教してもらひたい。日米のみならず、世界各國皆自己に還つて欲しい。孟子の所謂、盍反其本で、皆還元をせねばならぬ。人の罪を責むる前に先づ自ら責めるのだ。人の貸金をはたる前に己の借金を返へすのだ、皆己に反へる。本に反へる。其外には解決の道は決してない。

然らば日本の過剩人口を以て將來如何すればよいか？ 私は知らぬ。私は知らぬが、米國を立退く日本人の行く所は必ず與へられる、と信ずる。北か南か、日本人の行く處は必ず近くにある。遠走りするに及ばない。

日本も隨分亞米利加に注ぎ込んだ。然し米國も隨分日本に注ぎ込んで居る。此勘定が如何して精密

て居る。日本人の私はそれを嬉しく思ふた乎？ 私は嬉しく思はなかつた。

私は少しばかり土の生活をして見て、土と人との關係には體驗がある。私は鎌倉逗子の好い場所が西洋人の別荘地になつたり、江の島の頂邊（つっぽん）に日本人名義の西洋人別荘があつたりするのを嬉しく思はぬ。Filipina（パレスチナ）で米國生れの猶太人兵卒に、日本に猶太人移住の餘地があるかと問はれた時、私は明々に御免を蒙つた。己の情を以て他を推すと、米國の爲には寶の庫（くら）の加州に日本人が根を下ろす事は、米國人の悦喜（よろこび）でないのが當然である。米國は廣いと云ふ。加州の人口は少ないと云ふ。それが日本人の根を下ろす理由にはならない。日本人はふえる。現にふえて居る。此まゝで往けば、確に將來は新日本が米國に出来る。米人の杞憂は杞憂でない。それは全くの事實である。

私は曾て土を女に比した。我土は我女房である。米國が其昔日本人の勞働を要求したのは、手が廻はらぬから我女房（にようぼう）の世話を他の男に頼んだやうなものだ。世話してもらふ内に、追々子が出来てしまつた。のろまの亭主驚いて女房の取り返しにかゝつたやうなもので、これ程自然な事があらうか？ 米國人も此頃になつてやつと愛國心が出来て來た。女房が可愛ゆくなり出した。Americanization（アメリカニゼーション）は當然の傾向だ。

今は新紀元新世界の創始時代である。物皆還元の時代である。昔の皇帝即位、天下の戸籍調査があ

つて、臣民皆一應其戸籍についたやうに、世界が搖り直しの時代である。一方世界的に聯結疏通すると同時に、一方各部分の結束がはじまるのは當然である。侵掠は其手を引き、蹂躪は其足を退け、租借は返へし、併呑は吐き出す時代である。

私は米國が第一に支那人を排斥し、今度日本人を排斥するを喜ぶ。更に進んで黒人を排斥してもらひたい。黒人は亞弗利加に歸るべきだ。Lincoln に始まつた黒人の解放は、亞弗利加歸還に終らねばならぬ。

私は此活きた精神にもとづいて、日本が米國を去るやうに、米國は東洋を去り、其宣教師も歸つて自國に宣教してもらひたい。日米のみならず、世界各國皆自己に還つて欲しい。孟子の所謂、盍反其本で、皆還元をせねばならぬ。人の罪を責むる前に先づ自ら責めるのだ。人の貸金をはたる前に己の借金を返へすのだ、皆己に反へる。本に反へる。其外には解決の道は決してない。

然らば日本の過剩人口を以て將來如何すればよいか？ 私は知らぬ。私は知らぬが、米國を立退く日本人の行く所は必ず與へられる、と信ずる。北か南か、日本人の行く處は必ず近くにある。遠走りするに及ばない。

日本も隨分亞米利加に注ぎ込んだ。然し米國も隨分日本に注ぎ込んで居る。此勘定が如何して精密

に出来よう？ 亞米利加に東洋から歸つてもらふかはりに、此方もけちな事は云はず、一切に奇麗にノシをつけて、永々お世話になりました、と立つ鳥後を濁さず清く日本に歸らうではありませんか。と云ふて、今夜直ぐ荷造りして、明日の船で歸らうと云ふのではない。先方から申出がはつきりあるまでは居てもよからう。然しまさかの時の覺悟をして置く事だ。

それで此方の言ふ事ばかり云へば、日米の間はどうせ戦争になる。あの大戰をやつと經過して、まだ血が流し足らないであらうか？ 太平洋が修羅の海となり、日米互に血を流して、何の獲る所があるらう？ 最早人間も成長して好い時分です。

私の演説は順序なく一時間半に涉つた。ある時は諸君が笑つた。稀には拍子もあつた。然し終り方は皆黙つてしまつた、妻の言によれば、女學生らしい數名は中途で出て往つたさうだ。小説家の話は面白からふと期待がはづれて、變な面白くない話に興がさめたのであらう。

私は思ふ存分云ひ盡せぬ憾はあつたが、要するに云ひたい事の要領は言ふた。

壇を下ると、色々の顔が私を迎へる。其兄者人は私共の結婚の表面媒酌人であつた人の嘉君は家族は流感で寝て居る中を寫眞と鮮の折を持つて來てくれ、昔熊本で英語の初歩を私から習つた事もある

木君、同志社で面識の佐々君、社會主義の石君を識つて居る。O君などゝ握手する。角君夫妻も見えた。最後に Livingstone で奥——君と農場をやつて居る渡君が、私の演説について、これまで Livingstone ではあたりの白人との間圓滑であつたが、つい此程だしぬけに、村の入口に “No more Japanese wanted here!” と云ふ立札を建てられた事を話し、私の演説には考へさせられると云ふ意を述べた。私は今夜の聴衆が、學生や商業の人や土に直接交渉せぬ労働の人々から成つて居て、土の人が殆んど無いやうなのを遺憾に思ふたので、噂にも聞いて居る Livingstone から一人の聴者があつた事は、私に非常の満足であつた。

私共は二三諸君と齋君宅に往き、茶菓の馳走になり、諸君と別れて、Taxi でホテルに歸つた。

歸ると電報が待つて居た。それは Santa Barbara で十字架の死を遂げた私の甥の寡婦からであつた。彼女は娘と Fresno に居るので、今度はお目にかゝれぬと云ふのであつた。會はぬは遺憾だが、電報は私共を悦ばした。私共は翌日彼女に返電した。 “God bless thee and thine. We shall come again before long.”

私共は今度の世界一周に露西亞にも行かず、大切な亞米利加は素通り同然だ。露西亞には西比利亞

鐵道でまた行くつもりで居る。それよりも亞米利加にはどうせ遠からずまた往く豫感を與へられて居る。それで此返電を出したのであつた。

Fairmont Hotel は名の如く「美はしの山」の上のホテルで、私共の室から桑港灣を一目に見る。昨夜は氣もつかなかつたが、今夜は先程見舞ふた灣の向ふの O'Kland 一帯が光明の連珠を彼岸に延きはえて、さながら Illumination のやうに美しい。「大さんが喜んで居るのでせう」と妻が曰ふ。

第十二篇 日本へ

第一 太平洋（前）

其一 新天新地 四海一家

(一)

大正九年二月二十日。

今日は亞米利加を立つ日である。

朝食後角君夫妻來訪。角君は絹地や筆墨を持參し、私に一筆揮ふべく求める。私は遠慮なく惡筆を揮ふた。

新天新地曙 四海一家春

大正九年二月二十日 春洋丸 桑港を發する朝

爲 角岡君

徳 健

平常にまさる悪筆で、心外しんぐわいでならぬが、私の胸臆きょうおくは字が言ふ通りである。

色々拂ひを済まし、午前十一時半頃、私共は角君夫妻と Fairmont Hotel フェアマウントホテル を出て、Taxi タクシー で埠頭に赴く。

昨日領事館から小包が着いたとの電話であつたので、途中「Taxi」をとめて角君が私共の爲に取つて来てくれた。それは私共の期待した倫敦の靴でなくて、後で披いて見れば福書店から送り越した賀君の「労働者崇拜論」と「涙の二等分」であつた。倫敦の靴は到頭來なかつた。新しい靴をはいて歸る目論見もくろみは奇麗にはづれて、私は年來はきふるし、それで世界を一周した靴でまたのこゝ日本に歸り往くのであつた。此行のはじめに、私は書いた「女房と靴は古いに限る」そこで望の如く古女房と古靴で芽出たく日本に歸るのである。

埠頭はお話にならぬ混雑。船には一切乗客以外の人をのせぬので、私共は此處で角君夫妻に握手して別れる。角君夫妻は遠からず歸國の豫定さうなが、別れはやはり別れである。私共が果物好きくだものなので、其方は曾て商賣ものの手にかけて巧者かうしやな角君が特に精選した Orange オレンジ の一箱を今早朝船に送つてくれたさうなが、混雑の中で一寸見當らない。然し後で無事に現はれた。私共は日本に歸つてからも

永い事亞米利加を味はう事が出来た。

齋君夫妻も見送つて見えた。而してオレンヂや林檎の箱、また私共が欲しがつて居た Oatmeal の箱を家族の寫眞と共に齎もたらしたのは、並々ならぬ厚意であつた。私共は粕谷に歸つても、大分朝々 Oatmeal で亞米利加氣分を續けた。

額牧師の顔も見えたが、何しろひどい混雑で、おち／＼別を叙する事も出来ぬ。

混雑と亂雑が世界一周の何處の出船にも無い圖を私共に見せる。唯一枚の狭い板橋を渡つて、白服の日本 Boy が手荷物を運搬するが、何れも各自の係りの Cabin の手荷物しか持ち運ばぬ。匆々に柵の内と外とで諸君に告別した私共は、手荷物の大部分は其處にさし置き、各自兩手に提さぐる物を提げて、狭い橋板を兎に角春洋丸に乗つた。

其二 春 洋 丸

(一)

香港ホンコンで其姉妹船天洋丸を私共は見えた春洋丸が、私共を亞米利加から日本へ連れて往つてくれるのであつた。與へられた船房は、C Deck 左舷の No. 118。潤うるく、明るく、船中屈指の好い船房であつた。

春洋丸初期以來乗つて居ると云ふ物馴れた ホビー Boy の平君が面倒を見てくれる。懸念したトランク類も兎に角のつて居る事が分り、手荷物も船房に持ち運ばれ、乗船混雑の逆上ぎやくじやうがをさまると、私共も落着いた気分になり、昨夜友人の嘉君が演説の場に持つて来てくれた折詰の鯨を船房で開いた。久しぶりに食ふ鮓の味が好かつた。

銅鑼どらが鳴つて、下りる程の人は下り、Wistful Eyes をして目送する同胞を岸壁に残して、春洋丸は動きはじめた。

私共も船房を出て、甲板を歩く。長なが550呎、幅ひろ66呎、深ふか38呎、二萬二千噸の春洋丸は美しい好い船だ。大西洋を越した和蘭船の Rotterdam と噸數は匹敵するが、春洋は船體ヨリ細長く、輕快な感がある。一等船客に日本人の數が多い。

船は桑港灣を後に、徐々金門を出て行く。金門の幅は一湮半さうな。瞳孔どうこうの開いた眼には關門海峡にいくらもまさらぬとさへ思はれる。やがて先夜角君夫妻と自働車で來た Cliff House や Seal Rock が見えて、其處から桑港の夜を見下ろした Twin Peak も行く／＼後になる。桑港を出ると船は揺れるが通例で、こんなに靜かな事は稀、と若い日本船客の一人は云ふて居る。

四時には船客列をなして、Office に Ticket を出し、食堂の座席をきめてもらふ。物馴れた人達は、

逸早く Deck Chair を約束したり、Bath の時間をきめたりして居る。

私共が A Deck 船尾の Palm House 外の籐椅子にかけた頃は、亞米利加は最早のべつな低い海岸線を和やかに私共に見せて居る。

「さよなら、亞米利加！　また来るよ！」
と私共は心に叫ぶ。

傾いた目がぼかり／＼、船が揺れるので、疲れた私共は椅子にかけたまゝ、搖籃の心地にうと／＼する。

角君夫妻が先日齎らした喇叭水仙を私共は船房に持つて來た。夕近く紐育で噂に聞いた小が夫人の使ひとして妻に一箱の花を齎らした。薔薇、アスパラガス、フリイジアなどの美しい色が私共の船房を愉快にする。

時は春、春洋丸、太平洋、日本の船で日本に歸る日子日女が嬉しくなからうか？

花が一番私共の心を語る。

日本から歐羅巴の玄關迄は大阪商船會社の船に乗り、歐羅巴から亞米利加までは其船にこそ乗らなかつたが、日本郵船の世話になり、太平洋はまた東洋汽船の世話になる。それは嬉しい事である。

夕六時に、Boy が洗面の湯を持つて来る。

七時に食堂に出る。倫敦仕入れの Motherills 船暈藥を服して居た妻は少しやはり船暈の氣味だが、太平洋と春洋丸に敬意を表して、つとめて食卓に就く。一等船客が多いので、私共は Second Course。食卓は中央で、船長同席だが、今夜は船長は見えない。私共は田理學博士、加州中央農會幹事の千君、時事新報の大君、建築の秋君、遞信官吏の長君と一席である。名刺を交換した田博士を羅馬字のあの博士かと思ふたら、其令弟であつた。二階から奏樂が降り、青服の年長支那人が物やはらかに給仕する。斯くて、太平洋の第一日が暮れる。

私共は船房に歸つて、私は上の Bath に、妻は下の Bath に、疲れた而して安心した體を横へる。さよ〜歸るのだ、迎へに來た日本の船で、——「日本へ！ 日本へ！」

(11)

二月廿一日。Fairmont Hotel からの花が私共に今朝渡つた。Sweet Pea の Violet、喇叭水仙、Primrose、それから亞米利加櫻、美しい事だ。室内には花が多過ぎるので、食卓に出す。

龜船長も午餐から食卓に見える。船長の名は夫人と共に私共の記憶にあつた。剛健快活な男さかり

の好船長。食卓が賑合ふ。今度新に此春洋丸に乗つた初航海の歸りであるさうな。

甲板では内外人の甲板遊戯が盛に始まつた。大勢の子供連れの日本人もあつて、賑やかな事だ。一等船客二百三十人、其内日本人が大人子供を合はせ八十一人も居る。

紐育ではかけ違つてつい會はなかつた一さんと挨拶を交はず。

それから Miss 小から (Christian Science) の開山 Mr. Eddy の傳を借りて讀む。

賀君の勞働者崇拜論を讀む。大道の眞中を歩いて行く新人の歩み振りが、心を強くする。日本にもこんなのが居るから、さう心細く思はなくともよろ。

(二)

二月廿二日。朝、妻は一夫人を訪ふて、私共が New Orleans から汽車に同乗した守君の Boy が重患の事を聞いて來た。夫妻で Deck の共室に見舞ひに行く。桑港から少し悪く、昨日は已に危かつたさうな。天幸に小兒科の平博士が此船に船客として乗つて居て、毎二時間見てくれるさうだ。若い父も母も心痛に少し面皷れして居る。

今日十一時に初めて Bath をとる。

今日は Washington 誕生日で、午餐には小さな合衆國旗が各人別に食卓に置いてある。それを胸に

つける。

午後千君來訪。日本を去つて十四年、加州の排日問題につき本國の注意を喚起の爲に今度歸るのである。加州問題に關する話を色々聞き、後で種々冊子を借りる。

大阪天王寺中學の牧君と話す。倫理と英語を擔當して居る。年配も六十の方近く、而して自費の周遊は人意を強ふする。英吉利の中學などには、寄宿舎に泊り込んだりして、しんみりした視察をして居る。亞米利加ではふるい教へ子が移住して居る家を訪ふたりして居る。さまざまの手撮の寫眞が面白い。こんな先生をもつ中學生は仕合はせだ。

ボルネオ ボルネオ 丸では私が全船第一の年長であつたが、春洋丸ではそれでも内外人に可なり兄さんがある。桑港までの汽車内で見知り越しの人も居る。あの ボルネオ ボルネオ ものつて居る。

晚餐には、二階で樂隊が米國國歌を吹奏する。食卓の一同起立する。それから食卓にのせてある色紙の キャップ をかぶり、子供の鳴らす護謨風船をびい〜言はせ、クラフカー クラフカー を鳴らし、皆子供になつて芽出度 ワシントン ワシントン 誕生日を祝ふて、笑ひ興じた。

日本にもこんな日とこんな氣分が欲しい。

Washington 誕生日と云へば、私共は日本の紀元節に紐育を立つて、其翌二月十二日は リンカーン リンカーン の

誕生日であつた。二月は日米にとり芽出度い月である。

(四)

二月廿三日。連日好晴。餘程南に來たと見え、段々暖かくなつて來た。

船の生活も大分馴れた。早朝私共が洗面済まぬに Boy の平君が大抵番茶に砂糖ふりかけた梅干、Grape Fruit か Orange を持つて來る。七時には湯を持つて來る。八時半朝食。甲板に居れば、十一時には Cup のスープが Deck Steward によつて運ばれる。一時午餐。四時甲板或は船房で茶菓。六時に Boy が化粧の湯を持つて來る。七時夕食。食前三十分に注意の喇叭が吹かれる。樂隊の人が吹くやえて清しい喇叭の音が船内に隈なく響き渡る。私共は毎々空腹を覺えるので、喇叭の音が殊に嬉しく感ぜられる。私は二歳から十八歳の春まで、京都に居た中二年を除きずつと熊本の郊外に長じて、銀杏樹天を摩す熊本城から朝々夕々の喇叭の音が流れるのを聞き、成長したので、喇叭の音は殊になつかしい。食時の喇叭は銅鑼よりいくらましかも知れぬ。「井は其處に居て易はる。日本は其まゝで新まる」と私が曰ふたやうに、人間の造り出したものは、其靈さへ更はれば其まゝに利用されないものは殆んどない。救世軍が軍隊の形式を利用したは Boosey 爺さんの活眼だ。喇叭も平和に利用しなくては駄だ。

千君が Burbank の教育に關する小著、及 Burbank に關する雜著を貸してくれる。B君と懇意なうな。B君が亞米利加でも幼稚子供に教育のつめ込みが多過ぎる、十歳位まではもつと自然に親しませて、所謂學事を控へるやうにしたい、と謂ふのは、自然と親しい交渉を重ねて居る經驗の言葉で、私も同意だ。

船房トランクと Hat Case が見つからぬので、平君の先導で Baggage room に見に行く。隨分夥しいトランクの數だが、直ぐ見つかった。Borneo 丸の Baggage room を思ふ。それから平君の世話を受けるについて、Borneo 丸で四十餘日厄介をかけた木君は如何して居るだらう？ と夫妻噂をする。何にせよ、日本の船で日本を出で、日本の船で日本に歸るのは、嬉しい事だ。

妻は守君の Boy を見に往つた。少し好い方。

此航海の甲板競技や講演色々の慰みについて、委員が出来、Propane が出来たやうだ。

夜 B Deck の船尾で活動寫眞がはじまつたが、器械の工合が悪くて中止。

(五)

二月廿四日。私共の Deck chair は B Deck の船尾遊戯場の側にあつたが、あまり日が射すので、右舷に移る。日は射さず、北風も好い氣もち。

午餐の席で、船長は Magic purse を見せた。口が縫ふてある、而して内の小貨が出し入れ自由だ。妻が女の眼を以て、田博士が理學の眼を以て、秋君が建築家の眼を以て、大君が新聞記者の眼を以て、長君が遞信眼を以て、私が主觀的眼を以て見たが到頭 Magic を看破する事が出来ぬ。船長は笑つて種明かしをした。或糸を引張つたりしめたりする丈の事だが、矢張 Columbus の卵である。

午後三時半に、私共兩人は A Deck の船長室に茶のお呼ばれに往つた。酒の振舞が食卓員にあるのだが、私共が酒を飲まぬので、特に茶に招かれたのである。夕陽戎克の水彩スケッチがある。船長の筆さうな。剛健な筆觸が其人を表はして居る。

夕六時、日本食の馳走がある。私共は日本食を少しも Miss しないが、食へば矢張うまい。

今夜も甲板で活動寫眞がある、然し見に往かなかつた。

九時、食堂で日本語の講演がある。田博士の窒素の話がある。獨逸が始めてものにした空中窒素の話が面白い。空氣から窒素が取れる。肥料にもなり、爆藥の原料にもなる。私は博士の話聞きつゝ思ふた。自然は兩手に生死を祕める。而して人間に何方かを擇ばしむる。空氣が生命の種になり、生命を殺す爆藥にもなる。生か死か、何方を採るも其次第だ。惜しい事には獨逸は死を採つた。博士の話によれば、獨逸は1913年に已に壞地利をつゝいて戰爭を起す筈であつた。博士が居た研究所に電

報が來たら、それが戦争の知らせの筈であつた。今度の戦争についても、獨逸は必勝を期し、速やかな勝利を期して居た。博士等も半年も瑞西スイに待つてお出なさいと云はれたものさうな。然るに1914年の八月に戦争が始まつて、年の暮には最早硝石しょうせきが缺乏しはじめた。そこで空中窒素ちゅうその研究が全速で進められ、翌年五月には成功して、それで戦争が長びいた。獨逸は自然が與へた空氣から生を取り出すして先づ死を取り出した。畢竟するに天物暴殄ほうてんの惜しい智慧、惡魔の智慧である。

紐育正金支店長一さんは、財政上から見た亞米利加について話した。亞米利加の資本が支那を征服する處ところはない、と云ふ一さんの言は、私に安心を與へた。

(六)

二月廿五日。非常に暖かだ。船長以下船房せんぱうに到るまで白服になり、船客も大抵夏装して居る。布哇ブワホノルルY. M. C. A.から木曜午餐に招待の無線電信。

午前十一時に波斯丸ペルシヤ丸が行き違ふ。双方から手巾ハンカチーフをふる。肉眼で顔が見分けらるゝ近距離。無線の設備はあるが、此様な時に飛行機か、せめて傳書鳩つばきでもあつたら、と思ふ。春洋丸の上に居てはさう思へぬが、少しはなれてペルシヤ丸を見ると大分揺れて居る。何と云ふても太平洋の胸の上、静かでも心臓の鼓動は大きい。

然し太平洋はそんなに淋しく大きい感じでない。淋しさを感じるにはあまりに船が日本だ。而して私共は歸りなのだ。妻は曰ふ、太平洋の心地はせず、東京の街を歩いて居る心地がすると。春洋丸は細長く、八遍周ぐると一哩マイルになると云ふ程 Deck Promenade が長く、而して日本人が多いので、「東京」と云ひ「街」の感じは自然である。

連日好晴。夕方水平線に沿ふて、インク色の雲の堤や雲の柱が長々と影を洋面に醸ひたし、雄大な眺望であつた。

夜八時半、何時も講演の会場になる食堂に行く。氣象臺技師大さんの Esperanto 講義がある。私共も少しはやりかけて其まゝになつて居る。分化と結合が世界を通じて同時に働く時代に、自己を押し立てようとする念と同時に互に握手しよう念は自然に起る。世界は分れねばならず、一にならねば止まぬ。其點に於て萬國語の採用は自然である。Batai の綱領の中にある、自國語以外萬國語を必修語とする事は、まことに自然で而して其萬國語は畢竟 Esperanto に落ちて行く。四海一家春を呼ぼう私共がつて居る春洋丸に Esperanto の話は、洵まことに嬉しいものであつた。

Esperanto の後から私は一時間半ばかり話した。天井が低くて、無暗に明るくて何だが話しくい食堂である。暑がりの私が窓をあけてもらつたので、波の音が軽々と舷なはたを打つて私の聲はます／＼通

らなくなり、諸君は段々私に近く寄つて來た。私は何處の旅行が一番面白かつたかと毎々問はれるが、矢張 *Palstina* が一番面白かつた事を話し、其 *Palstina* の懺悔話をすると思つて、ナザレで英吉利の男を怒鳴りつけたあの話をした。怒鳴るは上乘でない、腹で叱るを上乘とする、まだ其處まで達せぬ遺憾を懺悔した。其英吉利人の負けぶりに感心した事から、獨逸の負け惜み、獨逸婦人と英米婦人の比較に及んだ。私は幹事の千君に、婦人の來聽を特に要求したが、私の打ちあけ話を聞いた婦人は、妻の外に一夫人外一名に過ぎなかつた。私は何處でも打あけ話ばかりする。分けて春洋丸の今度は *Family Party* のやうなもので、私は他所行き態度をとる必要がなかつた。私の話は頭も尾もないやうな變な話だつたが、皆興に入つて聞いてくれた。

第二布　　哇

(1)

二月二十六日。早朝 *Honolulu* 着。甲板から見た第一の感は、淋しい感じである。もつと平たい島かと思ふたら、案外山高く裾蹙まり、住み好ささうにも思はれない。皆上陸の爲急いで朝食をとる。

檢疫がある。

布哇の日本新聞記者が二三來訪する。甲板で漫遊雑談を少しする。

私はセルの服、妻は Port Said の夏服で、朝九時岸壁に上る。千君も同道する。

H 牧師が迎へに見えた。千君は H 牧師の教會に屬した事もあつたさうな。私は十三の歲同志社で八歳兄の H さんに別れて以來四十年ぶりの對面である。H さんの顯近く怪我が與へた「永久の醫」は昔ながらに、H さんは四十年ぶりに會ふても昨今別れたやうに一向老けて居ない。

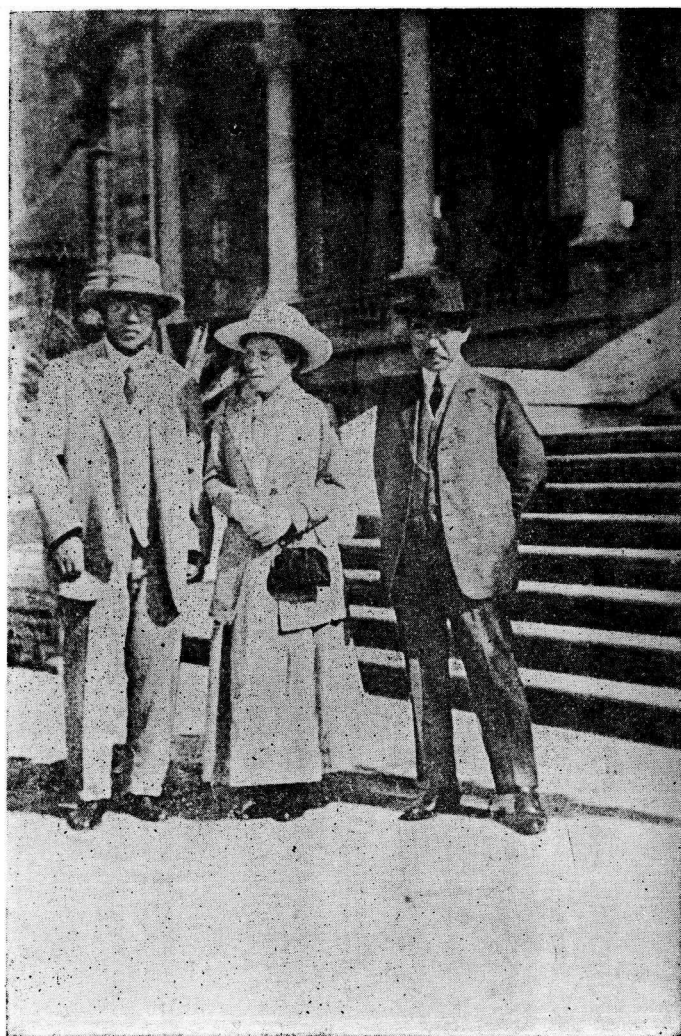
無線電報を春洋丸にうつた Y. M. C. A. の松君が小形の自動車を擬して迎へに見えた。

(11)

私共は、千君と第一にもとの王宮今の Capitol に導かれた。相應に立派な間取り。Lift で二階に上る。掲げられた歴代の王、女王の油繪肖像の中には、明治の初年日本にも來た王のも、最後の女王 Lijnokamani のもある。下りて石段下で、松君は私共三人の寫眞を撮つた。

それから一番ふるい宣教師の住宅や、土人が海岸から此處まで列をなして、一塊々遞次に運んだと云ふ珊瑚岩で出來た最初の Kawainoa Church や Carnegie 圖書館を見る。それから郊外に向ふ。

日光眩しく熱して、海の風は涼しく、椰樹立ち、熱帯の花咲き亂れ、新嘉坡にまた來た心地がする。



前 宮 王 舊

一重、八重、緋、紅、黄、白、Hibiscus の花の種類が夥し。

植付間もない青田がある。

熱帯植物に圍まれて涼しげに住みなした Bungalow がつどく。一年も来て住んで見たい。松君は今
は故人になつた Jack London などもよく長逗留しては、海に入つたり、書いたりして居たと話す。

月に何程でいけよう？ 夫妻に女中一人で百弗はかゝらぬと松君は言ふ。California で私共が暮参した

義兄の夫は、加州に渡る前夫婦、後では其女も呼んで彼此三年ばかりも此 Honolulu に住んだものだ。

Bungalow の寫真などよこした事がある。何處に住んだのかなど思ふて見て行く。

海水浴、波乘りに名高き Waikiki の Beach に出る。名高い水族館は、時間を惜んで見ない。

Rainbow 谷に走り、青蔦の這つた學校を外から覗く。これは男子ので、女子のもある。各國民の子

女が居る。土人の女兒は唱歌がうまいさうな。所謂文明、稼ぐ日本人、頭を使ふ亞米利加人などが入つて来る前は、歌ふて踊つて太平洋の太平洋島であつたのなもの。

自動車は王朝の古戦場で眺望の好い Nuanupai に走る。

大分駛つて、迂廻した山路を上つて、所謂 Nuanupai の險崖に來た。昔王朝時代に、先王朝の mehana が敵を破つて險崖から擠したと云ふ古跡で、其石碑がある。此處は嶋の北部を見晴らし、

太平洋が緑に碧に紫に色様々之際立つて遠目に美しい。ナザレの山路からエスドロンの色紙の平原を見下した時のやうな氣がする。島の中部の吹きぬきに當るので、無風の日でも此處は風があるさうな。今日も帽を吹き飛ばしさうな風が吹いて居る。ホノルルは暑かつたが、此處は寒い。はら／＼と驟雨さへ來た。

往復に自動車が數臺行き違ふ。日本人ばかりのもあつた。大抵は春洋丸の顔馴染。

歸途、甘蔗畑は遠く且同盟罷工で製造所も休んで居ると云ふ事だし、*Pine apple* の畑は山腹を拓いて植ゑられたそれを少し遠望したのみ。時間が乏しいので直ぐホノルルに引返へす。松君は自動車を *Kaplan* 公園に寄せて、日本の今上即位の記念に日本人から寄贈した噴水を見せた。其頂には鳳凰が翼をあげて立つて居た。

浴衣や單衣の日本婦人が我田舎を歩く顔で歩いて居る。落ちつきはよいが、日本服は要するにあまり好い服ではない。本國でも、殖民地でも、婦人が浴衣や單衣で歩くのは續けらるべき状態ではない。1917年の布哇の全人口250,627中、日本人102,479朝鮮人47,834に及んで居る。ホノルル市の人口71,950で、日本人が15,000に及んで居る。日本人が他國の感がしないは尤である。而して亞米利加人が日本の布哇の看を做して、或は米國資本家と日本の甘蔗畑労働者との間の争となり、或は日本語學校を排

斥しようとかゝり、名實共に亞米利加の布哇としようとするのも無理はない。

支那人の部落や、一見お寺とは思へぬ *Saracen* 式見たやうな建築の本願寺別院などを車上から見て、正午自動車は Y. M. C. A. の玄関に止まつた。

(三)

自動車を下りて玄関の石段を上ると、其處に立ち迎へられた婦人達の中から年配の一婦人が一何處であなを御存じ申して居るか、御存じですか？」と突然と尋ねられる。私は見當がつかぬ。すると婦人は伊豫の今治で、加之私が十二の年と云はれる。それは昔の増——嬢、今の岸——寡夫人であつた。私は桑港で二度目の今治時代、即ち私の十八九時代の知邊の齋君にそれと紹介されたが、布哇に來ると十三で別れた H 牧師だの、十二の私を識つて居る岸夫人だのに會ふて、何だか蓬萊の島に來て昔の自分に會つた心地がした。

小さな群の中から眼鏡の人が進み出て挨拶する。それは私が廿一二の時代熊本で初歩英語の師弟關係であつた矢君であつた。そののみか矢君は妻の小學校同窓であつた。私が十二に返へり、妻が小學生に返へる。布哇は蓋し不老の嶋なのであらう。

食堂に導かれる。食物はちやんと調理され、あるものは小皿に盛られ、或ものは大皿に取り分ける

べく盛られて、ずらりと並んで居る。立食の場合のやうに。代價づけがちゃんと掲げられて居る。會員は各自一枚の「Tray」をとつて、自身の好むものを選び取つて「Tray」にのせ、食卓に往つて喰べるのだ。私共の紐育はホテル逗留で試す機會はなかつたが、忙しい其處ではよくそんな飲食店があるさうな。簡易自治的で好い趣向である。私共は各自「Papaia」だの「Pine apple」だの幾皿をのせて、食卓に往つた。食堂には長い食卓が据ゑられ、四五十人の男女がかけて居る。紐育の「Columbia」大學生の會を思ひ出す。

食後私は短い挨拶をした。布哇は太平洋の瑞西でありたいと私は云ふた。勿論瑞西は同人種であるが、それでも三國語を使ふ人々が立派に寄合世帯をして居る。布哇は世界の縮圖、如何に人類が共同生活をなし得るかの試験場とも見られる。それから私は二十六年箱入りにして置いた妻が今度紐育で演説したりした事を話し、今日も妻の爲に前座をつとめると云ふて着席した。

妻は世界の平和は婦人の責任である事を話して「姉妹むつびし——」の歌を誦した。

それから千君が加州問題について少し述べた。

色々の人に挨拶する。警書店福書店の住家が舊臘全焼した事を傳へる人もあつた。副領事、日布時事社長などの人々にも對面した。

階上に行く。妻は婦人達と話し、私はH牧師、千君、奥牧師などと話す。私は加州で譲り、布哇で考へる私の意見を少し述べた。其問題について母國の注意を喚起に行く千君には氣の毒でならぬが、百年の大計は終に私の思ふ所に出でない事を自ら信ずるので、私はさう言ふ外なかつた。然しもつと加州もよく見て其處に投入して居る人々の實感實驗も十分汲んでの上でなくては、私の言は輕率に失する處があるから、其内今一度遠からぬ内に亞米利加には來たい、とも云ふた。然し私の立場は單に日本人の立場でなく、單に米國人の立場でなく、要するに人情の立場即ち神の立場なので、多分改むる事は出來まい。千君も至極は其處であらうが、中途に支障が多く、且北米がふさがれば、南米も自然駄目となると謂ふ。私は南米も日本人の天地でないと思ふが、黙つて居た。

私共は岸夫人と自動車で婦人基督教青年會を見、それから更にH牧師の宅に往つた。氷入れもん水の馳走がある。團扇うちあはを使ふて雑談。H牧師は同志社のふるい寫眞を見せる。新島さんの遺髪や、ストライキ學生の爲に新島さん自ら其掌たなこころを鞭つて、片々に折れた白木のステツキの折れなどを見せる。其ストライキ學生は、即ち私の級であつた。然し私は新島さんが自ら鞭つた其現場には居なかつた。それは朝の禮拜で、十三歳の私は出席をサボつて、自室で八犬傳を讀んで居た。

Hさんは「新春」を出して何か私に書けと云ふ。

「十一歳の夏から十三の夏まで年齢と級の差こそあれ同じ同志社の生徒と呼ばれし先輩堀兄に四十年ぶりに布哇の島に會ひしよろこびを鄙著の巻頭にしるす」

と私は書いた。

私が二度目の今治生活に懇意であつた會君は年來布哇の島の一つに來て、教育と傳道に従事して居る。この程夫人が永眠したさうで、私は見舞のはがきを書いた。

奥牧師が布哇に關する自著を贈り歐羅巴の宗教の現状について私に問ふ。私は英吉利でも會堂で活動寫眞をしたり、要するに宗教が社會化して來て居る事の外に何も變つた事を知らぬ。基督教は駄目です、と一言に片づけたので、奥牧師は憚びない顔をして、去つた。

H牧師の案内で會堂を見る。其地下室には、急製の床をかいて、日本人の五六家族が住んで居る。先般來甘蔗畑の日本労働者と米國資本家の間に賃金増加の事について争が起り、日本労働者とフィリツピン労働者が同盟罷工をして居る。其問題が未だ解決しないので、甘蔗畑を立退いた家族が處々に收容されて居る。其一部分なのである。布哇の日本新聞は皆後援し、宗教も後援して居る。

私共は濫りなる争ひを好まぬ。已に加州引揚げすら主張する。然し布哇は自ら問題が別である。少し亞米利加寄りではあるが、云はゞ太平洋の眞中に息つきにせよと云はぬばかり、ぽつかり浮き出た

やうな布哇は、太平洋を渡る者皆一様に其恵に依らねばならぬ。ある一國の壘斷ろうだんを容すゆるべきでない。布哇の位置が已に其様だし、布哇人口の約半數を占め、夥しい勞働を投入して居る日本は、それだけのClaimクレイムをもつて居る筈。賃金問題は至當の要求で、それは是非共主張されねばならぬ。私共は此會堂に居る勞働者の家族を慰め、しばらく辛抱してもらひたい、また加勢が必要な場合には應分おかげぶんの加勢をすると云ふた。H牧師は私を其人々に紹介して、筆をとつては名ある人で其加勢は千人力だと云ふ意味をのべた。

歸つてH牧師エイチに私は言ふた、「よく皆を收容しましたね、會堂に。それでこそ會堂の善用です。新島先生も喜ぶでせう」

宗教が活きる時だ。

私共は旅囊の中からご弗取り出して、皆の費用の一部にと提供した。千君も喜捨する。

牧師館の構内には、青年學生が數名寄宿して居る。H夫人は琴を教へて居るので、久しぶりに私共は琴の音を聞いた。

(四)

最早船に歸らねばならぬ時刻となつた。

私共は千君、H牧師とぶら／＼街を歩いて埠頭の方へ行く。私共は金がなくて紐育でみやげ物を買へず、桑港でも時間がないし、布哇からでも西洋みやげにならぬ事はないと戯談半分謂ふて居たが、布哇はやはり布哇で、布哇から亞米利加みやげは無理であつた。私共は繪はがきや、Cocanutの花いけ、など買つた。支那人も解し得らるゝ日本語を使ひ、日本人の日本語が却て異調を帯びて、不自由らしいのも、嬉しい感じではない。H牧師は私共の爲に黒と赤との木の實の Necklace を二つ買つてくれた。

私共が一の店で買物をして居ると、若い一人の邦人が挨拶する。それは私と同郷里の大君で年來しばしば手紙をくれる人であつた。布哇で米國の兵籍に編入されたなど云ふて居た。大君は Cocoa の罐詰や眼がさめるやうに美しい赤いカーネーションの花をくれた。

埠頭近く名物の花賣り女が並んで居る。花や色紙で造つた頸飾りを賣つて居る。私共も買ふ。而してH牧師や大君と握手して、春洋丸に歸つた。

(五)

夕六時、春洋丸は Honolulu を後にする。

埠頭に殘る同胞を見ると、淋しい感がしてならぬ。

今日の一日を思ふと、何だか夢のやうだ。

夕食には、生花せいばなや造花色紙ぞうかしかの飾りをかけた男女が多い。

太平洋の *Societies* にしたいと私が謂ふた布哇。世界の人類共同生活の試験場と謂ふた布哇。卿きやうについて私共はもつと考へねばならぬ。布哇はよく太平洋の樂園など稱へられる。而して蛇が居ないさうだ。私はある人の布哇の繪葉書に斯く書いた。

ヒビスカスパパイアの島蛇住まぬ島とし云へば住まんとぞおもふ

而して私は一句を更に書き添へた。「但一年ばかり」私共の國土は日本である。私共の埃田せいでんは日本を中心とする。どんな快適な島でも大陸でも、永住はゆるされぬ。

第三 太平洋 (後)

(一)

二月廿七日。布哇を昨夕後にして、今日はいよいよ日本に向ふ。北の航路は荒れやすいので、船長

は成る可く南方航路をとり、殆んど小笠原島へ突かけるやうにしてそれから北へ急轉するのださうな。お蔭で暖かい、而して今の太平洋としては滑らかな航海がつづく。

私共の Deck chair の間に小さなテーブルが置かれて、物の本などのせるに便利である。Christian Science の開山 Mrs. Eddy の傳をほど見る。良い女でも魅力ある女でもあつたが、天理教のお婆さん程偉きくも思はれない。天理教のお婆さんも、良人が不良人であつたが、Mrs. Eddy も最初の良人には結婚間もなく死なれ、二度目のは放蕩で妻の方から離縁し、三度目は弟子の一人を男にもつたが、要するに好い相手に會はなかつた。女のもの言ふ亞米利加だからだが、Mrs. Eddy ではないけぬ。男ばかりでいけぬ、女ばかりでいけぬ。やはりアダム・イヴだ。伊邪那岐伊邪那美でなくては新世界の創造は出来ぬ。

Christian Science は駄目だ。

Deck Steward の O 君は程ヶ谷在に養蜂園をもつて居る。

横濱の人加君と話す。右の手を繻帯して頸から吊つて居る。米國で何度も手術して直らぬさうだ。紐育の木君の話ではないが、米國のやうにあまり人體を器械視する所には、Christian Science

も出て来る。私は木君の話をして、自強術じきやうじゆつをすゝめた。加君の話の中に、米國東部の日本品輸入商の中には、相互の契約書に、日米開戦の時は契約無効云々の但書を入れる、と云ふ一事があつた。私は米國を素通りすどほりしただけだが、米國の日本排斥は決して表面の事ではなく、日米の間は米國に居る日本人の思ふやうに、若しくは思ひたくないから思はぬやうに、そんなゆつくりしたものではない事を痛感した。だから加君の此話は私には別に驚きでもなかつた。何れにせよ、世界の今後の平和の鍵は、日米の手に握られて居るに誰しも異存はあるまい。日米を相鬪あひたかはせようとする者は少くない。兩國の人士が其れに乗つて、無駄な血を流したら、これ程愚な話であらうか？

太平洋は永久に太平洋でなければならぬ。

夜は例の食堂で、講演がある。千君は加州問題について述べる。渡工學博士は華聖頓わしんどんの労働會議について語る。私は詳細な事を知らぬが、如何に國際的相談づくの時代と云へ、一國の問題は一國で決したい。他から色々云はれるのはいやだ。渡博士の言の中に「我々資本家」と云ふ一語があつて、私は不圖考ふとこうへた。私自身は何だらう？ 汽船の一等に乗つて「我々資本家」の演説を聞く自分は、資本家であらうか？ 私は畑をもつて、時には鋏をとるが、それは道樂で、私はやはり書くのが職業だ。私は筆をとる労働者だ。それは農の鋏、鑛夫の鶴嘴つるはし、棒手振ぼうての天秤棒と擇ぶ所はない。書く時、私は勞

働者だ。それから書いたものが印刷せられ、それが追々印税を生むに到つて、資本家になる。即ち自分には勞、資協調が自然に具はつて居るのだ。だから勞働者にも、資本家にも同情が出来る。

食卓で私の直ぐ右にかける田博士が病氣さうで、其室を見舞ふ。

(11)

二月二十八日。昨日船長から南十字星が見ゆると云ふ談を食卓で聞いた。

午前二時に起き、私共は A Deck に星を見に上つた。暖かく和らかい風がほやり／＼面を吹いて、私共に南支那海や印度洋の夜を思はせる。Palm House には、若い男女の西洋人がゆつたりとかけて、靜かに情話に耽つて居た。煙突の煙と、少しの雲があつて、肝腎の Southern Cross は見えなかつた。

A Deck 上れば若き人ふたり星を眺めて夜半に語れる

私共は靜かに甲板をあるく。Southern Cross こそ見えね、一天皆星である。此星空の下、此夜の洋の上、寝る人は寝ね、さめて働く人は働き、船は地球を象どつて小止なく動く、假令それが眞反對の方向であらうとも。

カント曰く、われを驚嘆せしむるもの二つ。頭上の星の空と、わが衷なる道義の大法と。

先哲の言なども思ひうかべてうちあふぐ太平洋の星月夜かな

舷に沿ふて碧燐流れ大空は雨よりしげき星月夜かな

檣の黄なる灯もまじりけり洋うちおほふ春星の空

洋黒う空の根方を蝕^{やじほ}みて残んの空は星月夜かな

南風や船をめぐりて洋黒う仰げば空に星の雨ふる 健

星原や太平洋の夜はふけて虫の聲さへ降る心地する

静かなりや太平洋の星月夜君と黙してデツキをめぐる あい

今朝から布哇のパパイアを食ふ。

Bolsheviki^{ボルシェヴィキ}のB君と舷にもたれて少し話す。B君はニイチエ崇拜で、超人を主張する。私は謂ふ、本當の超人とはすべてを愛する人である。而して私は「仁者無敵」の語を擧げた。B君も好い語だと

云ふ。握手して、話を切る。

私共の食卓は、何時も船長の話で賑合ふ。火夫は亞刺比亞人が適する事、有事の日には日本人、平時には支那人が船員としては好い事、其道の經驗談が面白い。南米の沿岸が唯一色一様の峭壁で、僅かに汽車が走つたりするので見分ける事、海鳥が何海渾も密集して居て、船が其處に突かければ忽ちに水に潜つて影もとどめなくなる、などの話に私共は興に入る。

普通選舉問題の騒ぎから、衆議院解散の無線電信が夕食の席に披露された。解散理由の文言が可笑し。

夜は B Deck の船尾遊戯場で、水火夫の相撲がある。New York は San Francisco と取り組み、大阪は名古屋と取る。取組番附にも日米を相撲にさせぬ用意が見え、Palm House の Smoking Room などの顔觸れが皆を悦ばせる。本式の四本柱、検査役はないが、行司、呼び出し型の如く、飛入りもあつて、内外人の大喝采であつた。相撲は好い日本の國技だ。Boxing などより何程好いか知れぬ。

(二)

二月廿九日。今日も未明に起きて、星を見に上る。南水平線の少し上に、はつきりと南十字は眺められた。低いには低いが、形は南支那海や印度洋のそれより整ふて居た。

縁あれば地を一めぐり歸るさにふたたび仰ぐ南の十字 健

印度洋の空に仰ぎし南十字太平洋にまたも眺むる 愛

太平洋の色も美しい。それは印度洋の色と同じ碧瑠璃である。大西洋は寢て渡つて、洋見る機會もなかつたが、太平洋は妻も三食に食堂を缺かさず渡るはありがたい。

春の洋白波湧かしわが船は日の本さしていさみ歸るも

軟風や船脚輕う春の洋日の本さして我れ歸るはも

日子日女は日の本さして歸るなり春洋洋とかすむ海原

春の洋船脚輕う日の本へ歸る心地に若くものぞなき

時は春、太平洋、春洋丸で歸るは嬉しい事である。ぼるねお丸は、百名に満たなかつたが、春洋丸は大家内だ。主側が機關部 110 名、事務部 39 名、甲板部 6 名、支那人 63 名で總計 228 名。それ

に客側の一二三等船客を加ふると、優いづに千名を數へる。

我船は太平洋の一軒家家からは鶴のよはひをかぞふ

愛

船は全速力で駛つて居る。然し船の脚あしより日の脚はまだ早い。私共の心はその日の脚よりも早い。

日の本へさきがけすなり勇ましくけふも入目をうつくしと見る

愛

朝食の Papai, 浴後の Orange うれしいものゝ二つ。

夫妻で田博士の病を問ふ。少しはよい方。守君の子ども危いところを取りとめて、日にく元氣づきつゝあるのはありがたい。

千君を介して、二三等客から私の話を求められる。喜んで諾だ。

夜は二等の甲板で船員の芝居がある。舞臺が出来て、短かい花道が出来て、簾内かきりの三味線などもあつて、中々本物だ。喜劇には米國歸りのハイカラ女の英語もうまいが、銀杏返へしの娘が本物の女を凌ぐ好い娘ぶりだ。布哇から乗つた解雇船員の一團が好い娘形にはしやいで頓興とんきやうな叫びをあげる。團七九郎兵衛の夏祭は、また黒人くろごを凌ぎさうな出来。然し舅しよの殺しが眞に迫つて、初めて此様なものを

見たらしい六七歳の日本の子供が泣き出したのは、エルサレムで土人と英兵の血まみれ喧嘩を見て女の子が泣き出したのを私共に思ひ出させた。子供にも大人にも、あまり惨忍なものを見せるではない。それにしても、太平洋の真中で悠々芝居が見られる此航海はありがたい事である。

(四)

三月一日。春洋丸が西半球から東半球に移り、西經から東經に移るので、三月一日は四時間しかなく、
5。

(五)

三月二日。船長以下の白衣が黒になつた。

午後は食堂で浪花節がある。浪花軒正龍の五郎正宗、イスタン・チャプリンの元和三勇士後日譚。

夜は電気化学工業會社技師古君の空中望素ちゆうくうぼうそに關する講話。中學教諭牧君の漫遊談があつた。

Esperantoエスぺランタンの講習は、先夜の初講以來毎日時間をきめて續けられて居る。

(六)

三月三日。Doneoホルネオ丸では散々悪筆を揮ふたが、春洋丸でもまた揮ふ可く餘儀なくされる。一年世界を廻つて來ても、悪筆は依然たるもの。

千君病氣で、夫妻 A Deck に見舞ふ。船長室の近く。船員室を旅客輻輳の爲宛てられた室であらう。夏は兎に角、冬は風邪をひきさうな室。右の手を繻帯の加君も同室であつた。

船尾に病室の設はあるさうだが、狭くて何程も收容出来ぬらしい。それに船醫は唯一人で少し病人が多い時は中々手が廻りかねると云ふ。今度の船客内に醫博士が乗つたりして居てよかつたものゝ、半月そこらの航路でももつと病氣に對する設備はあつてもよからう。

Kensington Palace Mansion Hotel 以來顏馴染の芒さんが大西洋航海の話から、此様な話をした。

西洋人は十三の數を嫌ふ。然しある時獨逸の潜航艇に襲はれた船に、十三人の日本人が居て、恰も好く船が助かつたので、日本人が十三人乗つて居ると芽出度いと云ふ事になり、それからは正確に十三人の日本人船客を乗せる事に骨折つた。

今夜は Deck Sport に Boxing がある。私共は見なかつた。

私共は初めて太平洋を渡る。船長の話に船員は別として、ある日本商人で、日米の間を始終往復する人にこれで七十何回太平洋を渡ると云ふ人があつたさうだ。二十五回渡刀水など藤東湖が口廣く述べ懐も出来ぬ話だ。

三月四日。船長は昨夜十時三等船室に男の子が生れたと云ふ事を食卓に話した。船に生るゝ子供の名親になる慣例で、船長は其名を春介——しゅんすけと名づけたと云ふ。私はあとで船長の Album に斯く書いた。

春三月三日春洋丸に生れたる男の子一疋其名春介

今朝、春洋丸は東京灣口に向けて針路を北轉した、と船長は語る。

私共の食卓で、私の直ぐ右に居た田博士病み、其直ぐ隣りの千君も病んで居るので、食卓に二本の齒がぬけたやうに淋しい。然し秋君、大君、長君が居て、船長が元氣な話を應酬するので、賑やかである。船長の話は愈^{いよく}出でゝ愈面白^いい。

近頃日本で流行の大本教の話が出る。其所説によれば、日米開戦して日本が危急^{ききん}に瀕する。米國の飛行機が襲來して、東京も燒土になる。唯大本教の所在地丹波の綾部は氣流が保護するので、災^{わざはひ}に罹らぬ。皇室と、大本教の信徒のみが助かる。其後で元寇^{げんこう}の時の様な自然現象が出て、侵入者は一人も生還せぬと云ふ。大本教の開祖もお婆さんであるさうな。

やはり女の時代だ、と私は聞きつゝ思ふ。

六隻の船が今横濱に向つて居るさうだ。一隻は Pump が破損して居ると云ふ。百何湮其船ははなれて居る。勿論一隻の船も眼に入るものはない。皆無線電信が知らすのだ。先夜の空素の話ではないが自然は生と死を兩手に握る。人間は望み次第何方でも取れる。無線電信が相互扶助に使はれるは何と云ふ悦喜であらう！これが互に相殺傷する場合であつたら、何と云ふ恐い無線電信であらう！太平洋が太平洋でなくなつた場合は、想像するも恐ろしい。

Deck Sport は毎日ある。子供の競技は可愛い。亞米利加に生れて、其處の言葉を自國語として話す玉さんの子女達が數からも優勢である。内外婦人の馬鈴薯拾ひ競争や、卵すくひ競争では、やはり日本婦人の器用が勝つ。針を持つて立つ婦人に向つて、糸を持つ男が走り、針の耳に糸を通して、男女相撃へて走り歸る競技では、西洋男女が勝つた。日本の男女が遠い證左であらう。

Cock Fight などに出る日本の競技者はあまりに眞剣で、Sport でなくなり易い。日本人にはもつと餘裕が養はれねばならぬ。私自身も何か愛嬌に加はりたいが、やはりきまりが悪い。此きまり悪さが矢張日本人で、とれねばならぬものゝ一つだ。

妻は洗面所の湯で少々右の手の指を火傷した。船醫室に往つて繃帯してもらふ。船醫の桐さんは基督者で、書架には内さんの全集など見えた。内さんの基督再臨運動は大分反對多く、基督敎界の長老

連にも反対者が多くて、内さんの講演の爲に基督教青年會館を貸す事も斷わつたさうだ。基督の再臨を信ぜず望まぬ基督者が基督者であり得やうか？

夕食後、私共は三等船室に話に往く。最初は二等船室で二三等船客の爲にと云ふ話であつたが、着物などの都合もあり、三等でと云ふ事になつた。私共はそれを悦んだ。十三年前の順禮行に、私は特別三等で往つた。特別三等もやはり三等圈内である。今度旅券を受取る時、今度は奥さんも御一緒なら三等ではありますまいな、と外務省の若い官吏が云ふたさうだ。私共に代はつて旅券を受取つた福君が告げた。全く先のは順禮行であつたが、今度のは順禮行ではない。日子日女の旅行は出來得る限り快適な明らさまな旅行であるを要する。船も汽車も旅館も、及ぶ限りは好いもの好いものと思つた。然し私共はすべてにすべてでありたい。ト Deck から船首甲板を見下ろし、私共の船房前の通路を、船尾甲板と隔てた鐵柵越しに其方を見やつて、私共の心は如何に隔てられた其方にあこがれたであらう。それで先日千君から二三等に話す可く交渉を受けた時私は欣諾した。而して今日三等でと云ふ話があつた時、更に私共は喜んだ。

船首甲板から階段を下りて、所謂 Stairage である。三方に船客の臥榻がかゝれて、其中央の高い

Platform のやうになつた所が食事の場所であらう。其處に木の腰掛が並んで、皆がもう一ぱいにかけて居る。私共は其處の木櫺こしむかに腰を下ろした。諸君が座蒲團がはりに毛布を持つて來てくれる。

私共は立上つて、挨拶をする。二等船客の思出の記の主人公と寄生木の主人公の姓と名とでかねて居るやうな菊君が私共を紹介する。

聴衆のある者はすばんにシャツである。或は浴衣のものもある。家族の長らしいのがある。女子供が居る。或ものは自分達の寢棚ねどに居る。階段に腰かけて居るものもある。

私は嬉しい感に満たされて、大要左の演説をした。

私は今晚此處に呼ばれて諸君と顔を合はせ、諸君に打明け話をする事を非常に嬉しく思ふ。私は先日已に一等船客に話す機会をもつたが、此處の諸君に話さない内は物足らぬ感があつた。よくこそ呼んで下すつた。

俚歌りかに「踏まれた草木に花が咲く」と云ふ語がある。今が其時代だ。社會的階級から云へば、今迄踏みつけられた労働者が頭を上げる時である。男女の上から云へば、今迄踏みつけられた女に花が咲く時である。人種から云へば、今迄踏みつけられた有色人種の時代が來た時である。世界をめぐるつて、

痛切に私はそれを感じる。

私はそれを痛感するについて、勿論それを悦ぶ。私は自ら弱い者で常に弱い者の味方をして来た。其弱い者が強くなる時代が来たのである。悦ばなくて居られようか？然し時が變れば態度が変わる。今迄弱い者として弱い者の肩を持つた私は、これから強くなつた者の強い友として、更に新しい態度をとらねばならぬ。甘やかす親が好い親ではない。本當の友達はおべつかを言ふたり、甘いづくめにするものではない。随分憎まれ口もきかねばならぬ。私は弱いとせられた有色人種に對して、女に對して、また所謂労働階級に對して、單に甘いものを與へようとは思はぬ。私共は本當の親でありたい。私共は本當の友でありたい。だから今夜は少し日本をこきおろしに来た。而して労働階級の皆さんに憎まれ口を利きに來た。何を云ふても諸君は長らく日本をはなれて、世界の空氣に揉まれて來た人々であるから、日本の労働階級では先覺の人々である。諸君に話すのは、諸君を通じて日本の Democracy に話すのだ。諸君は Democracy の基礎を据ゑる者であらなくてはならぬ。

私は斯く話し起して、英吉利を引張り出した。一等では英吉利を叱つた話をしたが、三等では英吉利人を揚げて話した。英吉利で犬が石油井に落ちた。労働者の一人が其井につり下ろされて、犬を助け出した。犬は勿論死んで居た。而して助けに下りた人も半死半生になつた。日本人にこんな事があ

らうか？ 自國の人間になるより、英吉利の犬になりたい、と云ふ者が、出て來ないとも限らない。日本人は潔癖けつぺきと云ふが、それは自分だけの潔癖で、決して他の爲に潔癖ではない。それから私は「mouth 附近の汽車の内、席がない爲に一等の通路に立たされた三等乗客の振舞まもひについて話した。日本の勞働者にこんな振舞が出来よう乎？ 私は船中で日本の新聞で見た普通選舉の運動者が徳川貴族院議長に迫つた事を話し、議長が怒つて「自分は聰明ではない」と突劔つゝばねた事を話した。堂々と主張せず、尋常に要求せず、威嚇いかたしたり、脅迫したりする Democracy は惡 Democracy である。少數の暴力も、多數の暴力も暴力に變わりはない。資本の壓制も、勞働の壓制も壓制に變わりはない。私は階級鬭争の鬭争を嫌ふ。人種鬭争の鬭争を嫌ふ。男女の戦ひの戦ひと云ふ語を嫌ふ。一の戦を他の戦に換ふるを嫌ふ。すべてそれは前代の遺物に過ぎない。Bolshevikボルシェヴィキの精神は兎に角、Bolshevik の如く Tsar を殺し、他を無理するやうでは、本當の Democracy ではない。

古今の Democrat は耶蘇基督である。彼は神の子を自覺した。だから自愛自重し、他愛他重した。自ら尊敬しない者が人を尊敬する事はない。自ら愛しない者が他を愛する事はない。英吉利人の偉いのは、如何な貴族も勞働者も、乞食こじきまでもちやんと一個人であるからだ。それは今英吉利も大ごたごたして居る。然しあの訓練は容易になくなるものではない。如何に大きな建築をしても、煉瓦の一枚

一枚が堅實でなければ、大きければ大きい程其建物は駄目だ。日本も個人々々がしつかり神の子の自覺が出来なければ、日本の前途は憂ふ可きである。

先日船長の話に、有事の時は日本船員がよいが、平時は支那人がよい、と聞いたが、日本人は非常に好き、畢竟戦争好きでいけぬ。Democracyは平和の天地である。平和に處する覺悟がしつかりしなく、日本の Democracy は成立たぬ。非常の場合はある。だから支那人でもいけぬ。日本人でもいけぬ。日本と支那と合致した者でなくてはいけぬ。英吉利人が双方を兼ねて居る。

それから私は故有栖川威仁親王が英吉利の軍艦で眞黒になつて、石炭庫の番兵をして立つて居られた處に日本の大官が往つた話をした。先頃の鐵道のストライクに貴族が自動車を自身運轉して、牛乳運びや色々した話をした。現内閣が労働黨に國政を任されぬと云ふと、労働黨で立派に内閣組織が出来ると云ふた話をした。貴族が乳の配達も出来れば、労働者が國務大臣の椅子にも坐われる。それでなくてはいけぬ。

要するに日本は上下を通じて皆自尊自愛自重が足らぬ。即ち神子の自覺が足らぬ。神子の自覺に基かぬ Democracy は、畢竟蜃氣樓だ。

自愛せよ。自重せよ。自敬せよ。

私の心から口からこぼれ出づる話は、一時間と四十分に涉つた。皆おとなしく聽いてくれる。

此等の中には加州から歸る家族も、布哇から歸る人々もあらう。中歸りのもあらう。歸り切りのもあらう。話しながら見ると、成人も子供も皆好い顔をして居る。パリサイ人の馳走も否まなかつた耶蘇が好んで社會的に卑い人々罪ある人々に接した筈と思ふ。三等室内は奢の中の様でむゝとあたゝかく好い氣もちの軀の聲が聞える。それがたまらなく私を嬉しがらせる。私は止めどなく話して居たいが、さまでとは思ふて話を切つた。

話終つて私はコツプに一ばい水を飲んだ。水のうまかつた事。

菊君が皆に代つて謝辭を述べた。而して握手を皆に勧める。私も妻も大勢の男達女達子供達としつかりと握手を交はす。

而して悦んで私共は階段を自室の方へ上つた。これで私共の春洋丸に乗つた甲斐はある。今夜の聴衆は好い聴衆であつた。皆好い顔をして居た。妻も三等の女達が一等の女達よりヨリ美しかつたと云ふ。

三月五日。朝食に *Papan* が最早無い。布哇がそれだけ遠くなつた。而して日本がそれだけ近くなつたのだ。

私共の食卓は依然田博士と千君を缺いで居る。田博士は黄痘を併發したが快方。千君はまだ熱が下らぬ。

夕食に珍らしく私共は日本服で出た。うっかり忘れて居たが、今夕は *Fancy Dress Dinner* で、西洋人は皆色々の異態をして来る。一番上出来は *Towel* と *Handkerchief* ばかりで羅馬時代の *Toga* のやうに装ふて来た年配の *Gentleman and Lady*、骨牌の札を *Sandwich Man* の如く智と背にべつたりと下げて来た組もある。定九郎鬘で出た若い西洋男もある。海綿で頭に瘤をこさへたり、*Arab* 装、キリンの如く眞黒に塗つたのさまざまある。西洋人の無邪氣さは全く愛す可きだ。日本人には甲冑で鎗を持つた人が一人居たきり。まだそれだけ日本は若いのだつた。さう云ふ私共から眞率な遊び氣分が足らぬ。偶然日本服で出ただけがまだしもだつた。

此 *Dinner* の席で無線電信が一通私共に齎らされた。日本からの初だより。出した人は鹿の員君。流石に嬉しう。

船房に退くと、追かけて電報が来た。妻に宛てた渡夫人の歌一首。

夢と過ぎし其ひととせは永からで現に君を待つ間ぞ長き 清子

妻は心から喜んだ。

東京朝日の下君から六百字の返信つきで電報。大阪から文淵堂。

此等の電報が私共に歸り力をつける。

私も妻も紙や絹やAlbumアルブムに夜の十一時までも惡筆を揮ふた。Borneoボルネオ丸の當時が頻に思ひ出でられる。

(九)

三月六日。春洋丸で生れた春介君の誕生を祝ふべく妻は一夫人と贖金きよごんに忙しい。

私は東京朝日に下の無線電報をうつ。

日本から聲がかゝつた。昨夜無線のたよりに接した時はもう歸つた氣になつた。歸るは勿論嬉しい。然し此旅が果てるを名残惜しい氣もします。喜んでもらひたかつた母には死なれ、喜ぶにきまつた血を分けた子はなし、アダム、イヴの素夫婦すめをとで歸つた時に歸り力がないなど言ふたら罰當りです。

母無しと誰かは嘆げく我を生める國土日本とこしへの母

我子あらばと誰かはかこつわが愛づる我等を愛づるおびただしの子等

私共は此長旅を恙なく終へて愛づる故國日本に歸る喜を與へたまふ天の父に感謝し、まだ二日路を隔つる海の上からながら「只今歸りました」と御挨拶を申します。

日子日女は日のゆくままに地をめぐり日の本にこそ歸り來にけれ

三月六日 午後六時

春洋丸にて

徳富健次郎

愛

今日も無線電信が數通來て私共を悦ばせる。

無線と云へば、汽船 Aquador が先月十六日にホノルルを横濱へ向け出帆したに、未だに横濱に入港しないさうで、問ひ合はせの電報が來たさうだ。如何したのだらう？ 日本嫌ひから其外國船に乗つた支那人が多かつたとは笑止な事だ。

今朝二等の菊君が来て、今夜二等で耶蘇信者の感謝會をするから、出席しないかと云ふ話であつた。私共は悦んで承諾した。一等で話し、三等で話し、二等で話せば、私共の話は一巡する。慾には船員にと思ふが、そんなに食ら^{わさ}ばすもの事であらう。

夕食後、私共は二等食堂の方へ行く。春洋丸が東京灣口へ向け北上しはじめてから、日又日と寒くなり、小雨^{こぼり}がそゝいだり、而して洋^{うみ}が段々荒くなるやう。私共が船尾甲板をさして舷側通路を歩いて居ると、背から私共を吹き飛ばすやうな寒い烈風が吹く。波は高く大きく、今にも甲板に打ち込みさう。空には十六夜の圓い月が挂つて居る。凄^{こわ}い景色。

私共は二等の食堂に往つた。鬱陶^{うつたう}しい感じの食堂である。

十四名の若い男女の集會。菊君が司會で、柴版の讚美歌を歌ひ、祈禱があり、それから各自の名乗り合ひがある。病氣で歸る Doctor^{ドクター}の家族。亞米利加で生れたと云ふ人。私のものを讀んだと云ふ佛教の人。船醫の桐君や婦人監督の若い婦人も集會の中にあつた。

私共は Columbia night^{コロンビアナイト}のあの席を思ひ出した。

茶菓が出る。煎餅や羊羹がある。

最後に私は立つて、可なり長く話した。十字架の時代は過ぎた。アダム、イヴは新天新地の創造にか

からねばならぬ。再臨の基督は必ず妻を挈^{とら}へる。基督の再臨は已にあつた。昨年が新世界の始である。船が烈しく動搖しはじめた。

私は頭も尾もない話を打切り、而して私共は諸君と握手して歸つた。私は大汗になつて居た。

(十)

三月七日。朝食の席で、私は他の食卓の日本人が日本人給仕に言ふて居る言を聞いた。昨夜投身した者があるらしい。「Christian^{クリスチャン}だつたさうです」と給仕が云ふて居る。

後で聞けば、三等船客の若い母が子供の一人を海に投げ込み、赤ん坊を抱いて自分も飛び込んだ。昨夜の出来事。それから少し立つて、また一人年長の三等船客が投身したさうだ。

これは私共に大なる打撃であつた。春三月、春洋丸、太平洋、日子日女の日本に歸る船、三月三日に船中で子供さへ生れて、此船は寶船^{たからぶね}であらねばならぬ。それに日本ももう直ぐと云ふ處に来て、何と云ふ悲劇!

昨夜私共が二等食堂で話した其間の出来事であつたらしい。思ひ合はすれば、あの時會衆の中で出たり入つたり變つた容子があつた。入水者の事が知れると、船はくるりと圈^{けん}をかいて廻はつたさうだ。

水葬の時もそんな例があると云ふ。私の演説の終近く、非常に船が揺れ出した時がさうであつたらしく。

入水者は永年亞米利加に居て、子供は皆亞米利加で生れたのさうな。其子供が弱いと細君は苦しめて居たさうな。少しも變つた容子が無かつたので、良人は其棚に寝て居て、細君が子供と甲板に出たのを氣づかなかつたさうだ。後の入水者は、老境の家族なしで日本に歸る樂がない人の、先の入水者に不圖氣を牽かれて海の底に安息を求めたのだ。

印度洋の引力を感じた私に、他事とは思はれない。

私は二等に往つて、菊君に昨夜の事情を聞いた。而して菊君と婦人監督の婦人と打連れて鑛山の横坑の様な下の通路を先夜私が話した三等室に往つた。棚の上に起き上つた新しい哀しみの人は、まだ三十前の若い男であつた。Los Angeles に働いて居た。菊君も Los Angeles の園藝をやつて居たので、互に名乗り合ふて慰める。日本近くなつて、妻と兩子女を俄かになくした若い人にはまだ夢の心地があらう。私は慰むる言を知らなかつた。彼の背を撫で、ヤケ酒など飲むでない、と言ふた。彼は子供の如く泣きはじめた。私はやはり太平洋の船で、亞米利加近くなつて氣が變になり、其夫人——良い婦人で、私共が十二三の子供としてよく紋の一同と呼ばれて菓子などの馳走になつた——が入水し

た其悲哀にも堪へて、立派な生涯を送つた私の舊師の一人 Rev. Davis の事を話した。而して彼が自愛を求めた。

菊君は更に私を伴ふて船尾の三等室に往つた。此處に居る極めて若い婦人は、新婚の良人と此春洋の往航で渡米の船中夫が病死し、布哇で火葬し、其骨を携へて此船で歸るのであつた。菊君の言葉に起き上つて私共に向ふた其顔はまだ子供々々した顔で、浅い契りの十分に悲しみも得せぬさまが私の胸を拍つた。

一人々々について糺したら、涙の話も嘸多からう。此春洋丸も入水者の外に病死者が他に二人もあるさうな。遺族のない人もある。横濱に骨を待つ細君も居ると云ふ。

二等の人々の發起で、不幸な人々の爲に弔慰の金をあつめる。發起者の中に私の名を出してくれと云ふ。悦んで諾する。

やがてまた一等船客の中から一さんと牧さんの發起で弔慰の醸金がある。其結果不幸者は一人に付五十弗以上を受ける事になつたさうな。

私の慰問に往つて居る留守に、私共の船房に「春介」坊の父なる人が祝ひの答禮に來たさうな。喜びにも約六十弗往つたといふ事である。

昨夜の出来事が私共を強く壓しつける。私共が乗つて居て、彼等を船に生に引きとむる事が出来なかつたと云ふ事は、恥かしい事濟まない事である。

加之海も大分荒れて、妻も久しぶりに船酔心地になり、物食ふ氣にもなれない。然し彼女は太平洋を食堂に出つてけた Record を破るが惜しさに、元氣を出して食堂に出る。

私が三等に演説した夜、一等食堂で西洋人の講演があつたさうな。英人 Hols oak 君の講演のあとに、米人の Conn と云ふ人の講演があつて、C 君は日英同盟を嘲り、英吉利は亞細亞から退散せよと云ふ意味を演説し、H 君怒り、あはや喧嘩にならうとしたが夫人が立ち入つて事無く治まつたさうな。何は兎もあれ西洋人の Frank で思ふ事をドン／＼言ふは感心である。

牧君は其 Album に私に何か書けよと云ふ。英米の教育家男女が色々書いて居る内には、まことに面白い句がある。Rugby の Smith と云ふ人の面白う。

“To love men is knowledge.

Humanity is the road that God chooses to travel along.

“The face of God is all men's faces.”

(愛は知である。仁は神の進むべしと選ばれた道である。神の姿は總ての人の姿の中に現はる)
洵まことに好こい言ことだ。牧君まきぎみは好こいみみややげげを持もつて歸かへられる。

私は William Blake 〇

“Voice of God,

If Thou humblest Thyself

Thou humblest me.

Thou too livest in Eternity.

Thou art a Man ; God is no more ;”

(神の言葉、爾曹若し自らを貶すならば爾曹は我を貶すものである。

爾曹も亦永遠の生命に生きるものである。爾曹は人である、神はそれ以上のものではない)

の語を一方に書き、他の一方に、

“ We Nihonese must learn to respect more,

and to love more, ourselves.

Tokutomi Kenjiroh

March 7.

Second year of New Era

Shōnyō Maru.”

〔吾々日本人は一層吾々自身を尊重し、又愛する事を學ばねばならない。〕

新紀元の第二年三月七日、春洋丸にて 徳富健次郎）

と書いた。

午後六時半に、船長 Boy が私共を船長室に案内に來た。海は荒く、風は英佛海峡のそののやうに寒いが、妻は桑港で求めた濃碧色の Visiting dress の着初めをして、船長室に行く。一さん夫妻、平醫博士、それに私共、とこれだけである。諸君は酒杯を擧げ、私共は酔はないものを飲む。平博士が此船に居た爲に、田博士千君守君の Boy 其他何程助かつたか知れぬ。博士は Edinburgh 談をする。一さんは米國の公園に美しい野花の咲いた處に立札して「どうぞ採らなすで下す。As the others may like to look at」と云ふ文句が書いてある事を話して、他の上を思ひやるそれが、唯「可からず」より何程餘裕があるかを、日本のそれと對照した感を述べる。まことに恥かしい事だが、日本は若い、我

儘だ、田舎者だ。すべてこれからだ。二千何百年の歴史を持つて居て、これからだと云ふ日本は、恥かしくもあるが、めでたくもある。五十三と四十七になつて、これから勉強をはじめる日子日ビチビチ女を生んだ國だけある。

船長の厚意を謝して一同食堂に下りる。今日は キャプテンズ Captain's dinner で ワシントン Washington's birthday の夕やうに皆立派にして來て居る。樂隊の君が代、英米國歌の吹奏がある。其度に起立する。色々の美しい護謨風船が且鳴り、且飛ぶ。 クラッカー Cracker が鳴る。英人の ホライオーク Holyoak 君が演説する。船長が私共の卓から立つて英語で答辭を述べる。私も何か言ひたかつたがやめた。婦人の聲が無いのは淋しい。妻に言ふて一夫人に勧めたが、遠慮して起たなかつた。

私共の食卓は依然二つの空席を残して居る。千君は昨夜の寒氣で慄々ぞくぞくして、今日は四十度からの熱があり、横濱に着くと入院の手筈になつた。

缺ひび無く、と云ふ事は出來難いものである。

今日も無線電信が數通私共に届いた。

いよゝ明日は日本だ。

夜私共の船房から食堂へ歩いて居ると、日本の婦人の聲として、

「今夜はとても寝られないわ」

と言ふて居る。

(十一)

三月八日。早起きして、船房を出る。

夜が明けかゝつて居る。北に火光がちら／＼ 三浦三崎の燈臺である。

「阿父、今歸りました」と私共は叫ぶ。

曉や三浦三崎の燈臺を跳る心に眺めし兩人

「父よ今歸りぬ」ともろ聲に呼ばはりけりな日子と日女とは

私は ゴドック に上る。まだ明け切れぬ甲板はもう右往左往の人だ。

「富士が見えて居ます」

と通りすがりに教へてくれる人がある。

居る。居る。白く、ぼいやりと、然しはつきりと、立つて居る。

雪の富士薄ほのぼのに現はれて歸れる子等を笑みて迎へぬ

日の本に生れし身をば祝ひけりおほどかの富士われを迎ふる

妻を伴ふて再び甲板に出た時は、春洋丸はもう東京灣に入つて、富津の砲臺を左舷にかはしつゝある。私は英佛海峡を渡つて、Southampton 近く英吉利の海堡を見た時の感を起した。あの時「日子日女迎ふ島夷共」と歌ふたが、此處も島夷共の住居だ。而して私共も其島夷の子女なのだ。

其英吉利以來顔馴染の苦さんが莞爾々々して居る。私は曰ふた、あなたは驪迎の家族が待つて居て羨ましい。苦さんは私を慰めて「だつて、あなたは皆が待つて居るではありませんか」と曰ふ。

私共は千君を訪ふて別を告げ、それから春洋丸最後の朝食に下りる。日本人も外國人も欣々として、食堂はわい／＼騒いで居る。

檢疫がある。随分長いことかゝる。一々名を呼ばれて通る。私共の向ふ隣の船房に居た波爾の伯爵と云ふ恐ろしく丈高い若い夫妻も、長らく横濱に居た領事の妹とか云ふ葡萄色紋羽二重の紋付の、

ウィンを被たお婆さんも其中に居る。それから外國人は Passport の検査がある。ごたくして、何だか外國人の手前面伏せな氣がする。

Deck Steward の大君が来て、新聞記者が大勢待つて居ると云ふ。

やがて文淵堂が長崎以來の顔を見せる。東朝の下君が来る。澤山の花束が私共に贈られる。

私は巴里仕立の服、妻は英吉利仕立の晴着で、二 Deck の船尾で新聞社の Lens の前に立つ。それから妻は妻、私は私で、簡単に漫遊雜感を話す。

私は Baggage room に往つて、荷物運搬人に私共のトランクや色々の荷物を教へる。其處は三等の直ぐ傍で、妻子を急に亡くした若い人の上が氣にかゝつたが、其處もごたくして居て、其人の影も一寸見えなかつた。

私共は船長室に告別の爲に往つた。出来る事なら船長が春洋丸の船長である間に、今一度此船で亞米利加に往きたい意を述べる。

最早船は何時の間にか岸壁に着いて居て、船客は大抵下りて居る。私共が殿に近い。私共は甲板に出た。一さんは見えない。夫人に挨拶して、私共は橋にかゝつた。

遙か下には大勢立つて居る。

妻は同窓から贈られた花を持つて、先に立つた。次に私。文淵堂と船房フネボの平君が澤山の花を持つて後からつゞく。

随分急な階梯である。

私共は滑らぬ用心して、徐おもむきに下りる。

そろ／＼人顔が分る。「先生！」など呼ぶ聲も聞える。

私も妻も黙つて下りる。

而して一年一ヶ月と十三日目で再び日本の土を踏む。

第十三篇
日
本

其 一

(一)

大正九年三月八日の午前十時過ぎ、私共は一年二ヶ月の世界一周を終つて、春洋丸から横濱の岸壁がたべに下りた。

私共より十日ばかりも晩おそく夫妻で世界一周の旅に上り而して私共より約一ヶ月早く歸つた海夫人が別懇の千君を世話す可く來て居て、階梯下で一番に私共に握手する。

阿爺おやぢが連れて來る顔を一度に見るのは恐いやうで、一つ／＼眼の前に來る顔を見る。二度も大病して私共を心配させた八重子が來て居る。火事に焼け出されて恙ない福君父子三人が來て居る。北京に居るだらうと思ふた淺君の三人家族が來て居る。俊子姉妹は私共の留守に妹に生れた赤ん坊と來て居る。九十九里の中君、久君。「みみずのたはこと」兵鳴以來蚯蚓を號とする武君。妻の同窓は釧子さん、伊夫人、西夫人、池夫人。東京の渡君夫妻。派手なウヰトの田鶴、操の兩嬢。一人は留守に嫁し、一人は留守に母をなくした芳と秋。歸る時は迎へにお出でと傳言して置いた文子。ぼるねお丸を送つた人々は皆春洋丸を迎へに來てくれた。其外名を知らぬ、名乗り合はぬ人々の數も可なり多かつた。

私は嬉しいやうな、恐いやうな心で、眼の前眼の前に現はるゝ顔を見た。

私の生の祕密を私に告げた季の姉湯夫人の白髪がちな顔が現はれた時、私は畢竟母に迎へられた心地がした。私は姉と黙つて手を握つた。

いざとなれば待つ子ほしやの心よりうれし思ひのみだれがちなる

けれども清子夫人がもう一昨日からあんな心の歌を無線でくれるし、今日も與夫人から、

新らしき世のしらたまをうちかざし春の洋より君かへり來ぬ 晶子

の歌が迎へるし、同窓一同よりとして、赤い細いリボンをつけた同窓一同の名刺と共に、美しい娘の笑顔のやうな花束がわたくしの腕におかれて、わたくしは泣くに泣かれぬお菓子を兩手にすかさるゝ小娘のやうな氣持ちさへさせられた。

數ある花束の中からわたくしは此同窓からのを手にもつて、旅の慣習そのまゝに夫の前に足をはこんで橋にかゝつた。わたくしの眼に紫や派手なお召のコトや若夫人達一同の笑顔がすぐ眼にひらめき入つた。私の心はうれしさが次第に占めた。いそ／＼高い階梯を下りて、たえて久しい瞳を見かはし

た。伊夫人、西夫人、釧子さん、それから卒業以來廿七年ぶりで一寸見それたハイカラの池夫人まで見えて、わたくし達のかへりをにぎはしてくれした。うれし泣きしてくれるものもあつた。

ありがたう皆さん！

あい

妻は娘達を總まくりにかき抱くやうにして、泣いて居る。邪魔だ、と邪魔な聲が後からする。私は妻に注意して道を開いた。

兎も角も高野屋に行く事にして、姉も私共も車に乗る。

出口で少しとめられる。私共は車上のまゝだが、顔馴染のSエスさんが家族と同乗した自動車から下ろされ、懷中物まで税關吏に調べられて居る。氣はづかしく思ふ。

テキサス

Texas に一人息子を見に往つた歸りと云ふ、船でも始終日本服を着て居た阿母おやが一人で歩いて行く。

(一)

私共は高野屋の三階に上つた。

皆が妻の服をほめる。

新聞記者の一人が来て、妻の談話を筆記し、寫真を撮る。

釧子さん、俊子さん、糟夫人、芳、秋、の兩女は粕谷に待受けの爲先づ去る。

夫婦喧嘩の話。ナポリで天井落ちの話。口にまかせて色々話す。僕が出る。姉の祝禱で日本の飯はうまい。然し洋服の座蒲團は流石に困る。

八千代子が来る。久牧師が来る。落實子は新に母になつて、まだ床上げをせぬ。「叔父さんに負けました」と傳言をよこした。

(三)

荷物の税關検査が長びいて、私共が高野屋を引揚げたのは午後三時頃であつた。

車で櫻木町停車場に行く。車夫君の悦んだ顔が私には一方ならず嬉しかつた。日本人の多い事多い事。然だ。此處が日本だつたのだ。

昨年正月の末此横濱を立ち、長崎を立つて、上海、香港、新嘉坡までは可なり日本人が居た、古崙母ではもう少なくなつた。坡西土は彌少なく、Palangina は日本人の片影も見なかつた。それから伊太利、瑞西、巴里、獨逸、白耳義、英吉利とまた追々日本人を見、亞米利加の東部は猶多く、西部は尙多く、布哇は尙多く、而して横濱に來ると日本人ばかり——日本は日本人の國であつた。

電車に乗る。Heat が過ぎて頭が重くなる。電車は満員。中に春洋丸の乗客外國婦人で淺野の茶會

に赴く人々が多い。丸髷の日本婦人が上手な英語で沿道の小さなマツチ箱のやうな家をきまり悪るさうに説明して居る。

東京驛に着く。青い掃除服を着た婦^{おんな}が箒^{はうき}を持って佇んで居るのが妻の眼を牽いた。國運を賭した戦後でもないに、伊太利や佛蘭西に見たものを我本國に見出す事は、勿論私共の愉快であらう筈がない。此處で別るゝ人は別れ、粕谷に行く者は三臺の自動車に分乗する。私共は姉と最首のに乗る。

三月八日、帝都の春はまだ浅く、丸の内外の柳は冬の姿で居る。自動車から見ると何の電車も何の電車も溢るゝやうな満員。

姉は代々木に住んで居るので、改正橋近くで自動車を下りた。

東京場末の狭い通りに人の多さ。成程日本は随分窮屈だと思ふ。

甲州街道を烏山^{からすやま}の口から南に入つて村をぬけ、田甫^{たんぽ}に下り、上り、火の見の半鐘^{はんしょう}と共に私共の書齋の高い藁屋根が見えて來た。

やがて出發の時、村の耶蘇信者の人々と別れの挨拶をかはした茶の生籬^{いしがき}の處で自動車を下りる。而して私共は歩いて一年二ヶ月ぶりに自家の窄門^{さくもん}に入る。

倫敦からの手紙で、ちゃんと籬根かきねが結ばれ、食堂の疊かさねが新しくなつて、私共を迎へる。

私共は長留守を預つてくれたりん女に長の禮を述べる。りん女の聲が震へる。猫のBビも已に二度母になつて居る。思ひの外、大きくはないが、愛されて人なつこい猫である。直ぐ妻の膝に上つて、餅菓子など食べる。

書院の八疊に座が設けられて居る。新しい厚座蒲團の二枚は、釧子さんの手染手縫ひの心盡しの待ち設け。耶蘇信者の人達や、近隣の人々が挨拶に来る。

ランプがついた小さな日本座敷は、西洋には見られぬやはり美しいものであつた。

留守を預けた、而して其留守中に妻をなくした篠の金さんが来て、私共の感謝と悼傷たうきやうを受けたはや後の事であつた。

やがて夕食の設が出来て、私共一同は新しい疊の食堂で久しぶりに食卓についた。私の祝禱しゅくたうで食事をはじめ。卓に列なるは、私共の外に内輪の男女十二人私共には尾頭おがしらつきの可愛い鯛が待つて居た。

晚餐終つて、歸る人々は提灯二つつけて賑やかにさよめき歸る。

私は縁側に送りながら曰ふた。

「婚禮のお開きの様だな」

(五)

入浴して、奥書齋に退く。廊下の鍵を忘れたので、鏡ミラーを破こわして掃除をさせたのである。

ランプが照らす書齋はさながら出發の時の書齋其まゝである。一年あまり黙つて居た緑銀の置時計を巻くと、直ぐきちくと言ひはじめた。

私共は大卓の椅子にかけて、さまざまの中を恙なく世界を一周させ、健オビやかにまた此書齋の椅子に倚よらする天の父に感謝した。

Home at last!

私共は歸つたのである。

其 二

(一)

一年二ヶ月しめ切つた私の書齋の縁には、迷ひ込んだ雀が二羽死んで居た。緑帷オリーブにくるまつて、熊蜂が幾かたまりも避寒して居た。

畑は無事であつたが、園えんは荒れに荒れて、野兔が巢をつくつて居た。

舊冬から度々雪が降つたさうで、今年の春は寒く、梅はまだ三分位しか咲いて居ない。

春はこれからであつた。

(一)

歸つて三日目の晩に、私共は粕谷の人々、及び特に懇意な耶蘇信者を合せて男女六十餘人を私共の小さな母屋おやに招いて、世界地圖について二時間ばかりみやげ話をした。私は曰ふた。世界を一周して見て矢張日本が一番好い。而して日本の中で粕谷が一番好い。其筈である。宇宙の中心は自己である。自己が立つ所が即ち宇宙の最上位であるに不思議はない。

話終ると、亞米利加みやげの Orange と林檎を諸君にふるまひ、それから Carbage や野菜物の種子を少々づゝ諸君に頒たげた。

然し私共は粕谷に住むが、廣く云へば日本に住む。更に廣く云へば亞細亞に住む。更に廣く云へば世界に住む。更に潤く云へば、宇宙に住む。尙廣く云へば、無限に住む。私共のみやげびらきは粕谷からはじまつて、遍あまねく周圍に行き渡らねばならぬ。

私共はみやげの整理に取りかゝつた。

(二)

私共の歸つた其日に頼まれた一の婚禮の司式の爲に、妻の同窓の歡迎會をかねて夫婦東京に唯一度出た外は、門を閉ぢ、客を謝して、新式能因夫妻は自分達の世界につけた足跡をペンで辿りはじめた。三月、四月、五月の三月は、私共の豫定豫想外の過去の行きがりの計算の爲に多忙をきはめて、私がペンをいよゝ取りはじめたは五月二十五日であつた。妻は七月になつて少しづゝ書いた。

私共が「日本から日本へ」と及び其 *Prude* に没頭して居る間に、自然は節序を追ふて進み、人は新なる可くもがいた。

總選舉があつて、初めて衆議院議員の選舉權を得た私は一票を投じた。それは今度初めて納めた所得税と共に、いよゝ私が眞劍に日本臣民となつた證據である。「戸籍につけ」と呼ばはる私の言を聽かれたやうに、國勢調査があつた。西比利亚を懸念して居たが、果して尼港虐殺があつた。不景氣風は當然の吹き返しであつた。大本教が著しく擡頭して來た。「三千世界一度に開く梅の花」と朗らかな名乗りを上げたお直婆さんは、*Panison* の *Abbas* 爺さん諸共新世界を呼ばう鶏鳴明鳥の聲々である。何れも新天地の日の出を待ちわぶる聲でないものはない。日が出ようとすれば、夜が出すまいとする。日米の間が著しく緊張して來た。日本はさながら八方ふさがりの窮地に居る。愚かな者は戦争の外に解決の道がないと謂ふ。少しも心配することはない。日本は堂々と日が出ればよい。日の出を榮えさ

す爲の周圍の暗黒ではないか？

過去の遺憾、現在の不満、將來の不安、それが生命の證據だ。單に私共自身の上から言ふても、一昨年二月私共が日の旅に上つて唯三週間目に母は取り去られたし、倫敦に着くと間もなく Tolstoy 夫人は死ぬし、私共が日本に歸つて此「日本から日本へ」を書いて居る其間にすら、此みやげの披露も待たず何を急いでかさつさと逝いてしまつた私共の愛した若い男、若い女の數は一二に止まらない。私共より一足早く日本に来る筈であつた Napoiii の彫刻家なども、夢の如く消えて了ふた。

飛花落葉はもとより私共の心を傷むる。

然し何の死か生でないものがあらうぞ？

何の生命か日新でないものがあらう？

私共の眼から涙が流るゝとも、それは日の面に洒ぐ一村雨であらねばならぬ。

生命は不斷の驪喜である。

一 昨年の正月日本を立つ時私は宣言した。

「梅が咲いたら歸る」

昨年三月八日歸つて見ると、當年は餘寒殊に烈しく、當然眞盛りである可き梅は、日あたりのよい所は咲いても居たが、要するに花はまだ三四分の蕾つぼみがちであつた。

日本の春はまだ淺かつた。

私はこんな歌を詠よんだ。

春寒み咲かばといひし梅の花蕾半ばに歸り來にけり

餘寒は案外ひどかつた。日本の春はまだ淺かつた。それは私共の失望であつたか？

晚おそいと私共は春を啣かたたうか？

何故もつと咲いて居ないと梅を責めようか？

否いな。それが自然である。成長はこれからだ。春はこれからだ。これからが樂みだ。

私共は私共の若い事を感謝しよう。人類の若い事を感謝しよう。天地の若い事を感謝しよう。

歴史の第一期、一切が手さぐりで往つた「だんまり」の一幕は永ながかつた、永かつた。然し最早夜の黒幕は落ちて、新天地の日出る時が來た。

日は何處から出る？ 名は實を現はして、日の本の名にしおはば瑞穂國みづほのくにから出ねばならぬ。新天地

は何處から生れる？ Adam Eve 又の名イザナギ、イザナミの抱擁から生れねばならぬ。人を措いて何の神？ 自己を外にして何の宇宙？ 一切はわれからである。相談づくで黄金淨土が出て來ようか？ 隣の點燈を待ち合はして自家の灯をともすであつたら、世界の Illumination は何の日に來ようぞ？ 日本はばつちり眼をあいて天の愛子の自覺に立たねばならぬ。

日本の日出でよ。日本の日子、輝やけ、父の日の如く。日本の日女よ、生め、母の地の如く。輝やけ、生め、日子と日女。手に手をとれ。環に環をつくれ。歌へ、永劫生命の讚美！ 舞へ、無窮生命の踊り！ 歌ひつ舞ひつ驩喜のさよめきを天地に盈たせ——遍ねく世界の日子女が夢ふりはらひ踊りの環に走せ加はつて、歌ひ出るまで、舞ひ出づるまで！

永劫に！ また永劫に！

新紀元の第三年眼ざめを呼ばふ酉の元旦

初日影滿地の雪を白金に輝やかす朝

日本恒春園に於て

徳富健次郎

愛

辛酉元旦

急がじな樂しみ讀まむ父の秘す生命の書を日に一葉づつ
健
雪や花しづくのぼる日の本の初日めでたく年新たまる
愛